THE CENTRAL REVIEW

中央公論

八月號

第三十年第九號・第三百廿一號



島村博士證明
健脳丸
脳病良薬
KENNOGWAN

避暑旅行の好季節と相成候

就ては効驗、需用、最偉大なる

脳神經最良薬

健脳丸にて御携帯

頭脳の明快を増され

充分樂しく御旅行の程お勸申上候

主効

□脳充血□脳貧血□耳鳴
□脳膜炎□鬱憂□中風
□神經痛□卒中□眩暈
□逆上症□頭痛□便秘

少量宛持薬とせば逆上を引下げ便通を快し恐る可き脳充血を治し中風卒下を未發に防ぎ記憶力を強め常に爽快なり

薬價

□五週分弐圓□三週分一圓廿五錢□二週分八十五錢□一週分四十五錢□三日分廿錢
全國薬店にあり

東京、大阪
本舗
丹平商會薬房

此廣告に依り御申越の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

遲塚麗水先生著

新刊

紀行文集 旅がゝみ

代田收二氏装幀及口繪

三色版 寫眞版 凸版 數葉挿入

天下の山水は麗水氏の文章に依りて光彩を添え麗水氏の文章は天下の山水に依りて才華を發す麗水氏の記行文は文章の秀麗、詞藻の富膽、蓋し天下一品なり、本書は氏が兩三年來の記行文を集めたるものにして東西三百里、南北八十里、東海、東山、北陸、近畿、山陰、山陽の六道に亘り青山碧海の奇遊を記して興趣誠に湧くが如く傍ら逸史と傳説を説き英雄と佳人とを論じ歌謠と舞曲を傳へ珍饌と美酒とを評す、机邊に此の一本を繙けば人をして居ながら天下の名山水に遊ばしめ此の一冊を懷にすれば舟車の往くところ親切なる一東道者となる、今や節盛夏に入る此の書の在る處常に無邊の淸風あり。

菊判半截形 三百廿余頁 洋装上製 正價金五十錢 郵税金六錢

新刊

中村孤月著

現代作家論

四六判全一冊三百余頁

正價金六拾錢

郵税金六錢

現代作家論と創作評論と伊藤野枝氏を對象とせる感想とを集めたるもの。日本文壇最新の狀態を知るに最良なると共に、著者其の人の内生活を最も明らかに覗はむ可し。而して其卷頭には特に往年『坪内逍遙先生島村抱月先生に呈す』の一文を置けり

發行所 東京日本橋鐵砲町六 振替東京壹五〇五六 磯部甲陽堂

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

中澤臨川氏著

タゴールと生の實現

初版再版賣切
第三版出來す

▲最上製
▲定價六拾錢
▲郵送料六錢

タゴールの來朝は愈々近づけり眞に彼を知らんとせば正しく彼を傳へたる本書によらざる可からず！

■世評の一斑

印度の詩聖ラビンドラナート・タゴールは今や思想界に於ける一大權威として識者の渇仰措かざる所、その戯曲、詩の飜譯は勿論、タゴールの研究書籍等近時頻出することその極に達し居れるが、著者は彼の生の實現を中心として直ちに彼が體驗したる中心思想を捕捉し以て平易に鑑賞的說明を下せるもの即ち本書にして、彼の神學乃至哲學に煩瑣なる研究を重ねつゝある者の多き中に、單騎その核心に猪突して以て眞髓を闡明したる著者の鑑識と努力に推服し、タゴール研究書中最も權威ある者なることを信じて疑はざる也。（時事新報評）

東京市牛込區矢來町中の丸　新潮社　電話番町二一二三番　振替東京一七四二二番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御記附を乞ふ

學生夏季旅行運賃割引

自六月拾五日　至九月拾五日

天津　青島　臺灣　南支那

内地　朝鮮　浦塩　大連

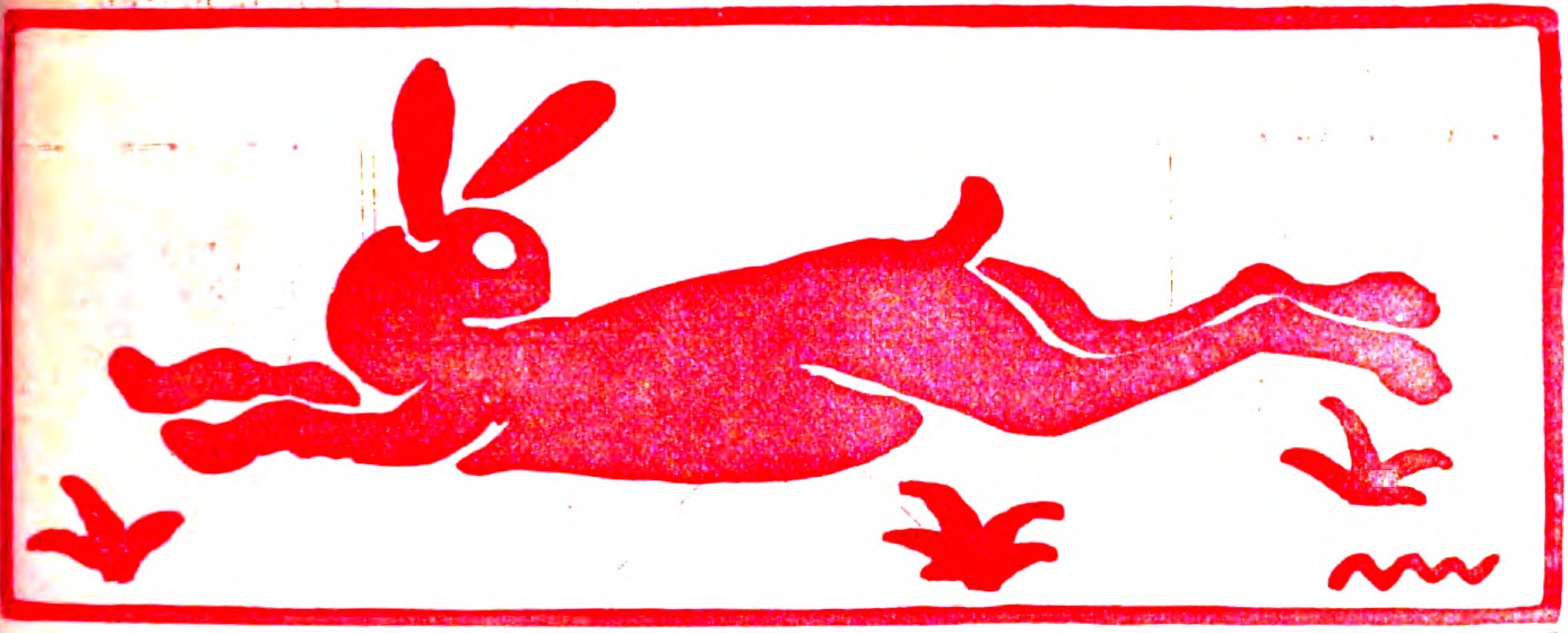


大阪川口

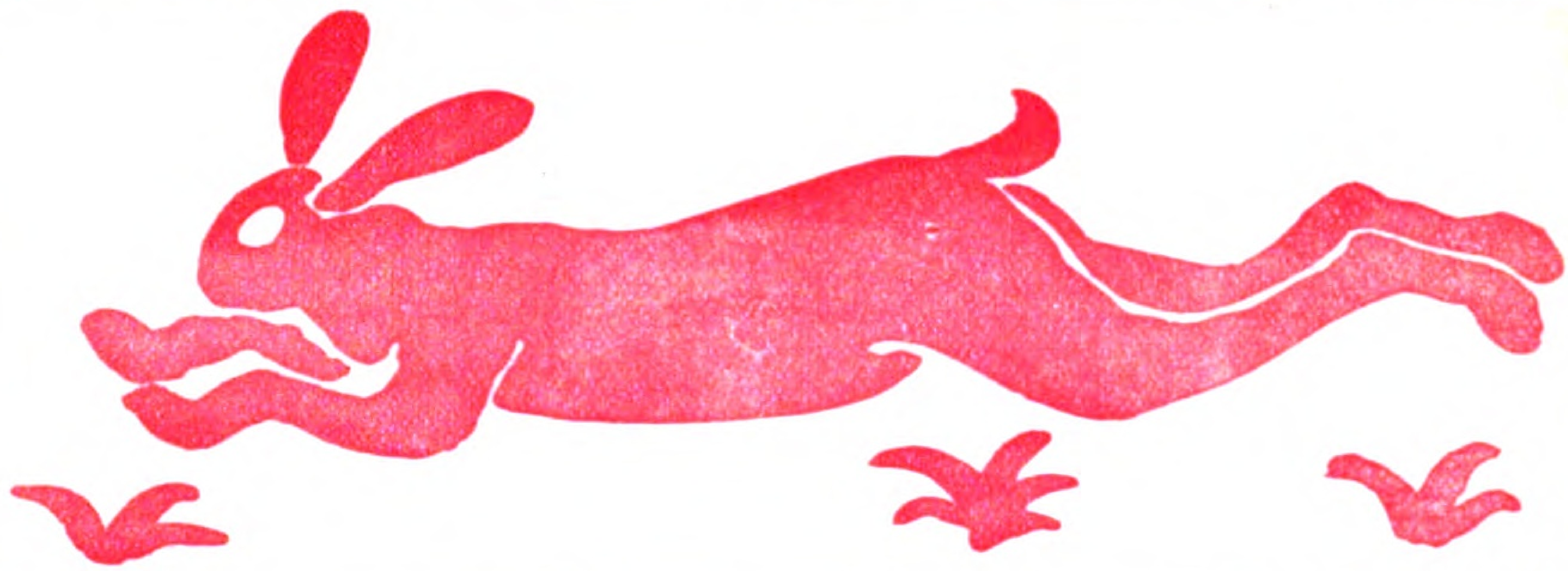
大阪商船株式會社

詳細案内書ハ本店、支店、代理店へ便宜御申込次第贈呈

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

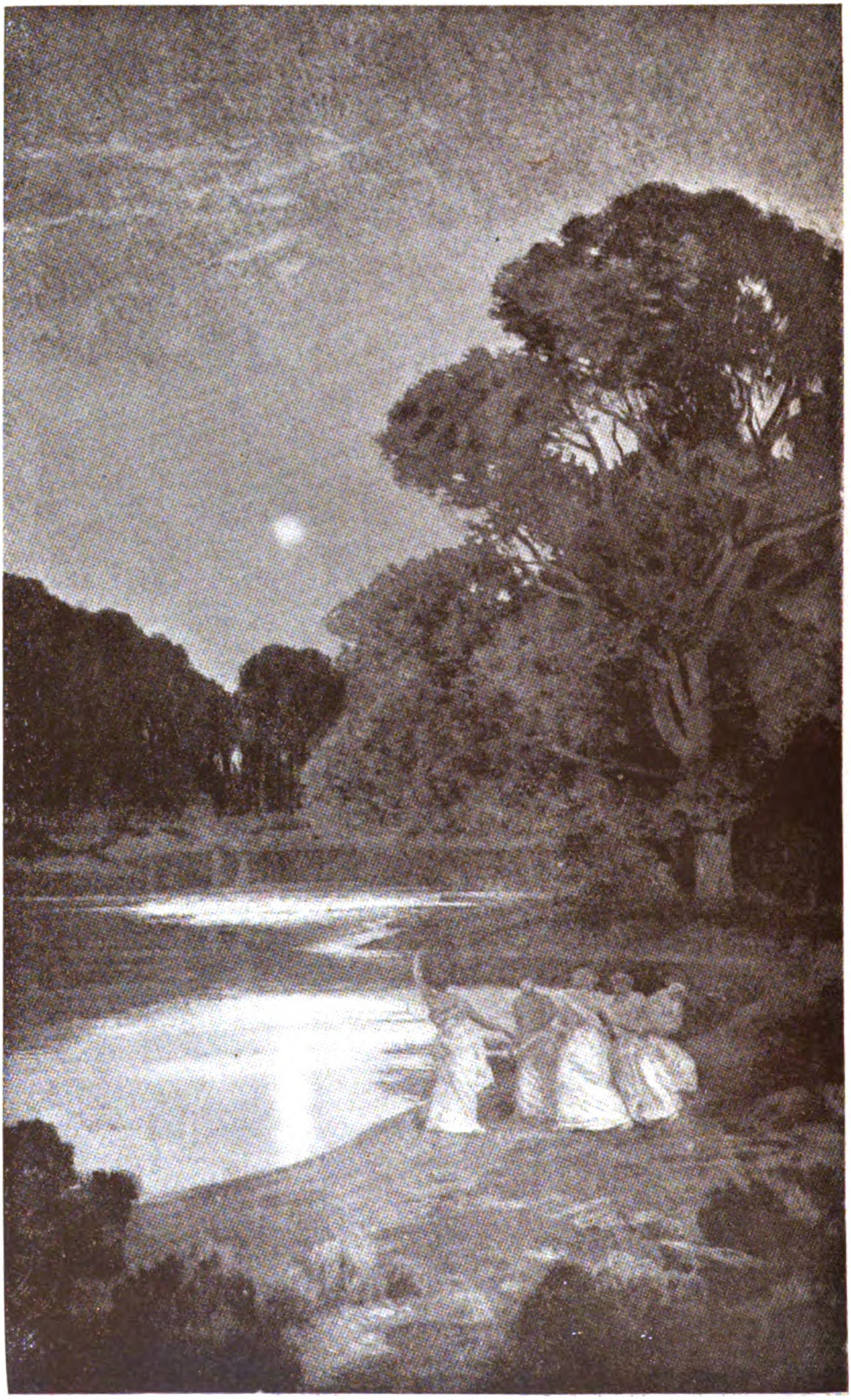


中央公論第卅年八月號目次




營業品概目
○懷中時計 各種
○掛置時計 各種
○ダイヤモンド並ニ各寶石
○指環手釦並ニ各種携帶品
○貴金屬美術工藝品製作
東京市京橋區八官町
小林時計商店
電話長新橋 一一〇三 一一〇四
振替口座 七八〇〇七

R. MÉNARD



Twilight

中央公論
八月號
第三十年第九號
第三百二十一號



人生に對する信念の缺乏

(一)

危き中に生きよとはニイッチエが人生を喝破せる奇言にして、普通一般の理想とは頗る相適はざるに似なり、何となれば世界人類の切なる一大願望は安全に、平和に、幸福に生きんとするに在ればなり、古來東西に賢人智者起り社會を組織し國家を形作り法律を設け警察制度を立てしは畢竟人類をして安全に生を樂しましめんとするに在り、即ち人生の周圍より危害の分子を一掃せんとするに外ならず、殊に近代文明の理想なるものに至りては安全の生活を求め、無事平穩の中に幸福なる一生涯を樂まんと欲するの情更に切なるものあり、即ち富の增加により世人をして飽食暖衣せしめ、音樂美術により耳目を娯

まじめ、醫術の進歩により病苦を減し生命を延長せしめ、最後に非戰解兵の結果として地球上より戰鬪殺戮の慘憺を一掃せんことを期せり、然るに世界の形勢を觀るに此理想は着々人生の事實と衝突し美なる理想の實現は前途益々遼遠の感なき能はず、看よ文明進歩の歷史は其大半は文明破壞の歷史に非ずや、現代歐洲の文明が古代の羅馬希臘埃及カルデヤに負ふ所多大なるを想はゞ誰か復た今の文明の竟に亡滅に歸するの日あるべきを否むを得んや、理想と實際との間には確かに永久の矛盾あり、ヘーグの平和會議を首唱し軍備制限を主張せし露國皇帝は僅々五年の後に日露の大役を喚起し、ダイナマイトの製造を發明して多くの刺客に便宜を與へたるノーベルは平和主義の擴張の爲めに其巨大なる財產を費やすべく遺言せり、小會社を掠奪し小資本家を蹴散らして獨り實業界の覇者となり爲めに幾百萬人を塗炭に陷れしカルネギー、ロックフエラーは博愛慈善を以て其晚年を飾らんとし、曾て自由平等友愛の權化と見做されし北米合衆國も將に一大海軍國として覇を世界に稱せんとす、此間確かに矛盾あり、然れども此の矛盾を指摘して嘲笑するものは人生の一を知り未た二を知らざるものなり、吾々の棲息する世界其物已に矛盾に富む、天然は人を生かし又之を殺し、右手快樂を與へて左手苦痛を散布するものなり、安全、平和快樂の理想は誠に善美なるに相違なきも果して人生の根本的事實と背馳することなきを得るか、寧ろ吾人はニイッチエの言の頗る意味深長なるを思ふ、危害の中に生を得んとする是れ實に人間の眞面目なる覺悟たるべきに非らざるなきか。

（二）

吾人は現在一生涯の前後に果して何物ありやを知らず、或は前生ありて今生の因緣を作り又は後生に於て現世の報を得ることもあらん、然れども何人も前生又は後生の必有を保證し得べきものあらず、即ち吾人々類に取り最も確實なるものは吾人が見且つ觸るを得べき只だ此身の生涯あるのみ、過去の因緣を追懷して今生の不遇を諦らめんとするものは勝手たるべし、後生の應報を豫想して現生の途筋を警戒せんとするもの亦た自由たるべし、然れども人間の大多數に取りては現世より確かなるものはあらず、現世に對し大膽に其事實を確認し忘想に陷らず懶惰に流れず、克己堅忍以て能く一生を送るものは眞に人間の勇者なり、危き中に生きるとは蓋し此を言へるなり。

來世の希望に遁路を求め前世の宿緣に退路を得んとするは必ずしも惡しからず、要は此種の假想に對する興趣の程度如何にあり、前世の宿緣を主として一生の不遇を諦らめんとするものは一種の宿命觀に陷り自暴自棄に流れ易く、後生を唯一の樂として今生の苦痛を忘れんと欲するものは遺世の人たり易し更にまた今世に安全平和幸福の理想の實現を求むるものは人生の實際と衝突し竟に厭世觀に陷ること稀ならず、夫の一知半解の哲學に毒せられて世を果敢なみ自殺を遂げし藤村某石黑某の如き正に此適例と云ふべきに非ずや、但た此美はしき理想は理想として樂しみ、人生の矛盾を見るも更に驚かず、奮鬪努力を以て一生を終始し得るものは頗る天稟の平衡を得たる人にして、斯る人こそ眞に愉快に一生を送り得べき幸運見なれ、然れども此外幾多の不幸運見あり、彼等は理性に長し何事にも其見解を分明にせざれば止まざる程に、其一たび平和、安全、幸福の理想に接するや人生の矛盾を打破し直に理想の實現を

求む、求めて其遂に實現し得べからざるを知るや乍ち悲觀厭世の人となり死を以て人生の苦痛より脱すべき唯一の活路なりと思惟するに至る、其心意の發動、理路脈絡の貫通自ら察する難からず、而して斯くの如きは多くは非凡異常の人物にして其竟に横死を免れざるが如きは最も惜むべきとなす、但た此種の人物に取り其缺點とすべきは其天賦の平均ならざることに在りて、例せば其智性の比較的に發達すると同時に其感性も亦た頗る鋭敏にして大體に感傷的なり、而して之を調和し統率すべき意思の力比較的に薄弱なるが故に遂に彼が如きの非常識なる末期を見るに至るものなり、ニイッチエの如き理想と實際の矛盾を感覺することと最も明なるに關はらず其天禀中自ら强堅の分子あり終に父母傳來の教に背くに至るも、超人主義に支持せられて人生の奮鬪を繼續し斃れて後に止むに至る、彼亦た人傑なるかな、彼れが人に勸めて危險の中に生きよと喝破せしが如き實に畢生の信念を此一句の中に吐露せるものに非ざらんや。

大凡人生觀を求むるものは須らく演繹的なる可らず、宜しく歸納的なるべし、即ち一種の理想もしくはユウトピアを標準として實際の事實を之に適合せしめんとせず、都て人生の事實に基き此間に處し一生を有効に送るの途を求め、奮鬪努力の中に安心立命の地歩を占むるを要す、實際の事實に基きて理想を劃くは頗る可なりと雖も一種の理想を標榜して實際の事實を批判するが如きは甚だ危險なりと謂はざる可らず、王陽明曾て佛寺に來僧の靜座修養するを觀る、中に就き一小僧を見て語りて曰く吾子世を遁れ佛門に歸依する頗る可なり但し世緣全く絶ち果して一事の心を累はすものなきや否やと、小僧曰く更

に他の世界なし只だ家に老母あり吾尙ほ之を忘る能はざるを憾むと、陽明曰く果して之あるかな、是れ人生の至情に出づ、吾子須らく家に歸り此心を基として人道を求むべきなりと、五倫五常は人間の大綱なり、此大綱を離れ復た人間社會あり國家ある可らず、此れ實に人生の根本的事實なればなり、吾人の道を求むるも五倫の間に於てし、吾人が安心立命の地亦た之を此間に於て尋ねざる可らず、人生以外に理想鄕を求め動もすれば世事を抛擲し顧みざりしは古今東西宗敎の免る能はざる宿弊なり、人生は事實なり假令事實を脫却し忘却して別に生命を求めんと欲するも其得る處のものは恐らく生命に非ずして空想ならん、科學の基礎の上に脚地を求めんとする現代思想は徹頭徹尾現世的なり、凡そ如何なる哲學なるも又た如何なる人世觀なるも、其基點を人生の事實に置かざるもの終に一世を風靡するに足らず、例せば社會主義の如き若しも其論理を極端に推行せば共產主義に歸着し、而して家庭を破壞し私有財產を廢止せざるべからず、然れども夫婦及び家庭の制度を打破するは即ち人生の根蔕を破壞するものなるが故に夫の極端說は到底一般輿論の承認し能はざるものなり、故に社會主義を唱ふるもの近來大に顧る處あり其推論を穩和にして人生の一大事實を否定するに至らず、却て家庭と私有財產を基として新社會組織を企圖するに至れり、而して各種の宗敎また近代に至り重きを現世に置き厭生遁世の傾向著るしく減少せるは亦た何人も見逃すべからざる處たり、更に生あるものは必ず死あり死亦た人生の重大なる事實の一なり、近來壽命延長の論あり大隈伯の如きは百二十五歲を期し之を公言して憚らず、然れども百二十五歲は幾分餘命を延長するに外ならずして人生終に死あるの事實は到底蔽ふ可らず、況んや各種の疾

病は不斷の危害を各人の生命に與ふるをや、假令醫術の進歩は大に死亡率を減ずると雖も病難竟に絶滅すべからず、幼少にして死するあり中年にして死するあり又た天災地變の爲めに死するあり、各人果して何の日に死すべきやは全然運に在りて豫期すべからず、即ち死は誠に忌むべきものなるも、何人も避く可らずとすれば、各人死を恐れず死すべき時には未練なく死するの覺悟なかるべからず、又た志の大小は人に因りて異なりと雖も何人にも一種の野心又た希望なくんばあらず、或は家を經營し子孫の計を成すを以て止まるあり、或は治國平天下の上に覇氣の實現を期するあり、更に又た學問技術の研究を遂げ鴻益を現代及び後世に及ぼさんと欲するものあり、然れども人の志や其大小に關はらず、之が十分の一をも達し得ざるを以て常とす、假令非常の天賦を受けて非常の時會に遭遇し其勢力一代を風靡し其盛名千載に及ぶものも其終焉に際しては多くは一種失意の人たるを免れず、況んや不運失意に一生を終るものの多きに於てをや、何人も其一生を以てしては全く志を遂ぐべからず必ず之を完成すべき子孫、門生又は同志者なかる可らず、即ち一人一己のみを以て完全ならず完全ならんと欲せば社會的に其方法を求めざる可らず是また人生の一重大事實たり、斯の如く算へ來れば人生不如意のこと甚だ多し而かも此不如意のこと是實に人生の根本的事實に外ならず、吾人の人生觀は此根本的事實の上に立てんことを要す、吾人の安心立命、平和幸福亦た此不完全なる根本的事實の間に於て之を求めんことを要す。夫の絶對的の完全、平和、幸福の如き理想即ちユウトピアとしては可なれども素と此世界に實現し得べき性質のものに非ず、人生は有限なり從つて吾人の成功、幸福、平和等悉く有限のものたらざる可らず、各人須ら

く志ざす所に從ひ只奮闘努力すべきのみ成敗利鈍素より其知る所にあらず、人もし其死するに當り淸き良心と奮闘努力の意氣を存せば人たるの道を踏むに於て多く遺憾とすべきに非ず、蓋し事業の大小、名聲の高下の如き畢竟五十步百步の論のみ、天を尤めず人を怨みず各其涯分を盡し斃れて止む是れ人生の哲理、之を解するものは死して猶ほ瞑するに足れり、而して樂も亦た斯の如き奮闘努力の間に在らんなり、即ち斯の如きは是れ危き中に生きるなり。

故グラッドストーンの孫某這般の大戰爭に義勇兵として參加して戰死せるものあり、其未だ死せざるに當り戰地より慈母に書き送りて曰く兒たとへ戰死するも阿母請ふ悲しむを休めよ人生の妙諦は徒らに永く生きるに在らず一生を意味ある生涯となすに在ればなりと、人間誰か死なからん一生涯をして意味あるものたらしむれば即ち死して遺憾なけん、其忠君愛國を大言壯語せざる處却て一段の妙趣を玩味せずんばあらず、安全、平和、幸福は固と其求むる所に非ず、事業の大小も亦その論ずる所に非ず、只だ國難に殉し一命を戰場に棄つ、彼の死する宛も其生るが如く悠然迫らず毫も平生の眞摯を失はず誠に乃祖の訓を辱めざるものと云つべし、勇士の龜鑑とは正さに斯の如き人をこそ謂ふべけれ、梅花は寒を犯かして咲く然れども毫も淸香を人に伐らず、野の百合花は泥土を出でゝ絕世淸楚の形を顯はす然れども更に人間に近づきて聲譽を求めず、天然の花は其分に安んじ其職を盡し散るべき時に散るのみ、此間毫も長壽を希ひ名聞を欲するの趣あらず、故に其美や貴く其生や靜なり、人生の秘訣亦た之を花の天眞に學ぶべきに非ずや。

（三）

現代我邦の最大缺點は人生に對する信念の動搖に在りとは云はざるべからず、封建制度の下に在りては武士道に由り信念を得、商農工は佛の因果應報に由り其諦らむる所を知れり、維新以來約半世紀に亘り普通教育は大に各人の自覺を促がし、社會上政治上各般の改革は個人主義の流行を誘致したるが故に傳來の倫理及び人生觀は終に各人の心を滿足し能はずなれり、因果應報の說必ずしも不道理なりと云ふに非ず、五倫五常の道之を奉ずるに足らずと云ふに非ず、然れども各人の心は著るしく懷疑的傾向を帶び來れり、個人主義の一產物たる安全平和幸福を欲するの情念は一轉して五倫五常の哲學的根帶を請求するに至れり、而して理想と人生の實際的事實との間に於ける矛盾は愈々明白に感覺せらるゝこととなれり、犧牲献身は口に高調すれども實際に其心あるもの少なく、忠孝の如きも動もすれば世俗的の表章と交換せざれは行なはれず、而して凡ての善德も物質的代價を要求せんとするに至る、曰く勳章年金、曰く世間の名聞利達、斯の如き報酬なければ行なはざる犧牲献身は眞の善德に非ずして犧牲献身の僞物たるのみ、而かも此の僞物さへ追々品切となるの傾向あり、同時に斯の如き虛僞の道德の一般に流行せんとするを見て憤慨し馳て一方に極端論をなし以て世を驚かすものを一派の社會主義者、新婦人の徒となす、吾人の觀る處を以てすれば一般の虛僞的道德も極端の社會主義も孰れも人心の浮薄なる傾向より生れ來たる產物にして、興國の人民に應はしきは現實の人生及び其義務本分に關し眞面目なる思想の普及に在り、今日の傾向は寧ろ衰亡の人民に付て見るべき狀態にして、殊に此の現世に於て到底達し得べ

からざる安全、平和、幸福の理想を揭げ。其達し得ざるを發見するや乍ち厭世悲觀の深淵に墜落すと云ふが如き最も慨歎すべし、大凡輿國の氣風とは、現實は現實として觀念する一種ストイック的態度と各人その義務本分を盡す爲めに奮鬪努力し報償を忘れ成敗を度外に置くの狂熱あるを云ふ、夫の主一に安全平和幸福を求め之を以て人生の最大目的を見做すが如きは衰世の徵と見るを至當とせん、例せば元氣旺盛の一青年を捕へて富家の養子となし日に一事の爲すべきことなく逸居平安の生涯を送らしめよ、胸中活動の英氣を燃やしつゝある彼青年豈に無意義の生活に堪へんや、彼れ必ず慨然として富家を脫し再び前日の浪人となり奮鬪努力の人となるを以て一大愉快となすべし、何となれば人生の幸福は奮鬪努力を離れて存在せず、寧ろ奮鬪努力の產物とこそ云ふべければなり、又た安全と云ひ平和と云ふ固と不安全、不平和の對象文字のみ、もしも人生の危險なからんには吾人は安全の何物たるを解せざるべく、紛擾亂離の經驗に由らざれば平和の難有味を嘗むること能はざるべきことと察するに難からず、故に絕對の安全、絕對の平和を忘想し其達し得られざるを知りて厭世悲歎する人の如きは決して强健なる精神の人に非ず、而して斯の如き傾向の流行する國民は已に衰亡期に入れるもの、有識者の最も憂ふべき徵候と云ふ可きなり、往昔羅馬の興るやラテン民族は最も剛毅豪邁の氣象に滿てり、彼等の間未だストイック學說の傳はらざりしも彼等は實際上克己節制に富みてストイック主義の實行者なりしなり、其男女に限らず一死國家に報ゆるの精神に至りては我大和魂と毫も憚ふ所あらざりしなり、フアビヤスの如き、スシピオの如き、グラカイ兄弟の如き眞に萬世の龜鑑たるに足れり、降りて帝政時代に入れば羅馬の士氣漸く

衰へ、世界帝國を維持經營すべき大豪傑大政治家の出づるあるも、ラテン民族の意氣は次第に衰弊し、奢侈遊惰の風は犧牲獻身の精神を亡滅し、更に一轉して厭世悲哀の傾向を生じ、遂に衰亡の徴悉く具備するに至る、我日本現在の傾向亦た羅馬帝政時の初期に似たるものあるが如き最も憂となすに足らずや今の政界の如き決して活氣なきに非ず、過ぐる特別議會の如き我憲法史上の最も活氣ある議會と稱するに足らんも、其活氣なるもの果して愛國の至情に基けるやと云ふに、其然らざるが如きは頗る慨歎すべきなり、羅馬共和政の末期に選擧運動の流行あり、當時戶別訪問を爲し投票を乞ふをアムビチヨと云ひしが此の語原より英佛語のアムビーシヨン、獨語のアンビチヨーンなる語を生じたり、即ち我言語にて云へば之を野心と云ひ功名心と云ふに當れり、而して其語の起りが政客の候補運動に在りと云ふに至り士氣の興廢その由來する所眞によく東西一轍に出づと云ふ可らずや、即ち羅馬に於て政客の候補運動が政治界を墮落せしむる一大原因たりし如く我邦に於ても候補運動は士氣衰亡の一大原因となれり、現に我當路者の心事を忖度するに高遠の理想を捧持し大經綸を實行すと云ふが如きは其アムビーシヨン即ち政治的野心を遂くべき方便たるに過ぎずして、殉國の至誠に至りては頗る缺亡するの感なき能はず、而して民間政客の心事に至りても亦た在野者と髣髴たるものあり、與黨の一部に於て參政官に落選したるが爲め乍ち不平家となり反政府の言動を敢てするも世間は强ゐて之を尤めざるが如き亦た以て五十步を以て百步を笑ふ可らずと做すものか、別語之を云へは豪邁勇敢の氣象は我政治界にも將に其痕を絕たんとするものに似たり、之を以て夫の靑年間に於ける厭世悲觀の流行と併せ考ふれば以て我大和民族の精神

感情に憂ふべき一大變調を來せるものと謂はざるべからず、如何にして此變調を挽回し眞に與國の人民に應はしき精神に立還らしむべきかは豈に我識者、經世家の最も眞面目に研究すべき大問題にあらずや。

(四)

現世の根本問題を解決し人生に對する信念の基礎を定めんが爲めに或る宗教に歸依する必要ありと思惟する人あらば吾人は素より異議を挾まんと欲するものに非ず、吾人は元來如何なる宗旨に對しても恩怨なく、神佛、耶蘇及び其各派に對する是非は吾人の嘴を容れんとする問題に非ず、但た孰れの宗教を信ずるも其信仰の歸する所現世を尊重し人生の事實に對し絶對の價値ありと見做すの必要を主張せんと欲するのみ、假令現世以外別に靈の世界ありと立説するも現世を浮世又は夢世と見做す可らず、此肉の生活は來るべき靈の生命に直接の關係あり、吾々が現世に種蒔く通りに來世に其實果を刈取るべきを示すを要す、然れど宗教の信仰を要せず神佛又は來生の實在を懷疑裡に收め只だ人生自然の本能的要求に從ひ人生の事實を事實として眞面目なる一生を奮闘努力に送らんと欲するものあらば吾人また之に對し毫も異論あるものに非ず、各人の性情は決して一樣ならず、神又は佛の信仰に基かざれば立命の安地を得る能はざるものあり、懷疑を第二の天性と爲し到底神佛又は靈魂の實在を承認する能はざるものあり懷疑者は懷疑者の脚地あり宗教家は宗教家の脚地あり、要は現世の不完全を知りつゝ尙ほ奮闘努力を惜まず、危險の中に生を求め、九死中に一生を得るの信念を有するを要するのみ、今や擧世滔々として厭世悲觀の風潮に卷き去られんとし衰世の徵候歷々として之を蔽はんとして蔽ひ能はざらんとするに際し、

教育家は學制の改革案に沒頭し、文學者は人生暗黑方面の寫實に餘念なく、宗教家は宗門の擴張と信徒募集に專念し是れ日も足らざらんとす、現世の眞實を說き努力奮闘の中に幸福あるを敎へ安全、平和は危險の間に存するを說くもの天下果して何人かある、吾人は我大和民族の現狀及將來を想ひ轉た長大息の感なくんばあらず。

現内閣の禍因

大隈内閣は過般來元老會議の詰問に遭ひて頗る苦境に陷りし模樣なりしか、遂に外交從來の遣り口を改善し以て元老の希望に副ふことを努むべしと云ふ約束の下に一時小康を得たるの觀あり、然れども元老の特に憂ふる所は日支間の疎隔と英國に於ける加藤外相の信用失墜に在るもの丶如く、若しも元老の注文を滿足せしめんと欲せば果して我外務當局を交迭せしめずして止むことを得べきや否、加藤男の人物、其日支交涉に際し執りし特種の手段は即ち深憂に値する現狀を誘致したる最大原因なりとせば、彼を依然として存置し彼の手腕に依賴しては到底此憂患を除く能はざるべきこと多辯を待たず、然れども元老の强ゐて追窮せず有や無やに一時局を收めしは彼等が内閣瓦解の責任を避けんと欲したるが爲めのみ、元老を滿足せしめたるにも非ず又た内閣として自信力を發揮したるに非ず、加藤外相依然として傲岸不遜なり又依然として自ら用ゆること頗る重し、是れ現狀を小康と云ひ姑息偸安と云ふ所以なり、元

老の干渉は吾人の常に非立憲とし不満とする所なれども、異日他の機會に際し今の小康破れ重ねて元老會議の催開となりて内閣瓦解を見ることあらんには、是れ現閣の自業自得と云ふべき耳、元老に由り創設せられし内閣の元老に由り破壊せらるゝに何の不思議もなければなり。

抑も加藤男が特に政界に重きを爲すは二個の理由に因れり、一は男が日本第一の富豪岩崎家の女婿として財力に富めることにして他は彼れが能く英國に知られグレー、ランスダウン等と意氣相許すものありと云ふを以てなり、若しも個人として彼れの實價を品評せば頭腦明敏にして頗る吏務に長し、議院の討論家としては敵手の弱點を衝き自家を扞禦するの才に富めりと云ふに止まり、其冷酷にして傲慢不屈なることは彼れが『惣スカン』の綽名を佩はせられたる所以なり、即ち此不人氣なる加藤男が一大政黨の首領として崇められる所以のものは彼れが財力に富むを見込まれたるに在り、又その一大外交家として世間に買被ふられたるは英國外交の後援あるべしと思惟せられたるに由れり、然るに其財力の點に於ては餘り多くの失望を黨與に與へざるが如くなるも、英國に對しては彼れが日支交渉の第五項を秘したる一件より多大の信用を失墜したり、最後に於て第五項を撤回して稍々英國の歡心を回復し得たるが如きも是れ唯表面の事のみ其個人としての信用は容易に回復し得べからず、彼れを同僚として其外交方針に贊同せる大隈首相も亦た共に信用を失墜せり、茲に於て外交家としての加藤男從來の價値は優に其大半を減したるものと謂はざるべからず、然り而して若しも歐洲の戰局にして果して豫期の開展を爲し、露國が一方能く其の國境を防禦しつゝ今頃は已に匈牙利のブダペストに迫り、英佛は獨逸を白耳義より放

逐しアルサーズ・ロルレーンを回復せりと云ふ如き形勢にも進み居る樣ならば終局の見當も大略確定せりと云ふべくして、加藤外相を以てするも最後談判の際に帝國の利益を擁護するに於て必ずしも不可なしと云ふべけんも、今や露軍はガリシヤより驅逐されワルシヤウの守備また或は安全ならずと氣遣はれ西邊の英佛軍は尙ほ獨軍の逆襲に備ふるに急にして毫も進擊の利を占むるに至らず、英佛露は尙ほ聯合を堅固にして銳意最終の勝利を劃策して怠るなきが如きも、萬々一にも双方引分けを以て局を結ぶが如きことあらんか、加藤外相の信用、手腕は果して能く我が支那に對する利權を擁護し得べきや否、吾人は思ひ之に及ふ每に朽木を以て大厦を支ゆるの慨なき能はず、加藤外相は去十三日石川縣同志會支部發會式に臨み自家を辯護するの演說を試み、左の如く云へりと報道せらる、曰く

某新聞には加藤の外交拙劣の爲め我國は孤立の地位に陷れりと記せり、自分は不肖なりと雖も最善の努力を爲しつゝあり、見よ日英同盟は歐洲戰爭の爲め益々鞏固となり日露は十年前戰爭當時に比して親密の度を加へたり、佛米との國交も兩三年前に比すれば確かに宜しく決して孤立の憂なし、局外者の批評は他山の石と爲すべし、我有する材料以上に立論するあらば之に服すべきも、新聞雜報位にては承知出來せず、戰後は加藤にて不安心なりなどのことも新聞にて承知せり、然るに此戰爭終局と形式等は加藤のみあらず、當局者たる英佛露獨の國民にも不明なるべし、此後形勢變化せば夫れ相當に方法も立つべきも今の所日本の執るべき一定の方針を立つること能はず、縱ひ如何なる形勢となるも、友國として聯合國と提携すべきは勿論出來る丈け利權を得んと苦心しつゝあり、云々。

自書自贊も玆に至りて極まれり、加藤男曰く加藤は最善の努力をなし出來る丈利權を得んと苦心しつゝありと、誰か復た男が最善の努力をなしつゝあるを疑はんや、只た世人か疑ふ所は男の信用と手腕にあり、假令男にして最善の努力を爲すも已に信用なく爲めに其手腕の一半を滅したりとせば其努力も終

に我利權を適當に擁護し能はずして止むべし、男曰く我有する材料以上に立論するならば服すべきも新聞雜誌位にては承知出來ずと、元老が男の信用手腕を疑ふは必ずや新聞雜誌以上の材料に因りしは勿論吾人と雖も新聞雜誌以上の根據に由りて立論するものなり、況んや新聞雜報決して馬鹿にならざるをや新聞雜報は男が甚だ卑下する所なるも往々にして外務省在外官吏の形式的報告に勝ることなきあらず、支那ボイコットに關する報道の如き即ち其一例なり、男又た曰く戰爭終局と形式は英佛露獨の國民も知らず此は形勢變化せば夫れ相當に方法も立つべきも今の所日本の執るべき一定の方針を立つること能はずと、何人も變化極まりなき局面に對し一定の方針を立よと云はず、但た形勢如何に移動するも變に應し綽々餘裕あるを要すと云ふ耳、若しも無謀無策にして行當バッたりを事とせば、終に只た英佛の後塵を拜し其殘飯冷肴に與るに止むの恐なきことを得ず、想ふに加藤男は元老の苦情に對する腹癒せの爲め田舍の政黨員に向ひ自畫自賛を演説せしものなるべく、所謂江戶の敵を長崎にて打ちしものか、但だ加藤男が此際帝國外交の揖を執るに付ては天下一般に一大不安の念に驅られつゝあるは爭ふべからず。

然りと雖も現內閣の禍因は單に其外交に在る耳ならず、大浦內相の下に行なはれたる選擧干渉も亦その一なり、即ち這般の總選擧に於ける政府の干渉政略は竟に政府要路の瀆職罪を構成すべき危險なき能はざるものの如し、由來瀆職罪は下僚有司に對してのみ適用し、政府が政治上の必要よりする犯罪は法官も之を看過するの例なりし如くなるも、立憲政治の本義を徹底せんと欲せば屢々政界混濁の原頭たる政府當局の犯罪を嚴重に取締らざるべからず、白川事件と云ひ板倉日向事件と云ひ素より痛恨事たりと雖

も將來を戒め廓淸の實を擧げんが爲めには法廷の嚴正公明なる判決を希はずんはあらず、今や前途を眺むれば風雲大に動かんとして頗る不穩の徵候あるは否むべからず。蓋し豫審の進行上或は累を內閣に及ほすべき結果を見るに至らんも未だ知るべからざるなり。

此外豫算上の難關あり與黨內の紛擾ありと雖も差當り內閣の危機は加藤大浦兩相に聯關す各種の問題に在り、現內閣にして果して此兩禍因に勝つことを得ば假令他に幾多の難關あるも少なくとも御大典後まで繼續し得べきは蓋し疑なきものの如し。然れども此等の禍因は果して內閣の致命傷たらずして止むべきや否や、

印度思想論

木村泰賢

▲冷遇されたる印度思想

印度思想は近頃段々我國の一般に認めらるゝやうになつて來た。文藝の方面からも哲學宗教の方面からも、若い人々の眼界が漸く印度の方に擴がりかけて來た。殊にこの春以來タゴールの流行に伴つて著しく印度熱が高まり、最早、印度研究は單純なる歷史的興味、考古學的趣味以上に、そこに生きた何物かを見出さんと欲するまでに進んで來たのである。或は一時の流行かも知れぬけれども、自分は之を日本思想界のために欣ぶべき現象と思ふものである。敢て必ずしも印度思想は東洋思想であるから、而も自分の專門が印度思想の研究であるからといふ我田引水的立場からさう言ふのではない。寧ろ印度思想の中には確かにその期待に添ふべき澤山の或物を包含すと考へるからである。少くも餘りに西洋思想にかぶれたり、又は、餘りに島國的に固まり過ぎやうとする日本現代の思想界の通弊を緩和させるに大事な役目を演ずるものと思ふからである。そこで自分はこゝにその印度思想の特徴とその價値に就て少し許り述べて見たいと思ふものである。が、その前に一寸印度思想の研究に對する一般的狀勢に關して思ふ所を言つて見たい。

一體これまで、日本の一般思想家の注意が印度思想に對して餘りに冷淡過ぎた。彼等は西洋のことゝ言へば希臘邊りから最近の思潮にまで觸れて論じながらも、印度思想に對しては一言の敬意を拂ふことさへも吝なる有樣であつた。印度思想は已に古びて黴の生へたもの、現代思想には沒交渉なもの、その研究は專門家のやるべきことで、一般人の關ることではないと臆斷し去るを常とした。たまに印度思想を欣ぶものがあつても、多くは好事者的動機からか、然らざれば衒學的動機から來たもので、眞に生きた思想のためにしやうとしたものは甚だ尠かつた。殊に奇怪なるは千三百年以來その感化を受け、今尚ほ生きてゐる佛敎に對しても——勿論佛敎は全部印度思想ではないけれども——かゝる態度をとつたことである。試みに今日の敎育家、思想家、操觚家といはるゝ連中に對して佛敎に關する極めて簡單な事項を問ふて見よ。彼等の中で幾人か能く之に答へ得るものあるか。而も彼等は之を普通の事として恥辱とも何んとも思ふて居らぬのである。實に驚き入らざるを得ぬ。言ふまでもなく、佛敎は信ずると信ぜざるとに關らず、日本の國民性に喰ひ入つてゐる思想として、日本人の高等常識の一種ではないか。それに對してさへ已にかゝる有樣である。況してその他の印度一般の思想に對する無識と來ては實に御話しにならぬ程であつたのも亦怪むに足らぬ。殊に不快なるはこの點になると、佛敎者も同じ側に屬することである。彼等の多くは、佛敎以外の印度思想は下らぬもの、而して佛敎は漢譯にて研究すれば充分であると老へ、印度思想の研究や、梵語原典の研究などをば恰も餘分の仕事の樣に見做したのである。近時青年佛敎者の中には漸やくその迷夢から醒めかけて來たやうであるけれども、大勢としてはまだ〳〵かゝる思想に支配されてゐる方が多い。之を思へば、哲學文學と云へば西洋最近のそれに限ると考へる人や、學問の目的は手取り早く何にかに應用し得るものに限ると考へる人などが、印度思想の研究に一毫の同情を有せなかつ

たのか、寧ろ罪のない方と言はねばならぬ。併しながら印度思想は全體として爾かくつまらなきものであらうか。而してその研究を爾かく輕視することは果して日本の思想界のために名譽なことであらうか。之を判ずるには理屈を述べるよりも、先づ西洋に於て印度思想がいかに研究され、いかに見られてゐるかの一斑を述べた方が近道であらう。何故なれば西洋ではかうだと云へば、直に肯く癖がまだ日本人からとれぬからである。

印度の研究が歐洲學界の問題となつたのは十八世紀が初めで、爾來、僅かに百年餘に過ぎぬ。即ち日本が佛教によりて印度思想を知つた年代の約十分の一である。併しながら、此間に於ける研究の進歩とその効果とに到れば眞に驚嘆に價するものがある。今や、歐米の重なる大學に於て散克利(サンスクリット)の講座のない所はなく、著名な印度學者を教授として有せざる所はないといふ有樣である。その結果として印度學の諸方面に渉りて、原典の出版に、その飜譯に、考證に、組織的研究に、斯學の進歩は實に侵々乎として止まる所を知らぬ有樣となつた。最も文明の遲れて居ると言はれる露西亞でさへ盛にその研究に從事し、有名なる佛教文庫(bibliotheca buddhica)の大事業もペトログラード大學の附屬事業として經營せられてゐるに徴しても思半ばに過ぎやう。(日本で出版しかねた南條博士の梵本法華經もこゝで出版されたのである)。況して學問の最も發達して居る獨逸なればサンスクリット、パーリ、西藏語等の聖典研究を經て將さに漢譯佛典の研究にまで手を下さんとする程の進歩を示して來た。

而も是等は單に言語學的、考古學的興味による專門學として許り研究するのではない。彼等の精神生活を一層高め、深めんがための資糧を此間に求めやうとした眞摯な努力も手傳つてゐるとを見逃してはならぬ。已に印度思想輸入の初期に於て早くもこの點に着眼したのは大哲、ショーペンハウエルであつた。彼はその居室に佛像を安置し、就寢の前には必ず羅典譯のウパ

ニシャッドの一節を讀みて無上の慰安をこゝに求めるを通規とした。彼は印度學者ではなかつたけれども散克利文學の歐洲に齎らすべき効果を豫言しては、ルネサンス時代に於ける希臘文學の復興よりも思想界に及すべき影響が大きいであらうと言つた。また英國邊りの基督敎の宣敎師達が印度に傳道しやうとする計劃を嘲りては印度思想に對すれば基督敎は恰かも岩にぶつつかる球の如きもので、迚ても齒が立つまいとさへ言つてゐる。而してその結果として彼の哲學組織に印度思想が大影響を及ぼしたことは今更說くまでもないほど著名な事實である。印度思想の全般が未だ分らぬ時に、而も印度學者でないショーペンハウエルでさへこの通りであつた。況してその後印度思想が段々と明になるにつれ、その專門家となれば殆ど心醉と思はるゝまでその思想に傾倒した學者の數の殖えたのも、また怪むに足らぬ所である。ショーペンハウエルの門下たるドイセン敎授は世界に眞の哲學は三回程起つたといひ、獨逸のカントに、希臘のプラトーに、それから、印度の吠檀多即ちウパニシッドであるといひ、而も此間に一貫の思想を見出さうと努めてゐる。彼は通例の所謂哲學史家と異り、印度より說き初めて獨逸に結ばんと企て、一般哲學史 (Allgemeine Geschichte der Philosophie) を著した意味もこゝにあるのである。又、最も博學にして常識に富めるマックス、ミューラーがその一生を印度研究に捧げて悔いなかつた根本動機も、全くその思想に憬れたためであつた。「印度は吾人に何を敎へ能ふか」(India, what can it teach us)の一節が最能くこの事を示してゐる。

若し余は、自然が與へ得る凡ての富と力と美とを最も豐富に賦へられた國――その或部分では地上の極樂――を見出さうとして全世界を尋ねるとせば、余は、それを印度なりと指示せざるべからず。

若し余は、天が下のいかなる處に於て、人間の心がその最も重量な天賦の或點を充分に發展せしめたか、而して最も深く人生の最大問題に就て考慮したか、而してその問題の或點に關する解決としては、

已にプラトー、カントを學びたる人と雖も必ず注意せねばならぬ程の域に達したかと問はるゝならば、余は、そを印度なりと指示せざるべからず。而して更に若し余は、いかなる文學によりて吾人歐州人が——殆ど、希臘、羅馬人の思想と、セム民族中の猶太人の思想とのみによりて養はれたる吾人歐州人が——吾人の内的生活をして一層豊富にし、一層包括的にし、一層普遍的たらしむるために、即ち一層眞の人間となるために、啻にこの現世活のためのみならず、更に更新せる無限の生命のために、最も必要なる訂正的思想を、いかなる文學より導き得べきかと、余自らに問ふならば、余は、之を印度なりと答へん。(India, what can it teach us P.6)

馬翁は決して無暗に刺激的な言辭を弄する、詩人肌の人ではない。この宣言は實に彼が研究の結果として到達した最後の結論であつたのである。

その外、印度思想に對してかゝる評言をなした大小の歐州學者の意見を載錄するならば實に數ふるに遑あらざる程であらう。尤も中には基督の宣教師で著名な印度學者もあるから、それ等の中には隨分偏見に充ちた評を下した人もないではないが、苟も公平な態度をとる學者となれば、少くも、歐洲の最後思想と比肩し得べき何物かを見出してゐるのである。從て研究の盛なるに伴つて、陰に陽に歐洲の一般思想の中に喰ひ入つた印度思想の影響も實に豫想外に深いものがある。表面運動だけにしても、今や各國に佛敎會のない所はなく、所在に、吠檀多敎徒の會合あり、殊に亞米利加には瑜伽（ヨーガ）主義の學苑もある程にて、到る所に、印度思想は一般的に鼓吹されてゐるのである。況して知らん振りして、吠檀多や佛敎の思想を藉り來つて自己の神學や人世觀を多成してゐる人々をも、この勘定の中に入れるならば、今や西洋の精神文明に對する印度思想の影響は到底、度外視す、からざるものとなつたのである。この勢で進んだならば、たとへ、未だショーペンハウエルの言つたやうに歐洲の思想界に根本的革命を起すまでに到らずとしても、將來、印度思想によ

りて、歐洲人の世界觀や人世觀に著しい變動が起るに違ひあるまいと思ふ。

西洋の學界なり、思想界なりに於ける印度思想の狀勢は、先づ、ザットこんなものである。而もそれは僅かに百年餘りに開拓された効果なることを思へば實に驚かざるを得ぬではないか。而もまた、彼等が之を研究するに當り、日本人が歐洲思想を高等文明の產物として研究したと事變り、寧ろ、征伏された東洋文明の一特產として研究した結果たることを思へば、いかに彼等は印度思想を思想自身として偉大なる價値を有するものと見たかゞ推知されやう。翻て之を千有餘年以來、印度思想の感化を受けた日本人の印度思想に對する現狀と比較せよ、何んたる著しいコントラストであらうか。あちらでは荆刺を推し開いてまで之を拾ひ採らんとするに對し、こちらでは已に與へられたものさへも捨てゝ用ゐぬといふ有樣ではないか。利用の上手と下手とが文明の分れ道であるとするならば、情けない哉、日本は此點に於ても歐洲の下風に立たねばならぬのである。吾人は獨逸の青島占領に對して、榻下の下、他人の鼾睡を許さぬと言つて之を驅逐したではないか。而もかゝる重大な、當然、日本の學界なり思想界なりに屬すべき印度學の領土に對しては、隨意に歐洲人の鼾睡を許るさんとするのであらうか、この程目先のきかぬ矛盾が、またと世にあるまいと思ふ。而も殘念ながら、何んと言つても、今日では、印度學研究の覇權は已に西洋の學界にとられて仕舞つたのである。散克利をやるにしても、印度哲學をやるにしても、少くも磨きをかけるには西洋に行つて來ねば本物でないかの如くに見做さるゝに到つた。のみならず、佛敎に關しても、日本は澤山の材料を有して隨意に使用し得る便宜を持ちながら、稍々もすればその粹は向ふに吸ひとられて、却て之を逆輸入せねばならぬやうにならうとしてゐる。之を取り戻して日本を斯學の本家とすることは、少くも青島から獨逸を驅逐した以上に日本學界の急務ではあるまいか。而もこの事業たるや決し

て青島を陥落させた位の易々たる氣持ではいかぬ。少數の專門家許りでは到底やりきれるものではない。多數の人、殊に思想界に出入する識者が眞に印度思想を味ひて、そこに盡きぬ思想の泉を汲まんとするやうな一般的氣運に向はねば駄目である。

この意味に於て、近頃漸やく日本の思想界が眞面目に印度に向ふやうになつて來たのは、日本の思想界を順調に導く上に、斯學の研究を促進せしむる點に於て、非常に快心の事と思ふのである。尙益々この氣運の盛にならんことを望むや切である。

不平を述べた序でに、今度は少し、自分の畑に入つて、所謂專門家諸先輩に向つて注文したいことがある。後輩の癖に生意氣だと叱れるかも知れぬけれども、序でゝあるから少し許り平常の所感を漏らして見たいのである。それは外でもない、日本の印度專門家は餘りに考證に走り過ぎて思想内容をば却て疎外視する傾きのあることとである。佛教の研究であらうが、一般事項の研究であらうが、苟も印度研究といへば必ず考證に極まつてゐるといふ有様である。曰く何々聖典の成立、曰く何々經の翻譯、曰く某々の年代考、曰く某々語の吟味といふが如く、外形的歴史的研究は可なりに發表せらるゝけれども、思想内容に關する有力な研究は誠に乏しいのである。少し樂屋落の氣味があるけれども之に關して可笑な事があつた。自分の交遊者中には隨分、惡口屋が多いが、嘗て自分は何にかの序でに彼等の前で印度思想に關して談話したことがあつた。すると彼等は態と眼を見張つて、印度哲學でも思想問題を取扱ふのか、吾等は印度哲學とは御經や梵語に關する考證學の異名かと心得て居たよ。と驚いた振りをしたのである。本より一場の戲言に過ぎぬけれども、また以て、印度學者の研究方針に對する局外者の感想を知ることが出來ると同時に、顧みて反省せねばならぬ批評であると自分は其時感じたのである。固より印度は歴史の不明な所であるから何事を研究するにしても是非とも考證の力を藉らねばならぬ。之を離れては眞の學問的研究の出來ぬことは萬々承知の上である。併し

ながら之と同時に、印度には歴史以上に出づる永恒の思想内容のあることを忘れてはならぬ。少くも一方に考證的研究をやりながら、他方にはその思想内容を提起して、之を批判し解説し、出來得ることならば之を自己のものとして現代生活に引き宛てる點まで消化するのは、印度思想史家の任務ではあるまいか。然るにこの方面を度外視して只管に、乾燥無味な考證的研究を事務とする現今の印度研究の傾向は、どう見ても、その當を得たものでないと思ふ。其力で一般人に印度思想を皷吹するとか、進んで思想界を動かさうとするが如きは木に緣つて魚を求むるよりも難いのである。考證も必要である。飜譯語の詮索も必要である。殊に藏經の索引を作るが如きは缺くべからざる學界の急務である。併しながら、印度思想の最も價値ある點は、マックス、ミューラーの所謂「プラトー、カントを學べる人と雖も注意に價する生命問題の解決」に存することを吳れ〲も忘れてはならぬ。而して日本の思想界がその缺陷を補ふために印度思想に期待すべき點もこゝにあるのである。考證もなく、梵語の詮索にも浮身をやつさぬタゴールの思想が、たとへ表面上にしても日本の思想界に或物を寄與した意味を、印度專門家に三省してもらひたいと思ふ。一生を過去の研究にのみ沒頭して滿足する人ならば格別、苟もその學べる所を以て幾分でも現代の精神生活に觸れんとする人は、印度思想の生きた方面を開拓してもらひたい。自分の事は棚に上げて敢て苦言と希望とを呈するのである。

自分はこの小論文で敢て印度思想の講義をやらうとするのではない。また必ずしもその生きた方面を開拓して見やうと企つるものでもない。これは自分の力に中々及ばないからである。こゝではたゞ重なる問題に就いて、印度特有と思はるゝ思想の特徴を述べ、その人生觀上の意義に關して、少し觸れて見たいと思ふのである。初の氣焰が大きいから內容も定めてエラからうと豫斷せぬやうに願ふ。

又、印度思想といへば佛教も含まるのであるけれども、佛教には支那、日本で發達した要素もあるから、

今は主として印度一般思想を對象とする。

▲印度思想の外形的特徴

印度の文明は短く見ても約四千年間に渉つてゐる。アリヤン人種が印度の西北、五河(パンジャーブ)地方に移住した時代から、今日に至るまでを通觀すれば、隨分、その文明に變化もあれば動搖もあつた。併しながら、若し此間に於ける一貫の特徴を求めるならば、それは確かに精神的方面の優越といふことである。勿論、物質的方面の發達にも見るべき點があるけれども、迚も其精神的方面には比べ者にならぬのである。極端に言ふならば印度文明より思索と信仰とを除去したならば、あとには、世界的な何物も殘らぬと言つても然るべしと思ふ。印度文明の特徴は宗教と哲學とを產出した所にある。

從てこの間に起伏、興廢した思潮の種類を擧げるならば實に數へ切れぬ程ある。吾人はこの中に世界のあらゆる宗教の型を見出すことが出來ると同時に、希臘以來近世に至るまでの哲學思想をも見出し得る程である。併しながら、また、是等を一貫した、印度思想の特徴といふべき點もあるから、その著しい所を、先づ形式的方面から述べて見やう。

第一。思想の發表は團體的であつたこと。

由來、思想活動は主として個人的なものである。千萬人の意見よりも、時に、一人の思索の結果が却て異なることがあるから、思想活動と個人格とは到底離すことが出來ぬものである。然るに不思議にも印度の思想活動には、この個人的色彩が甚だ缺けて、多くは團體的形式の下に發表せられてゐる。彼等思索家が、自己の考案したものでも、態々之を沒して天啓とか又は古聖とかに假托して主張するを常とした。而も之を遼遠の昔より傳はるものとして嘗て純乎として純たる歷史的個人思想と自覺したものが甚だ尠いのである。たゞ獨り、佛陀ありてその法を、無師獨悟の創見と銘を打つて宣傳したのは、恐らく、印度思想界にありて破天荒の現象であらう。しかし、それでも矢張、佛陀自らもその先驅として過去の七佛を認めた許りでなく、後

世の佛教徒となれば凡ての思想を佛陀に歸した程で、幾分その風習を脱することを得なかつたのである。況して、正統婆羅門教となると、吠陀でも、ウパニシッドでも、甚しきは餘程後世に起つた思想でも、凡て、大昔に聖者達が神の旨を受けて宣傳したものゝやうに心得て毫も個人的意見を認めぬ。

かくの如きは、見樣によつては、個性人格を重ぜぬやり方で、甚だ不徹底な思索法であるかも知れぬ。併しながら、吾人はまた、この間に於ける印度文明の特徵と、他國に見出し得ぬ美風の存することを看取せねばならぬ。蓋し、思想を以て生活の餘裕に基く、言はゞ一種の趣味とする限り個人々々に色彩が異つても宜しいけれども、印度の如く思想其者が文明の本質をなす所にあつては、各自の思索がそのまゝ一般的たることを要求するからである。即ち換言すれば、印度の思索家は、言はゞ、その思想を以て直ちに一般文明に對する實際的政策たらしめんとしたので、之をその民族性に歸し、又はその民族性を動かし得べき團體の形で發表しやうとしたのである。こゝに印度人がいかにその思想を必須的なもの、實際的なものと考へたかの消息を充分に示してゐると思ふ。且つ、他人の說を燒き直ほして直くに自己の創見を誇らうとするやり方に比すれば、印度思索家の沒我的態度は却て眞理その者に忠實なやり方ではあるまいか。自己の名譽を沒却してまでその創造した思想を一般的たらしめんとした奥ゆかしい努力は大に買つてやらねばならぬ處と思ふ。遮莫、之がために歷史を埋沒し、思想の新古を混同した罪は飽くまで免るゝことの出來ないのは勿論である。

第二。**思索の態度が自由であつたこと**

前述の如く印度の思索家はその思想を古聖や傳承に假托した。併しながら、注意をせねばならぬことは、その傳承たるや概ね名目のみで、彼等は決して古傳のまゝの傳承に束縛されなかつたといふことである。寧ろ、印度の思索家は自由に自己の良心に從て、思索し公論して敢て憚らなかつたことは、世界中でも一寸珍らしい程である、已に梨俱吠陀の天然神話全盛の時代に於

て、神界の大立物を大膽に否定しやうとした形迹も見えてゐる。その後、國民的宗敎ともいふべき婆羅門敎が成立してからも、依然として、その中に自由思想が認容されてゐた。婆羅門哲學の粹で、且つ印度哲學の源泉とせらるゝウパニシャッドの思想も實は當時の反婆羅門的自由思潮の結晶に外ならなかつたのである。況して紀元前五六世紀の佛敎時代となるや、諸異想が盛に頭を擡げて、各々、その地歩を開拓した樣は眞に思想界の一大偉觀と言つても宜しい程であつた。佛陀が吠陀の敎權を否定し、婆羅門の絕對權を否認して、淸新なる人格的宗敎を皷吹されたのも、一面からは反抗的運動であるけれども、他面からはこの自由思想の結論であると見ることも出來るのである。殊に印度人の性癖として、何事も極端まで及ぼさゞれば承知が出來ぬので、思索も極端から極端へと移り、吾人をして實に能くも思ひきつて、かゝる說を述べたものかなと、驚かしむる程の說も平然として主張せられてゐる。故に印度思想は表面上よりすれば沒個人的であるけれども、決して歐洲の中世紀に於けるが如く、傳承の力を以て、個人の信仰や思索の自由を妨げるといふことはしなかつた。印度人の思索は飽くまで自己の理性を主としたもので、自己の理性に合へば信じ、然らざれば舊來の信仰をも造作なく捨てゝ他に移るといふ風であつたのである。これ實に印度に因明學などゝいふ議論法が盛に行はれた所以である。故に印度人は殆ど狂熱的な宗敎國民でありながら、回敎侵入以前までは嘗て大袈裟な宗敎の迫害がなく、文字通りに信仰の自由が保證されたのである。

各自異れる諸思潮が同時に併立して、而も絕えず新な思想が釀成された所以もこゝにある、而して印度思想が或點に於て世界無比の深さに達し得た所以もこの自由に考へ得たといふ事情に負ふ所が多いのである。たゞ近代に至りて印度人の信仰が度すべからざる程、頑古に固まつたのは、蓋し、印度は獨立を失つて思索力も衰へた結果で、寧ろその退歩を示すものである。

第三。哲學と宗敎とが同一であつた。

印度の思索家の態度は頗る自由であつたけれども、それは決して氣まぐれの論理的遊戲の爲めではなかつた。寧ろそれは全人格の要求を充たそうとしたものであつた。即ち知的要求許りでなく、同時に、情意の要求をも充たさうとしたものである。故に印度には種々の思潮があるけれども嘗て哲學と宗教との間に區別を附したものがなく、兩者は一體不離のものとして、たゞ表裏の關係をなすに過ぎぬと見られたのである。いかなる信仰に對しても必ずその理論的根據を求め、いかなる理論に對しても必ずその人生觀上の應用的方面を豫想したのである。即ち印度思想は、全體として、智信合一主義、知行合一主義の上に立つもので、聽て、廣義の實用主義であつたと言はねばならぬ。ウパニシャッドや薄迦梵歌などで、頻りに、僧法耶(理論)と瑜伽(實際)との合一を主張した意味も全く爰にある。從てこの點を見逃しては印度思想の眞意を捕捉し得ぬよになる。印度思想を正當に理解するには、先づ表面と、純理論を辿ると同時に、その裏面に廻つては、實踐的信仰的方面からその價値を見出すに努めねばならぬ。

吾人を以て見るに、此點は印度思想の特徴中の一大特徴で、而も印度のために大に誇るべきで點あると思ふ。西洋に於ては、希臘系の哲學と猶太系の基督教とが、古代に於て衝突し、中世に調和し、近世に於て再び分離した。而してカントが之を人心の二要求に基くものとして、哲學は知的範圍に、宗教は情意的範圍に屬するもので、兩者が獨立してその地位を保つものと定めてから、西洋の哲學者は概ねその見解に順じてゐる。併しながら卑見によれば、こは寧ろ事實の解釋で先天的理論上の解釋ではないやうである。何故なれば、哲學的要求も宗教的要求も、之を人世觀上よりすれば、共に全體的立脚地から實在を捕へやうとして起つたもので、偏務的要求から出發したものではないからである。故に若し西洋に於ても、哲學と宗教とが、希臘なり猶太なり、同一民族から起つたものであつたならば、恐らく去る解釋を與へなかつたかも知れぬと思ふ。然るに印度にありては、その國民は希臘人の如く

容的で、而も猶太人の如く情的であつたから常に理論と信仰との同一を期したので、毫もその間に區別を附せなかつたのみならず、附することに極力反對したのである。此點に於て、吾人は、たとへ、その思想內容を別としても、印度のこの態度が將來の理想的宗教なり、理想的哲學なりの典型とならうと思ふ。而してこの意味に於て、近頃、西洋の哲學的傾向が著しく宗教的色彩を帶びて來たのは、漸やくこの理想的典型に近づきつゝあるものとして、吾人は寧ろ印度思想の勝利を欣ばんと欲するものである。

▲印度思想の內容的特徵

印度思想の內容は甚だ複雜であるから、全體に通ずる特徵を擧げることは甚だ困難である。以下述ぶる所は、比較的に一般性を帶ぶるものと、著しく特徵を發揮した或者とである。

人生觀

古代印度アリヤン人種の人生觀は、何れかといへば、現世主義であつた。神を祭るにしても、日常の糧を與へよと祈り、怨敵の退散を助けよと賴み、未來の事などをば余り氣にかけなかつたのである。蓋しアリヤン人が印度侵入の初は、西北方、五河（パンチャーブ）地方を舞臺とし原住民族の驅逐を任務としたので、生活の伸路を開くのが何によりの緊急問題であつたからである。

然るに彼等は原住民族を驅逐して恒河平原地方に發展して、生活に格別の苦勞を感ぜぬ樣になるや、その人生觀にも除々に變化を來たした。從來快濶であつたのが、幽欝となり、從來活動的であつたのが、靜的となつた。即ち此際に於ける彼等にとつては、已に、生きて行くといふことは人間當然の事で、改めて之に關して考慮を要せぬ問題となり、人生の目的は寧ろ生存の意義を明にするにあつたのである。加ふるに、氣候も漸やく熱くなり、單調なる平原生活に、耳目の欣ばしむるものなく、偏へに思索して形體以上に人生の歸趣を求むるに最も好都合な狀勢となつたのも、この傾向を助長した一因であつた。

この結果として彼等の到達した人生觀は、要するに、人生はそのまゝでは多大の意味を有するものではない。換言すれば、人生は吾人の最高理想を實現すべき一階段に過ぎぬから、その最高理想に觸れぬ限り、たゞの肉體に過ぎぬ、といふことになつたのである。印度特有の厭世觀の理論的根據はこゝにある。故にこの觀察は、一面よりすれば、印度の思索家が無限永恒の理想鄕に憬れながら、他面には、顧みて現實生活の之に添はぬ所から來た、內面的矛盾に基く人生觀であつた。文獻の上よりすればウパニシャッドの初期に初まり、その後期に至つて初めて確定したやうである。蓋し、ウパニシャッドは、印度人が最も大膽に、切實に、人生問題の解決に苦心した最初の記錄であるからであらう。これより學派時代となるや、厭世思想は、殆ど、各派共通の人生觀となり、佛敎、耆那（ジャイナ）派、數論（サーンキヤ）派は勿論、現生活の規定を主とした法典の作者さへもその傾向を帶ぶるに至つたのである。而して、之に依つて印度思想が益々高遠、幽玄の旨を發揮したことは爭ふべからざる事實である。何故なれば厭世の結果は、總て、益々理想界の擴大を來たして來るからである。但し、かく言つたからとて、印度の思想家は、厭世觀の結論として、直ちに現生活を否定し去らんとしたものと解してはならぬ。寧ろ、より多く、之を肯定せんとして、一應、否定の道をとつたものであることを忘れてはならぬ。彼等は理想界と現實界の不調和を感じて厭世的となつたけれどもその理想界を以て自己以外に別にあるものとはしなかつた。寧ろ之を自己自身に備はるものとしたのである。從て、その理想を實現すべき舞臺も現生活を除いて別に求むることが出來ぬも勿論のことである。故に、印度の思索家は一面に肉的自己をツマラヌものと見ながらも、また他面には、人間に生れたことを何よりの幸福として歡喜した、最高理想を實現するには、快樂多き天上よりも苦痛多き人間の方が恰當であるといつて欣んだのである。こゝを以て、印度の思想家は厭世觀を主張しながらも、自殺を是認することなく、寧ろ之を禁止した。佛敎の戒律でも、殆

事詩マハーバーラタの教訓でも堅く自殺を誡めてゐる。この意味に於て、タゴールが人生を道路に比したのは最も能く印度思想の深き人生觀を道破した比喩と思ふ。蓋し道路は一面から見れば、吾人と吾人の目的地とを隔つる障礙であるけれども、他面から見れば、その道路の一歩々々が、聽て、吾人を目的地に導く連鎖となるからである、即ち此意味に於て、印度の思想家は、吾人の日常生活は、頗る嚴粛なる、而も、最も神聖なる存在であつて、直ちに無限、絶對の理想界に連る、一歩々々、解脱の歷程であると感じたのである。印度に於て厭世觀と汎神觀とが同時に、同一人によりて主張せられ得た契機點も全くこゝにある。印度思想を理解しない人の中には印度思想は總じて、生活の否定を主意とするもので、佛教もその例外ではないなどと批評する人もあるけれども、その生活の否定といふことを無條件に使用する時には、大いにその正鵠を誤ることになる。

自分は敢て、悲觀的厭世思想を辯護せんとするものではない。併しながら、幾分の厭世的色彩を帶びざる理想主義ほど物足らぬものもないと思ふ。況して淺薄なる樂天主義に至りては、寧ろ、思想界を害ふものとして之を憎むものである。印度の厭世觀は稍々極端に走つた點に於て確かに面白くない。去れどそは、力弱き、敗者の厭世觀ではなくして、其生活の勝者たらんとするの努力の結果たることを忘れてはならぬ。ハイネ曰く

眠りは甘く、死は尙ほよし。
生れざりせば、最も善かりしならん。

印度の厭世思想に似て、非なるものと言はねばならぬ。

輪廻思想

厭世觀と關連して、印度思想の一大特徵と見るべきは、輪廻思想である。輪廻思想とは言ふまでもなく靈魂は死後生前の善惡業によりて、種々の生を受けて無窮に流轉移生するといふ信仰である。尤もこの信仰は、希臘にもあり、殊にピタゴーラス派や、プラトー派などが

主張した處であるけれども、世界中、未だ嘗て、印度程、固執的で且つ普遍的意義を有する所はないのである。印度人は今日でも之を確實に信じてゐる許りでなく、佛教の行はれる所多少この信仰を有せぬ所がない程である。印度で解脱といふのはつまり、この輪廻の境を脱して安住不動の境地を開拓することで、不死といふのも、輪廻の生死を離るゝといふことに外ならぬ。即ちこの思想は印度人にとりてはその人生觀上、最初に衝着する大問題であつたのである。

文献上、この信仰の起原を尋ぬるに、最古の梨俱吠陀(紀文前二〇〇〇―一〇〇〇)の時には未だその形迹がなかつた。然るに神學書(ブラーフマナス)時代(紀元前一〇〇〇―八〇〇)に到ると稍々その萠芽を示し來り、遂にウパニシャッド時代(紀元前八〇〇―六〇〇)に到りて圓熟したものである。之より學派分岐時代(紀元前六〇〇頃)となるや、遂に一般的となり、あらゆる學派はこの問題の解決を以てその中心點となした。マヌの法典の如きは法律的に之を規定した程である。

而してその理論的根據を尋ぬるに、大凡、二種あるやうである。一は、靈魂不滅の思想に基くもので、他は倫理上、責任の追跡に基くものである。靈魂不滅の思想に基くものとは、要するに、次の如き理由に歸する。靈魂とはつまり生命の義で、獨り人類許りでなく、動物にも植物にもあるものである。然るに事實上、一切の生物は肉體的に生滅する所を以て判ずれば、その不生不滅の靈魂は、死時に於て他に移生すとせねばならぬ。而して一切の生物は生命といふ點に於て本質上、同樣であるから、その移生の範圍も生物界全體に渉るものと見ねばならぬ。即ち人間も馬に生るゝことあれば、馬は猿に生るゝこともあるといふのである。次きに倫理上責任の追跡に基くものとは、その移生に際して運命を支配する力を生前の所行に歸する考である。即ち、何故に、或る靈魂は人間と生れ、或る靈魂は馬と生るゝか、而も同じ人間でも、何故に其運命に吉凶禍福の相違があるか、等の問題に對して、それは生前に於ける善惡行の餘習(カマル)ありて、その力に酬ひた果報であ

ると考へるのである。蓋し、この理由は、吾人に善惡と禍福とが一致すべきものとの倫理的要求ありながら、現實上この要求が充たされぬ所より、之を過現未の三世に及ぼしてその倫理的妥當性を求めやうとした所に基くものと解さねばならぬ。

かくて、是等の理論と、傳承の力とによりて、印度人は輪廻說、業說を以て、一毫も疑ふことの出來ぬ眞理と信じ、一切の行動の背後には常にこの考察が控えて、之を支配した。而して、其結果として、永久休みなき輪廻を恐るゝ心よりは厭世觀を助長したけれども、また、之に依つて現在生活に於ける道義心を助長したことも一方ならなかつた。殊に一切の生物に對する慈悲心、同情心を涵養し、他國に見ることの出來ぬ動物愛護の美風を印度に生じた原動力も全くこの觀念が基礎となつたものである。

今、吾人を以て見るに、此考は結果に於て、頗る有效な點ある許りでなく、また理論上よりしても、俄かに放棄し得ざる根據を持つてゐると思ふ。固より今日よりすれば、その推定の道行には受け取り惡い點がある。殊に靈魂の不滅を餘りに器械的に取扱ふた邊り、已に原始佛教が排斥し去つた程の欠點を持つてゐるのである。併しながら、人はこのまゝ死滅し了るものではないといふ信仰のある限り、この思想は、少くも、宗敎上、倫理上、多大の理由を包含してゐるものである。煩はしくはあるけれども、少し之を述べて見やう。

抑々、カントも言つた如く、假令證明が出來ぬにしても、善惡と禍福との一致は吾人の實踐理性の要求として放棄し得べからざる假定である。若し善惡と禍福とが全然、別範疇ならば、早い話しが、形罰も推賞も意味をなさぬことになり、恐らく社會の秩序も維持することが出來ぬことにならう。然るに實際上に於ては、この要求は必ずしも充たされないで、少くも半數は踏みにぢられてゐる。善人榮え、惡人亡びて、めでたし／＼は德川時代の小說の筋のみで、事實に於ては、支那人の所謂、あゝ天道是乎非乎の現象が頗る多いのである。こゝを以て、昔よりこの要求を徹底的に會通せんとし

て種々の假說が提出せられた。試みに一二の例を擧げるならば、先づ支那に於ては、積善の家に餘慶あり、積惡の家に餘殃あり、と、いへる格言は此問題の解決として提出せられた代表的のものであらう。即ち、祖先の善惡がたとへ、當人に酧いぬにしても、その子孫の幸不幸に影響するといふ考である。この考たるや、或る點までは事實に契ひ、而も子孫は祖先の延長であるといふ點で、幾分の理論的根據を含めるものである。併しながら、事實の全體でない許りでなく、理論上よりしても、若し當人にその要求が充たされないで、而も、子孫もなかつた場合には、その行爲の責任は永久に消え去るといふ欠點がある。即ち事實上よりしても理論上よりしても、到底、滿足な解決と言はれぬのである。又、この問題に對する猶太人の考を見るに、自分の解する限り、凡て神意に歸したやうである。即ち、ヨブの如き義人にして苦むだのも神之を試みた爲めで、從て、惡人にして榮えるもまた神が之を試みたものと言ふだらう。而して之が最終の會通法として提起せられた考は即ち末日審判である。世界の最終に到りて、現世の不公平は凡て公平に判かれるといふのである。然るにこの考は、神を全智全能とする限り、而して靈魂の不滅を許す限り、理論上、立て得られぬものではない。何故なれば、いかなる事があらうとも、神意の致す所、奈何ともすることが出來ぬと遁げられるからである。併しながら、吾人を以て見るに、よしや、一時の試みにせよ、善人を苦め、惡人を榮えしむるといふが如きは、神樣が餘りに小刀細工をやる嫌があつて面白くない。且つ、その最終審判も世界の末日まで未決として置かれ、而もその時、一度に全生命の運命が定められるといふに到つては、餘りに悠長で、且つ、餘りに片附け過ぎる嫌ひあるを免れぬ。これでは惡人は永久に救はれることが出來ぬといふことにならう。故にこの考は、たとへ神の存在を認めた所で、甚だ信じ惡い、而も餘程苦しい假定であると言はねばならぬ。その外、此問題に對する考察は各國にあるけれども、何れも不完全で到底、理論上、支持し得べからざるも

のゝみである。若しそれ、現今の倫理說に至りては、善惡と幸不幸とを別問題として論ずるから、別に欠點がないけれども、之は科學としての態度であつて、人生の根本的要求にまで觸れんとする宗教的解決法と異るから、こゝに評する限りではない。

かく見て來ると、印度の輪廻說、業說は、たとへ絕對的價値を有せぬにせよ、少くも、之まで提出された諸解決中で、ともかく一番妥當なものと認めねばならぬ。自己の行爲が飽くまで自己に酬いるといふのであるから、個人の責任を沒する患がなく、又因果の關係は三世に及ぶといふから、現世の不公平も之に依つて格別の無理がなく解け、且つ人をして運命に安じて、而も善に進ましむるの効がある。加ふに、之を宗教的理想の追求よりすれば、たとへ、一と度び墮落の深淵に沈むも、幾多の生の更新中に遂に無限の理想を成就し得べしとの悠遠なる希望を與へ、宗教的救濟の方面に於ても大なる力がある。況して之を、善人の生涯に徵すれば、この輪廻の事實は、已に吾人の生活過程中に、儼然として存在してゐる。吾人の思惟、行爲の積聚が、吾人の人格を形成し行くの事實は、やがて、業說の心理的證明を語るものではないか。人格の修養上、時に靈性の活動が強くなり、時に動物性の著しく現はるるは、やがて、生きた輪廻の證明ではないか。三世因果、六道輪廻の說は、體驗上よりすれば、實にこの生活過程を延長したものに外ならぬ。而して、自分はこの思想の價値を寧ろこの生活的體驗に置かんと欲するものである。

ウパニシヤツドの自我觀

厭世觀も輪廻觀も、畢竟するに自我問題に關連する產物である。而もこの自我の觀察を最も深い點まで進めたのが印度思想の一大特色である。勿論、ソークラテースが、汝自身を知れと叫び出してより、この問題は西洋哲學に於ても常に思索の中心となつてゐる。併しながら、之を一生懸命に、あらゆる問題の中心として、而も一般的に論究した點に於て、とても、印度に及ばぬのである。印度の思索家は之を全生命の問題を解決

する鍵鑰として、人生の最高歸趣を見出す通路として、否、宇宙の中軸に關する實在の問題として取扱つたのである。かのショーペンハウエルやマックスミューラーなどが、プラトー、カントの研究者も三顧の價ありと宣言した印度思想なるものも、實に、この自我問題に關した思想を指すものに外ならぬ。併しながら、それだけ、この問題は印度の諸派によりて種々に取扱はれたので、之を一括して述ぶることは中々困難である。依て今はその代表としてウパニッヤッドに就て、少し許り述べて見やう。蓋し、ウパニシャッドは、その以前の凡ての自我觀を纒めて、最も深く廣く、之を攷究した記錄であるからである。

然らば、ウパニシャッドは自我をいかやうに觀察したか?、この問題も決して簡單な解答で濟まされるものではない。何故なれば、ウパニシャッドは組織的教理を述べた記錄でなく、多數の詩人的哲學者がその心に浮べるひらめきを雜然と述べたものであるからである。從てこの中には、詩的に考察した自我觀や、本體論的に觀察したものや、心理學的認識論的に考察したものや、乃至、禪定的考察による體驗的報告などが、色々と雜つてゐるのである。併しながら、是等の諸態度に通して一貫の方針となれる自我の求め方は、要するに、內省的思索によりて外から內へと觀察の眼光を進めることとであつた。即ち、物質的要素より精神的要素に、感覺的要素より非感覺的要素に、暫有性より永恒性に、簡單に言へば、肉體的分子を遺去して精神の中樞へと進むことに依つて自我を捉へ得べしと見たのである。くさぐさの例はとても擧げて居られぬから、此事を最も明白に示したと思はるゝ、タイテリーヤ、ウパニシャッドの五藏（パンチャコーシャ）説を出して見やう。五藏説とは、吾人が通例、自我と考へてゐる肉團身を起點として、內部に、四重の關門を通過して最後に眞性實我に到達するといふ考である。之を順次に併べて見ると次の通りである。

一、食味所成我（肉體）

二、生氣所成我（呼吸）

三、心所成我（現識）
四、識所成我（理性？）
五、歡善所成我（眞我）

即ち、心身の組織に於ては、先づ、肉體的生理的要素を遺去し、更に感覺的要素に富める現象心を遺去して、心作用中最も高等なる理性に進み、而も、この理性も主觀客觀對立の嫌ありとして絕對的本位としての眞我に進めるやり方である。而して、この中に心理學的觀察も認識論的觀察も、乃至、本體論的觀察（精神の本質を求むる）も含まることは、改めて說明しなくつても、吾人自身が少しく反省して見れば容易に分らうと思ふ。加之、この順序はまた、瑜伽即ち禪的考察の次第を示すものである。即ち、禪的修行に於て、初めに身體を制し、次いで呼吸を整へ、更に心の動搖を抑え、觀念を集中し、遂に無念無想の境に至りて生命の本質を直感せんとする順序に合するのである。眞我を歡喜と名けたのも、蓋し、この瑜伽的體驗から來たものであらう。何故なれば、瑜伽の見地よりすればこの境は即ち悟得の城であつて、こゝに至れば未曾有の大歡喜を獲るといふからである。この意味に於て、第五藏の眞我は貧弱なる抽象の結果ではなくして、寧ろ最も具體的實在なりと解さねばならぬ。とにかく、かく見て來ると、この五藏觀はウパニシャッドに於ける自我探究法の全體を代表するものと言ふことが出來る。

次ぎに然らば、かくして探究された眞我の性質はいかにといふに、固より認識論上よりは之を何んとも言ふことが出來まい。何故なれば眞我は認識の最高原理であるから之を更に認識するいかなる機關もないからである。この意味に於てウパニシャッドの大立物たるヤージニャワルキャ仙は眞我を說いて「曰非」「曰非」(neti, neti)と云ひ、何んと言つても當らぬ旨を簡明に示さうとした。併しながら、眞我には此外、體驗上の意味もあれば、本體論上の觀察もあるから、之に認識論上の豫定事項とを加へて、その積極的性質を定め得られぬ譯もない。即ち之を本體論的觀察よりすれば、自我は言ふまでもなく常恒の實在であらねばならぬ。

凡ては無常變遷する中にありて、獨り、變化に預らぬ中心點であらねばならぬ。何故なればこの中心點たる實在を求めんとしてウパニシャッドの思索家は自我に到達したからである。故にウパニシャッドは我を說いて常に實有といひ、實在の實在と名けるを通例とした。デカルトの言葉を藉りて言へば、萬物の存在は疑ひ得べきも、自我の存在は疑ひ得べからずと考へたのである。更に之を、認識論上よりすれば、自我其者の性質は分らぬとしても、少くも、それは認識の主體たる點に於て精神的存在とせねばならぬ。即ち純粹主觀とせねばならぬ。この意味に於て、ウパニシャッドは、また、我を知、心、覺などの異名を以て示することもある。デカルトの所謂、我思ふ故に我存するのである。次に之を直感的體驗の方面からすれば、自我は、先きに述べた如く、歡喜體である。憂苦なく、不淨なく、分裂なき、純一絕妙の歡喜をその本質とするものである。この意味に於て、ウパニシャッドは五藏說の場合許りでなく、到る處に、眞我の異名として歡喜といふ語を用ゐてゐる。タゴールがウパニジヤッドの語として愛(love)を說いたが、實はその愛の原語も ānanda 即ち歡喜であるのである。

この、實在、認識、歡喜の三性質はウパニシャッドで、種々に我の性質を說いた中で、最も重要なもので、而も、最も積極性を帶びた說明である。從て、これよりして、後世の吠檀多教(ウパニシャッドを組織立てんとする學派)となるや、直ちにこの三性質を纏め擧けて眞我の定義とした。即ち有名なる saccidānandam(サッチッドアーナンダム)の合成語がそれである。Saccidānandam とは Sat(實在)cit(心識)ānandam(歡喜)の三語を合成して一語としたもので之を忘れては、ウパニシャッドの自我は分らぬとしたものである、要するに、分り易く言へば、自我は吾人の身心の組織中の主體として、認識の本源で本來純妙の歡喜體で、而も常恒不變の實在であるといふが、ウパニシャッドの自我觀である。併しながら、ウパニシャッドの自我觀は之だけで止まる者ではない。若し單に之だけならば、要するに、其自我觀

は各個人の微弱な一霊魂の説明に過ぎぬことになつて仕了ふ。ウパニシヤツドの特色は寧ろ此自我を直ちに宇宙の大我と結び付けた處にある。即ち進んで、所謂、梵我一如論を唱へた所にウパニシヤツドの意義が存するのである。蓋し、先是、印度の思索家は宇宙の原理を尋ねて、そを唯一、絶對の梵と名くる風習が一般に行はれた。然るに、ウパニシヤツドに至るや、その空虚な名目に滿足しかねて、之を實質的に把捉せんとして自我の探究を試み、遂に宇宙の本體と、人間の本體とが實質上、同一であるとの結論に達したものである。この消息を最も明にするものは、チヤーンドーギヤ、ウパニシヤツドの一句であるから、試みに之を引用して見やう。

(一)、實にこの一切は梵なり、そを tajjalān として靜かに念ずべし。誠に人は意向によりてなる。この世に於て意向によりて成るが如くに滅後に於ても然り。故に宜しく意向に留意せざるべからず。

(二)、現識よりなり、生氣を身とし、光を形とし、眞實を思惟とし、無限を自我とするもの――彼は一切の業をなし、一切の願望を滿たし、一切の香を嗅き、一切の味を嘗め一切を包容し、寂默にして憂なし、

(三)、これ即ち我が心内に於ける自我なり。その小なることは麥粒よりも、芥子の實よりも、粟の種子の核よりも尙小なり。これ我が心内に於ける自我なり。その大なるや地よりも、空よりも、天よりも、全宇宙よりも大なり。

(四)、一切の業をなし、一切の願望を充たし、一切の香を嗅き、一切の味を嘗め、一切を包容し、寂默にして憂なし。これ我が心内に於ける自我なり、是れ即ち梵なり。我はこゝに死沒してかしこに生ぜん。

梵を先づ tajjalān (tat + ja + la + an = 彼に生じ、滅し、息す)として萬有の生住滅の大原理たるを示し而も人の志念によりて之に達し得べしと提示し置き、翻てその志念の方針として自我を求むべきを敎へ、更に、その我を小よりも小として心內の存在なるを示すと同時に、大よりも大なりとして宇宙梵と共通する旨

を道破した所梵我の關係を說くに頗る巧妙な表現法と言はねばならぬ。之を最も簡單に纒めた格語は有名なる、

Aham Brahma asmi 我れは梵なり、

Tat tvam asi 汝はそれなり、

である。卽ち、こゝに至りて Aaccidānndam の我れは直ちに宇宙的意義を帶ぶるに至つたのである。然らば之を推定した手續はいかにといふに、この理論を支持する根據には大凡三通り位あるやうである。第一は認識論的根據で、萬有は我が表象に外ならぬといふ、言はゞ、カント、ショーペンハウエル的見地に似た觀念論的立脚地から自我を宇宙の中軸と推し立てたもの。第二は本體論的見地からで、Microcosmos = Macrocosmos の類推法によつて、小我と大我との同一を推定したものである。第三は例の直感的體驗に基くもので、一切の表象を收めて心を沈潛する時直ちに梵たる絕對的生命を實現し得るとの理由に基くものである。殊に、この第三の理由は、生活上、ウパニシャッドの思索家にとりて最も有力な根據となつたやうである。蓋し、實踐上、吾人が物質的肉體を主とする限り、吾人の生活は感覺的分裂的で而も排地的となるから最も微少であるけれども、肉欲を去りて精神的に深く進むに從て、その生活が包容的となり全體的となり、次第に廣く、深く、且つ自由になつて遂に無限に擴大するからである。(此意味に於て、肉體的我欲の絕滅を期して無我說を唱へられた佛陀は、却てウパニシャッドの眞我を得たもので、天上天下唯我獨尊の自覺の下に三界を慈悲によりて包容した人格は梵我一如の實現化であるとタゴールは觀察したのである)。とにかく、何れにしても、ウパニシャッドの自我は、たゞの個人的な在ではなく、個人的なるまゝに、軈て、宇宙的意義を有するものと見たことは、諸ウパニシャッド全體に通ずる一貫の思想である。而してこの點は獨りウパニシャッド思想に於ける一大偉觀たる許りでなく、印度思想の最も誇りとする所である。但し、更に進んで、唯一の大我と無數の個人我との本體論的關係を論理的に追

跡する段となれば、また非常の困難もあるので、後の吠檀多派に至りて種々の意見が呈出せられたから、ウパニシャッド許りでは、此點は完全な解決が得られぬと心得ねばならぬ。

最後に、この思想に對する價値判斷であるが、これは中々の大問題である。何故なれば之を試むるには勢ひ、哲學的にはプラトーより近世獨逸の觀念論にまで觸れ、宗敎的には猶太敎、基督敎などに觸れねばならぬからである。しかし、今はその餘裕がない上に、自分の力では及びさうもないから止めにしやう。たゞ、この自我觀に關連して、これを印度文明の特徵を暗示するものと見て、印度文明と西洋文明との差異に關して、一寸感想を浮べて、本稿の終りとしやう、

▲印度文明と西洋文明の得失

抑々文明とは何を意味するかといふに、要するに、自我が物質に對して自由を得る社會的現象を指すものに外ならぬ。換言すれば自我が物質の力を破りて、その自爾の方向に發展し行くべき組織である。併しながら、その自我をいかに見るかによりて、自我の發展といふ意義が異つて來る。若し自我を肉的存在と見ればその文明といふことは、要するに身體が自由を得て、その欲望を滿足させる樣に物質を利用改造するの謂である。歐洲文明は實に、この道を通ふて發達したもので、而も最も成功したものである。この意味に於て、現代思潮と言はるゝ、個人主義、功利主義、實用主義などは正しくも歐洲文明の眞髓に契ふ思想と言はねばならぬ、反之、若し自我を精神的靈的存在と見れば、その文明の正路は、寧ろ我欲を去り、物質の束縛を離れて、精神生活を無限に擴ぐる所に存することになる。印度文明はこの方針をとつて進んだもので、ウパニシャッドの自我觀は正さしくその特產で且つ、その指導者であつたと見ることが出來る。勿論、事實上よりすれば、吾人の生存は心身の合成に基くものでその一を離すことが出來ぬから何れの國でも兩方面の發達があるけれども、特徵に就て分け言へば、右の如く言はる

のである。然らばこの兩文明に於て、何れが勝つてゐるかといふに、改めて言ふまでもなく、生活上最も有効なるは歐洲の物質的文明である。この文明方針が全世界を風靡せんとしてゐる所以もこゝにある。併しながら、この文明方針が極端に進むや、萬事は余りに利用的となりて情趣に乏しく、生活の必要以外には德義をも顧みることなく、人間の靈的方面が著しく麻痺して來ることも、また疑ふべからざる事實である。その極、衝突、亦衝突、遂に切角築き上げた文明を破壞し了らねば止まぬことにならう。そろ〱歐洲文明がその欠陥を暴露して來たのも蓋し所以ありと言はねばならぬ。然るに、印度の文明方針は、その外形より判ずれば頗る力の弱いものである、物質に對して無關係の態度をとらんとするのであるから、自然が與へる以上にその利用法の發明もあるべき筈がなく、肉體の發展を主とせぬから、他民族を征伏すべき方法の發達もあらう筈がない。これ印度は昔より絕えず、他民族の侵入に逢ひ、遂にその獨立を失つた所以であらうと思ふ。併しながら、それだからとて、その文明方針が、全く誤つてゐると斷定するは非常の早計たるを免れぬ。蓋し人間に靈性のある限り、その靈性の發展を方針とする文明は、少くも、肉體我の發展を主とする方針と同等の價値を有するからである。況して、自我の發展自由、持續が人間の最大目的であるとするならば、この要求を完全に實現する道はたゞ、主觀的方面に求むる外がないから、印度的方針は人類のあらん限り、その價値を失ふことがあるまいと思ふ。歐洲文明が欠陥を露すに從つて、今後は、或は反對に、印度文明の方針が徐ろに頭を擡げるかも知れぬ。故に單に目前の狀況からのみ判斷して、ウパニシャッドの自我觀を文明方針に契はぬ思想と定むるは決して正鵠を得た批判と言はれぬ。

遮莫、理想的文明方針は、その何れの方針をも兼ねて偏せざる所にある。率直に言へば、歐洲文明の、力的、差別的、征伏的精神を印度文明の、致的、平等的、平和的精神を以て補ふことが出來たならば、こゝに初め

て理想的文明が建設されやうと思ふ。即ち、内に深く精神の本性を明めてその普遍的、常恒的意義を見出すと同時に、その光によりて、外には個別的、相對的生活を照らして、直ちに全人の理想を實現し行くが文明の眞方針であらうと思ふ。而してこの方針をとることは決して不可能のことではない。蓋し前に述べた所は、暫らく、身心に分けて、その特徴に就て觀察したのであるけれども、その實、身心不二であるから、その調和を基本として一般生活に及ぼせば、軈てこの理想的文明方針となるからである。禪宗などにて、動靜一如とか正偏會互などゝ說けるも、個人的の事ではあるけれども、矢張、この方向に向ふべき針路を示したものである。

日本人は不幸にして創造力に於ては世界に誇るべき權利を有せぬ、しかし、その代り、消化力に於ては蓋し世界無比であらう。而してその文明ゎ、未た、歐洲や印度の如く、極度まで進んで居らぬから、理想的文明を建設する上に於て大なる希望がある。而も幸に、日本は印度文明の影響をも受けて居れば、西洋文明の影響をも受けてゐる。その兩長所を打して一團として、摸範的文明を形成するに最も都合のよい地位にあるのである。これを成功するが實に吾人日本人の權利で、且つ任務ではあるまいか。

附記。筆を措いて顧みるに論旨甚だ亂雜なものになり、而も論すべき題目も澤山に殘つて仕舞つた。實はこの外に、吠檀多の神觀。印度思想史上に於ける佛陀、唯物論的快樂論者としてのチャールワーカ。解脫的道德、等を纒める豫定であつたが、編輯〆切の切迫したのと、豫定の紙數に達した爲めに、以上にて擱筆することにした。龍頭蛇尾に終つた所は、公論記者並に讀者諸君に深く謝する所也。

新劇團當事者に

坪内士行

私の日本を去つて居た七年の間に、西洋の事情も變つたが、日本の事情の變つた事は非常である。物質的、外面上の變化を云ふのでは無い。其等には驚くに足る程の事が未だ目に止らぬ。が、外國の文藝なり思想なりが輸入され紹介される事の早くなつたには驚嘆する。殊に私の最も長く居た英國は、何と辯解される人があつても、未だに、ステエデイーでは有らうが、スローな國である。又、プラウドな國民である。獨逸にせよ、露西亞にせよ、新作家新思想を生じても、其等が倫敦で一般の評判になる迄には中々の時間がある。英國博物館内の圖書館に行つて見ると、「過去五年(?)以内の小說類は備付けず」と有る。つまり其の年間に評價の定つた物を選んで、始めて館内に藏する意味で有らう。萬事がその調子。これに比して米國では、淺くは有らう、一般的では有らうが、感受性に富み、且比較研究など特に熱心で、歐洲に於ける文藝思想の概念を、ほゞ網羅し統一した者も多い。從つて物により、又昨今は尙ほさら、倫敦に居るよりも、東京に居る方が遙に早く歐洲の作品思想の紹介を見得る順序である。その際に當つて、私が今更らしく、よしんば劇と云ふ狹い範圍に就いてゞも、英國のクレーグはかう、獨逸の新作品はどう、と云ふのは、喩へば活動寫眞で見られた景色と同じ品の幻燈畫を持出すと同じ事である。多少色合が實物に近くとも、到底移り變りの樣を其のまゝに、逸速く見た感に及ばぬ。十年廿年前に歸朝せられた文藝界の方々の御土產話と同じ質の物を、よし私に發表出來うるとしても、それは恐らく讀者の望まるゝ品では有るまいし、或はかへつて、洋行

歸りは見方が古い、と非難されぬとも限らぬ。私の望み、又、萬一讀んでやらうと云ふ方々が有るとすれば、その方々の望みは、私が歐米から歸つて、文學上よりも、その實地に見た所を、如何に目下の日本劇壇に應用し、採用せんとするかに有ると思ふ。

が、之は今の私に取つては頗る困難な事である。七年の間の物質的、外面上の變化には驚くに足る物が無いと申した。其等は皮相な西洋の模倣、幼稚な一時的の追加に過ぎないからである。が、精神的には、或は人あつて、それも同じく西洋の模倣であると云はれるかも知れんが、さうでは無いと思ふ。政治界、宗教界はいざ知らず、文藝界に於ける現今の煩悶、亂脈は、強ちに西洋の思想に感觸れた結果のみでは無い。直覺力に鋭い我々日本人が、殆んどあらゆる西洋の思想なり文藝を味つて見て、なほ飽足らず、安心しえずして本心から如何にかして自個の生活意識に對する壓迫を解放せんとする悶えであると思ふ。又、さうあつて欲しい。その激烈な日本文藝界の變遷を不幸にして私は委しく知らぬ。蓋し歸來後日淺くして、未だ親しく其の間の消息を知るに至らぬのである。文字の上に於ても、舞臺の上に於ても。從つて多少私に抱負が有るとしても、それを今早卒の間に讀者の前に發表すべきでも無く、無準備な意見を先づ文にするは、小說家が荒筋を先づ說くと同樣、損のみあつて益は無い。私はそれをしたく無い。殊に今の劇界は徒らに言論を戰はして居る場合では無いやうに見受ける。たゞ歸來早々ながらかくあれかしと日本劇壇の先覺諸氏に望みたいポンの一二を順序無く申すに止めたい。

指折つて先づ驚かれるは、目下我が劇界に新團體の多い事である。これでもすでに一時に比しては半分以上減じて居ると聞いては、一層に驚かざるを得ない。そもく、と論じ始むるにも及ばず、何國、何時の世にか、新劇團が、單なる野心、單なる衆合隊の下に立派に成功した例が有らうか。之をモスコーの藝術座に見るも、ダブリンの愛蘭土劇團に見るも、その他何れも有力な後援補助あつて始めて效果ある活動をなし來

つた。その第一は資本家の助力である。藝術座のモロゾフ、愛蘭土劇團のホルニマンの如きはそれで、かゝる有力な財政上の補助あつてさへも、設立以來すでに何年を經るも、藝術座如きさへ第二のチエコフ無くして、既に意氣衰へつゝありと評され、愛蘭土劇團も第二のシンヂ生れずして、人やゝ飽くの色を見せて居る。補助あつてなほ然りである。まして出發の當時から我無娑羅に突進するは、其の勇は愛すべき乍ら、智の無い猪武者では有るまいか。日本幾多の新劇團がモスコー藝術座の事業は勿論、ダブリン一座程の影響さへ世に及ぼさぬ中に忽ち行詰りの姿となつたらしいは、畢竟地盤が强固で無いからに他ならぬ。資本が豐かで無い以上は、如何に藝術的向上心のみ盛んでも、維持上俗受け專門の物を上場せざるを得まい。惜しむべきである。然し乍ら、この資本家の確實な後援を得ると云ふ事には、事業家に文藝の解る人が無くてならぬ事勿論であるが、それよりも此の後援を受けんとする人の人格が第一に肝要で有らうと思ふ。自己の名擧や成功をのみ眼中に置く者に後援するならば、結局川上音次郎や、澤村、市川の誰彼を贔負すると同じく、日本全體の演劇界には何等深く寄與する所無くして終る。演劇の社會的價値を知り、俳優としての天職を明かに自識する紳士にして始めて後援すべく、又後援せらるべきであらうと思ふ。文藝協會は其の意味に於て最も後援せらるべき資格に富んで居たらう。中心となる面々の見識高く、才學深い事は一般に認められながら、それにして尙眞の意味に於て實業家の熱心な後援を受くるには到らなかつた。一度文藝協會倒れては、他の幾多の新劇團の首領の人格なり、見識に信用を置かず、事一倍と困難になつたらうと思へば、同協會の瓦解は、一私情の上を離れて、日本新演劇の將來の爲めに頗る嘆ずべき事であつた。手拭配りや藝者屋の軒毎に叩頭する事ともならば、新劇團の存在の價値正に零である。實に今は徒らに雜口となつて得意がる時では無い。よしんば一時は牛後となるの誹は受けようとも、よく自重し、團結し、技を錬つて、誠實なる事を

世に認めさせ、財政に苦慮を要せぬ後援を得て立つに非んば、よし百の新劇團並び立つとも、到底一のダブリン一座にさへ對抗しうる事難いであらう。無理に合同を求めるでは無い。競爭を非とするのでも無い。たゞ區々たる私情を棄てゝ、競爭にしても天下二分の如き大競爭であつて欲しい。大事業を前にしては、喧嘩嫉妬は後日の沙汰にして欲しい。

又聞くに、今も新劇團の出し物の過半は外國劇であると云ふ。外國劇至極面白い。が、目下の演出法が如何で有るかは知らず、萬一それが徹頭徹尾洋風を模せんとする物であるならば、非で無い迄も愚であると思ふ。まづ其れに入るに先立つて、西洋に昨今流行の所謂表象的舞臺裝飾法に就いて一言申したい。これは讀者諸君とくに承知のクレーグを始めとしてラインハルトや、近くはバーカーなどの好んで用ゐる方法で、その各々手段に相違はある物の、主として、英に於ては故ヘンリー・アーヰングに至つて極つたと云はれ、佛に於ても數十年來行はれ來つた寫實一點張りの舞臺裝飾法に反動して起つた點に於て一致して居る。舞臺は實地では無い。いかに巧みに實物らしく見せんとしても、何處にか缺陷を生じ、破綻を出して、ごく／＼幼稚な見物を除いては、遂に不滿を感ぜずには居られぬ。舞臺上の演出はナチユラルネスを第一と尊ぶ事論を俟たぬが、人智が進めば進む程、かへつて暗示を主とし、實よりは假空の中に統一を持して、觀衆の想像に訴へ、そのイリユージヨンを完全にさせる方法を取るべきで、前に擧げた三人も、乃至近く歐米の藝術界を席捲した露西亞舞蹈團にせよ、皆此の意味に於て成功した一部の標本を示しつゝ有るに他ならぬ。

たゞ此處に申したいは、是等表象的舞臺裝飾案をそのまゝに直輸入する事である。全體是等の新案を試みつゝある人々は、何處からヒントを得、何を利用した物であらうか。成程クレーグは希臘劇からヒントを得て居よう。バーカーはポエルの沙翁演出法案を變化したのが出立點であつたらう。が、その多くに見出されるのは東洋の色彩、日本の舞臺面である。例へば能面

の如き、花道の如き、布幕の如き、廻り舞臺の如き、又その背景に用ゐられる色彩や、小道具の造物の如き、案者或は否定もしようが、親しく見る者に取つては、彼等の案と我が舊舞臺面と明かに類似する點が頗る多く見受けられる。この出所は何處にもせよ、日本に是等歐米の新案を其まゝ直輸入して、したり顔で居るとすれば、やゝ滑稽ではあるまいか。彼等が東洋から仕出して、彼地の嗜好に合せて造出した物を、我々が頂戴して我々の舞臺へ飾立てるならば、正宗の銘刀をサーベルに直して床の間へ置く趣。何故我等は我等で新機軸が出せぬかと疑ふのである。此處について乍ら盲評を加へると、クレーグの案は概して壯は壯である。麗である。が、餘り空想に走つて、同氏年願の新々劇場設立の曉は知らず、例へば「六十丈の布を垂れるなどゝは、到底行はれざる論」と一夕バーカーが說破した如く、現今の劇場に對しては餘りに無理な注文である。ラインハルトの案は奇は奇である、雄は雄である。が、之は又例へば手品師の如く、例へば劍舞師の如く、時に「サムラン」の如き巧みな藝術品を造り上げぬでは無いが、「フアウスト」第二の演出は天勝のサロメの上等に過ぎず（演者の技藝を比較するのでは無い。演出法を申すのである）「エテイボス王」の群集の使用法に至つては、正に寫實と表象との混成物。眞の藝術的考案者として贊美する事は出來ぬのである。バーカーや露西亞バレーのは、少くとも實際的には前二者よりも成功した物では有るが、さて是を日本へそのまゝ取入れたら如何か。歸來日の淺い中私は招かれて、さる新演出を見に行つた。その折は舞臺に布幕を垂れたと云ひ、造物を置いた具合、いかさまバーカー案の「十二夜」其他の舞臺面に似通つて、新味は有つたが、廻り舞臺無く、道具幕の習慣なども無い英國あたりにあつてこそ斯もせずばと思はれる點迄も、至極忠實に直輸入して、二重の手間を省く所か、三重の手間を迄かけられたは、寧ろ笑止に感ぜられた。バーカーなどの布幕は畢竟幕合を短縮せんが第一の目的、それを一々幕居五分、十分と置いて迄も念入りに摸せら

れたは、道具方の不馴れも有らうが、隨分と西洋崇拜過ぎた思ひ違ゐでは無からうか、西洋の舞臺面を學ぶは大いに宜し。又その新法、新案の研究は勿論大いにせねばならぬ、と同時に、我等は我等の繼ぎ來つた特長を、西洋人の見ぬ前に、又見る以外に利用し應用せねば義理の惡い話である、クレーグやラインハルトの案は參考として聞くべく、何も徹頭徹尾それに從ふの不見識はせずともの事。廻舞臺、布幕は云ふまでも無し、强盗(ガンドウ)返しや面明り(ツラアカリ)、さては小道具の面や造物と、考案次第では思ひもよらぬ一新機軸の出せまい物でも有るまい。すでに日本に所謂「出語り」の雛壇を、露西亞舞踊團は堂々とオペラ座の舞臺へ飾り立てゝ、滿場の客を驚嘆せしめたのである。是等の新運動を、外國からの刺擊をのみこれ待たずして、先づ内より發するやうになれかしと願ふのである。

續いては前に申した外國劇の演出。これを、背景や道具衣裝を寫眞其他によつて外國通りにし、動作も、或は活動寫眞や西洋人や、又は洋行歸りの人々に聞いて、一から十迄外國人通りに演じようとする試みは、これ又一つのリヤリズムに他ならない。果してそれは成功する物であらうか。日本新劇團の資力なり、日本人特有の出つた體格で、果して實現しうるであらうか。私には頗る覺束ないように思はれてならぬ。同じく西洋人の中でも、私は屢々倫敦で英國俳優が佛蘭西物を演ずるのを見たが、餘程巧みな俳優でも、なほ骨が有り過ぎて、親しく佛人を見た目には僞りとしか見られぬ。恐らく獨逸人の演ずる沙翁物とても、各人物の性格を演出するとせぬとは先づ問はぬとしても、元來の英國物と云ふ氣分が眞實現れるや否や疑問であると思ふ。單なる紙面の上に於ける飜譯でさへ到底原文の味は傳へられず、一にも二にも誤譯問題の起る世の中。舞臺の上に見る外國劇を「あれで幾分外國物になつて居ますか」と尋ねられるさへ、初心過ぎた問と聞かれるのである。から申したからとて、一概に私が外國物の上場を排斥したり、攻擊する者と思はれては大きな誤解である。外國物大いに紹介すべしでは有る

が、たゞ其の殆んど不可能なる純寫實に無用の時間を費さうより、その作の趣なり味を出すに專心になる方がよいと思ふ。つまり是をも一種の暗示で行くのである。あまり不調和で無く、變妙で無い限り、和洋折衷で行くより他はあるまい。要はそのイリユージヨンを破る程の動作を一切謹むにある。これ程の所に目安を置いて、作の味を出すを第一と力めるならば、同じく外國劇の演出にも、今迄よりもつと自由な、もつと生氣ある、そして一層日本劇壇の將來を益する活動が出來ようと思ふ。つまり西洋の型に拘泥し、囚はれないでも宜いと云ふのである。我々は我々で新案を立て、獨特の演出をやつて然るべきでは有るまいか。例へば獨逸に獨逸流のシエークスピヤ演出が有ると同じく、我にも亦能式舞臺沙翁劇など面白からう。彼の糟粕をのみ嘗める事か。

外國劇の上場勿論不都合では無いが、それは結局仲介物、橋渡しとすべき物である。我々の目ざす所は矢張り日本人の書いた日本の劇で無ければならぬ。近頃の默阿彌熱や古劇研究復活は一時的と思ふ故、早卒に祝辭も捧げられぬ事であるが、一時的にもせよ、かく人の目が默阿彌あたりに戻つたは、私は私の便宜上その原因を次の三つとしたい。即一つは勿論この外國劇輸入の反動である。次には西洋直輸入の新舞臺裝飾術からサヂエストされた、舊歌舞伎の舞臺面研究である。三つには西洋物や新劇の多分が理智の方面をのみ描いたに對して、もつと優しい人情味を帶んだ作を望んだ結果であると。もとより之は新參の私の獨斷ながら、かう三つの意味に於て、私はこの日本古劇の研究は贊成である。古劇を古劇として玩弄するのでは何等將來の益には立たぬ。その間から新らしい、やがて應用されうべき特長を見出し、理よりも先づ情のある新作を作出す手段として研究を續けて欲しいのである。思へば日本にイプセニズムが唱導されて以來、いや樗痴居士の頃よりして、次第にこの人情味の富んだ脚本は乏しくなつた。その以前のは之は又餘りに甘過ぎる人情話のみではあつたが、世が理窟流行となるに從つ

て、一般と鹿爪らしい脚本のみ先づ選ばれ、私の日本を去つた七年以前は丁度イブセン流行の頂天だつたと思ふ。その後、これも理屈屋のショウが歡迎されたかどうか、細かな流れの移動は存ぜず、兎に角歸朝して默阿彌復活の聲を聞いても、自然とこそ思へ、さしては珍らしい現象とも思はぬ。恐らく今默阿彌を持囃さるゝ人々も、亦江戸文學を模せらるゝ人々も、その巧工的な一面のみに魅せらるゝのでは有るまい。部分的ながら、優しく、深く寫された世故人情の味を賞せらるゝので有らう。かくして將來に於て、一人なりとも眞に深く浮世を知つた日本の作者が出て、日本の人情を寫す此れが橋渡しともなるならば其の時に始めて今の古劇讃美の聲も有意義となるのである。理は時と共に移ると思ふ。情は恐らく古今その趣を一にするであらう。沙翁や近松や、下つては默阿彌の捨てられぬのも、棄て難い人情美の籠つて居ればこそと信ずる。私はこれから新作をされようとする人の覗ひ所は、この新時代舊時代の間に縺れ合う人情に有ると思ふ。それは勿論悲劇としても描ければ、又一層多く喜劇としての材料となる。日本人は或る點に於ては英國人に似て居る物の、その言動や思想は佛蘭西人に似通う點が多い。それで第二の近松の出ぬのをさして不思議とも思はぬが、何故に、殊にこの大矛盾の目下の社會狀態にあつて、日本に第一人者となりうべき喜劇作家が出ないかを怪む。三馬、一九以來日本には眞に大なる滑稽作家すら出て居ないように思ふ。大なると申したは、寸鐵人を殺す風の小諷刺家は多いからである。又、眞にと申したは、淺草あたり、帝劇あたりに鍍金の喜劇作家は有るさうだからである。日本最初のモリエールの出るのは今ではあるまいか。

さて此の新作家の出ると云ふ事に就いては、私に一つの注文が有り、相談が有る。主として新劇團のビヂネス關係の方々にである。その大體は、私がさる仁に出さうと思つて認めた次の手紙に主旨は在る。それを掲げて、此の取り止めも無き亂文を結ばう。

拜啓、酷暑の候御變りも無く、御座もいよ〱御

盛況の由賀し奉り候。さて先日は御使者をもつて、拙稿に就き御丁寧なる御依頼、痛み入り候。その節御答へ申上候通り、小生存じ寄りの限り、御役に立ち候限り、御相談に預る事光榮と存じ、喜び御承諾申上候。たゞ此處に新歸朝者の無遠慮さを以て、殊には日本の近況少しも存ぜぬを好い楯と仕り、御尋ね申上げたき一義有之候。幸ひ御一讀の上御腹藏無く"Business is business,,と御返事賜り候はゞ難有存上候。

それは、先日の御口上にては、どうやら拙稿を御役に御立て被下候ようすでに御内定のように承り候が、萬一御使用と相成り候場合には、報酬の邊は如何の事に相成り候物にや。これは先日の御使者には別に御尋ねも申上げず、又その後多忙にて參上の折も得かね居り候まゝ、乍失禮書面を以て一寸御伺ひ申上候事に候。もつとも斯くアケスケに當方より報酬請求に及び候事、遠慮深き日本の作家には未だ餘り例無き事と、或は御驚きかとも存じ候へど、これは最初より相定め置き候ようの習慣相つけ候方、双方將來の爲めかへつて便宜かと存候まゝ、不案内を幸ひ、かくは臆面無く申出で候。

もと〳〵小生とても、目下の新劇界、殊には多年御苦心の御座の如きに、取るにも足らぬ拙稿に對して、決して多額の報酬を請求致す程の無分別には無之候。

然し小生考へ候に、何と申しても此の劇には作が第一、俳優が第二、舞臺裝飾が第三と存候。(小生今回の拙稿を自慢のよう御聞取り無きよう重ねて願上候)小生のは兎に角、すべて宜しき作なりと御目利き相濟まぬ上ならでは御採用相ならぬ事勿論と存候と同時に、一旦御引取りの上は、これに對して相應の報酬あるゝ當然に存候。從來ありと聞及び候菓子折其他は、報酬とは申しかねるかと存候。勿論すでに名を成せる大家が、關係上知人引立ての爲め、その名作を貸出さるゝ時は、是は

全く特別の場合。その例を後輩の、しかも作をもつて世に立たんとする若者にまで應用せんには、双方共倒れ。一時の挨拶は表面上奇麗に相濟み候とするも、その爲め作家の意氣を鈍らせ、やがては糊口の途にも影響致すべく、到底大なる意味に於て、日本劇界の發展を計る所以ならざるべしと愚考致し候、昔鷗外逍遙の大家を始め、金錢を度外視して脚本を物され、後身引立ての爲めならぬをりにも「禮なんか」と大度量に差出されし頃も候べし。それら一面情け有る義侠的の行爲に違無く候へども、一面より云へば之等大家が、目下の脚本冷遇の價を造られし物か。「何幕の脚本故報酬幾干」と相場を定むる習慣をつけられしならんには、後に從ふ我々の便宜、幸福如何ばかりなりしかと、遂愚に落つる次第にも候。昔は小說脚本を戯作として、或は餘業と輕んじたる時代も候由。が、幸にして原稿料と申す物はとくに定められ、昨今少しく地盤の固き雜誌にして定額の原稿料を拂はぬ所は無きように候。これからは上場せられたる脚本に對しても、是非相當の報酬を出す規定あつて然るべしと存候。「武士は喰はねど」の餘弊あつて、今も金錢の事を口にするを賤む人候べけれど、それは非道をして迄金を取らんとする者をこそ賤むべけれ、高楊子使ひたくなきに高楊子使うも一種の僞善者と存候、英國の裁判官は世界中にて最も公平なる由に聞及び候。その故は全く十分の給料を得て、賄賂に目眩まさるゝ憂ひ少きに在りとの事。大和魂勇ましき日本の裁判官は存ぜず候へども、まア勞働苦心に對する賃金はやるが當然。日本に作者無し、見るべき新脚本無しとは、私滯外中にも度々承り候繰言に候へど、戯作三昧に書流し候ならば格別、それ専門に一心で書き候物が、菓子折一つ位と化し候ては、是はどうも作者出て來いと申す方無理かと存候。米國の脚本家故フイッチと申すは、俗受け専門の作者には候ひしが、先づ日本の小說家で申さば村井弦齋氏

どころか、大成功の後歐洲所々に別莊を造り、若くして死に候ひしが、幸福な生涯を送り候ように聞及び候。又英、米のフレンチ社出版の諸脚本には「此の脚本を素人の上場せらるゝ折には、その一回毎に金三ギニー（約卅圓）宛申受くべく候」と記しある物多く候。素人の催しに對してなほ且然りに御座候。近くは英國のアーノルド・ベンネットは、小說家としても收入豐かに候ひしが、數年前「一里塚（マイルストーンズ）」を物して、それが二年程打續くる大當りを取り候折には、優に二萬磅程の所得をえて急に「脚本なんかわけは無い」などゝ申居り候由。さう思ひ上がられても困り候へど、兎に角日本劇界の將來の爲め、有望なる脚本家保護援助の爲めにも、貴下達卒先して、登用脚本には必らず相應の報酬相定められ候事、御座の爲めにも名聲を增す事と存候。かくして原稿料よりも上場料正確に、又有利とならば、雜誌に先づ脚本を發表致す順序顚倒の風習も無くなり、自然西洋に於ける

と同じく、一面には他座の亂用を防ぎ、一面には客の好奇心に訴へて、時に意外の大當りとも相成り候べきか。勿論この報酬の高は、或は純益の幾割として、作者興行者共同の利得法も宜しかるべく、又一幕幾ら、幾日幾らとあるも宜しかるべく、又作者の手腕、名聲により、同時興行中の他の作との割合により、上下有るべき事論無く候へども、苟も登場俳優に一定の給金を與へ得る一座たる限り、その北斗星（スター）と同額とは申さずとも、同座中の第二段の俳優所得に等しき位の報酬が主なる作の著者に拂へえざる理由も口實も無之と信じ候。それを拂ひえざる程の貧弱な一座ならば早晩相倒るべく、又一日も早く倒したき物に候。

更らに又申上げたきは、これも人よりの聞傳へにて眞僞は存ぜず候へども、すべて當今の新劇團に在つては、一旦或人の飜譯なり創作なりを上場と相定め候上は、俳優の稽古其他萬事當然その作者、譯者に責任有る物の如くに見なされ居り候と

か。萬一事實ならば、これも亦甚しき曲解の見と存候。勿論何人に致せ、自分の筆にしたる物の上場に際しては、よきが上にもよかれと念ずるは人情。自然賴まるゝを待たで自身出張差圖さるゝ仁も有之候べけれど、それは其の仁勝手の好意的行動。元來は決して作者は、よしんば作其の物に十分の謝禮有りとも、その爲めに稽古萬端の世話迄燒かねばならぬ物とは定まらず候。まして作その物にすら錄に報酬無き日本に於て、稽古まで面倒見せられては溜つた物に御座無く候。作は作、稽古は稽古、これも御座等卒先して、萬一是非とも作者の稽古を必要とせらるゝならば、それには又相應の車代なり、挨拶ある事と御規定然るべく存候。さも無くば座附の舞臺主任をして作者の意を汲ましめ、作者は單に隨意に參觀する位の事として、責任は座附の主任負ふが當然と存候。この邊日本にては、未だプロデューサーなる者の意義なり位置が明かならぬだけに、待遇頗る曖昧の如くに存ぜられ、さてこそ我田引水と僻目には見ゆべき愚見をも憚り無く申し陳じ候次第に候。幸ひ、これが私欲私利を基とするにあらで、廣く、大きく、日本將來の脚本家の爲めとの愚意御汲み取り被下、御判讀、御實行願はれ候はゞ、小生一身のみならず、同盟其他同職諸氏の幸亦これに過ぎざるべく、祝福御身に下る事と信じて疑はず候。

敬具

なほ、全體この文結論を急いで詳論をするの餘裕が無い。例へばクレーグやラインハルトを一と口に貶し去るなど先覺大家に對する禮を缺く事甚しく、宜しく一々その非と思ふ所を例證を擧げて論ずべきながら、席暖まらざる昨今の私の生活。其等はいづれ改めて御意得たいと思ふ。

緑蔭榻下に時事を談ず

伯爵 大木遠吉

大隈伯と我輩との關係は、私的關係から言つて謂はゞ大隈伯萬能ともいふべきで、其意味に於て我輩は當然大隈內閣擁護派の一人であるべきである。大隈伯が我輩の親父の親友であるといふ點から云ても、現在の私的交際から云つても、私輩が大隈伯謳歌者の一人であるに不思議はない。然しながら公私の關係は嚴密に區別しなければならぬ。我輩が私的關係に於て大隈伯に緣故が深いからとて、盲目的に大隈伯を首相とする現內閣を讃美し謳歌することは出來ない。失政と認むべきものあらば容赦なく之を指彈し忠告しなければならぬ。今日之を現內閣の施政に就いて觀るに、其內閣組織の當初に於て發表したる政綱なるものゝ實現せられたるは尠い。殊に對支外交の結末に至つても僅かに我國既得の權利を正式に獲得したるに止まつて、此千載一遇の好機を徒らに逸走せしめたるの觀がある。我輩は必ずしも在野黨の言ふが如く全然終始失敗の歷史を以て蔽はれてゐるとの酷評を敢てするものではないが、さらばとて當局者の言明する如き大成功とは、いかに贔屓目に之を觀ればとて思はれないのである。特に靑島還附の聲明に至つては餘りに早計に失しはしなかつたか。更に溯つては、その初め日英同盟の誼みにより歐洲大戰亂に參加して獨逸を敵としたるが既に其第一步を誤つたものではなからうかと思ふのである。然しながら、是は已に大詔煥發の今日、慢りに云爲するのは穩當を缺くものあるが故に言はねが、少くとも今少し深思熟慮の餘地があつたではなからうか。尙剩餘金支出の方法に就いても、我輩の遺憾とする所復た尠くはない。然しながら今日我國民は既に政治的變轉

には餘りに倦み疲れてゐる。現內閣必ずしも完全でないまでも。之を破壞して代ふるに何物を以てすべきかは、識者を俟たずして國民一般の深く憂ふるところである。現內閣が國民一般の眼に、決して理想的のものとして映つてゐないには相違ないが、さらばとて之を舍てゝ他に採るべきものゝ無いのも國民一般熟知の事實である。姑らく假すに時日を以てし、姑らく許すに寬大の猶豫を以てせる過日の貴族院の態度は以て我輩の最も德とするところである。

尙之を現內閣擁護の與黨に就いて觀るに、素より我國現存の政黨一も完全なる政黨らしきものを見ずと雖も、今日の政府與黨ほど雜駁な烏合の衆はあるまい。政黨いづれも公黨にあらずして私黨である。而も今日の政府與黨は私黨中の私黨と謂ふべきである。自己の榮辱利害をのみ是れ圖つて、眼中國家無く政黨なき不統一なる團體である。之を破壞し、之を改造するは目下の急務である。然しながら、現在の政府與黨が不眞面目にして不統一なる私黨なるが故に其言論に耳を假すの要なしといふならば、そは由々しき憲政の大事である。いかにも不眞面目には相違ない。殆ど齒ひすべからざる無賴の朋黨ともいふべきであらう。然しながら現在の與黨は、兎にも角にも我國現在の議會に於て多數を擁する政黨である。而して我國國民の代表者が議會に植付けられるものとしたならば、多數黨たる與黨は國民の輿論を代表するものであり、與黨の行動は國民輿論の歸嚮と觀るの外はない。よしや如何に腐敗せる政黨と雖も、立憲政治を定め、議會政治を建てた以上は、腐敗せる政黨を改造する必要こそあれ、議會の意嚮を無視する譯には行かない。若し之を敢てするといふならば、そは憲政破壞の賊である。往年桂公が、政黨は民論の發現にあらずとして、政黨を經由せず、輿論を直ちに國民其者に徵して其施政方針を定めんとした所謂超然主義の內閣は、之を口に言ふべくして行ふべからざる事である。眞正の輿論と云つても、どれが眞正の輿論であるか、自己流に判斷したる單獨な所論を輿論の發現也として居りはしないか、其邊容易に

斷定することは出來ない。されぱこそ玆に議會政治の必要が生じたのではないか。自己の所論に聽いて、之を國民多數に圖るなき英雄政治が適當とするならば、何故議會政治を建設したのであるか。世界の大勢並びに日本の國情に照して輿論政治を必要としたが故に、今日此議會政治を建設したのであつて、一旦此議會政治を建設した以上は、曲りなりにもしろ、くねりながらにもしろ多數黨の處置を以て國民輿論の歸嚮と見なければならぬ。議會が何と言はうとも、それは國民一般の所論では無いと言ふならばそれまでゝある。現政府の與黨が雜駁であり不眞面目であるが故に、それらの議論は國民の意嚮を代表したものでないと言ふならば、何の必要有つて議會政治の實を採つて居るのであるか。輿論政治の必要を感じ、議會政治の實を擧げた以上は、假令政黨が何うであらうとも、國民の代表者たる多數黨の意嚮を以て則ち國民の意嚮と見るの外はない。若し現與黨が正當に國民の意志を代表しないものとすれば、之に代はるべき政黨が國民の意志を代表するものでなければならぬ。即ち議會に多數を占めて自黨の政策を發表し、公然內閣を更迭せしめるのが憲政の常道であり。通則であるべき筈である。

我輩は、前に述べた如く、現內閣の施政に對して滿足の感を抱く者ではない。であるから若し之を倒壞して吾々の理想に近い新內閣を設立するとすれば、今に於て我輩は些の異論をも挾む者ではない。但だ今日之をするには苟も憲政の通則に背反してはならない。正々堂々の政策を以て之と爭ひ、憲法政治の常軌を踏んで新たなる內閣を樹立しなければならぬ。然るに今日現內閣に不利を來し內閣の危殆に頻しつゝある原因が那邊に有するかと言へば、政府の政策に見限りを附けたが故でも無く、反對黨が國民の輿望を擔つたが故でもなく、只何となく現內閣の影が薄くなつて來たといふに止まつて、それ以外の理由は何處にも存在しない。是れ僅かにそこに何等か憲法以外の事情が伏在して居るのではないか。

憲法以外の事情とは何であるか。元老の憤慨是れで

ある。然しながら元老とは抑何者であるか。今日の政黨主義から言つて、其在朝と在野とを問はず、今日の政治家にとつて彼等は實に共通の敵ではないか。固より、彼等は明治維新の皐謨を翼賛した元勳であり、功臣である。元勳であり功臣であるが故に國民之を尊敬して禮を以てするに元老の優遇を與へて居る。然るに憲政布かれ、議會政治行はるゝ今日、尚其餘喘を以て彼等が我國家の政治に干與し、我國家の政治を支配せんとするならば、それは以ての外であつて、之を露骨に言へば彼等は實に憲法運用上の惡魔であると言つてもよいのである。素より彼等が、時局の艱難に際して人一倍心配するのは人情の常である。只斯かる場合には案を整へて當局の參考に資すべきであつて、徒らに干渉すべきではない。若し其案にして、時代晩れのものであつて、最早今日に適用すべからざるものであるならば、政府宜しく其の然る所以を説明して彼等を滿足せしむべく、元老も亦自己の提出したる考案を以て、當局の説明を以て滿足すべからざる程の名案良策であるとするならば、十分に當局と愼重なる論議を重ねて批評し忠告をすべきである。唯何處までも彼等は後見役であつて、實行の機關では無い。然るに今日、上は朝廷より下國民に至るまで彼等に一種卓越せる權力有るかの如く考へて居るのは何故であるか。又事實に於ても彼等は今日尚隱然たる勢力を有して居るのである。少しく譬喩の例を失するかも知れぬが、其間夫の法皇の存在せし院政時代を偲ばしむるものであるはなからうか。是れ甚だ遺憾なる事であつて、幕政の起つたのは全く院政なるものがあつたからである。天子幼冲にして、一時の便法として執つた院政が、因襲の久しき間、遂に習慣法となつて、萬機總攬の天皇は有れども無きが如く、世の中と何等交渉なき法皇の手に天下の政治を委ねて、政權一途に歸せず、天に二日あるに至らしめ遂に英雄をして幕府を創始せしむるに至つたのである。今日の事、固より院政時代のそれ程甚だしくはないが少くともそを偲ばしむるものあるに至つては甚だ遺憾の事と言はねばならぬ。須らく服膽明目して、妙な

破目から妙な事の生ぜないやうに警戒することが必要であると思ふ。重ねて言ふまでもなく、元老には憲法上の責任は微塵も無いのである。謂はば隠居の放言に過ぎない。然るに此の元老なる者の容喙に因つて内閣の危機を醸すといふに至つては言語道斷であつて、如何に大隈内閣に不滿を有するとも、國民擧つて此外敵を禦ぎ内閣を危地から救ふことに努力しなければならぬ。政友會にとつても將た國民黨にとつても、憲政の爲めに敵として戰はねばならぬところのものは、大隈内閣にあらずして先づ元老で無ければならない。

然るに今日在野政黨たる政友會の態度は如何、その元老を敵とすることを忘れて、動もすれば、之を歡迎し之を利用して政爭の具に供せんとして居るではないか。政友會は多年鞏固なる地盤を有し、政權を掌握して居つたのであるから、一度政權と離るれば、之を渇望するのは亦無理もないけれど、渇望の餘り漫りに之を濫用して現内閣を仆さんとするが如きは見下げ果てたる行動である。我輩が現内閣の施政に不滿足なのは今言つた如くである。然しながら元老の活動に因つて現閣の危機を醸すとならば、進んで現内閣擁護の地位に立たんと欲する者である。大隈伯の首相たる現内閣といふ意味に於てでなく、憲政擁護の爲めに現内閣を持續させ度いと欲するのである。世は漢となり楚となるとも、厄介至極なのは此元老である。

世或は曰ふ。元老は已に半死の老翁である。矢鱈に騷がずとも天然の淘汰を待つて自然に片附くであらう。どれを見ても七十八十の頽齡である。之を餘りに氣にするは神經過敏に過ぎると。然しながら今日已に院政の如き弊風の仄見ゆるのは遺憾である。元老は年を逐うて消滅しても、憲法以外の一種名狀すべからざる權力者が政府の一隅に存在するが如きは憲法政治の爲めに由々しき大事である。我輩は第一の元老亡びて第二の元老の生ずるを惧れるものである。乃ち、雨降らざるに門戸を綢繆して其甚だしからざるに防止せねばならぬと思ふのである。今日の新聞雜誌の傾向に就いても、我輩は甚だ慊焉たらざるものがある。元老の活動

を咎めざるのみならず、却て之に至囑するが如き傾向あるは我輩の最も遺憾とするところである。彼等にして元老を容認する精神ならば、そは憲法廢止を欲するのであつて、我輩また何をか言はん哉である。若し一時の快を呼ばんとして、彼の輩を利用し、以て現內閣を呪はんとする如きは、拙の拙なるものであつて悔と危險とを後生に貽すべきを覺らざるものである。

尤も多年特種の朝權を有する元老の權力を制限する事は國民の立場として遣り難い事であるに相違ない。然しながら終始一貫するに誠意と熱心とを以て、徒らに功を急ぐことなく遣つたならば、何れの時にか目的を成就する時が來るであらうと思ふ。縱令現在の元老を絕滅することは困難であるとしても、第二の元老の發現を喰ひ止めることだけは容易である。若し假りに今日の元老なるものを容認するとしたならば、遂には第二第三の元老の發生を促し、眞の立憲政法は最早絕對に我國に見るべからざるに至るであらう。苟も政黨者流を以て任ずる者にして、いかに政權に憧るればとて、此憲政の敵たる元老を利用して臺閣を乘取らんとするが如き、自ら危くするの甚だしきものであつて、國民は宜しく其行動を攻擊しなければならぬ。國民當面の仕事は元老退治でなければならない。政權爭奪はそれからである。

獨逸魂の研究

▽獨逸の側面觀

奧田竹松

個人としての獨逸人は取り立てゝ優勝なる人種とは認められない。總じて理解力がく鈍く、常識に乏しい。獨自の判斷とか、裁量とかいふ點に於て著しく缺けて居るやうに思はれる。勿論彼等自身でも自らの鈍重であるといふことは能く認めて居る。彼等が總ての事物に對して熱心に研究してかゝるといふのも此自覺から來るのであらうと思はれる。巨細に沿革を調べ緒論から書き起さなければ結論に達することが出來ない。頑丈な脚場を築き上げて仕舞つてからでなければ煉瓦積を始めない。隅から隅まで綿密な計算をしてからでなければ何事にも着手するといふことをしない。之を結果から觀ると、いかにも用意が行屆いて居るやうであるが、彼等は此準備と計算とがなければ何事をも爲すことの出來ない人種であるやうだ。苟くも之を爲すには、人間の常識といふものとは全く沒交渉に、極めて綿密な科學的智識と計算とを基礎として、精細な研究を經なければ安心が出來ない。是れが獨逸國民性の特徴の一ともいふべき研究的態度である、今一つの特徴は彼等獨逸人は、非常に好都合な團體的要素を備へて居ることである、彼等は常識も乏しく、獨自の判斷と裁量が十分でない。之等の短所が同時に其の長所で指導の方法によりては從順にして命令を奉行する國民となし得らるるのである。即ち命令とか、規則とか、申合とか、掲示とかいふやうなものを以て率ゐらるるには最も好都合な人種に出來て居る。凡そ世界中で獨逸程、命令、規則、申合、掲示等の多い國はない。此等のものは政府又は聯邦、地方團體、各種の協會、企業者等から出すのであるが、國民はそれに據つて初めて指導されるのである。極端に評すれば此等がなければ、恐らく獨逸國民は一擧手一投足をも自ら爲し得ないであらう。唯國民は前述の規則命令、指圖に絶對の權威を認め、之に服從することをのみ知つて居る。立法の精神を探究しやうともせず、又固より内容に對して批評も非難も之に加ふるとをしない。たゞ命維れ從ふといふ有樣で、自我を捨て、さして苦痛もなく、平氣で團隊の大我の爲に個々の小我を犧牲にするの傾向を有つて居る。故に一騎打の兵士としては必ずしも強くはないが、聯隊單位、師團單位の近世的戰鬪には寔に適好なる戰士といふことが出來

る。

此二つの特殊の國民性を有する即ち研究的態度と團體的生活に適合する特性を有する獨逸人を教育し薫導して現獨逸帝國の組織體が出來上つたのである。而して此組織體を貫く一つの主義がある。即ち尙武主義である。之に平行して王室中心主義（場合に依りては國家中心主義となる）がある。此二つの主義が互に表裏翼贊して此組織體に生命を與へ、玆に渾然たる有機體を作つたのが今日の獨逸帝國である。

尙武主義は命令に對する絕對服從といふことを前提として居る。尙武主義の行き亘れる結果獨逸人は階級の念强く、秩序を重んじ規律に服する性向を持つて居る。苟くも一日の長ある者に對しては謙讓抑損する。又職務に對する觀念が甚だ嚴格である。使ふ人が側に居ると居ないとに拘らず、人眼あらうと、無からうとには一切關係なく、自分の職務に對しては、蔭日向なく極めて忠實に遂行して誤らない。その代りに自己の責任以外の仕事になると、縱令自分が手を束ねて遊んで居ようとも手傳つて援けるやうなこともしない。又總じて餘りに物質的であつて、文雅な風流氣といふやうなものは少いが、その代りに素朴剛健の氣風はある。總て實際を尙び、苟且にも無駄事をせず、生活は簡易質素である。粗衣粗食に甘んじ、享樂の方法としても、ビール、音樂、遠足、舞踏等が關の山である。共に甚だ廉價な快樂である。これさへあれば彼等は他に多くを望まない。此等は皆尙武主義から來た賜物でありはしまいかと思はれる。斯ゝる資質を有する國民が猶其上に强烈なる自負心を有して居る。之が直に士氣となるのである。彼等一般の國民的自負はロマンチックに過ぐるかも知れないが、彼等は世界中に於て最も卓越なる最も强い人種であると固く信じて居る。最近獨逸の興隆した歷史を見て彼等がさう思ふのも必ずしも無理ではないかも知れぬ。陸海軍は短日月の間に偉大の發達を遂げ、商工業に於ても英佛の先進國を凌ぎ米國と覇を競はんとして居る。其外學問技藝發明等あらゆる方面に長足の進步を爲したのである。Deutschland! Deutschland über alles! と彼等の誦さむ歌は彼等の國民的自負を僞らずに表現したものであらう。小學校に於て歷史を授ける場合も教材としては主として最近四五十年の獨逸現代史、プロシヤの勃興から今日の隆盛に至るまでの彼等に取つて最も誇負多き時代の歷史を詳しく教へて居る。どの獨逸人も、戰さには勝つもの、學問には優つた者、商工業は他國に勝れた者と固く信じて居る。何事に對しても自ら信した事が一等善い事と信して居る、左右を顧みて狐疑躊躇しない、我より古をなすの意氣があるから一般に士氣の横溢して居ることは非常なものである。

所謂尙武主義で陸海軍に對しては王室よりの優遇は至らざるなきまで行き亘つて居るのみならず、一般社會からの尊敬も往々過分ではあるまいかと思はれる位である。従つて陸海軍々人たらんことは男子功名榮達の標的となつて居る、第一流の人材は爭ふて陸海軍に集るといふやうに承知して居る國内多數の大小主權者及其子弟等、多數の貴族、並に由緒正しい富豪の子弟が相競うて將校たらんことを志望する。此等の申込に

對して聯隊は非常に嚴密な選拔を行ふ。第一に其祖先の中に功蹟あり名譽のあつた者を拔擢する。苟くも父祖の中に不名譽や破廉恥な行爲のあつた者には絕對に入隊することを許さない。故に聯隊の將校たる者は自分の一身が後世の子孫にまで善惡とも影響を及ぼすのであるから、自分の一身は長き過去と未來との一連鎖であると考へて居る。此點に至りては我が武門武士氣質に似て居る所がある。若い時には豪酒痛飮、隨分亂暴を働いたりするが、破廉恥なる所業若くは苟くも武士の名折れになるやうなことがあれば、仲間が承知しない。即ち將校としての位地を失はねばならぬのである。今度の戰爭に於ても、將校には戰死者が比較的に多いが、捕虜になる者が少いとの樣に傳聞して居るが、此等は此邊に原因して居ることゝ思ふ。

下士養成所があつて、下士を特別に仕立てる、下士には下士屋敷を給して家族と共に住はせる。其中で生れた子供は生れながらにして下士になるやうに出來て居る。生れ落ちるから兵隊屋敷の中に住んで其中で生長し總ては親の跡を襲ふて下士となるのである、即ち下士の職を世襲すること、我か封建武士の如きものである、此の如く將校と下士とは特製の產物であつて獨逸軍隊の骨髓である。幹部である、之に全國皆兵主義(文字通り行はれて居る)と尙武主義で精神的に鍛鍊せられた壯丁を以て兵士とするのである、個々の粒は或は佛國の兵士と比較して必しも勝れては居まいが、前述の幹部で統率され、指導されて茲に從順にして唯令維れ奉すといふ兵士が出來上がるのである、凡そ戰爭をするには此れ位ゐ都合よく出來て居る國はないではなからうか。

次に此尙武主義に平行する皇帝中心主義を說く爲めには、先づ獨逸皇帝に就いて話さなければならぬ。世間周知の獨逸皇帝は極めて多方面に趣味と才能とを有する人である。單に陸海軍のみならず、學問界といはず、文藝界といはず、技術界にも科學界にも、乃至商工業界にも少なからぬ趣味を有して居られる。啻に趣味を有して居らるゝのみでなく、機會ある每に之を獎勵せられる。皇帝は全國公私大小の會合儀式に身を以て親臨し、或は式辭に演說に或は自由會談に於て、場所と場合に適切なる意見を發表して會合者を鼓舞獎勵せられる。假に夏期若干週日の那威旅行を除くの外は終年殆ど寧日もなく、時には一日三ヶ所も驅け行かるゝこともある。多くは夜行列車を利用して隨分遠距離の式場と式場との間を驅け持たれる。又日常學者のみならず商工業者又は技術者にも、譯していへば顧問(ラアト)とか樞密顧問(ゲハイムラアト)とかいふ稱號を與へて居る。惟ふに獨逸程階級と稱號とを崇拜する念の甚だしい國はない。立憲君主國と言つて居るが、甚だしく封建的であつて階級門地又は稱號勳章に對する念が强い。此國では本名を呼び掛けられることは階級の低い者でなければ決してない。獨り當人のみならず社會上の階級名か、職業又は稱號を以て呼ばれる。妻女まで何々博士夫人又は何々顧問夫人抔と呼ばれて、夫の死後に於ても矢張り其の稱號を持續するのである。斯ういふ階級觀念の著しい、稱號を尊ぶことの甚だしい國柄であるから、最高級の皇帝自らが機會と場合によりては夫々斯道の功勳者又は事業者若くは會合の關係者に破格の謁見

を許し、親しく手を握り、會話を許さるるのであるから、社會各方面に渡つて奮發する氣になるのは當然である。皇帝は單に陸海軍の大元帥であるのみでなく、學問界、技術界、商工業界の大元帥である。一身を以て各方面の國民的生活を統率して居らるる概がある。從つて軍隊のみが軍隊ではない。彼等の日常生活が已に軍隊式であるから、戎衣を着すれば則ち兵士となり、軍服を脱すれば即ち市民となるのである。軍隊の動員と同時に各階級の國民全體が總ち動員し得らるゝのである。此の度の戰爭に際會して著しく此が事實として表現して居るのである。尤も此皇室中心主義といふのが其儘何處までも獨逸國全體に適用されて居る譯けではない。バヴァリア、ウルテンベルグ、サクソニー等の大聯邦は普魯西を德川家とすれば島津毛利の諸侯に相當する。此等聯邦の人民は必ずしも普魯西のホーヘン・ツオルレン家を中心とする觀念には同じない。之が一の故障である。最一つは工業の發達に伴ふ社會民黨の發展が同じくホーヘンツオルレン家を中心とする觀念に反對する。此等の者に對して自ら變通の途がある。即ち國家中心主義を以て之に代ふのである、此の兩主義は名は異るも其の揆を一にして居つて、要は國に强大なる重心を作るに在るのである、此の重大なる重心の存在が獨逸の强味ではなからうか。

要するに前に述べた尙武主義と、簡易主義と簡易生活で鍛へられた國民を重心主義といふセメントで固めて之に世界の優勝人種だとの自惚心が加味して居るのであるから、戰爭するには誂へ向きの國民に出來て居るやうである。之に加ふるに今度の如く聯合軍側の不用意、不準備なると對して獨逸では十分の準備と計畫とを持つて仕掛けて起つた戰爭であるからには今日までの成績を擧げて居るのは先づ當然で、取り立てゝ嘆稱するには當らぬと思ふ。（了）

▽獨逸は何故强いか

法學博士　長岡春一

獨逸が何故强いかと言へば、其理由はいろ〳〵あらうけれど、私は第一にそれは準備の問題であらうと思ふ。成程他の國では戰爭の準備は相當にして居つただらうけれど、御承知の通り獨逸の軍備擴張は有り餘つた中からして居つたのに反し、佛蘭西の如きは有り餘らぬ中からして居つた、是れが大なる相違である。

一昨年であつただらうか、佛蘭西の議會で陸軍の攻擊が盛んに行はれた事があつたが、其時にも白耳義界の要塞問題が重大な問題となつた。佛蘭西でも獨逸と開戰した曉には、直ちに白耳義の中立は侵されて、此方面から敵勢を受けるに違ひないといふことを知らなかつたのでは決してないが、議會が陸軍の要求に應じなかつた爲めに思ふ樣に此方面の防備を充實する事が出來なかつた。又露西亞も大軍備擴張を計畫して去年から二年後には略ぼ完成する筈であつたが、去年の夏頃には漸く其實行に着手したに過ぎなかつたので、殊に砲兵の力に非常な缺陷があつた。

であるから今度の戰爭は、どうしても佛露から仕掛ける戰爭ではなく、已むを得ず受けて立つた戰爭である。之れに反して獨逸の方では千九百五年の軍備擴張、千九百十一年に又擴張を爲し、引續いて其翌十二年に又々大々的軍備擴張を遣つて居るが、其完成は非常に迅速に行はれた。委しい事は軍事專門家でなければ解らぬが、兎に角軍隊の組織の上から言つても、又數字の上から云つても、非常な相違があつただらうと思はれる。

私は白耳義に千九百十三年の春まで居たが、軍事專門の事は解らないにしても、鐵道の狀態などは素人にも多少解るが、白耳義の國境に沿うて獨逸は多數の平行線を敷き、無數の垂直線を以て之れを連結するといふ風に鐵道網が組織せられて居て、一朝有事の日に獨逸の大軍は容易に白耳義に侵入し得る樣に出來て居た。夫れだから白耳義が獨逸を恐れる事は非常なもので、軍備擴張案が提出されたが、恰度私の同國を立つた後で議會を通過して、十三年の春に法律になつた。そして戰爭はそれから半年目に起つた譯であるから、まだ其備へも十分ではなかつた。リエージユの要塞は、どうせ白耳義へ獨逸軍が侵入するといふ事は解つてゐたのであるから、夫の有名な第二次モロッコ事件(千九百十一年)後先つ其防備の充實に着手したが、アントワープの要塞までは未だ手が屆かなかつた。尤も今度のやうな戰鬪振りでは、縱令手が屆いてゐても果して何らかは解らぬけれど。

それに露西亞方面の鐵道網にした所で、獨逸は國境に沿うて二つの平行線を持つて居るから、自由に其軍隊を移送する事が出來る。之れに反して露西亞では獨逸がどこそこに兵を集めたと知つても容易に其方へ持つて行く事が出來ない。

もう一つ聯合軍側に弱みのあるのは確かである。それは聯合軍側では兵力を一つ處に集めることが出來ない。露西亞は彼方、佛蘭西は此方といふ風に此處彼處に散在して、彈藥輜重等の關係から言つても相策應するとが六ケしいが、獨逸は所謂內線策戰の利を以て思ふ所に兵を集め、思ふがまゝに働くことが出來る。初めは獨逸は食糧に窮するだらう、彈藥が盡きるであらうと考へられてゐたが、其割には能く持ち堪へてもゐるし、彈藥の補給も能く續いてゐる。

此等は皆戰備が十分に行屆いてゐたが爲めではあるが、其準備と言つても單に物質的方面のみに止まらず、精神的にも行屆いて居つたのである。日常の教育から、何から何まで總てが軍隊的で、下女に至る迄上長の前では氣を附けの姿勢を取る有樣である。國民一般がさういふ心懸けであつて、若い少尉などが尊敬せられるのは殆んど想像の外で、宴席で最も優遇せられるのは彼等軍人であるといつた風に、總べてが軍隊本位である。

最後に獨逸にとつては世界の强國が相集つて獨逸種の人間に反抗してゐるといふ事が彼等の敵愾心を煽つた主要の原因であるに違ひない。戰爭前までは獨逸が戰爭を始めたならば、獨逸は南北に分離するであらうとか、バイエルン、ザクセン等の人はプロイセンを嫌つて居るから到底一

設團結は覺束なからうとか思ふて居た人も少なくなかつたが、今日さういふ事の無いのは、單にプロイセンの消滅はプロイセンの消滅に止まらずして、延いて獨逸種の人間の勢力が打破せらるる所以であると考へたからであらうと思ふ。いかに氣が合はなくとも、プロイセンの消滅は懸て彼等自身の破滅である以上一致合同せざるを得ない譯である。而して其合同は獨逸多年の希望であつたので、久しき以來政治家や學者の熱心に鼓吹し、夫のビスマルクに依つて略ぼ大成せられたのであるが、愈々今度の戰爭は其成果を實地に證明したのである。そして獨逸種の人間の爲めにあらゆる他人種を敵として戰ふといふ一大決心が今日獨逸の强を爲さしめた所以であらふと思ふ。尤もそれに反して聯合軍側では海上權は制して居るのであるし、また國内を荒されてはゐるけれど、それとても左程痛痒を感ずる程でも無いから、その中には獨逸が弱るであらうといふやうな考から終局を頼みにして可成人を損はぬやうにして居るし、獨逸は永く戰爭を續けてゐては困るから、出來るだけ敵を傷け。然る後機を見て講和をせうといふやうな、一方は熱烈な、一方は比較的冷靜な態度が當然其戰鬪振りに表れて、今日のやうな狀態を保つて居るのであらうと私は思ふのである。

▽戰爭と獨逸の將來

法學博士 福田德三

獨逸の國民戰

獨逸は何故强いかと言ふ問に對しては、私は今度の大戰爭は、實に獨逸の國民戰であるが爲めであると答へたい。我國に往々說をなす者ありて、今度の戰爭は單に獨逸皇帝(カイゼル)の野心を滿たす爲めに計畫されたものであるかの如く考へて居る者もあるが、是れは非常に誤れる見解と言はなければならぬ。今度の戰爭は獨逸にとつては實に獨逸一國を賭しての國民戰であつて、決して獨逸皇帝(カイゼル)一個の野心の爲めに起つたのではない。其證據には(第一)社會民主黨の今日の態度はどうであるか。平素猛烈な非軍國主義、非カイゼル主義、非帝國主義を主唱して居つた彼等は今日甘じて政府の施政に贊成して居るではないか。先頃の議會で軍資支出案の討議せられた時にも、公然之に反對したのは社會民主黨の中でも只一名であつて、修正黨(レヴキシヨニスト)のベルンスタイン外六七名の者は、採決の場合故らに議場外に出で、贊否共に票決に加ふる事をしなかつた。是れ彼等は黨議として之に贊成する事が出來ないが爲めに、個人の自由行動に委せて贊意を表せしめたのである。之を以て直ちに社會民主黨の豹變と見るのは餘りに早計である。彼等は平素政府の施設に反對する者ではあるけ

れど、彼等と雖も國家有つての國民であり、國亡びれば國民としての彼等も滅ぶべき運命を有つて居るのであるから、社會黨員であらうと何であらうと、國家を離れて個人としての存在はない譯である。彼等と雖も亡國の民となるのは厭やである。積極的には願はくば興國の民であり度い、此一念の發露が獨逸をして今日あらしめた一原因であらうと思ふ。彼等が平素の主張と今日の態度とは理論上から觀て矛盾して居るやうに見えるが、決して矛盾したものではなく、夫のマルクスの世界勞働運動主義とも必ずしも牴觸するとは云へないのである。

第二の證據としては、今日獨逸の分邦主義（パチキュラリズム）の實際は何うであるかといふことを考へて見よ。南獨逸の聯邦は悉くプロシアに反抗し、常に特別なる取扱を要求して居つた。然るに一度戰爭を開始するや、其等反抗の聲は忽ち消えて、擧國一致の實を示して居るではないか。二三日前の朝日の海外電報が『獨逸の戰時財政は聯邦の大藏大臣之を掌らずして、帝國の大藏大臣に一任する』といふ事が議決せられたと報じて居る。是れは英國に於て聯合軍諸國の財政大同盟が締結せられたといふやうな、內容の無い素人嚇かしとは違つて、遙かに重大な意義を有するものである。由來此分邦主義は獨逸にとつて獅子身中の蟲ともいふべきものであつたが、今回の戰爭に依つて財政的に之を中止して獨逸帝國一任主義を採つたといふのは、いかに獨逸が此戰爭に對して國民全部を擧げて之に當つて居るかといふ事を證してゐる。

第三に、獨逸の學者文藝家及び有數な政治家新聞記者等九十餘名は相圖つて一の檄文を世界に向つて發し、獨逸の立場を明かにして世界の有識者に訴へたといふ事である。其の中には平素カイゼルに反對し、プロシアを敵とした人達も少からずある。其人々が今日相俱に獨逸帝國の爲めに一致協力して働くやうになつたといふのは、今度の戰爭が實に獨逸の國民戰國難戰（假りに名く）であつて、單に皇帝戰でないといふことを證して餘りあるものと思ふ。而して今日迄に就て云へば獨逸が優勢を保つて居る所以の最大原因は實に此國民戰といふ事に歸するであらうと思ふのである。

獨逸と英佛との國民の覺悟の比較

斯くの如く、今回の戰爭が獨逸にとつて重大な國民戰であるに拘らず英國に付ては未だ之を國民戰とまで言ふ事は出來まいと思ふ。英國民も素より熱心ではあらうが、其度合は獨逸に較べて遙かに低い。謂はゞ內閣戰とも言ふべき域を脫してゐないと思ふ。佛蘭西に至つては、平素より反抗的要素の尠い國で、反對することも尠い代りに一致した場合にも其力が極めて薄弱である。支那の諺にもある通り、「國に諍ふ臣無ければ殆し」で、到底獨逸のやうな一致團結を見ることは出來ないのである。

獨逸の最弱點

而して獨逸の今日最も要とするところは何かと云へば、其經濟にあらず、其軍事にあらずして實に其財政である。今日英國の財政狀態と獨逸

の財政狀態とは正反對で、英の極めて健全なる財政狀態に對して、獨のそれは極めて不健全である。而して其不健全なる原因は何處にあるかといへば從來の分邦主義が其主なる弱點を形作つて居る。何故なれば、獨逸の財政は二重財政と名付くべきものであつて、聯邦財政の上に尙一つの帝國財政がある。所謂天に二日有る有樣である。均しく是れ主權に基く財政であつてみれば利害關係の衝突は當然免れる譯にはゆかない。而して帝國政府は一千八百七十年に出來たので、聯邦政府に對して謂はゞ弟分である。而して其主なる仕事は海軍と外交とである。然るに夫等に要するところの經費の財源は既に兄分たる聯邦政府に於て最早餘すところなく取り盡して居る。玆に於て帝國政府の財源は巳むを得ず之を聯邦の手未だ及ばざる所に俟たければならない。然しながら財政の原則として一國財政の重要なる部分は之を直接國税、特に所得税に俟つて、尙足らざる部分は之を奢侈品榮養品に課する間接税に依つて補ふやうにするのを最も適當とする。故に一國が次第に大きくなればなる程直接税の收入は殖へて、從つて一國の財政は富裕になつて行くのである。今日の英國も、其初めに於てはあらゆる惡い間接税を廢し、代ふるに正當なる直接税、特に所得税に重きを置いて、今日の健全なる財政の基礎を確立する事が出來るやうになつたのである。然るに現在の獨逸では、此財政上最高の原則に反して主として間接税にのみ由らなければならない。然るに其れのみにては到底不足である、從つて國債は增加する一方である。

今日獨逸の負債總額が英國の如き富の多い國と同額であるといふに至つては、いかに獨逸の財政狀態が不健全であるかといふ事を知るに足るものがあらう。今日獨逸が海關税を重くし保護貿易主義を實行して居るが、是れ實は國產奬勵の意味に於てではなく、主として財政の都合上巳むを得ず此政策を採つて居るに過ぎないのである。

ビスマルクは夙に玆に觀るところあり、帝國建設の初に方つて間接税以外に財源を、國有鐵道と煙草專賣との二に求めんとした。然しながら此二つの計劃はいづれも失敗して成立しなかつた。煙草專賣は全然成立せず、鐵道國有は實施せられたけれども、最初ビスマルクが考へたのとは正反對に、帝國國有とならすして、聯邦國有となつて了つた。之を財源として聯邦諸國を厭せんとしたビスマルクの計畫は却て己れの武器を敵に與へ聯邦に非常なる重きを加へた。結局毛を吹いて疵を求めるの愚に終つたのである。後年ビスマルクの辭職するに至つたのは、單に此政策の失敗にのみ其原因を數へることは出來ないまでも、遠く其胚胎する所は此政策上の失策にある、此二案の失敗が彼の職を退かしむるに至つた有力な原因とすることが出來るのである。若し此政策にして失敗に終らなかつたならば、ビスマルクは恐らくは大皇帝の威力をも揮ふことが出來たであらう。

先年前阪谷藏相が歐羅巴に行つた時は、獨逸のシドウ大藏大臣が財政整理を行はんとして居つた際で、日本の現狀を聞いて、能くも斯く一朝にして封建制度を廢止することが出來たと言つて驚いて居た相である。其節阪谷男爵は獨逸の病根を此二重財政に在るとし、之を廢さなければ

ならぬと答へられた相であるが、私が夙に此二重財政を以て獨逸の禍根と深く信じて居る說と全然見解を同くして居る。

弱點却て强所

然しながら此獨逸の弱點は總て獨逸今日の强みを加へて居ることにもなるのである。それは何であるかと言へば、獨逸帝國が間接稅を重課したる一の善い方面は經濟の獨立、國產の奬勵といふことがそこから生れるのである。理論としては素より自由貿易に如くものは無いが、從來の如き自由貿易に就ての考へは、今度の戰爭に依つて餘程變化せざるを得なくなつた。少くとも從來の自由貿易といふものに疑問が生じて來た。獨逸の自由貿易主義者にも疑問が生じたであらうし、英國の自由貿易主義者は尙更疑問が生じた事と思はれる。素より獨逸の莫大な財源をなして居るところの科學工業及び製鐵業の發達は保護貿易のお蔭でないのは勿論である。只此戰爭に於て已むを得ず遣つたまでである。それが幸に此場合獨逸の重みとなつただけであつて、永く英國の如く世界に覇を稱する爲めには到底此力に依ることは出來ないが、今日にては兎も角獨逸の强みを爲して居る事丈けは事實である。

百年前の英國と今日の獨逸

何故なれば今日の獨逸の地位は百年前の英國の地位である。一方には和蘭、他方には佛蘭西の兩先進國を控えて居つた百年前の英國は、此等の兩國を壓倒して自國を富ます必要があつた。其必要は今日の獨逸の必要とするところで、今日英國は獨逸の軍國主義を盛んに非難するけれども、十六七世紀頃に於ては英國が軍國主義ドコロか海賊主義を採つて、盛んに亂暴狼藉を働いたことは歷史上明々白々なる事實である。文明の進步は世界の道德的判斷を向上せしめて、期せずして獨逸の橫行を攻擊するの聲となつて居るけれども、獨逸は謂はゞ英國の眞似を爲てゐるに過ぎないのである。今日の國際法なるものはユーゴー・グロシアスの初めて主唱したものであるが、彼れが說を立てた動機は、英國が漫りに和蘭の船を拿捕し、和蘭は英國の船を拿捕して、停止するところを知らなかつたが爲めに、今後海上に於て、一切商船並びに商品拿捕を嚴禁せんと英國に向つて抗議を申込むの必要に成つたのである。乃ちユーゴー・グロシアスの「海上戰法」といふ著述が公にせらるゝに至つたので、當時に於ては國際法の主唱者たり維持者たるは和蘭であり、國際法の蹂躙者は英吉利であつたのである。今日獨逸は國際法を無視してゐるけれど、英吉利も其昔は盛んに無視したもので、今日之を無視しないのは最早維持者の側に立つて居るからである。之に反して獨逸は今や益々興らんとする國である。世界の第一等國を覗つて居る國である。現在世界の一等國たる英國にとつて寔に氣味の惡い敵であるには相違ない。そこで、英國は單に彼自らの敵とせず、或は文明の敵と言ひ、或は國際法の賊と呼んで、世界の同情を己れに斂めて此新興國を撲滅せんと欲するものである。それは恰度品も新らしく、値も安い新店に對する老舖の反抗のやう

なものである。要するに今度の戰爭は英にとつては既得の利權を失はざらんとする努力であり、獨逸にとつては新らたに獲得せんとする欲求の發現である。此意氣の相違だけでも、獨逸を强からしめたといふことは少しも不思議とするに足らないであらうと思はれるのである。

現在に於ける英獨經濟上の比較

右云ふ處よりして現在に於ては經濟上では獨逸は英國よりも强味が有る。其食糧の供給に於て著しく强味を有する。英國も獨逸も共に供給を海外に仰ぐのであるが、一旦海外供給の杜絕した時にけ獨逸は國內の供給を以て需要を滿すことが出來るけれど、英國では是れが出來ない。其理由は第一に獨逸は國內の生活程度低く、且つ伸縮力に富んで居る、第二に官僚政治が國內に行亘つて居るが故である。官僚政治は決して吾々の理想として望ましいものではないが、戰爭の如き特種の場合には却つて官僚政治の方が都合が好い。今日獨逸では穀物の買上げ、麵麭の分量の制限にまで干涉して居るが英國人の眼を以て之を觀ると、いかにも獨逸は困窮の狀態に陷つてゐるやうに思はれるが、實は平常から獨逸は此種の官僚的制限を加へて居るのである。ビールの溫度を一定して、それよりも冷いビールを賣れば警察官が罰金を科するといふ風な事さへ遣つて居る。戰爭が起ると直ぐ馬鈴薯の粉を石鹼に用ゐることを禁じ、平素流し元で打棄てた殘物を豚に與へることにし、今までの豚の食物を人間が喰ふやうに定めたなどを見れば、獨逸の用意の周到さを思はしむるのみで、それが獨逸の困窮を證してゐるものと見ては間違である。獨逸は現に最高價格法なる法律を發布して物價其他の生活必需品の最高價格の標準を定めて、日常品はそれ以上の高價で賣ることを禁じて居る。若し之を承諾しない商人があれば、政府の權力を以てそれを最高價格にて買上げ、政府から之を各需要者に賣渡すやうにして居る。「商品の沒收」といふのは即ち是れである。が、是れは決して獨逸が困つて居るから遣るのではなく、安價な物を國民一般に提供せんとする物價調節に外ならないのである。食糧窮乏などいふことは問題でない。左樣思はしむるのは例の英國の淺はかな世界瞞着策に外ならないのである。右に述べたやうな二つの有利な事情は之を英國に求めることが出來ない。英國は自由政治であるから無暗に干涉がましい事を許さない。戰爭の爲めに困つてゐても粗食に甘んずる習慣が無いから依然として贅澤を止めない。要するに文明國民として英國民は尊敬すべき國であるが、戰爭となつては決して强い國民ではない。

軍事費の中其の大なる部分は兵士の食糧である。而して戰時と雖も、平時と同じ生計費は之を要する。只戰時の生計費は平時に比して高くはなるだらうけれど、要するに平時勘定が戰時勘定に代るのみである。平時は喰ひながら稼いでゐる。それが戰時になると戰場に出征した壯丁は稼ぐ譯にゆかないから生產力が減ずる。そこで國內に殘つた生產國民が生產する高が此等軍人の生活費をも支へ得るや否やの問題である。其點になると獨逸は戰爭に出てゐる人が多いから、殘る國民の負擔が大であ

る。それに反して英國は此軍事費の負擔が比較的に少い。此點は英國の獨逸に比して有する强味であると思ふ。

軍費負擔問題

然らば獨逸が今後軍費の負擔に堪へなくなる時があるであらうか。又其軍費の負擔に堪へなくなるとして、それが爲めに戰爭を廢める時が來るであらうか。私はさういふことは決してあるまいと思ふ。假りに英國は何億萬圓遣つてるとし、獨逸が何億萬圓借金したとしても、その遣つたり借金したりしてゐるのは金其物ではない。金貨といふ物は決してそれ程澤山有るものではない。例へば千人のお客には千枚の下足札が無ければならぬといふのではない。客は入替り立替りして來るのであるから千人のお客に下足札が百枚もあれば足るのである。それと同じやうに軍費にしても初めから遣ひ直して行けばよいので、何億萬圓の金を積んで置かねば戰爭が出來ぬといふのではない。要は國民の過去に蓄積した富と開戰以來現に生產しつゝある富とが軍費の負擔力に當るのであつて、此生產の絕えざる限り軍費の負擔に堪へるし、從つて戰爭は繼續することが出來る。それを一年か二年にして過去に蓄積した富が無くなるかの如く思ふのは迂闊である。又國債を募集する困難を感ずるであらうと言ふものもあるが、それは募集する方法に困難を感ずるのみで、方法だに立てば募集して出來ないことはない、財源はあるのである。

英國は過去に於て莫大の富を蓄積し、又現に生產しつゝあるであらう。從來百萬の人間を要した仕事も、今では五十萬、四十萬の人間で同じだけ產出をして居る。であるからこゝ三年や五年で軍費を支へることが出來ずして戰爭を中止しようなどとは思ひも寄らない。同じく獨逸にも過去の富と新らしく產出する富とがある。故に戰爭の已むは軍事上、外交上から來る可きで、經濟財政の方面から戰爭を中止すべき理由は今に於て無いと云ふ可きである。

戰爭終了後の獨逸の强味

然しながら何時かは此大戰爭も終局を告げる時があるであらう。而して其曉に獨逸が勝利を占めたらば勿論の事、假令大敗北を招いたにしても、其後獨逸國民は非常に勃興するであらうと私は思ふ。是れが單にカイゼルの野心から遣つてゐる戰爭ならば、そんな事は無からうと思ふが國民戰である限り、戰爭の終ると同時に戰爭に用ゐた力を學問技藝商工業等に集中することになり此等は一時に勃興して、將來に於ける强味は世界中獨逸が最も之を有つことになるであらうと思ふ。今日までの獨逸の强味は英國に對して强くなりたいといふ國民的大野心の發露であつたけれど、成上り者の野心だけでは到底將來の强味とすることは出來ない。將來の强味は偏へに學問の强みでなければならない。普佛戰爭の時の獨逸の强味は小學教育に在つたと言はれてゐる。然しながら今度の戰に於ては獨逸の强みは大學と工業學校にあると云ふ可しと思ふ。一般に教育の普及に望ましい事ではあるが、それ以上に、實用の學問、役に立つ數

育といふやうな程度のものゝみでなく、何時役に立つか分らぬといふやうな、一寸見ては迂遠な超世間的の學問の研究が盛んなといふ事が今後の强味である。獨逸が過去に於て歐羅巴大陸をも統一せんとした中心勢力であつたのが、十字軍以來代々の政治家の政策が宜しきを得なかつたか爲めに衰へ、今日になつて漸く再び勃興して來た獨逸の强味は陸海軍の强みのみではなく、實に學問を貴ぶといふことである。今日健全な財政を以て誇つて居る英國も、今より百年前は其財政危殆に瀕して、今日の獨逸と選ぶところなかつた。然るにピット出で、ピール出で、ハスキツシ現れ、最後にグラッドストーン出でゝ其財政狀態を改革し、今日の基礎を造つたのである。獨逸學問の興隆は聽て間接税の害あることを知らしめ、直接國税に依るの外なきを認めて、かの獨逸財政の禍根たる二重財政從つて分邦主義を全廢するに至るやも計られぬ。其れには聯邦制度其のものを廢するに至るか否かは分らぬとしても、少くとも聯邦財政の範圍は著しく縮少し、大部分をあげて帝國財政に統一する樣にならなければならぬ。而して聯邦が夫々に陸軍を分有する限りは此事は行はれない。故に先決問題は陸軍も亦た海軍の如く之を帝國陸軍とするに至ること是である。此事が出來、其結果として二重財政が廢せられ、玆に直接税を大黑柱とする健全なる英國流の帝國財政が出來上れば、獨逸の强味は更らに加ふること疑を容れぬ。英國今日の健全なる財政は學問を尊重し學者の說を容れた結果である。獨逸學問の隆興更らに一段を加へて玆まで來る時がない限りは、獨逸の强味は未々以て安心するを得ないものである。(七月十九日談)

▽極端なる獨逸讚美論者を警む

法學博士　吉野作造

近代獨逸の最も著しき特色は、何と言つても先づ第一に「力」である。彼の中歐に雄視するは、恰も力滿身に溢れる巨人の傲然として群少を睥睨するの概がある。獨逸國民は全體として氣力頗る旺盛、早く已に四海を呑んで居る。而して彼等が國力發展の爲めに勇往邁進する時は、何物も其前途を遮ることは出來ない。獨逸國民が目的を定めて進むや、頗る露骨で何等遠慮するところがない。それ丈け彼の行動は蠻的である。けれども、又若々しい生氣を帶びて居る所もある。而して此國力發展の目的の爲めには、朝野の別なく貴賤を問はず、各方面皆步調を一にして居る。軍人然り、商工業者然り、學者亦然りである。此等の者が互に共同一致して、組織的に國家の發展を計つて居るから、彼はあり餘る力を最も經濟的に活用する。是れ學術の進步に於て殆んど世界に冠たり、商工業の發達に於て、將に英國を凌がんとして居る所以である。斯くて彼は後進國でありながら、メキ〱と其力量を表はし、最近に於ては歐洲の國際場裡に於て、一つの怖れとなつて居つた。而して此怖るべき獨逸國民の力は、今度の戰爭に於て最もよく發揮されたのである。彼が四面强敵を

引受けて東西に奮闘し、毫も屈せざる有様は、正に之を國技館に於ける太刀山にも比すべきである。獨逸の特色は固より之のみに止まらないのであるけれども、最も著しい特色であり、且つ世人の獨逸を云々する時に直ちに問題とさるるのは、此「力」といふ方面である。獨逸を褒むる者も、又之を譏る者も、此議論の目安とするものは多くは此「力」である。

此「力」は確かに我々の獨逸に學ぶべき最も主なる點であるに相違ない。獨逸の如く強からんことはまた我々の願である。而して獨逸の如く強からんが爲めには我々はまた大に獨逸を學ぶの必要がある。此點に於て予は世の獨逸讃美論者と非說を異にするものではない。然しながら我國の一部の獨逸讃美論者の間には、見逃し難い一つの病に陷つて居るのを見る。それは何かといふと、獨逸の「力」を讃美するの極、此「力」を過重視し、且つ此「力」を有するものに有り勝ちの他の忌むべき屬性をも讃美せんとするの傾向である。斯の如き病はもと個人の間にも免れ難い。好きだと思へば痘痕も笑窪に見えるといふことがある。凡そ一藝に長ずる者はそれ丈けの理由で他の多くの缺點が寛容せられることが珍らしくない。勝負に汚ないとか、金錢に吝(ケチ)だとかの難あつても、兎も角も彼の「力」に驚嘆して、太刀山の贔屓は今日決して少くない。之と同じ理屈で、獨逸の力を讃美するの極、何もかも獨逸の文物を褒め、且つ辯護するといふのは、あり勝ちの人情であるとはいへ、之を我國の鑑にするしないといふ重大の問題に關係しては、我々はもつと冷靜に考へねばならぬと思ふのである。

「力」は成程國家の生存並びに發展の上に於て第一義の必要である。殊に今日の如き戰亂の時代に於ては、最も著しく其必要を感ぜらるゝのである。けれども之は國家に取つて最も重要なる要件ではない。少くとも唯一の最重要件ではない。我々は「力」の奥に「力」を支配指導する一つの道義的精神の缺くべからざることを認めざるを得ない。「力」を有し又は「力」を讃美する者は、宛かも元氣旺盛な青年が、動もすれば其元氣に任せて酒色の慾を恣まゝにするが如く、道德とか人道とかを無視して省みない弊に陷り易い。酒も飮まず女も買はないやうな意氣地のない者は、當世の活舞臺には駄目だなど大言壯語するのである。例へば獨逸の武力を讃美するの餘り、アングロ・サクソンの文明を罵倒するが如き徒輩は恰度此種類の人間である。焉んぞ知らん、「力」のあり餘る當年の元氣者は、十年二十年の後には大木の風に折らるゝが如くに倒れて、最後の勝利は常に小心翼々の實直者に占めらるゝことを。アングロ・サクソン文明の獨逸文明に勝つて之を尊重すべき所以は、いづれ詳細の研究を遂げて遠からず讀者諸君と共に講究して見度いと思つて居るが、兎に角、獨逸に心醉して英米を忘るゝのは、我國現時の言論界に於ける最も憂ふべき傾向であると信ずる。

獨逸讃嘆者は、彼の「力」の偉大なるに心醉するの餘り、彼の有する他の忌むべき屬性をも賞讃し、又は少くとも之を寛容せんとする。忌むべき屬性の最も著しき一つは、力に任して傍若無人に振舞ふといふことである。彼は一旦目的を定めては必ず之を成し遂げるといふ確信を持つて居

る。如何に困難なる事業の前にも決して逡巡しない。此點は實に獨逸國民の偉大なるところである。けれども彼は其目的を到達するに當つて、何物をも顧慮しない。只其目的を到達しさへすればよい。恰かも勝ちさへすれば手が汚ながらうが、他人か何と思はうが、一向構はない。獨逸語にツエック・メーシッヒ(Zweckmässig)即ち目的に協ふといふ意味の言語があるが、之がよく此性格を現して居る。即ち目的に協へさへすれば他人が迷惑をしようが、道德の掟に違ふが一向構はない。換言すれば目的の爲には手段を擇ばないといふのである。恰度血氣盛な青年が、仕事に成功しさへすれば、酒を飲まうが、女郎を買はうが構はんではないかと言つた風がある。されば今日の獨逸は、道德の頽敗實に甚だしい。學問の如きも形而上の方面は比較的後れて居るといふことである。宗教其他の精神の狀態を觀ると、歐洲文明國中恐らく獨逸は最も後れて居るだらう。成程獨逸には學者は多い。然し之は獨逸の社會が學者を優遇するが故に人材が集るのであつて、國民全體の智識が他國に比して特に進んで居るといふのではない。ルーテルを出し、カントを出した獨逸には無論偉大なるものがあるけれども、今日の獨逸の文明には、卑近なる目前の目的の爲めに無遠慮に其「力」を振揮ふといふことの外に、何れだけ偉大高尚なる文物の發達があるだらうか。されば流石に西洋諸國に於ては、戰爭前已に獨逸の「力」の偉大なるは之を讃嘆するに躊躇せなかつたが、而かも尙其所謂獨乙文明の缺點を指摘し攻撃する者が多かつた。ルーテル、カントの獨逸文明は無論今日でも又將來に於ても永く世界の讃美に値ひする。けれどもカイゼル・ウイルヘルムの下に於ける獨逸の文明は、日本と支那との以外に於ては餘り多くの崇拜者を有することは出來ない。

元來日本には道德拔きの「力」の崇拜者がなか〱ある。今日の日本の先輩といふ者は、多くは皆此種類の人物である「醉枕美人膝、醒握天下權」といふのが、當年の青年の誇りであつた。血氣定らざる青年の言としては之も致方がないが、斯の如きは元來思慮の熟した大人の口から聞くべきの言葉ではない。然るに日本人は不思議に「力」を愛し、「力」を讃美する國民と見えて、今でも「力」さへあれば品行などは何うでもよいといふ考がなか〱强い。例へば我々が卒業生の就職などを世話する時でも、身體が丈夫で學問がよく出來れば、品行などは少し位惡くても構はないといふことを聞く。曾て岩倉具定公が、學生貸費の資金を提供して秀才の養成を試みられた事があるが、貸費の條件三ケ條を極められ、第一、學問優等、第二身體健康、第三品行方正、を擧げ而して終りに但書を加へて、「第三の條件は深く之を問はずして可なり。何となれば之を矢釜しくいふ時は秀才を逸するの恐あればなり」と書いてあつたさうだ。之は予が右の貸費を得て大學を卒業した友人の某秀才より親しく聞いた話である。斯くの如き考は實は我國先輩の間になか〱强いのである。獨逸の「力」を讃美してアングロ・サクソンの高尚なる文明を理解する者の少きも亦怪むに足らない。

近頃新聞で飯野吉三郎といふ人が問題になつて居る。聞くところに依れば彼の經歷は岐阜縣の師範學校を卒業して暫く小學校の先生をして居

つたといふに過ぎないさうだ。多少易に詳しくて道ト者の毛の生えたやうなことを言ふ所に人と變つた所がある。外に特に才識の見るべきものがあるといふ事を聞かない。彼の品行に至つては世間に隨分非難もあるやうだ。素行の正しからざる點に於ては何人にも負けないといふ者もあるが予は明に之を知らない。月今詐欺恐喝の嫌疑で法廷に引出されて居るが、不思議に彼には有力な崇拜家があつて、河野廣中、頭山滿などゝいふ名士が、彼を先生〳〵と言つて尊敬して居るさうである。法廷に押川方義、三宅雪嶺の如き人々も特志辯護人として出廷して居るとの事である。そこで彼には何がエライのかと考へて見ると、彼の持つて居るものは只「力」である。聞く所によれば彼は筋骨逞しく、力人に絶し、容貌魁偉、眼光炯々として一見直に人を威壓するの風采を有つて居る。彼の前には何人も竦然として畏怖を感ぜざるを得ないとの事だ。彼は此「力」を利用して僅々數年の間に百萬の財を積んだと言はれて居る。此「力」が思ふに河野頭山諸氏の如き舊時代の名士を魅して自分に服せしめたものであらう。兎角高遠なる理想のない者は、我自らの「力」を以て人に臨み又強大なる「力」の前にはオメ〳〵と頭を下げる者である。然しながらいかに飯野某に此怖るべき「力」があつても、我々は彼を以て新時代のゼントルマンとして之を尊敬することは出來ないではないか。

獨逸は之を人にして言へば纏つた智識のある飯野吉三郎である。纏つた最新の智識がある丈けに、獨逸の方に倣ふべきものがあると思ふけれども、之を讃嘆するのは、恰かも飯野氏を持ち上げて居る河野頭山氏の如き者ではあるまいか。いかに河野頭山氏が天下の國士であり、又彼等の崇拜する飯野氏が偉大なる力を持つて居る者だとはいへ、彼等を帝國の代表者として歐洲の中央に出しては到底通用は六つかしい。廿世紀の新時代に活動する帝國の國是としては、獨逸の如き偉大なる力を養ふも無論必要ではあるが、又アングロ・サクソン文明の長所をも學んで、高尙にして圓滿なる紳士的國民性を作り上げねばならぬと思ふのである。

▽模範とすべき獨逸國民

醫學博士　中原德太郎

獨逸に御承知の通り帝國主義で、皇室といふものに非常に重きを置く國柄である。總べて天子を中心としてゐるところなど、其國體が我日本と餘程好く似通つてゐる。

天子は社會の各階級に於て特に學者、軍人、實業家の三つを優遇して居られる。軍人では低い階級の少尉などにも天子親ら謁見を賜ふといふ風で、士官にさへなれば隨意に宮中夜會に出入して、皇后陛下とも一所に並んで踊つたり跳ねたりすることも出來る。學者は學者で特別の尊敬を受けて皇室の優遇を賜つて居る。又皇帝の政策とでもいふか何といふか、金力といふものに非常に重きを置いて、天子親ら實業家に接近することを努め、時に親ら位階や爵位をも與へらるゝ。實に天子に臨海軍

の元帥であるのみでなく、實業界に於ては總帥であり、學者の總大將ともいふべきである。

こんな風に皇室の殊遇を辱うするものだから、天下の秀才は相率ゐて此三つの方面へ向って行く。であるから比較的に社會の他の方面では人才に乏しく、此三つの方面に主として良い人物が集つて居るといふのも實はそれが爲めである。官吏とか政治家とかいふやうな者は日本などに較べて決して高くない。良い人物は故らに皇室の優遇を受けない官吏や政治家にならうとは思はない。外交なども獨逸が上手だとは私は思はない。政治なども必ずしも良いとはいへない。只國家の基礎は學者軍人實業家の三方面で大體を作つて居るから、假令いかなることがあるとも此三つが土臺になつて働いて居る。今度の戰爭なども左うだと私は思ふ。特に士官以上になると人物が澤山に居る。學者は學者で常に科學の研究を續けて居るから、今度の戰爭などでも此戰備が科學的に十分出來て居つたことであらうと思はれる。學者に依つて修められた科學的智識は之を早速軍隊が應用するといふ風で、實業家は實業家で平常から國家に籠絡されて居るから、一朝有事の際には無論喜んで金を出したに違ひない。即ち平常から天子が特に學者軍人實業家を優遇して置いたといふのもこれあるが爲めで、獨逸が今日英佛露の大敵を向ふに廻してよく戰ふといふのも、其原因の一つは茲にあらうと思ふのである。

學者の優遇は自然と教育に力を注ぐことになるのは當然である。獨逸が佛蘭西のナポレオンに敗けた其當時、ウイルヘルム皇后が直接ナポレオンに面會して和を乞うた時に、プロイセンを其儘にして吳れと言つて賴んだが、それからといふものは其子のウイルヘルム一世を教育するに全力を注いで、今日の偉大な獨逸帝國を形作るに至つたのである。其方針が今日も猶國民一般を教養しつゝある。今日獨逸の强いのは此方針があつて、初めから世界を敵として當るといふ準備が行屆いて居つたからである。

特に我々の學術方面から言つても獨逸の遣り方は他國に其例がない。いかなる國民もこれには及ばぬ。啻に皇室の優遇を受けて居るからといふのみではなく、一般の學者が世界に卓越せんとして、學術に對する研究心は旺盛である。子供の頃から非常な勉强をするが、其勉强は老人になつても止めない。私の知つて居ることで、逝去つた一人の老教授、日本でいへば最早大家として研究も何もせずに納つて居るといふやうな老教授が、曾て若い者の話す言葉の中に、其老教授の知らないことがあつたといふので、『今君の言つたことは何ういふことか教へて吳れい』と言つて、それを公衆の前で尋ねたことがある。日本でならば若い者の知つて居ることを老人が知らないとあつては恥しいといふので、知らなくても知つた顏をするもので、況して公衆の前で、それを聽直して說明を求めるといふやうなことはしないものである。其老教授なども、唯に若い者に自分の知らぬところを教へて貰つたといふのみでなく、家へ歸つてなほも研究したといふことである。萬事が斯ういふ風に總て研究心の盛なことは世界中で獨逸が一番と言つてよからうと思ふ。私共の方の萬國醫

學會でもそれ〳〵學者が自分の研究を發表演說すると、其翌日敎授は學校でそれを講義してゐる。講義する許りでなく、『何某はこゝのところを研究せよ』とか『誰某は彼處の部分を研究して見よ』とか言つて、苟しくも自分達の知らない新學說に對しては何處までも研究して止まないといふ覺悟を有つて居るのである。

又一方に獨逸は、其生活が極めて質素である。總て儉約を主旨として居る。特に學生の儉約な事は驚くばかりであつて、獨逸の大學生は日本の大學生に比して其費用が半分にも達せないかと思ふ。それで傍ら家庭敎師をしたり、勞働をしたりいろんな內職をして自活をして居る者が多い。斯ういふ風に一方では學問を研究し、一方では自活の道を講じて艱難辛苦を嘗めて居るから大抵の困難にはビクともしないといふやうなところがある。公園などを散步して觀ても、白耳義のブルッセルの公園などへ行くと、どの人間もどの人間も懷手をしてブラリ〳〵として居るが伯林の公園などでは、どれもこれも步いてゐる人間は、苟しくも眼に觸れ耳にするところは研究し盡さねば止まないといつた風に見える。總て何事か常に考へて居るといふ風である。いかにも拔目のない、研究的な國民と言ふべきであつて、とつて以て日本人の模範とすべき國民は獨逸人であらうと思ふのである。

▽獨逸の國民性を論ず

慶應義塾敎授 向 軍 治

第一 歷史以前の獨逸

三ツ兒の魂百までといふが、發展する國民は歷史以前から特殊の民族性を有つて居るのである。獨逸人は北方から出た人種で、雪と氷との間に生れ、南へ出で、深林の中に猛獸と共に住まひ、常に風や雷の中に發育した人種である。陰鬱の天地に棲息するといふことは、自己に立ち返る深い思想に沈むといふ性質を養成する上に於て少からざる力を有つて居る。南方快濶の天地の中に生存する者が、愉快な自然に氣を奪はれ、安逸な生活に墮落するに反して、北方の人種は發達の初期から鍊えに鍊えを重ねるのである。外界の壓迫が內に省るの力を喚起すると同時に、天地自然を死物視しないで其間に人格の力を認めるといふ結果を生ずる。卽ち獨逸民族は生れつき哲學的宗敎的の人種である。人間の生活に取つて極めて不利益な北方の天然自然は、一面には倔強な身體を作り上げ、一面には堅固な意志を鍊え上げるのである。此精神と此意志と此身體とを備へた獨逸人が、何千年の後の今日、世界最强の國民として現れやうとは、昔の獨逸人は豫想しなかつたかも知れない。けれども、其發達の要素は早くも之を備へて居つたのである。斯くの如き民族なればこそ、

ルッテルも現はれ、ライプニッツやカントも出で、ゲーテも居ればワグネルも居り、ビスマルクも生れ、フレデリッキ大王の如きも又今のカイゼルの如きも生れ出でたのである。

第二　歷史以後の獨逸人

タチッースの「ゲルマニア」に依つて見るに、二千年前の獨逸人は其理想に於て、今日我國の昔風の老人の有つて居る程度以上に達して居たやうである。歐洲出兵論などを唱へて、戰爭が日本人の商賣であるかの如くに考へて居る昔氣質の人が可なりあるやうであるが、二千年前の獨逸人は全く戰さを商賣にして居たのである。之と同時に婦人を大切にしてゐた民族である。女まで皆政岡流の精神を持つて子供を仕上げたのである。忠君の思想の強いこと、今日の日本人と少しも違はない。此剽悍な人種は、千五百年前に於ける國民大移轉の當時皇帝中心の思想を以て勇ましく戰ひ、淸らかな生活を續けて居たことは、十二三世紀の交の文學に於てよく描いてある。中世紀に及んで基督敎の傳播と共に羅馬の文明の感化を受けることが著しかつたのであるが、內に力ある民族の同化力に富んで居る一例が、我國民の發達の上に於て明かなるが如く、獨逸人も亦よく他國の文明を消化して自己の個性を失はなかつたのである。忠實、正直、勤勉、仁慈、剽悍等のあらゆる美しい性質を備へた民族が、基督敎の感化を受けたのであるから、カトリック敎的の信仰で滿足しないで、遂に十六世紀に於てルッテルに依つて、新らしき獨逸の人格となつて現はれたのである。墺太利が久しく獨逸皇帝の位に居つて、獨逸の首腦となつて居つたにも拘らず、眞個の獨逸民族の性質は早くよりプロシアに依つて代表せられて、南方の舊敎的獨逸は亡びて北方の新敎的獨逸が蔚起することゝなつた。而して之に好機會を與へた者は、大奈翁である。十七世紀に於ける戰爭の慘害と、佛國の勃興とは、プロシアの發展に刺戟を與ふること決して少くなかつた。二百年前から兒童の就學を强制的に實行することゝなつて、佛蘭西の浮華なる文明に對して、根强い奧深い人格を作り上げるといふことに力を盡くした。二百年前から築き上げた國民敎育が、今日其の實を結んだのである。ルッテルがバイブルを平たい獨逸語に譯して、宗敎上から獨逸民族の個性の發達に力を盡くした如くに、十七世紀の終りから學者がそれ迄唯一の學問語であつたラテン語を廢して、大學の講義も獨逸語を以てするといふ運動を始めた。學問が學者の專有物にならないで、國民全體の腦裡に廣く刻み込まれるといふことになつた。我國では今の世の中でも尙言語文字の改良のことを等閑に附して居るのであるが、獨逸人は十七世紀以來自國語の發達に最も力を盡くし、高尙な思想を平易な言語で表はすといふことに盡力したのである。これが國民敎育の發達と相待つて、高い敎育ある者の言葉と、敎育の程度の低い者の間との言葉に、大した差別がないといふことになつた。是に於て學問が實際的になつて、文字の讀めない國民がなくなると共に、國民全體の智識が進歩するといふ結果を生じた。今日でもアメリカ、カリフォルニア州の人の中に、日本には汽車があるかなどいふ

學問を發する者が決して少くないのであるが、獨逸では田舍者でも日本人と支那人とを見分け得る位に進歩して居るのである。此國民が奈翁に蹂躙せられ、墺太利の頑固政治家に壓迫せられた結果、遂に新教的獨逸帝國の基礎が出來て、千八百七十一年に其帝國が生れ出たのである。當時國民誘掖の任に當つた者は、哲學者フイヒテの如き、文學者アルントの如きであつた。大日本史や日本外史が明治の文明に大いに貢獻したと同じく、文豪シルレルの作は今尚獨逸人に歡迎せられて居る。獨逸人は祖先傳來の確固なる個人性を備へて居る上に、歷史あつて以來、屢々軍事上及び政治上に外國の壓迫を受け、之に依つて益々鍛錬せられて遂に今日を致した七顛八起(ななころびやおき)の民族である。

第三　現在の獨逸

古來獨逸の最も苦痛に感じて居た處は運輸の不便なことである。工業は起しても其貿易は佛蘭西人か和蘭人に賴まねばならぬといふ不便な境遇に居つた。南へ向つて發展するといふことが、新らしい獨逸帝國の出來て以來の獨逸の宿望であつた。ビスマルクの時代には歐洲に於ける自國の地位を堅めるといふことは、最も急を要することで、未だ海外へ手を延ばす餘地があまりなかつたのである。二十六年前に今の皇帝が位に即かれて以來、最も重きを海外の發展に置かれた。之は一擧兩得の策で世界に於ける地歩を占めることは、同時に歐洲に於ける自國の地位を高めるといふことになるのである。而して世界に發展せんとするには、商工業に依るの外はない。世界商業の發展は海軍の援助を要する。殊に英國に匹敵するまで進む必要があつたのである。工業を盛んにするのには原料を要する。今回の戰爭に於ても獨逸が毒瓦斯を用ゆると言つて、聯合軍側で盛んに攻擊するのであるが、獨逸には其毒瓦斯の原料があつて又之を製造する工業も發達して居るので、直ちに用が便ずるのであるが英國の如きは其原料もなければ其工業も發達して居ないのである。流石の商工業の盛んなアメリカでさへ、獨逸の商工業の勢力の侵入を防ぐことが出來なかつたのであるが、之は一面には、人工で天然の與へざる材料を作り出すといふ智識を有つて居るからである。一體製造業は分業法に依らざれば成功しないものである。併し商業は獨占事業でなければ思ふ存分の活動は出來ない。クルツプ會社の如きは製造には無論分業法を用ゐて居るのであるが、鑛物の採掘から大砲に造り上げて出すまで、否な彈丸を發射するまでも、會社一手に纏めて行つて居るのである。此商工業が從來貧乏國であつた獨逸を富强の地位にまで進めたのである。プロシアは三百年前までは極めて荒れた土地であつたのであるが、時の君主が國土の開發に力を盡して殆んど代々民力休養に心を用ひ、殊にフレデリツキ大王に至つて今日のプロシアの基礎が出來たのである。本來哲學的宗教的に生れついた頭腦を以て、哲學者、宗教家及び文學者が先導者となつて國民の開發に努め、其發達した智識を實際に應用して、農工業及び商業に於ては、天然の妨害に打勝ち天然の足らざるを補つて人工的に富んだ國土、强い社會を作り上げるのである。獨逸を以て只戰さ

に强い國とのみ思ふのは大いなる誤りで、其實さに强いのは、學問の進步、敎育の發達、農工商業の改良進步の結果である。此頃の戰爭の報告に依ると、露西亞は甚だ弱いやうであるが、之は決して露西亞の兵士が弱いのではない。露西亞の工業が進まない結果として兵器が不完全であり彈藥銃砲に大いに缺乏して居るからである。潜航艇にしても獨逸で用ゐて居るものは、海底に居つて自由に其方向を定めることが出來るやうな仕掛がしてあるのである。何れの方面に於ても、學理を應用して人智のあらん限りを盡すといふのが、獨逸人の本領で、之に加ふるに堅固なる意志と熱心なる努力と、强壯なる身體を以てするのであるから、到底も浮華に流れた英國の文明や、文明の程度の低い露西亞の兵を以て、獨逸に勝てる筈はないのである。若し我國を獨逸のやうな强い國にしたいとなら、獨逸人のした後を追ふより仕方はあるまい。第一に敎育の改善殊に言語文字の整理に着手せねばならぬ。又學問を實際的にする必要がある。然し學問研究を眞實遺憾なく根本的に行ふといふには金を要する。國を富ますといふことが、何より急ぐ仕事である。今日程積極的に勤儉主義を實行する必要のある時はあるまいと思ふ。

▽前途不安なる獨逸文明

文學博士　姉崎正治

或政治學者がイギリスの政治を批評して、『イギリスの政治は論理的ではないが、Consistent である』と言つたことがある。其意味は時の必要に從ひ、人民の要求に應じ、四圍の事情に依つて政治の組織を變更して出來上つたものであるから、前後揃はない點があつて、所謂論理的でないけれども、總てが必要に應ずる爲めに苦心慘憺の案配を經たものであるから、機關の活動が圓滿に進行する。論理が貫かなくとも實用には適する。所謂 workable である。或は有機的とも稱せられる。例へば植物の生長は理論的に言へば、幹が眞直ぐに生へて枝が四方に出る筈であるが事實はその通りではなく、大抵の樹木は不規則な形をして居る。それが、却つて生活の境遇に應ずる所以になつて居る。イギリスの社會的事物、現在の人民の性格は皆 workable といふ一點で動いて居る。これと對照して著しく違ひのあるのはドイツの遣方である。帝國統一以來、特に今帝ウイルヘルム二世の即位以來、總てが皇帝並びに其顧問たる人々の腦髓から論理的に作上げられて居る。政治のみならず法律、教會、教育、商工業に至るまで、悉く一定の聯絡を保つて制度秩序が整つて居る。それ故にドイツ國民の生命は、其論理の前提が有力な間は總て枝葉は整つて行く。そこで其根本たる主腦に變動を生じた場合には、如何にして國民の

生活が進み得るかといふことは疑問である。例へば數年來ドイツの有識者の間に憂慮の種になつて居るのは、御代が變つて今の皇太子が即位されたならば如何なる變動を生ずるかといふことである。今帝の在朝中に整へたところの論理的制度が瓦解するまでには行かずとも、非常な打擊を受けることは明かである。況や外國との戰爭又は內亂の結果、一層大きな變動が國家の主腦に生じた場合には、國民は如何にして其活動を續けるか、ドイツ人自らも其悲觀を抱いて居る譯である。或人の言に『イギリスでは人間が働いて居るが、ドイツでは法律が働いて居る』と言うて居るやうに、法律制度の機關となり、國家の手足となつて働いて居る人民が、其主腦の變動と共に大打擊を受けるのは必然の勢である。

この點は日本人の側から觀て特に注意すべき點であつて、今まで日本の文物にドイツの勢力が多かつたのは、其秩序整然たるのを好んだ爲めである。政治にしても敎育其他總てイギリスの生活に、書物や報告で解るものでなく、餘程其中に這入つて生活しなければ解らない。又其具合を理解したところで、之を模倣し、之を日本に移植するといふことは出來ない。自然の發達を經たものは自然の發達を待つ外はない。然るにドイツの制度文物は總て論理的に出來て居るから研究し易い。又他に移植することが出來る。半年や一年の調査滯在で大體のことは解る。又直譯的に之を輸入することも容易い。その爲めに日本は過重に、ドイツの眞似をしたのである。其餘勢は今日に至つても猶ドイツの長所許りを見て其短所を思はない人が多く出來て居る。これ等のことは今更ら言ふまでもないことであるが、いくら言つてもドイツかぶれの人は其弊害を悟らないで居るから、斯くの如き考の日本にある間は、何處までも斯くの如き模倣に反對する者がなければならぬ。何となれば斯くの如き細緻の模倣は國民の元氣を枯らし、何事も政府の力に賴らしめる源であつて、國家の繁榮に於て一時は奏功しても、何時までも其發達を遂げる所以の道ではない。

右の點は大體論に止めて、進んで現在戰爭中に於けるドイツ人の遣方に就いて考へて見よう。開戰以前からでも同樣あつたが、開戰後特に激しくなつたドイツ人の特徵は、總て外國人を敵と見るといふ一事である。よく言へば愛國心、敵愾心の盛んなことであるが、惡く言へば偏狹なる排外心である。此力に依つてドイツは現在の國難に堪へ、四方に敵を受けても屈せずに居る。此點から觀ればドイツ人は愛國者の標本ともいふべきである。然しながら猶一歩深く考へて見るに、斯くの如く四方を敵とせざるを得ないやうになつた原因も亦同じ點にある。日本の諺に『佛を出さうと鬼を出さうと心一つ』といふことがあるが、ドイツ人が四方を敵とするに至つたことは、少くとも半ばドイツ人自らが敵を作り出したのである。近くは開戰以後ドイツの哲學者、神學者が發表した議論を見ても皆その通りである。『外國人は皆獨逸を理會しない。それ故に尊敬しない。尊敬しないから輕蔑をするのである。それ故に外國人は皆敵である。』總て其調子である。其事を明白に臆面なく言明して居る人間もある。(例へばオイケンやラッソンの如く。)而してドイツ人を理會するには何うしたらよいかと言へば、彼等は口を揃へて『ドイツ人にならなけれ

ばドイツ人の長所は解らない』と言つて居る。要するに世界中がドイツの臣下になつてドイツを崇拜するに至るまでは、外國人は悉くドイツの敵であるといふことである。其考で他國に對し、他國を輕蔑し、憎惡し遂に總ての國民を敵にして了つたのである。此點から觀れば、現ドイツの苦境はドイツ自らの心で自ら鬼を作り出して、其鬼と戰つて居るのである。愛國心といへば美名であるが、要するに日本にも昔あつたところの攘夷の精神である。攘夷の精神を積極的に發揮したものである。

現在ドイツ人の斯くの如き性質に就いては、世界の危險分子として排斥しなければならぬ。アメリカでは現在ドイツのことを稱して『世界の狂犬』と言つて居るが、世界に斯くの如き狂犬の現はれたといふことは世界共通の危險である。日本も狂犬の仲間入りをしないやうに注意する必要がある。然しながら我々批評家の立場として觀ると、ドイツ人が斯くの如き狂犬になつたのも多少同情すべき點はある。それは斯くの如き偏狹なる愛國心の歷史的由來である。即ち中世紀數百年の間は、人も知る如くドイツは諸侯分裂の有樣であつて、其間爭鬪が絕えなかつた。其分裂に乘じて東はロシアから、西はフランスから厭迫を受けたことも少くない。恰も日本の封建時代に他領の人を皆敵として見たが如く、ドイツ國內でも地方每に相恐れ、且戰つたのである。其精神をば外國に對して發表すれば、悲歌慷慨の對外心となるのは自然の勢である。其敵愾心がナポレオン以來フランスの攻擊に激せられ、而して帝國統一以來組織的に養成せられたのである。今まで隣國隣村相敵として居つた精神を、今度は外國に向つて發表し、教育制度で之を養成し、宗教で之を煽動し、工業にまで之を應用したのである。それ等の結果が集り集つて今日の戰爭になつて居るのである。斯くの如く觀察すればドイツ人の敵愾心には同情すべき點はあるが、少くとも過度に養成し、激したといふ實は免れることは出來ない。其結果は一種の狂犬病に罹つたやうなものである。そこで戰爭が始つて、第一憎く思つたのは自分の要求に應じなかつたベルジック、續いてベルジックを援けたイギリス、それから日本、それから今度はイタリアである。これ等の國に對する憎惡の念の盛んなことは殆ど憐れむべき程激して居る。但しこれ等の國民を總て同樣に憎むといふことは、人間の精神では困難のこと故、現在の狀態では新しい敵程多く憎むといふ有樣である。勿論イギリスに對しては特に憎惡の念が盛んであつて、此頃出來た歌などで見ると、イギリス人の肉を啖ひ血を吸つても厭き足らぬといふ感情を現はして居る。而して現在ではイタリアに對して同樣の感情を抱くやうになり、遂には敵でもないアメリカをまで憎むやうになつて來た。アメリカを憎むのも矢張り前に言つた偏狹なる愛國心の發露である。初めはアメリカに遊說して自分に同情させようと試みて、それが思ふ通りに行なかいで却つてアメリカの輿論がドイツに與みしないのを見て、激怒してアメリカに對して憤慨罵倒するやうになつた。これ等の心理的經過を觀ると、いかにドイツ人の精神が irritable erratic であるかといふことを知るに足る。廣濶な精神と高遠の理想とに基いた愛國心でなく、偏へに己れを主張する主義に基いて愛國心を養成

した結果は斯くの如くてある、日本の教育家も此點に就いては特に考ふべきことであらうと思ふ。

▽獨逸國民性の長所と短所

武者小路公共

先づ獨逸人の個人的性質に就いて觀察して見るのに、其特徴とするところは、堅忍不拔の氣力のある事と、學究的の研究心の深いこと、之を實地に應用する技能のあることなどは直ぐに目につく點である。之を社會的の關係から觀察すると、上下の階級の區別が非常に明確であつて社會の秩序が整理と立つて居るのが其主もな點である。從つて其缺點の方を擧げて見ると、個人としては自我心の非常に强いことゝ、從つて自分の利益を主張する爲めには他人を排擠することも厭はないといふ點、それから下級社會の者は、小成に安んじて到底も上級の社會と伍して事をして行くといふ奮發心がないやに見受けらる。此點は主なる缺點と思ふ。從つて獨逸人に接觸した人の感想といふものは、其特徴の最も著しい精力的なることには感服するけれども、其自我心の强くして傍若無人を敢てして憚らざる點に就いては、非常に不愉快の心持を有つ次第である。從つて獨逸人は恐るべき人種なることを考ふると同時に、到底親しむべき溫情のある人間とは思はれないのである。其結果として如何に永く獨逸に留學し、如何に永く獨逸人と接觸をして居る者も、獨逸の個人と非常に肝膽相照すやうに親くする關係の者は殆んどないのである。之を英佛に留學して居る人達の狀態に照すに甚しい相違である。英佛に永く居つた人は忽ちにして英國化され、或は佛國化され、所謂我英國、我佛國的の思想を注入されて歸る人が多い。之に反して獨逸に留學して居つた人達の感想は、永く滯在すればする程いよ／＼以て獨逸人の性質に嫌惡の情を抱くに至るのである。然し此英佛人と獨逸人とを較べて見るのに、若し獨逸人を贔負目に觀察すれば、北方の種に媚はざる粗野な性質に原因をなして、所謂僞はらざる告白を始終して居るのである。爲めにひどく人の惡感を起さしむるのではあるまいか。或はゼントルマンライクとかいつて、表に紳士の態を裝はんとする爲めに、それに接觸する人に幾分春風駘蕩の感を抱かしむる英國の人民。若くは溫厚玉の如き佛國の人種に接觸したる者は非常に愉快な感じを得ることも、之は常に外國人が入り込んでよく外國人と接觸して居るが爲めに鍛錬されたる性質によるのであつて、其本に遡れば苟くも人間たる以上自我心を中心として總ての行動を遣つて居るものと見るのが當然であらう。從つて世人の見るが如く獨逸人と他人種との間に非常なる區別があるといふことはいへないだらうと思ふ。要するに此獨逸人の個人の特性なる精力主義といふことは最も著しく人の注意を惹くものであつて、上下の階級に通じて各々非常なる熱心を以て事に從ふの狀は、他國に於て窺ふ事の出來ぬところである。先きに上下の階級の劃然たる區別が、人の向上心を抑へや

しないかといつたけれども、事實は之に反して各々居に安んずるの信念を與へ、それが爲めに各人が自己の職分を守り、それが爲めに滿腔の勢力を出すといふことが、いよ〳〵以て獨逸の風致を進めるやうになつたらしく思はれる。其階級性の最も著しき一例を示せば、予が曾て宮内省に宮内大臣を訪問しようとした時に、まだ宮内省の所在を知らなかつた爲めに、其近傍の番兵に就いて委しく其宮内省の所在を尋ねようとした時に、番兵は只一言『知らず』と答へた。然らば貴下の監視する此建物は何人の居らるゝ所であるかと反問したところが『予は只單に此屋前に歩哨として立つべきことを命ぜられたのであつて、此家の内部に何人が住めるやは、予の關するところに非らず』と素氣なく答へた。そこで詮方なく其往來を行く人に、宮内省の所在を問ひ、且つ其衞兵の建物の何たるかを訊したるに、宮内省は其隣りで、其守備され居る建物は、皇子アイテル、フリードリヒ親王殿下の御住宅であつた。若し之を日本にて見たならば、衞兵は其内に居る人の官職氏名を記憶して誤ることを許されないのである。然るに獨逸の兵は斯くの如く教育されて居るのである。其結果としては單に命令さへあれば水火の中へ入ることを厭はない「原因は予の問ふところに非らず」といふ、頗る簡單なる信念の然らしむるところである。而して其信念の基くところは予の上官は到底予に比して比較すべからざる賢明なるものである。此命令に服從することは最もよき指導の下に服從するのであるとして安心して遣つて行ける。かく信じ得るが爲めに如何なる難事といへども、命令一下行ふことになる。此觀念は總ての方面に亙つて居つて、上の命令は事の如何を問はず下に於て敢行される有様は、他の國で見ることの出來ない特徴である。而して彼等の盲信するが如く、其上に指揮する人達は事實上彼等に比して非常に賢明で、非常に學識あつてよく大局をわきまへて、彼等を指導して居る。從つて之を軍の統率に適用して見れば、適當なる命令を上官が出して、之を無我無心に遂行する兵卒が出るのであるから、事は頗る簡單に而かも適確に行はるゝ譯けである。之がやがて獨逸が現在に於て四面の敵を受けながらよく抵抗を續けて行ける原因でなからうかと思ふ。初め予が伯林に於て觀察した所によれば、獨逸の軍人は餘りに華美な服裝を好み甚だ職務に不忠實なるかの如く見受けたのである。而かもよく内情を尋ねて見ると、總ての將校は朝六時頃より軍務に服して、終日非常なる激務をいとはないのである。其軍人達が、例へば少尉中尉の階級に於ては決して政治論などすることなく、單に軍隊の教訓其他極く一局部のことに熱中して居る。其點も他の國の青年將校と非常に選を異にして居る。之を觀ても各階級に對して自己の職に應ずるに全力を盡くすことが解るので、之が爲めに總ての秩序整然たる事は、想像が出來る。それから又一方に於て理論と實際との調和を保するは、獨逸の特徴なるが、之は學者が如何に學術研究的に遣る時にも、常に實地といふことを忘れぬ點にあるだらう。曾て「ウイルヘルム皇帝研究所」に於て、物理化學の大家なる有名なる某教授が其學術の研究の爲めに研究所に雇はれたのであるが其服務の初めに當つて、獨逸皇帝は坑内に於て毒瓦斯の爆發を豫知し得

る燃火の發明を委托した。若し之を外の國の學者に命じたならば、自分は學者である。理論の研究をするものに對して左樣な應用を命ぜらるゝのは不都合であるといつたかも知れぬ。處が獨逸では其純粹の學者は直ちに喜んで其命に服し、約半歲を費して其發明をした。それが爲め獨逸の石炭礦の爆發を豫防する事が出來るやうになつた。斯の如き學者ですらもよく實務を離れないから、其他の役人官吏等に於ても、職務の傍常に研究を怠らざるは著しい特徵である。從つて事務が頗る簡捷に行かぬ弊があるやうに見受けられるが、然し頗る確實で適確に行はるゝは又著しく目立つところである。要するに獨逸人の性質は一言にして之を掩へば着實にして精力の强いところにあると思ふ。從つて其人達の崇拜する人物もさういふ意味に於て著しき性質を備へた人を取るやうである。獨逸で崇拜せらる人は音樂家でワグナー、文學者でギョーテ、政治家でビスマルク、軍略家でモルトケ、宗教家でルーテル、此人々は外國で想像する以上に、獨逸人に崇拜されて居る。豫言者は鄕に入れられずといふことを信じて居た予は此等の人物が外國人よりも寧ろ獨逸に於て想像以上に、人間よりも寧ろ神に近いところまで崇拜さるゝのを見て驚たいのである。而してビスマルク、モルトケ、ルーテルの各人に就いて見るも、其性格の獨逸式たることは何人も認め得るであらう。又ワグサーのパーシファルやギョーテのフウストの如きも、其性質に於て獨逸人をよく代表して居るやうに思へる。此獨逸人の精神狀態には所謂軟弱といふことを見ることが出來ぬ。又從つてワグナーの音樂の如きは何れを取つても佛國若くは伊國式の南方趣味のもない。ギョーテの作も又然りである。所謂文學藝術も雄渾莊重といふことには適するが、艶麗優美は殆んどないのである。此艶麗優美のないといふことは、總ての意味に於て獨逸人が外の人から嫌惡せらるゝのではあるまいか。然し獨逸が中歐に立つて飽くまで四圍の敵を防ぎ得るのは、寧ろ此性質に基いたものである。即ち諺にいふ『憎れ子世にはびこる』とは獨逸人に適當な言葉で、餘裕のない自我心の塊りに依つてよく現在の位置を維持して居るのである。但し此性質が果して人類の品性の立て前から見て、褒むべきものであるか、否やは別問題であつて、若し斯くの如き人種が世界の大勢を占め得べきものとすれば、寧ろ其勢力を振ひ得る者は、餘りに仕合せな者ではなからうと思ふ。若し此獨逸の特徵のみを殘して、全く短所を除けば何ういふことになるか、寧ろそれが爲め雄大なることをも失ひ、全く平凡化はしないかと思ふ。之に由つて之を觀れば、獨逸人の惡い性質が、此發展を助けて居るものかも知れない。吾人は此點に鑑みていかにせば最も社會に於て有勢な地位を占め、而かも一般の嫌惡を招くが如き事なかるべきか、之は大いなる研究問題であらうと思ふ。

▽軍隊的に訓練された獨逸國民

某海軍少將

英佛露の三大國に、近頃伊太利を加へた聯合軍側の大敵を向ふに廻して戰つて居る獨逸は、時に戰捷を博して世人をして或は此大戰の勝者たりはせぬかと疑はしむるのであるが、之は一局部の勝負で勝敗の大局には大なる影響に及ぶまいと思はれる。此點より考へて來ると、全然海上より一掃せられ、又は佛京への侵入が阻止せられたる時機以來と云ふものは、大局上獨逸は日々敗れて居るは事實であつて此戰爭が續けば續く程事實上敗れに敗れて行き居るは譯であるけれど、兎にも角にも獨逸は能く闘つて居る。それならば獨逸は何故戰爭に强いか。是れは獨逸が今度の戰爭を豫期して、一日も其準備を怠らなかつたといふ事も一つの理由であらう。が、一口に言つて最も其主要なる原因は、個人心身の鍛練が出來て居たといふ事にあらうと思ふ。此點になると、日本などはこの人間を作るといふことにまだ／＼力が入つてゐない。つまり國民は最早人の說を聞いて初めて何う動くといふのではなく、各人各自にいかなる困難をも突破して四方へ出て行かうとする意氣が、獨逸國民全部に漲つて居る。此素養は今日に出來たのではなく、全盛時代の佛國等より壓迫せられ獨逸が苦しみに苦しみ、鍛へに鍛へて來た結果であらうけれど、それにしても國民上下一致して之に向はなければ、とても今日のやうな基礎を作ることは出來なかつたであらう。殊に上に立つて居る人は勿論、國民の中堅となつて居る中流の位置の健全なる國民が大に奮發して茲に至らしめたるものと思はれる。であるから獨逸人の爲る事には萬事に魂が入つてゐる。人に負けぬといふ、日本で云へば武士道とか日本魂とかいふ氣分が、男は勿論女にも入つて居る。聞く處に依れば、家庭の細君が自分の子女を養成するにも萬事軍隊的に遣つてゐるといふ事である。家庭から社會から總べてが斯ういふ風に秩序正しく教育されて居る。それだから獨逸人と應待すると、何となく喧嘩腰のやうなところがあつたり溫情といふものが無かつたりするやうに、ちよつとは感ずるのであるがこれは稍々極端過ぎる嫌はあれど、要するに人と交るにしても眞劍で遣つて來るからだらうと思ふ。

それから殊に輿論の制裁といふものが、餘程尊重されてゐるやうに思はれる。獨逸に行つたことのある人は誰しも氣の附くことと思ふが、私ども鳥渡通り懸つただけでも、獨逸の若者達の中には頰に武術に基く切創のある人が澤山ある事に氣が附く。汽車の中で遇ふ人や、往來で擦れ違ふ人の中にそれが澤山ある。吾々から見れば隨分醜くも見えるが、彼等獨逸人は是れ有るを誇とし、娘さんや何かもさういふ切創の痕のあるやうな醜い面の人を却て一種の氣骨も有り確かな人として慕ふといふ風に聞いて居る。

要するに斯らいふ尙武の氣象、といへば一方に偏するかも知れぬが、兎に角しつかりした人間を尊ぶといふ氣風は餘程廣く行き亘つて居るやうに私は思ふのである。歐羅巴に澤山ある珈琲店へ這入つて見ても、佛蘭西の珈琲店と獨逸の珈琲店とでは店内の空氣が際立つて違ふ樣である。卽ち後者に在つてはボーイの動方に秩序があつて引締つて誠に心持ちが良い。獨逸の國民は皆軍隊の規律の如何なるものかを一度必ず味つて身體及精神を鍛へて來た者で、縱令軍隊に入らずとも、學校が已に軍隊的精神を以て働いて居るのであるから、國民全部皆兵の實を擧げて居るのである。

私は獨逸といふ國民は能く智勇を兼ね得たものだとは思つて居るが、人の人たる道の修養は殆んど欠けて居ると思ふ。從つて高尙な國民とは思つて居ない。只此智勇的鍛練が國民一般に行渡つて居るから、今回の如き大變亂に際し、國民擧つて自己を空うして國家の爲めに戰はんとの猛烈なる敵愾心を持ち智勇の最上を發揮し、毅然として四圍の大敵に當り散らして居る現狀である。惜い哉國民として最も大切なる高尙と云ふものなきが爲め、土耳古からは同情されて居るが文明と云はるゝ限りの世界全國から疾視されて居るのではあるまいか。要するに獨逸側は局部戰勢の如何に拘らず大局上日一日に敗點に近づきつゝあるものと斷しても誤りなからう。聯合軍側は百も承知のこととならんも殊に此點に注意し益々元氣を發揮すべしである。兎に角獨逸流の智勇的鍛練は我國民の大に鑑みて其長を學ぶべきであらうと信ずる。

▽獨逸魂の成立せる歷史的因緣

理學博士 田中正平

戰爭も已に一ケ年を經て、いろ〳〵世の中で期待して居つたところが當つたところもあるし、又外れたところもあるだらうと思ふ。が、要するに獨逸の兵は豫想外に强い。獨逸國民の決心團結も豫想外に强い、とは、世の中が認めて居るところである。殊に此戰爭は近來の戰爭として卽ち學理の應用到る處に行はれて、剩すところなき戰爭として、殊に獨逸人は學術の應用が非常に巧みであると云ふ事が明かに證明された。獨逸人は常よりして學問に非常に熱心であるし、又學問を以て國を建てやう、學問を建國の一つの道具としようといふ位に、自らも任じ人も許すといふやうなことになつて居る。段々此獨逸式の學理を應用するところ用意周到なるところ、微細なる點まで組織をして、其實行に過ちなきを期する點は眞に敬嘆に値するのみならず、將來はどの國民でも此方針に倣らて進まなくてはならぬと云ふ如くに、一種の流行を來たさんとして居るらしく思はれる。

扨て此獨逸人をして斯くの如くに、學術を發達せしめ、學問を利用し又其他總て百般の事に學問を應用せしむるに至つたに就いては、之は只國民の決心とか、或は國の方針より出たといふのみでなく、之を然らしむる點及び之をして成功せしめて今日のやうな隆盛を致さしむるところ

の理由となるものは、單に世人の考ふるよりも、少し深い所に其原因があるのではあるまいかと思ふ。此點について私の其獨逸に居りて觀察したことを回顧して一寸感想を述べて見度いと思ふ。私は固より歷史家でもなく又經世家でもないから、其觀察固より斯道の專門家から見たならば淺薄であるかも知れないが、折角のお求であるから只よく／＼の感想丈けをお話して見るのである。

只今からザツト廿四五年前であつたらう。獨逸に一種の理想的の事業が行はれたことがある。それを譯して申すと、「倫理修養實踐團」とでもいふべき會合であつた。之は聞くところによれば、英米の間に初まり殊にソルターといふ人が主張されたとか云ふが、其目的は即ち古來から人間の倫理的生活といふものは、皆殆んど宗敎の支配するところである即ち多くの文明國に於ては、宗敎と倫理とは離すべきでない。處が此宗敎といふものは、種々の沿革を經たもので、今日の理性の發達した世の中に於てはどうも矛盾が多いといふので、近世人は追々に宗敎から離れて行つた。所謂宗敎の宗敎たる所より人心が次第に乖離する傾がある。それと共に倫理の基礎が緩む恐があるので、それかと言つてからに倫理といふものは、此世の中に住んで居る間は、一定の法則があるのであつて、之は各學派の唱ふる所も、略ぼ一定して居るのみならず、聖賢哲學者共の敎へられたものも、詮じつむれば殆んど同じことになるが故に、之を本にして即ち動かすべからざる倫理の原理を本として、之を宗敎から離して、世道人心を導き延いては國家の事業を銘々が擔當するに至るまでも、其方法で遣つて行けば、壞れかゝつた道德も保たれ、宗敎は宗敎として神聖なる位置に置いて、特殊の發達をさせる方が便利ではなからうかといふので、其會員は屢々會合して倫理的の講話をなし、又お互に意見を交換し、殊に其實行に務むる一つの團體を拵へるといふ催しであつた。獨逸でも隨分立派な大學の敎授なども喜んで奔走されたらしい恰度井上巽軒博士なども一時は其方に餘程心を傾けて居つたやうに聞いて居る。無論此會のプログラム（綱領）とか事業とかについては、社會百般のことに關し、世界の平和を維持するを旨とした。無論カーネギーの以前の話で、要するに萬民皆同胞皆兄弟であつて、此人類の中で從來鬪爭を事とするは怪しからぬ話であるといつて大いに平和主義の綱領を鼓吹したものである。其會の或代表者が各知名の人に人を派して意見を聞いた事がある。其代表者がモルトケ將軍の所に行き、そして戰爭といふものについての意見を叩いたことがあつた。其時將軍は八十歲以上であつた。將軍は元來非常に沈默溫厚の人にて、一言も苟もせぬ人であつたが、其人が從容として答へて曰く『自分の意見では、戰爭は人爲的に終熄せしむることは出來ないものだらう。又戰爭は人類を陶冶するについて効力があるものである』と言つて他に何んとも言はなかつたといふことを今に覺えて居る。此モルトケの言葉が、其時代に於ては隨分世間の批評を免れない。殊に平和論者からして駁擊されたことがあつたのであるが、然し今日に於て此モルトケの言はれたことは、大いに床しく思はれる點がある。即ち今日世界の上に於て各文明國といふものは殆ど此の

所謂戰爭に依つて淘冶せられたるところの國民より出來て居るものであらうと思はれる。殊に獨逸國民に就いて考へると、最も然りであると私は信じて居る。戰爭がいかに此獨逸國民を淘冶したかと云ふ事に就いて少し述べて見たい。

先づ獨逸人種といふものは、太古の事は分らぬが、一種の遊牧民であつたらう。羅馬時代には一種の野蠻人として取扱はれたが、段々羅馬其他の南方の文明人種との交通が盛んになつて追々に社會的の組織を成して來た。此國民は非常に多くの且つ興味の深い神話或は英雄傳說を有つて居つて、其等に由つて觀ると、此國民は非常に剛健なる氣象を備へて居る。殊に質朴であつて、所謂健全なる生活能力を持つて居つた人種である。又羅馬時代に色々の歴史家がゼルマン人種に就て記したところを見ても、斯ういふ風が現れて居る。であるが、此人種は自然の恩惠を十分に受けなかつた。何故かといふに此人種の落付いた場所といふものはアルプス山の北方で、氣候の峻烈なるのみならず、土地が豐饒でない。殊に北に進む程然りである。今日の如く、文明が進めば自然の壓迫を防禦し、之を避くる方法設備も發見さるゝのであるが、當時に於ては非常な困難を感じたものに相違ない。即ち日常の生活は殆ど自然との戰ひであつた。中世暗黑時代では、殊に其宗敎的の壓迫を受けたのみならず、四面に段々强國が出來た。殊に佛蘭西と伊太利が盛んになつて、獨逸の人智と此等の國の人智との間には非常の懸隔が出來て來た。即ち一方は段々物質上、精神上の文明が盛になるに拘らず、獨逸の文明は遲々として進まず、益々隣國から壓迫せらるゝやうになつた。即ち此國民は外に發展する道もなく、さればと言つて、外の者と同化することも出來ず、天然と隣國からと詰めぬかれた結果、萬事が消極的になり、國政も亦統一が附かず、人民は塗炭の苦みを嘗めざるを得なかつた。それが先づ中世からして所謂三十年戰爭、七年戰爭あたりまで續いたが、此二大戰爭を經て、歴史が所謂近世に入つた。其間に無論歴史的境遇といふものは、此國民の性質に影響を及ぼさぬといふことはないので、それが何ういふ風に影響したかといふに、獨逸國民は人種としては立派な人種である。即ち身躰は健全で殊に剛氣に富み又忍耐力が強く、諸方各種の壓迫に對抗して生活し得るだけの資格を備へて居る。殊に人爲的に即ち銘々の努力を以て、世の中に生存しなくてはならぬと云ふ念が　其時に十分に養成されたのであつて、現にそれがある爲めに四方の壓迫に拔抗して來たのである。然しながら國民としての志を伸ぶる、即ち例へば物質的の榮華は到底我國民では得ることの出來ないものゝやうに斷念して、隣國の文明の燦然たるを羨望して居る丈けで、決して自分達の運命として此域には達せないのであるといふ念を起して居つた事が、內向即ち外に發せずして內に精神を磨き、精神上の結果を以て自ら慰め以て自ら樂む風に自然傾いた。卽ち其時代の獨逸人は理想的、神秘的、夢想的の人種であつた。之も四圍の狀況の然らしめたところである。夫れ故に獨逸の文明の特色として現はれたのは主もに精神的の事業である。殊にルーテルの如き宗敎的の事業、又は引續いて文學上クロップストック、レッシング

ゲーテ・シルラーといふやうな俊傑を出した。それ等は何らかといへば人間の理想、精神上の理想を發揮しようといふのであつて、之は英、露佛の文學家と大いに其趣を異にして居る。又殊に此國民よりカント、ヘーゲルの如き形而上の哲學者の代表者が出たといふのも、自然の成行でもあらう。殊に物質的の事は斷念したことになるから、心を磨き、心の秘密を探究せんといふ方に、國民の努力は傾き、又それによつて心を慰むる方面に向つた。その故に學者が澤山に出來、何れの學者も實際から遠い夢想的な學理に奔つた。カーライルの書いたものに獨逸流の學者を諷したものがある。例へば其傑作たる『魔糞先生』などがそれである。即ち三階の家根裏に居つて黒パンを噛りつゝ、破衣を纏ひ、器具衣類の狼藉たる中に晏然として坐して宇宙人生の問題を論じて居るトイフエルスドレック即ち魔糞先生は當時の獨逸學者の傾向を多少誇張して書いたものであつたらしい。又國民もさう云ふ傾向を迎へた。それで先程申した通り色々政治上より戰爭に戰爭を重ねて、國民は英雄豪傑の蹂躙に任かせ、人民は塗炭に苦しみ、自然の發達が大いに妨げられた。殊に英雄豪傑の餌となつた人民は、とても自ら進む丈けの勇氣もなく、又同民族の中で兄弟垣に鬩ぐ的の事が多くあつて、お互に信頼することも出來ず、皆猜疑の間に住んで居つた。然し永い年月の間には段々プロシアが固まつて來たが、奈翁の戰さで、折角政治的の事業が完成しかけたところを蹂躙され、墺太利よりは壓迫され、露國からも迫害を受くることになつて到底獨逸人といふものは世の中に、他國民と同等の文明國と認めらるゝことがあるか、なきかに就いて、自分で疑を存して居つた位で、俗に云ふちゞけて居つたのである。ところが奈翁時代の爭亂治り、殊にプロシヤからはスタイン、ハルデンベルヒ等の豪傑が出て國民の奮起せねばならぬことを力說した。奮起するには之までの社會的政治的の制度を改革して銳意進んで行くより外に國としての立場がないといふことを悟つて、孜々として所謂臥薪嘗膽の策を執つたのである。此時からプロシアは段々北獨逸の各國と共に何うしても佛伊の文明を眞似てはいかぬ。自分の固有の文明を基として、萬事を組織的に整理し、又經濟的に（財政のみならず、總ての人力、材料其他の廣い意味の經濟的に）改善し、國を勃興させる目的の爲めには各人民擧つて其方に進むに非れば國民の生存は保證されぬといふ念を喚起した。無論敎育の方針も、皆之によつた。學問の奬勵、藝術の態度、皆之が必要に應じて其方に向つた。それから段々內政も整頓し、即ち一八六六年墺太利との戰爭、次いで一八七〇年の佛蘭西との戰に勝つた、其間豪傑の澤山出て居るは、之を云ふまでもない即ち老帝ウイルヘルム第一世の如き、ビスマルクの如きあつて、此二大戰爭に成功し、歷史あつて以來初めて獨逸人といふものは、文明國人の仲間入の出來た心地がして來た。

即ち國民に自信が初めて生じたのである。從來とても文學に於て、音樂に於て、或は宗敎に於て或は哲學に於て、又或は科學に於ては。獨逸人は世界に大いに貢獻したといふ自信はあつたけれども、然し世界の大國としての權勢威力を感じた事は之が初めであつた、國民の自信力が此

時に勃然として起り來つたのである。それから中世紀以來、此衰れなる境遇を如何にして切拔けて來たか、如何にして盛大に向つたかを段々自覺するやうになり、のみならず此方法を以て官民が進んで行き、總ての事業事物に對し勇氣と信念とが出て來たのである。之が即ち普佛戰爭より得た大なる賜物である。偖それより以來大國と交つて見ると、又世界のこれまでの情勢を伺つて見るのに、どうも獨逸人として他國の人種の後へに附くといふ理屈が分らぬといふので、益々覇氣を増し、又古來からして獨逸人は學問好きで、殊に學理を修めたが爲めに、總てが科學的で一物も苟もせず、總ての物を利用して、此國民生活を助長するの念を段々心理に染み込んで居るところのものであるから、それが軍隊に於ては士氣を鼓舞することになり、又社會萬般のことを組織的の基礎に置いて着實に進んで行くと云ふ事になつた。

一體他國に於ては學問の色々な發明であるとか、或は工業の進歩と云ふやうな事があればそれは先づ第一に自然に打勝つて人生の安逸と快樂とを進める點に重きを置けるも、獨逸はそれに止まらず、即ちそれを以て强國の基にせんといふ點に着目したやうに見える。その氣風は昔から四面敵を受けて壓迫せられた時に發はれた。確固不拔の精神、モルトケの所謂戰爭によつて陶冶せられたる所謂獨逸魂で以て擧國一致强國の目的に努力したのである。

兵法學者より聞くところによれば、古來軍事上に成功するには、何かある一つの軍法といふものを案出しなくてはならぬ。例へば昔、亞歷山大王が希臘を蹂躪し、波斯を切り隨ひたるは所謂密兵隊式を案出してそれで成功したのである。中古以來歐洲は皆亞歷山式であつた。處が獨逸のフリデリッキ大王は更に散兵式を發明し、右翼左翼中央と隊を分つて從來の密集隊式に勝つことが出來た。このフレデリック大王の成功を見て總ての國に於て、此散兵式を大いに眞似を遣つたが、又奈翁が出て密兵で突貫式を遣つて成功したといふ事である。獨逸風の組織的の頭、即ち一物も苟もせず、總ての秩序整然として進むことは、獨逸人の之を得たのは、偶然の譯けでもなく、又一人一個の少數の人が考へて其方に向けたとかいふものでなからうと思ふ。これは即ちモルトケの言つたやうに戰爭即ち四圍の壓迫より致すところの結果であらうと思ふ。我國でも近來獨逸を嘆美するの餘り、大いに獨逸式を學ぶべしとの論もあるやうであるが、私の考では獨逸の今日あるは、今迄述べたやうな歷史的の結果であるから、學んでもなか〳〵同じやうに行くものでもないし。又今迄述べた兵法と同じ事で、他人のやつた兵法では最早や功を奏せず、更に新らしき兵法を發明せなければならぬ道理であるから。我國民は徒らに獨逸を學ぶよりも寧ろ我國民性に基いて世界に雄を稱すべき富國强兵の策を講ずるのが必要の事であらうと思ふ。(二十日談)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

第拾版

籾山仁三郎著

株式賣買

（増補訂正）

四六判全一册
總布装上製
三百八十二頁
定價金壹圓
送料金八錢

本書の特色

● 本書は、理論に偏せず、實際を離れず、巧みに株式賣買の詳細を説明したるものなり。

● 本書は、定期取引、直取引、兩算等に依て、如何に株式を賣買す可きかの實際を説明したり。

● 本書は、株式賣買をなすに就て備へざる可からざる豫備智識を與ふるものなり。

● 本書は、株式放資、鞘取、日步取等株式賣買に依て確實に利益を得る方法を敎ふるものなり。

● 就中兩算のことを記述したる如きは、本書を以て嚆矢とす。

（中付一の一）

東京市丸の内
三菱廿一號館

籾山書店

電話本局二一三二
振替東京二四一七

(中付一の二)

夏目漱石著

橋口五葉裝幀



〔第廿版〕寸珍合本美製全一冊 正價金壹圓卅錢 郵稅八錢

消夏の讀物

行人

〔第三版〕 脊革美製箱入全一冊 正價金壹圓七拾五錢 郵稅金十二錢

漾虛集

〔橋口五葉裝幀〕

〔第八版〕 裝幀美製全一冊 正價金壹圓四拾錢 郵稅金十二錢

東京日本橋 **大倉書店**
振替東京二三八番
電話本局四一四番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文學博士 上田敏先生著

新刊

獨語と對話

近代思潮の混沌として卓立する所無き今日より甚しきは無し先生玆に慨する所あり該博の識見を以て音律を說き詩を說き小說を說き美術を說き舞踏を說き特に卷末には歐州戰亂を背景として此等の凡てを說く而して筆を行るに或は獨語し或は主客の問答に擬し苟も迷岐に立つ者をして劃然として向背する所を知しめずんばやまじ若夫れ字句と思想と行文の斬新にして洗錬なるに至りては時代文の好模範とすべし

中判上製 箱入全一 正價金九拾錢 送料金八錢

好評三版

黑頭巾 横山健堂先生著

大西鄉

▼曉望せられし稀代の快著▲

英傑の典型大西鄉が偉大なる人格と風貌とは健堂氏が雄健の筆によりて紙表に躍如たり

菊判上製 箱入極美 正價金壹圓五拾錢 送料金十二錢

好評四版

松崎天民先生著

戀と名と金と

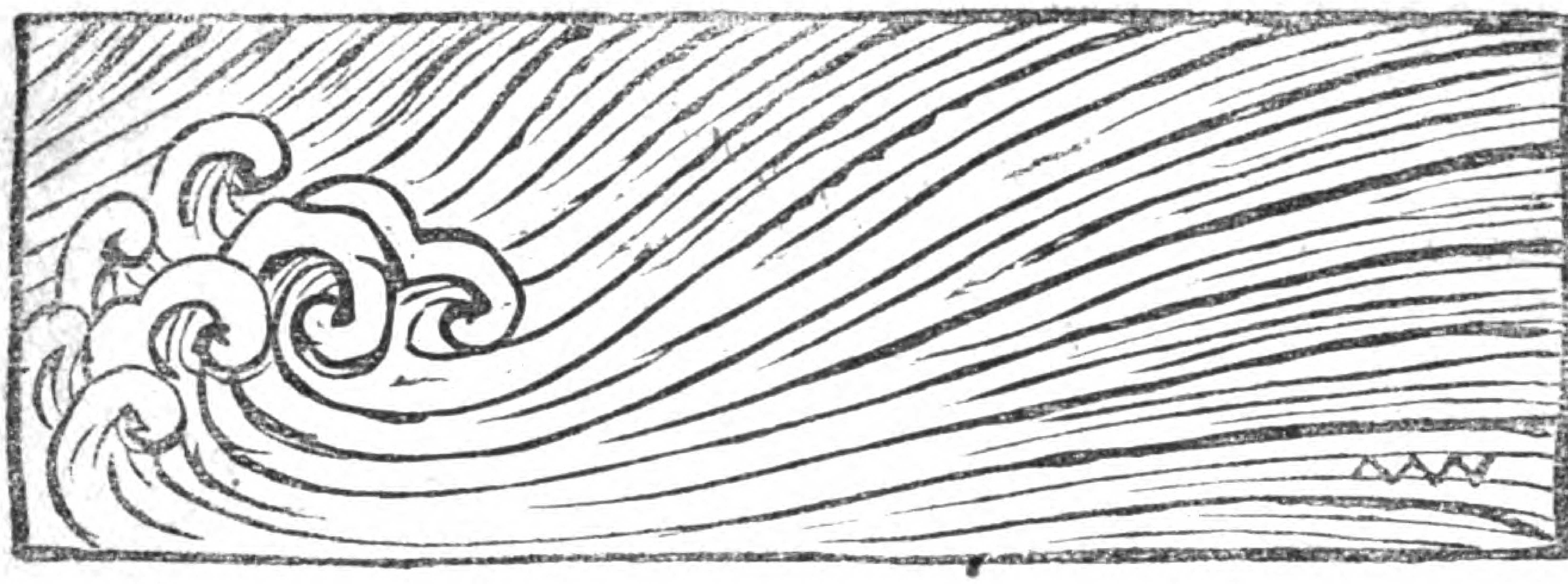
▼天民式觀察と文章の發揮▲

本書は著者が漂泊の人世と流轉の世路を眺めたる最新の記錄にして事實を生活の根柢に置く小說以上の面白き讀物也其輕快なる筆と同情ある觀察は必や讀者の興味を强要するならん「戀と名と金と」に思ひ煩へる男女は先づ來れ

菊判上製 箱入極美 正價金九拾錢 送料金十錢

(中付一の三)

發兌 東京市日本橋區檜物町 振替口座東京二三〇番 ■弘學館書店■



A辯護士の取扱ひたる犯罪ロマンス(四)

松崎天民

人間の犯した罪を、人間が裁判する以上は、そこに多少の誤謬が無いとは、斷言することが出來ない。そして周圍の事情から、犯人と目されて、餘儀なく罪に服し、苦役の一生を終る者も、絕無とは云はれまい。A辯護士が、此の八年間に取扱つた事件の中には、寃罪を雪ぐに由なくて、千秋の恨を抱き、空しく獄舍に死だ者が、たゞ一人あつた。國の法律は當の犯人と判決しても、斷定された者が强ち眞の犯人で無い場合もあると云ふ、その實例の一つに見て宜からう。司法權の行使を職務とする側から云へば、それほど重大な事柄でなくとも、個人の權利を尊重する上から云へば、眞に悲しむべき一大事ではあるまいか。

下手人は誰ぞ

一、旅團長邸の殺人

私が司法官試補に任ぜられて、第〇〇旅團の屯營地なる北越の××地方裁判所詰に補せられたのは、日露戰爭の初つた秋であつた。取るものも取敢ず××市へ赴任して、初めて法曹界の人に爲つた時、明治三十七年の秋風は、袖や袂に冷た

く吹いて居た。

其の頃、××地方裁判所では、一つの不思議な殺人事件が、公判に附せられて、法曹界は無論のこと、××市での大評判になつて居た。事件そのものは、法律上の參考資料とする程に、然く價値あるものでは無かつたが、其の判決の如何と云ふことは、一方ならず私の好奇心を煽動した。私は毎日の樣に、裁判官の背後の「司法官傍聽席」に腰掛けて、審理の樣子や事件の內容を、第三者の立場から觀察して居た。

法廷に現れた事實は、明治三十七年三月下旬、第〇〇旅團長森少將の邸宅に、何者かゞ忍び入つて、同家の小間使お園と云ふ、若くて美しい女を殺害した事件であつた。そして加害者として被告席に立つて居るのは、其の町の車夫で進藤佐吉と云ふ、三十一二の屈强な若者であつた。立會檢事は佐吉を加害者と確認して、其の犯行には一點の疑を容れる餘地がないとて、最も重き死刑に處せられたしと論告した。官選の辯護人は、殆ど義理一遍の辯論を以て、證據が不充分であるから情狀を酌量して處斷されたしと請求した。

私が最も注意したのは、係裁判長の審問の態度であつたが、裁判長も亦、進藤佐吉を加害者と認めて、各方面から追窮し、速に自白すべしと迫つて居た。私は毎日の樣に公判を傍聽して、事件の內容も經過も詳細に知ることが出來ると共に、一つの疑問が力强く萌して來た。巧に法網を免れる橫着者が十人現れるよりも、寃罪に泣く者を一人出す方が、裁判官としての恥辱であると云ふ、平生の主張も頭を擡げ初めた。小間使殺しの眞の犯人は他にあつて、加害者として法廷に立つて居る進藤佐吉は、或は寃罪であるかも知れないと云ふ事が、何とはなしに考へられた。警察官や檢事局は當然、喚問し檢擧せねばならぬ他の「强い者」を逸して、憫むべき「弱い者」を犧牲の血祭に上げて居るのではないか。私は斯うも考へて、この上は賢明な裁判長の正斷に依つて、事件の解決を見るの他はないと信じて居た。

けれども進藤佐吉は、小間使殺しの犯人と目され

て、最後の宣告を受けねばならぬどん底に落ちた。舊刑法の謀殺を以て處斷すれば、正に死刑に相當するが、死一等を減じても無期徒刑で然るべき被告は、「情狀酌量」と云ふ四字の下に、有期徒刑十年に處せられた。私は此の判決を見ても、本件に對する裁判官の心持と云ふものを、疑はずには居られなかつた。果して佐吉が、小間使殺しの犯人であるならば、その罪は最も重い死刑に該當するので、更に情狀を酌量して減刑する必要を認めない。然るに當該裁判官は、謀殺の所爲を確認して居ながら、此の種の犯罪に對しては、最も寬大な減刑を應用して、有期徒刑十年に處したのである。當の被告が不服の申立をするよりも、私は先づ司法官の一人として、此の事件の裏面に流れる一道の暗潮を見のがす譯には行かなかつた。他に有力な加害嫌疑者が無いので、一種の豫斷を以て佐吉を被告席に座らせ、無理攻めに加害者としたのではあるまいか。情狀酌量の手加減が、餘に寬容である一事にのみ就いて考へるも、斯うした疑問は、何人の胸にも起らねばならぬ當然のことであつた。

況して此の事件には、佐吉よりも有力な一人の嫌疑者が、事件の中心點となつて居るにも拘はらず、當局は其の方面へ更に一歩も進めなかつた。そして冷たい法律の手は、佐吉を小間使殺しの犯人として、何の容赦もなく暗い牢獄に投じてしまつた。犧牲になつた佐吉を憫むの私情よりも、私は司法權の威信を保つ上から、今日まで十年の間、未だ曾て此の一事を忘れることが出來ない。旅團長邸內の小間使殺しと云ふ、事件は極めて單純でも、其の底を流れる黑潮の中には、一種の秘密が漾ふて居るのであつた。

從つて此の事件は、法廷の記錄の上に、過去の犯罪となつて居ても、私の心には常に新しく繰返されて、今日でも解き難い謎の一つになつて居る。裁判所は進藤佐吉を加害者と認めて、處罰したけれども、私の心には別に一人の加害者が居て、それが今日此頃は、平氣な顏をして幸福らしく暮して居る樣に見える。

二、殺された小間使

小間使殺しの兇行が演ぜられたのは、明治三十七年三月下旬、暴風雨の暗夜も午前二時半と云ふ、眞夜中の出來事であつた。殺された女はお園と云ふ二十三歳の美人で、殺された場所は旅團長の邸內であつた爲め事件は忽ちそれからそれへと、非常な評判になつた。

表面に現れた事實に據れば、加害者は先づ旅團長邸の背後に在る坂田雜貨店の庭に忍び込み、そこから一丈餘もある高い塀を乘越えて、旅團長の邸に忍び入つたとある。その時お園は、朋輩のお夏と云ふ女中と二人、一つ蒲團の中に寢て居たが、お夏がフと眼を覺ました時、お園は赤い帶をしめながら、起上らうとして居た。「今頃何處へ行くの」とお夏が聲を掛けると、「誰かゞ私の名を呼で居る、又例の惡戯かも知れないから、取押へてひどい目に逢はせてやる」と答へて、お園はしどけない寢卷姿で、臺所の方へ出て行つた。

お夏は其の儘またウト〳〵と睡つて居たが、やがて三十分ほど經たかと思ふ頃、「キヤツ」と一聲、魂消るやうな悲鳴が、臺所の方にあたつて聞えた。驚いて馳せ付けた時には、既に加害者らしい者の姿は無く、お園は半開いた臺所の戶口から、三尺ほど外へ乘り出して、俯向けに斃れて居た。「大變、大變」と云ふ呼聲は、凄じい風雨の夜に一層物凄く聞えて、邸內は上を下への大騷ぎとなつた。「お園さんが殺された、お園が殺された」と立迷ふばかりで、女中や書生は手の着け樣がなく、何れもガタ〳〵慄へるのみであつた。その夜、主人の森少將は、機動演習に出張した不在中で、奧の室には夫人時子が唯一人、淋しさうに座つて居るのみであつた。周章狼狽した家の者が、夫人の居室に馳せ付けて、「お園さんが殺されました」と云つた時、夫人は落着き拂つて、「何て大きな聲です、騷いではいけないよ」と制したさうである。

屆け出に依つて出張した警察官は、先づお園の死體を檢分して、傷は左の乳の下に唯一ヶ所、鋭利な海軍洋刀で突き刺したものと斷定した。そして家人等の申

立に依つて、加害者は裏手の坂田雜貨店より忍び込だものと認定して、犯人の捜索に着手した。果して坂田雜貨店の方より、曲者が忍び込んだ形跡があつたか何うか、警察官は家人の申立を信じて、曲者の忍び込だと云ふ徑路に就ては、更に何の取調もせずに引上げた。お園の慘たらしい死態を見て、お夏は吃驚仰天し、齒の根も合はず夫人の居室に馳せ付けた時、時子夫人は不斷着の上に、チャンと平生の帶を締めて、羽織を重ね着して居たが、少しも驚愕の樣子は無かつたさうである。さすがは陸軍少將の夫人だけあつて、邸内に血腥い慘事が起つても、少しも取亂した風を見せないとて、臨檢の警察官は、敬服したさうである。そして此の犯罪の裏面には、必ず色戀の沙汰が潜んで居るに相違ない、と目星を付けた其筋では、先づ平生からお園に思を寄せて居たらしい若い男の仲間から、捜索の歩を進めて物色し初めた。

旅團長の邸に、お園と云ふ美人の小間使が居ると云ふ事は、××市での大評判になつて居た。若い軍人軍卒の群は勿論、學生と云はず、出入商人と云はず、勞働者と云はず、若い男の仲間には、常にお園が物語の種になつて居た。娶つて妻にしたいと思ふもあれば、何とかして言寄つて、嬉しい戀仲になりたいと思ふもあつて、お園は××市での評判女になつて居た。それに森旅團長の邸宅は、××市の中央から停車場に出る表通りにあつて、家の前には舊城の濠から出る清い溝川の流があつた。お園は何時も其の溝川に出て、紅い腰卷の間から白い脛も現に、男の心を蕩かす樣な姿をして、何時も洗濯物をして居た。停車場へ往復する町の若者は、お園のさうした姿を見る毎に、その優艶さを噂し合つて、人知れず思を焦して居る者もあつた。

百方手を盡して捜索したけれど、お園と色戀の關係を結んで居る男は、何處の何者であるか、警察の探偵力では、遂に發見することが出來なかつた。人知れず懸想して居る男は、大尉にも中尉にも、學生にも商人にもあつたが、それがお園殺しに關係の有る樣な者は鐘や太鼓で捜しても見當らなかつた。兇行があつてか

ち一月經ち二月經ても、更に一人の嫌疑者さへ檢擧する事が出來なかつたので、××市には樣々の評判が傳はつた。中には警察の無能を攻撃して、搜索の方針が間違つて居ることを、是非する者さへ現れた。

兇行があつて後、早くも三ヶ月を經過した。

三、印袢纏の血痕も

兇行後三ヶ月を經て、漸く嫌疑者として檢擧したのが、進藤佐吉と云ふ三十二歳になる人力車夫であつた。佐吉を加害者として引致する迄には、其筋でも非常に苦心したが、何よりも先づ其筋で恐れたのは、犯人が不明のために受ける世間からの攻撃であつた。

佐吉が加害者と目されたのは、極めて薄弱な原因であつたが、他に有力な嫌疑者が無い以上は、佐吉を唯一の加害者として拘引するより他には、執るべき手段がないのであつた。そして佐吉の印袢纏に、腥い血痕が附着して居た事と、殺されたお園と同名のお園と云ふ女房を二年前に離別して、人知れず小間使のお園に懸想して居た事とを結び合せて、其筋では一も二もなく佐吉に目星を付けたのであつた。殊に佐吉が、女中や妾の周旋を業とする通稱雷婆(かみなりばゞ)に賴んで、半年前にお園を女房に貰ひたいと申込だと云ふ事實は、一層不利益な嫌疑を受ける原因となつた樣であつた。

お園殺しの加害者として、佐吉が拘引されたと聞いた時、××市の者は一人として、その意外に驚かぬはなかつた。警察の聽取書も豫審の調書も、悉く佐吉のためには不利益になつて、有罪の決定を與へられ、××地方裁判所の公判に移された時が、恰も私の赴任した當時であつた。そして檢事や裁判長は、一も二もなく佐吉を犯人と目して、處罰しやうとしたが、佐吉は一々事實を否認して居た。お園を女房に貰ひたいとて、雷婆にまで申込だことは事實であるが、お婆さんはお園へ取次がずに、唯「車屋の佐吉は、お前に惚れて居るよ」と戯談に言つただけであつた。そしてお園は、雷婆から此の話を聞いた時、身慄(みぶるひ)して厭な樣子をし、それから彼は、邸宅の前の溝川で洗濯をせぬ樣になつ

た事も、佐吉は能く知つて居た。要するに、佐吉がお園に懸想して居た事は事實であつても、それを殺人の理由とするには、餘に證據が薄弱であつた。

事實の審問が進行するに從ひ、佐吉を加害者と認むべき唯一の證據は、印袢纏に附着して居る血痕の一點にのみ歸著した。裁判長は此の血痕をお園に結び付けて、否應云はせず服罪させる積であつたらしいが、佐吉は更に動ずる色がなかつた。「印袢纏に附いて居る此の血は、人を殺した血ではありません。富樫某の老婆を人力車に乘せて、或る田舍に行きました時、馬車の馬丁と喧嘩した時の血です。人力車の避け方が惡いと云つて、馬丁が喧嘩を吹きかけましたから、私は腹が立つて拳骨で撲つて遣りました。その時相手が鼻血を流しましたが、其の血が流れて附いたのです。人殺しの血か、鼻から出た血か、何うかお調べを願ひます」と、佐吉の申立は筋道が立つて居た。裁判官は直に東京地方裁判所に囑托して、當時上京中の富樫の老婆に就て、佐吉が申立た樣な事實の有無を取調べたが、富樫の老婆の申立も、佐吉の申立に一致した居た。唯一の證據にして居た印袢纏の血痕が、鼻血であると判明した時、裁判所は斷罪の資料を失つてしまつた事になつた。けれども他に有力な嫌疑者を逮捕し得ない以上は、佐吉に懸つた嫌疑の雲は容易に晴れず、更に他の方法を以て、佐吉に自白させ樣と努めた。

お園殺しに用ゐた兇器が、果して何んな刃物であつたかは、兇器を發見し得なかつた爲めに、容易に斷定することは出來なかつた。けれどもお園の傷所から推定すれば、鋭利な海軍洋刀に相違ないと云ふだけの鑑定は附いて居た。そこで裁判官は、佐吉の先妻村越そのを呼出して、「お前の亭主であつた佐吉は、海軍洋刀を持て居たことがあるか」と訊問した。おそのは暫く考へて居たが、「私と夫婦で居た頃には、海軍洋刀を持て居ました」と答辯した。斷罪の資料に窮して居た裁判官は、こゝぞとばかり佐吉に向ひ、海軍洋刀の行く方を詰問したが、佐吉の申立は餘りに呆氣なかつた。「海軍洋刀は持て居ましたが、先妻が内職した金で買

つて、大根や蕪を切るのに使つて居たゞけです。夫婦別れをした時に、先妻が持て歸りましたから、その後どうなつたか知りません」と云ふ佐吉の言葉には、更に虚僞らしい様子がなかつた。

お園に懸想して居た事も、雷婆に世話してくれと申込だ事々、印袢纏の血痕も、海軍洋刀の行く方も、遂に斷罪の資料とはならなかつた。此の上は無罪放免となるのが、當然の結果であると信じて、佐吉は其の日を待設けて居たが、裁判所は容易に佐吉を放免せず、更に他の方法で審問することになつた。

四、有期徒刑で十年

佐吉が殺したに相違ないと認むべき證據は、次から次へと破壞されても、佐吉を加害者としてしまはねば、事件の結末は容易に着かないのであつた。廣い世間に眞の犯人を探ねやうとはせずに、一人の佐吉を捕へて、何とかして白狀させ様とて、裁判所は様々の手段を講じたのであつた。

裁判長は最後の手段として、佐吉に一枚の寫眞を示して、「お前は此の女を知つて居るか」と尋ね、重ねて「惡い事をしたとは思はぬか」と云つて、佐吉の顏を凝視めた。裁判長から示された寫眞は、お園が慘殺された當夜の模様を撮影したもので、若く美しかつた面影は何處へやら、血に染んで斃れて居る姿は、到底、二た目とは見られぬ血腥さゝであつた。裁判長の前に立つて居た佐吉は、何心なく其の寫眞を受取つて、三分間ほど凝視めて居たが、やがて顏色を蒼白にしたかと思ふと、忽ち逆上せんばかりに紅くなつて、聲を放つて慟哭したり、咽嗚したりした。

始終の様子を注視して居た裁判長は、寫眞を見て佐吉が泣いたのは、お園殺しの兇行を悔悟した自白の涙であると斷定して、直に裁判を言渡した。死刑に相當すべき謀殺犯と認めて居ながら、此の種の犯罪には珍らしい寛大な酌量減刑をして、有期徒刑十年に處した仔細を、私は初めて明かに合點することが出來た。第三者の私が傍聽して居ても、眞の犯人は何者であるか、

大抵は見當が付いて居る事件でありながら、裁判所が强て其の方面の取調べを閑却して居るのを見て、私は司法權の危機これより甚だしきはないと憤慨した。何んな者でも宜い、犯人として一人を處罰さへしてしまへば、それで責任を免れ得ると云ふ樣な、聖代にあるまじき所置を見て、私は人知れず憤慨するのみであつた。そして、これと云ふ確な證據も無いのに、お園殺しの犯人に斷定されて、獄舍の憂き目を見ねばならぬ佐吉の身の上を、憫れまずには居られなかつた。

　今更、云ふまでもなく、お園殺しの事件に就いて、何者よりも先に取調べねばならぬのは、森少將の夫人時子であつた。××市の一部では、少將と小間使お園の間に並々ならぬ關係があるとの風說が、根據ある事實の樣に傳へられて居た。殊に兇行の當夜、森少將が不在であつた事や、家人が夫人の居間に馳せ付けた時、夫人は平生の通りに身支度して、蒲團の上に靜座して居た事や。强て落着き拂つて、周章て騷ぐ家人を制して、「餘計な事を饒舌つてはいけないよ」と云つた事などを綜合すれば、思半に過ぎるものがあつたに違ひ無い。けれども日露戰爭の眞最中で、軍人に對する尊敬と感謝の念が、人々の頭に深く泌み込で居た軍國時代の事とて、其筋でも何とはなしに遠慮したのではあるまいか。そして旅團長夫人の喚問と、旅團長邸の家宅搜索と云ふ、重要な二つの事柄を閑却したために、飛でもない男を加害者と認めて、處罰せねばならぬ事に立至つたのではあるまいか。私は事實の審問から裁判言渡までを傍聽して、裁判官の不徹底な態度を憤ると共に、旅團長夫人であるが爲めに、事件の渦中から免れ得た時子夫人の僥倖を呪咀はずには居られなかつた。

　森少將夫人が加害者であると云ふ證據は、容易に捉へ得ないにせよ、進藤佐吉が眞の犯人で無いと云ふ立證は、種々の方面から擧げる事が出來た。裁判官は、佐吉が慘死したお園の寫眞を見て、慟哭し嗚咽した一事を以て、有力な斷罪の資料にしたけれど、これは佐吉を罪しやうとする一面からの觀察で、他の大切な人情自然の流露と云ふことを閑却した見かたではあるま

いか。別れた妻と同じ名のお園、然も若くて美しいお園、人知れず思ひ焦がれて居たお園が、見るも無殘な死に態を見ては、誰しも泣くのが當然ではあるまいか。可愛相な事をした、不憫な事をしたと云ふ同情の念を抱いて、死者のために悲しみ歎くのは、人情の自然であつて、更に兎や角と疑ふ餘地は無い筈である。佐吉を罪した裁判官の唯一資料は、一面のみを見た大膽極る推定で、更に有力な證據と云ふものが無かつた。

進藤佐吉は、寃罪に服する樣なお人好しではなく、直に不服を申立て控訴したが、官選辯護人の通り一遍の辯護があつたのみで、控訴は直ちに棄却された。そして十年の歳月を、雪に寒い北海道の監獄で送らねばならぬと極つた時、佐吉は狂人の樣になつて「無實の罪だ、無實の罪だ、無實の罪で俺を苦しめる」と云つて、怒つたり泣いたりして叫き立た。

五、加害者は邸内に

進藤佐吉が北海道へ護送される途中、捕繩を破つて逃走したのは、それから一ヶ月の時であつた。青森まで落延びて、身の振り方を付け樣として居た時には、既に機敏な其筋の手が廻つて、再び囚はれの身となつて居た。佐吉は囚徒逃走罪に問はれて、又もや法廷に立ねばならぬ身の上に爲つたのであつた。

其の頃、司法官を辭して、辯護士を開業して居た私は、取るものも取敢ず青森へ急行して、佐吉に面會して見た。長い間の獄中生活で、顏面は蒼白に窶れて居たが、その兩眼は燃える樣に輝いて、何事か深く覺悟して居る樣子が見えた。「××地方裁判所で、小間使殺しの公判があつた時、裁判官席の背後で、何時も傍聽して居たのが私だよ」と云ふと、佐吉は涙を流さんばかりに喜んで、辯護をしてくれと依賴した。囚徒逃走罪では、辯護をする餘地が無いけれど、無實の寃罪と云ふ事に就いては、出來得る限り盡力しやうと答へて、私は佐吉から種々の事を聽取つた。

佐吉は男泣に泣きながら、熱い涙を零して、犧牲にされた身の不幸を語り初めた。

「監獄から逃走すれば破獄罪と云ふ、重い罪に問はれる事も、護送の途中から逃走すれば、囚徒逃走罪で罰せられる事も、俺は何も彼も能く承知して居るのです。けれども何う考へても、このまゝ北海道へ送られて、十年の月日を監獄内で送らうと云ふ様な、あきらめた氣持にはなりません。それも裁判長や檢事が云ふ様に、俺がお園を殺した眞の犯人であるなら、何を今更、逃げたり隠れたり、そんな卑怯未練な眞似をするものですか。俺はたゞ、俺が殺したのでは無いと云ふ事を、何處までも言ひ張るために、それで途中から逃げて來たのです。俺の思さへ通れば、十年や二十年を北海道で送つても、そんな事を厭ふ様な男では無い積です。俺が殺したのでは無いと云ふ證明さへ付けば、自首して出る考へでしたが、その前に又縛られてしまひました。

俺はお園に惚れて居ましたけれど、自分の思が通らぬからと云うて、可愛い花ざかりの女を殺す様な、そんな大それた惡事を働く男ではありません。これと云ふ確な證據も無いのに、裁判所では一も二もなく俺を罪人にしましたが、こんな目に逢つた俺こそ好い面の皮で、眞の犯人は今頃、枕を高うして寢て居ることでせう。二月經つても三月經つても、殺した奴が判らぬものですから、警察署は宜い加減の因縁を付けて、否應云はせずに俺を引張つてしまうたのです。いろ／＼取調べて見ると、俺を犯人にするには都合の惡い事があつたけれど、他に目星しい嫌疑者が無いものですから、とう／＼俺を血祭に上げてしまうたのです。俺に有期徒刑十年を申渡した裁判長でも、其の腹の中に立入つて見れば、可愛相だけれど他に犯人がないから、それでお前を罪人にするのだ位には思つて居ることでせう。俺がほんとにお園を殺したか殺さぬか位の事は、いくら馬鹿でも承知して居る筈ですが、何時迄經つても犯人が判らないものだから、其筋でも困つてしまつて、それで俺を恐しい殺人犯にしたのです。

俺が殺したのではありません、殺した奴は確に旅團

長の邸内に居る筈ですが、警察も檢事局も手を付け得ないのです。俺一人が擧げられたのみで、外に嫌疑者が出ないのは、あの邸宅の内に犯人が居ると云ふ確な證據ではありませんか。俺は何も他の下手人を申告したくはないが、自分が殺したのではないと云ふ事だけは、非常上告をしたいと思つて、それで途中から逃走しました。俺は勞働者ですもの、監獄に入つても苦しくはないが、無實の罪で入獄するのは、第一俺の心が許しませんから、何うか宜しくお頼み申します」

佐吉の話は、一々同情に價する事ばかりで、眞の犯人に對する見解も、私の觀察と全部が一致して居た。既に控訴院の審理を經て、服罪の途中に在る佐吉に對しては、何等辯護の餘地が無いけれども、逃走の理由として、小間使殺しの寃罪である由を陳べるのは、有功なことであると考へた。そして多數の囚徒の中には、佐吉と同じ樣な寃罪に服して、一生涯を雪ぐに由ない罪に泣いて居る者がある事を、裁判官の前に披瀝して置くのも、無用の事では無いと考へた。

囚徒逃走罪に、物々しい辯護人が附く樣な例は、餘り度々ある事ではなかつた。

六、犧牲に爲つた男

私は進藤佐吉の辯護人と爲つて、××地方裁判所の公判廷に立つた。名は逃走罪の辯護であるけれども、實は佐吉のために、寃罪である由を主張するのが目的であつた。たゞ其の事を申立さへすれば宜いので、佐吉の殺人罪と云ふ事は、法廷の上では何處までも、既決既濟の案件として取扱はれて居た。

判事として在官中の事柄は、默秘すべき事項に限つて、これを法廷で陳述することを許されて居ないが、出來得る限りは寃罪と認むべき點を列擧して、佐吉が逃走の原因を詳述した。佐吉が護送の途中から逃走したのは、寃罪を雪ぐに就ての材料を集めるためで、決して他意が有つてのことではないと論述した。そして被告をして敢て逃走罪を犯さしめたのは、その責果し

て何れにありやと論じて、同じ逃走罪でも、佐吉の場合には最も輕きに處斷されたしと請求した。

冤罪である、無實の罪であると絶叫しても、それは全く後の祭で、徒らに空砲を放つ樣なものであつた。佐吉は逃走罪として、更に二ヶ月の刑を加へられて、間もなく北海道へ送られ、十勝の監獄で服役する事になつた。辯護人としては僅に逃走罪の辯護をしたに過ぎないけれど、私は一種の犧牲に爲つて入獄した進藤佐吉が、何だか可愛相でならなかつた。佐吉自身が云はなくても、少しく心ある者は、小間使殺しの犯人が佐吉で無い事を能く承知して居た。兇行當夜の模樣や、お園の傷所を見聞した者の中には、一言の下に、加害者は女であると主張した者さへあつた。兇行當夜の森少將夫人の有樣を見た者は、お園を殺したのは夫人であるとまで私語いて居た。殺されたお園と森少將との間に、色情の關係がある事を信じて疑はない人々は、少將夫人が嫉妬のために、暗夜に乘じてお園を殺したとまで噂し合つて居た。

私はお園の傷所が、左の乳の下にあつたと云ふ事實に根據を置いて、下手人は必ず女であるとの見當を立て居た。殺人傷害の事例に徴して考へるに、男の犯人は多くの場合に兇器を右手に持て、相手に向つて肉迫するが、右手の兇器は一直線に相手の左部には向はず、必ず斜に相手の右側を突くのが例になつて居る。そして女の犯人は、兇器を持つ場合は大抵左手で、これも眞直に相手の右を突かずに、左を刺すのが約束の樣になつて居る。此の一事だけでも、夫人を疑ふ理由は充分である上に、その他にも夫人を嫌疑者とする丈の事由は澤山あつた。殊に若い美しいお園と、五十を越した旅團長との仲を知つて居る者は、嫉妬の餘に夫人が殺害したものだと信じ切つて居た。尠くとも警察署や檢事局が、一度も旅團長の邸宅を搜索せず、一回も夫人を喚問しなかつた事は、更に疑惑の念を深ふするのみであつた。其筋の人々は、お園殺し事件の解決の鍵は、旅團長の邸に在りと認めて居ながら、日露戰爭時代と云ふ事と、旅團長夫人であると云ふ事のために、

わざと遠慮して、捜索の歩を進めなかつた樣な、一種の傾向さへ見えたのであつた。

殺されたお園は、××市でも屈指の美人で、色白の丸顔に、男の心を蕩かす樣な笑を湛えて居た。種々と云ひ寄る男があつても、柳に風と受け流して、他に意中の人でもあるかの樣に澄まして居たのが、樣々の噂を生む原因になつて居た。主人の森少將と深い關係があると云ふもあれば、邸宅に出入の軍曹と、二世を契つて居ると云ふもあつて、常に種々の風說を立てられて居た。けれども邸宅外の若い男と、怪しい關係があつたと云ふ事は、これを打消すだけの理由があつたけれども、森少將との關係を打消すだけの言分には、お園も困つて居る樣子が見えて居た。「お園は若いのに、身持が正しい」と云ふ者があつても、「森さんの妾同樣になつて居れば、他に男は入るまい」と打消されて、出るにも入るにも、噂の種になつて居た。その評判女のお園が、暴風雨の暗夜に何者にか殺害されたと言ふのだもの、これが××市の大問題になつたも無理ではなかつた。

森旅團長は、お園が殺されてから間もなく、機動演習から歸邸したが、默然として更に一語も發せず、折々深い吐息を漏すのみであつた。そして市の人々が、「お留守中に大變な事が出來まして……」と云ふと、將軍は愁然として、「可愛想な事をしました」と、唯一語答へるのみであつた。

進藤佐吉の服役と同時に、お園殺しの噂も、漸く下火になり初めた樣であつた。

七、過ぎ行く月日に

それから今日まで七年の間に、人々の運命は樣々に暗遷し默移したけれど、小間使殺しの犯人のみは、依然として疑問の儘に打過ぎて居る。思ふに殺されたお園の靈も、更に慰められる事なくして、宙宇に迷ひながら、旅團長の邸宅を睨んで居る事であらう。

森少將はお園が殺された翌年、自ら請ふて日露の役に出征したが、退官後は東京に邸宅を構へて、風月を

友として暮して居る内、病氣に罹つて逝去した。留守旅團長として居さへすれば宜いのに、自ら進んで出征したのは、人知れぬ胸中の悶を戰亂の巷に遣る積であつたらうと、今でも××市の人は取沙汰して居る。お闇殺しの眞相は、何人よりも森少將が知つて居る筈であつたが、少將の死と共に、其の秘密も永久に葬られたと云つて、殘念がつた者さへあつた。

それよりも一層哀れを止めたのは、北海道の十勝監獄で苦役して居た進藤佐吉が、四十三年の秋十月、十勝監獄の病檻で、恨を呑で死だ事であつた。「仕樣が無いから、兎に角、服役はしますが、十年の後に出獄しましたら、屹度眞の犯人を出して見せます」と云つた顏が、今も尙明かに見える樣である。色の淺黑い中肉中脊の男で、如何にも勞働者らしい頑丈な男であつたが、徒刑囚の苦役には、血の汗を流した事であらう。殊に無實の罪で罸せられて、その寃を雪ぐことも出來ず、淋しい病檻で呼吸を引取る時には、今更の樣に人を怨み世を恨みながら、苦しみ悶えて死んだことであらう。

先生樣には、一方ならず種々とお世話樣に相成候へども、これぞと申して御禮いたすこと叶はず、不惡幾重にも御許被下度候、滿期出獄は七年の後と相成候へども、それまで無事壯健にて苦役いたし候や、又は牢死いたし候やら、一寸先は闇よりも黑くて判らぬ北海道の牢屋より、改めて御禮申上候、たゞ懸想いたし候のみが緣となりて、恐しきお闇殺しの惡名を着せられ、身に覺えなき罪科にて、牢屋に投げ込まれ、苦役せねばならぬとは、何と云ふ不幸の身の上なるかと、折々は齒を食しばりて殘念がり候へども、最早あきらめるより他に道は無之、同囚の者や監獄のお役人樣よりも、種々と慰められて、漸く其日〱を送り居り候、時下向暑の折柄くれ〲も御身御大切に遊ばされたく、御面會相叶ふ時節には、何分とも宜しく奉願上候、匆々頓首。

四十一年の夏、佐吉から寄越した此の手紙が、今では唯一の思ひ出の種になつて居る。若し佐吉が眞にお

園殺しの犯人であつたならば、十勝監獄の苦役も、身から出た錆として諦めて居たであらうが、何處までも寃罪であつたが爲めに、佐吉の監獄生活は他の囚徒よりも人一倍苦しかつた事であらう。佐吉さへ無事で居れば、去年の春か今年の春は出獄して居て、眞の犯人を申立てないまでも、何とか慰めて遣るべき方法もあつたであつたであらうに、死では何事も水の泡になつた。今頃はお園の靈と逢つて、互の數奇な運命を語り合つては、泣いたり笑つたりして居る事であらう。

佐吉に有罪の論告をした檢事も、有期徒刑十年を言渡した裁判長も、既に現世の人ではないが、たゞ當時の陪席判事が一人、東北に居ると言ふ噂である。私は何時か機會があつたら、其の陪席判事に逢つて、「君達は彼のとき、心から佐吉を犯人と信じて居たのか」と尋ねて見やうと思つて居る。そして佐吉を正犯と信じて居たと云ふか、或は又「あんな事にでもしてしまはなければ、他に仕方が無かつたものだから……」と答へるか。私は其の虚傳の無い言葉を聞いて、それを佐吉への手向にしやうと思つて居る。殺されたお園も浮かばれまいが、牢死した佐吉も、此の儘では到底浮かむ瀬が無からうと思ふ。佐吉のためには、百萬遍の讀經を聞かされるよりも、佐吉を罪したその判事の眞の心持を聞かされる方が、何んなに好い回向になるか知れないであらう。

過ぎ行く月日に、多くの人達は死でしまつて、取殘された者の中に、森少將の未亡人時子が居るのは、何と云ふ運命の惡戯であらう。今はもう五十路を越えて額に寄せる皺も深く、有りし昔の色香は無いが、何處やらに少將未亡人の品位を備へて、極めて幸福な月日を送つて居るとか。未亡人のためには、忘れたい十年の昔であつても、私は死だ人々のために、未亡人を其の住居に訪ねて、十年前の心持を、思ひ出話に聽いて見たい。——

八、哀れむべき人々

お園殺しの疑問を解決するのは、少將未亡人を訪ね

て、心からの懺悔を聽くより他に途はない。青山に近い村に住で居るとのみで、詳しい事は判らないけれど、有髪の尼となつて、信仰の生涯を送つて居るか何うか。是非とも訪ねて行つて、お園殺しの裏面に潜む秘密の一端なりとも、捉へたいものである。

　私は訪ねて行く前に、左の手紙を送らうと思つて、去年の春に認めて置いたが、何だか氣の毒な樣な心持がして、未だに送らずに藏つて居た。此の手紙を送つてから訪ねやうか、それとも突然に訪問しやうかと、今でもいろ〳〵と思ひ惑うて居る。齢老いた未亡人の平和な餘生を、悲しい痛しい思ひ出で苦しめるのは、何だか罪深い事の樣にも考へて、私は今日まで遠慮して居た。けれども何時か一度は訪ねて行つて、心からの告白を聞かなくては、死だ佐吉へ對して、申譯の無い樣な、一種の胸苦しさに堪えられないのである。

　拜啓、未だお目にかゝつた事は有りませんが、仔細あつてお姓名は十年前から承知して居ます。私は今から十年前に、お園殺しの事件があつた當時、××地方裁判所に勤めて居たものですが、目下は××區××町で辯護士を開業して居る者です。御承知の通りお園殺しの犯人は、進藤佐吉と云ふ事になつて、十年の處刑を宣告され、それで何も彼も一段落を告げましたが、問題はそれで終局したと云ふのでは有りません。私が今日突然、この手紙を差上げますのも實は其の事柄に就いてゞあります。

實は親しく御伺いたした上で、詳しい事を承りたいのですが、私が今でも不思議に思つて居ますのは、お園殺しの犯人は、進藤佐吉で無くて、他に有りはしないかと云ふ事です。それには樣々と相當の理由もある事で、先づ第一に可愛想なのは、殺されたお園ですが、それよりも一層哀れなのは、牢死した進藤佐吉の一生かと思ひます。佐吉が眞實お園を殺害したのならば、入獄するのも牢死するのも、當然の結果ですが、私は佐吉が犯人ではないと思つて居るのです。そしてお園を殺した犯人は、男でなくて女であつて、その女の何人なるかは、廣い世界の中に、貴

女様より他には知る者が無いと思つて居るのです。私はそれを貴女の口から承つて、死だ人々の供養にしたいと思ひますので、その他に何の仔細も、何の理由も有るのではありません。お園を殺した眞の犯人は、此の十年の間一日として愉快な日を送つた事はなく、人知れず苦み悶えて居るに違ひないと思つて居ます。私は其の婦人に向つて、今更自首して出よとは申しませんが、無實の罪で牢死した佐吉のためには、是非とも追善の供養をなされとお勸めいたす積です。そして心からの懺悔を承つたならば、お互に何んなに清々として心持が好い事でせう。凡ての事は神樣が知ろし召して居る以上、私等は神樣の前に、何んな秘密でも押し隱して居てはならないと思ひます。

何れ御伺いたした上で、いろ〳〵と詳しい事を承りたいと思ひますが、突然參上するのも失禮かと存じて、取敢ず御都合を伺ひます。十年前の秘密の犯罪でも、お互に當事者でない以上は、別に心配する必要もありますまい。何分の御返事を拜見いたした上で、日を期してお訪ねいたしませう。

此の手張を見た時に、未亡人は何んな顏をして、何んなに驚いて、何んな返事を送るであらうかと、私はいろ〳〵想像して見た。「仰せの趣は何の事やら合點參らず候」と來るか、或は「何時にても御來車を待上候」と來るか、何れにしても強い反響があるに相違あるまい。そして親しく逢つて、徐ろに話をして居る間には、眼色や顏色に依つて、大抵の心は讀むことが出來やう。果して未亡人が下手人であるか、何うか、私はそこまで押して行かなくては、此の事件に隱れた謎を、完全に解いたとは云はれまいと思ふ。

それにしても、森少將の未亡人は、何んな顏をして、何んな心持で、この十年間を過したことであらう。裁判所の眼さへ免れ得たら、もう安心だと思つて、平氣に笑つて暮して居たか。又は良心の苛責に堪え兼ねて、日夜を苦しい現心で過して居たか。私は何よりも先に、十年間の心持を聞いて見たい。

要するに、殺されたお園も、牢死した佐吉も、老いた未亡人も、皆、哀れな人達である。

—七、一八晩—

次號には、「犯罪ロマンス」の「五」掉尾として

遺傳的犯罪の哀話

を掲ぐべし。一人の若くして美しき女性が、歡樂と罪惡の間に、流轉し行く徑路を描いて、大に讀者かの同情を惹ん。

お國氣質（二）

早川鐵治

日本全土
六十餘州

今日は山陰山陽四國を御話しやうと思ふが、其前に一體是は緒論に申すべき問題だが少し御話して置かなければならぬことがある、これは即ち日本人と云ふものは學術上から行くと、種々なる人種の混合で、所謂混血兒人種である、それから封建時代になつて來て各藩共に鎖國をやつたから、これで其地方に依て大變性質が變つて來た、それから所謂大きな國主大名と小さい譜代大名との間に自から性格が違つて來たと云ふことである、そこで此大名以外に所謂幕府の直轄の天領と云ふものがある、これに次いで旗本の領地がある、是が旗本八萬騎と云ふて全國に分布せられて居る、それから寺領、社領と云ふものがある、是が又自から性質が違つて來た、それから京畿の邊に行くと公卿の領地がある。

さう云ふ譯で日本六十餘州の中に二百餘大名の外に社領、寺領、それに小なりと雖も公卿衆の百三十何人

と云ふものがあると云ふ有様である、從つて其三百年の間領して居つた所の領主の性質如何に依て人民の性質も非常に變つて居る、先づ前にも言ふた通り大々名の領地に於て自から一定した國是と云ふか、國風と云ふか、自から性格の定まつた者がある、旗本若くは小大名に至ると其點がない、何等劃然たるお國風と云ふものを拵へる程の力がない、それから天領などになると隣藩に對して兎角將軍直轄と云ふことで、我儘な氣が出て來て、天領の人民と云ふものは非常に威張つたものである、それから又小旗本などの下に居る者は非常に民權が發達して居る、何故發達して居るかと云ふと、兎に角根が僅か二千石か三千石の旗本であるから、少し民間に氣慨な人間があれば直ぐにお旗本の公用人位のものを取詰めることが出來る、これ故に天領若くは旗本の支配下の人民は大藩の人民よりも不羈の氣慨がなくて、所謂今で言へば民權擴張せられて居つて、ちよつと自主の觀念が強い。

それから又德川家が天下を治めた時非常に注意したのは、足利の末に大々名が出來て、なか／＼中央政府で容易に統御が出來ない、それで關ヶ原の戰爭に依て先づ以て大々名に大打擊を與へた、毛利家の如き山陰山陽十二州を持つて居るのを長防二州に追拂つて仕舞つた、又會津百二十萬石、上杉氏を米澤三十萬石にして仕舞つたと云ふやうな譯で、百萬石以上の大名は、加賀の百二萬石、是等が大々名で、後は皆百萬石以下大きい所が五十萬石六十萬石位の所である、どうも二三人しかないやうにして仕舞つた、これのみならば例へば長州だとか或は薩摩だとか云ふやうな、もと／＼德川家に緣の薄い外藩に對しては其近邊に持つて來て必ず德川家の譜代大名、若くは國主大名でも德川家に特別の關係のあつた者を抑えにして居つた、どうしても手の出せぬやうにして居つて益々鎖國の氣風が已むを得ず出來て來た。

依て國主大名でも殊に德川に緣の薄い方の大名の所と云ふものは劃然として他の藩と違つた所の性格が出來て居つた、從つてお國氣風と云ふものも違つて居つ

たのである。

そこで先づ長州と周防と云ふ、所謂防長二州と云ふものは、是は毛利並に毛利家の一族郎黨の持つて居つた所であつて、本藩の毛利が三十七萬石足らずで、其他吉川監物が毛利家としては幾分か毛利藩の一族でありながら外様であつた位のもので、後とは毛利家の一族に依て占めて居つたのである、故に毛利家と云ふものは前にも御話した通り毛利右馬頭吉田三百貫から出て、さうして兎に角大内氏の爲に陶氏の葬ひ合戰をして、尼子氏を亡ぼし、さうして遂には山陰山陽に於ける十二州の領主にもなつたのである、是は大内氏の爲に仇を報いた忠義と云ふことが土臺になつて居る、元來大内氏は、帝室に縁故があつたから、大内を繼承した結果、帝室に對して始終勤王の志が厚かつたのである、それであるから應仁の亂以來京都政府が非常に貧乏して居つた時に、正親町天皇が位に即かれた時杯は即位式も出來なかつた、長く御位に即いて居られたが即位式が出來なかつたが、これが御即位後三年後に元就が御即位の費用を獻納した、そこで從四位下大膳大夫と云ふ位を貰つて、さうして菊桐の御紋章を貰つた、なかなか由緒があるのだ、家は代々大膳大夫と云ふものを襲ふて居て、さうして功を萬世に傳へよと、陛下から厚き勅語を賜はつたのである、是は永祿元年に位に即かれて、永祿三年でなければ即位式を擧げることが出來なかつたのである。

さう云ふ譯で毛利家の起りは主の爲に仇を報ゆる、次いで其主の大内と云ふ者が、義興以來、帝室に特別の勳勞があつたので、それでこれを繼承して毛利家と云ふものは勤王を唱へたのである、それであるから毛利は殊に關ヶ原の戰爭の時分には、毛利輝元は大阪で留守大將であつたが、併ながら徳川家をして關ヶ原に勝を奏せしめたと云ふのは、毛利家若くは毛利家の一族であつた、是が豐臣に味方をしたならば容易に勝敗は決しないのである、輝元は大阪方の留守大將をして居つた、其點から行くと罪は深いが、事實關ヶ原の戰爭は毛利家の一族に依て勝利を得たのである、毛利家

の一族たる所の小早川金吾秀秋が裏切をして後ろの山から下りて大谷刑部少輔を打破つた、これが爲に勝敗が決したのである、次で吉川廣家と云ふ人は本家の秀元に對して中立の態度を取らせ小早川、吉川兩家が德川家に對して心を寄せた、さうして秀元をして積極的態度をとらせなんだから、其爲に關ヶ原の戰爭は遺憾ながら西軍の敗けとなつたのである、然るを山陰山陽十二州の領地を削減して長防二州に追はれると云ふことは實に關ヶ原のやり方に付て見ても毛利家に對しては殘酷なやり方であると云ふのは毛利輝元と云ふ人が名君でなく、唯凡將であつた爲めである、若しあれが一藩擧つて島津家と同じやうな態度をとつて居つたならば決して長防二州は之を削減されるやうなことはなかつたらうと思ふ。

それで大々名が長防二州になつたから、從つて非常に困つた、一藩大に困窮した、併ながら妙なもので君臣の情誼と云ふものは餘程元就以來主を愛するの氣質を養ふたと見えて、毛利家を捨てゝ他郷に行かうと云ふ者は無かつた、故に十萬石取つて居つた者は一萬石になり、一萬石取つた者は千石になり、千石の者は百石になり、さうして尙ほ毛利家の家來として居りたいと云ふ風であつた、これだから三十七萬石ばかりでありながら、なかなか武士の數は多い、これですから大きな祿を持つて居る家老はないと云ふのは今のやうな譯である、大體主人自からが殆ど七割から減らされたのであるから、從つて非常に餘り大きな祿の武士と云ふものは居らぬ、此大削減と云ふものが能く長州人を以て一種の氣風を養成させた、普通では食ふに困る故に非常に經濟をしなければならぬことになつた、そこで三杯の飯を食ふ者は二杯で我慢すると、斯う云ふ譯で是が吾輩の說であるが、吾輩の說で行くと、是れ故に長州人には肉付の宜い者が居らぬ。

畢竟長州人が吝嗇だと云ふことは何で吝嗇かと云ふと前のやうな譯で、決して是は貶す譯ではない、主人が三十七萬石に減らされても尙且主を捨てゝ他郷へ行きたくないと云ふて祿を減らされ、祿を減らされたか

ら已むを得ず儉約しなければならぬ、そこで今の獨逸と同じやうな譯で、長州の一般と云ふものは非常に儉約してさうして上下相擧つて武を磨いた。

今御話した通り肉付の惡いと云ふ例には先づ差向き山縣元帥などはどうです、明治維新から殆ど四十年間立派な地位に居られるけれども、矢張り肉が付かない、井上侯爵の如きも巨萬の富を持つて居るが矢張り肉が付かない、私共の知つて居る所では漸く有地品之丞に、梨羽時起、是は併し兄弟ですが、晩年には恐しく瘠せられたけれども乃木さんなどはもう少し肉付が宜かつた、あれは何でも長州枝藩の完府詰で、一體江戸詰と云ふものは何處の國でも、長州なり薩州なりに居るものは氣品を存して居つたけれども、兎に角江戸の感化を受けて居るから、乃木さんは豪らかつたさうであるけれども、江戸詰の武士と云ふものは國士（くにざむらひ）は輕蔑したものである、其代り江戸の奴は難義をして居らない、私はまだ親しく元老諸君から小さい時分の御暮しのことを聽かぬが、併ながら吾々の幼年の時分、貧乏武士が如何に暮しをして居つたか、長州では隨分祿を大抵減らされたから非常に難義をしたらうと思ふ、中以下の人と云ふものは女中などを置くではなし、今の新らしき女などに長州あたりの士族さんの奥さんの家政向を見せてやりたい、これは質素の暮しをし、夫が京都へ詰める、江戸へ參覲交代をして行く、參覲交代する其時分には若干か小遣金も付けてやる、祿は小祿であつて十分な小遣は出來ない、そこでどうかと云ふと、蠟燭の心を卷くとか、或は絲を紬ぐとか、機を織るとかして、さうして夫々小遣金を付て世間へ出て恥のないやうにしてやる、家では兎に角士族であるから子供の教育をしなければならぬなか／＼勞の多いものである、これから晝は家政のことをし、夜は夜業をして夜間十二時までも、今は「タングステン」とか「カーボン」とかゝあるが、其時分は燈心を入れた「カンテラ」で以てやる、これで育つて來た人である、これであるから今の新しき女などは想像の屆くものでない、そう云ふ家庭に生れたものである、今のやうな譯で

毛利家の藩風と云ふものは一藩の氣風が已むを得ず上下擧つて非常に質素儉約になり、已れもう一度天下を取つて見やう、此觀念は德川家の爲に出來たのである、是が毛利家一般の上下擧つての氣風である、これが所謂薩長土肥と云ふて王政維新時分に最も此明治の維新を作るに付ては此二州の州民が與つて事を致したのである、それだから此幕末の場合に於て毛利家は初めから勤王論である、さうして君側の奸を除かんが爲めに長州兵は家老の福原越後、國司信濃、益田右衞門助杯を大將としてとうとう禁闕を犯した、此三家老是が爲めに後に朝敵の名を受けて割腹したけれども、會津薩摩も其時分には毛利家では君側の奸と思つて居つた、岩倉さんも後には豪い人になつたが所謂公卿衆の惡い奴と思はれてゐたことがある、其結果として長州は誤つて朝敵の汚名を受けて、さうして德川家と開戰することになつた、長防二州を以て德川家の全國の兵を引受けて一歩も國境内に入れない、是は丁度今の獨逸と同じで、今の獨逸が四方に敵を引受けて自分の國へは一歩も敵に足を入れさせない、大隈さんは日印協會で獨逸は必ず敗けると云ふ樂觀的のことを申して居るが、歐羅巴の事情に通じた早川鐵冶などは甚だ憂慮に堪えない、決してさうとは思はれない、近來種々の狀況を見ると獨逸は弱つて居らぬやうである、遂には幕末時分の長防二州が天下の兵を引受けて尙ほ國境内に一歩も入れさせないやうな形勢になりはせんか、さうすると王政維新前の日本の國情と歐洲の戰爭は同じことである、薩長と云ふと可笑しいが、今戰局に入つて居る露亞西が恰も薩摩か會津、そこで長防の兵隊が京都へ上洛して禁闕を犯した時に、薩摩と會津が最も之が防戰に力を盡して居つたが、後には薩摩が遂に長州と組んで王政維新をしたやうな譯で、薩摩たり得る所の露西亞が今英吉利と組んだ、さうして英吉利は會津ではなからう、會津は佛蘭西かも知れない、最後に偉目に遭ふのは佛蘭西であるから先づ會津は佛蘭西であらうと思ふ、全國の兵を進めて會津城が落城したやうに、歐羅巴が丁度さう云ふやうな形勢である、御維新

前の長州と云ふものはなか〱偉い、今から考へれば無謀であるけれども、兎に角英米和佛などが聯合艦隊十八隻を卒ゐて下の關へ入り込んで來て、さうして大島などを焼討をした、其時の山縣元帥などは傳馬船に乘つて矢聲を掛けて後から追駈けたと云ふ話がある、兎に角これだけの勇氣があつた。

　さればこそ長州人の氣風は質素にして勤勉、今日の第二世の長州人は非常に違つて居るけれども、併ながら一代ではさう變らないで質素勤勉、殊に貧乏であるから海外へ行つて發展すると云ふ氣風がある、それであるから朝鮮あたりから滿洲地方に於てなか〱發展して居る、それから布哇邊にも長州人は行つて居る、是は薩摩人と違つてなか〱計數にも明かである、惡く言へば長州人はこすい人種である、こすくなければ立ちやうがない、所謂こすくして仕舞つたのである、長州人のこすいのは詰り貧乏の結果からこすくなつたのである、併しながら今日實業界では久原や藤田傳三郎がどつちかと云へば大きな實業家になつて居る、藤田は恐ろしく大きくなつたが、久原は弟の藤田程には行かないが伜の時代には却て藤田よりも大きくなりつゝある、一體どの奴でも長州人は商賣氣はあるけれども、所謂漢の高祖が起つて豊沛より人才が多く輩出したやうな譯で、長州人が天下を取つたから、殊に武力を以て取つたから長州人たる者は大多數は軍人になり僅かに少部分が民間に居ると云ふ有様である、長州の陸軍と言はれるやうになつたのは、畢竟天下の兵を長防で引受けた結果軍人出身を希望して、今日に至るまで陸軍に於ては最大勢力を有つて居るのである、又維新後今日の大日本を形作る上に於て長州人は非常に功勞が多いのである、大村山縣は何れも分つて居るが、次では兒玉とか桂とか、或は乃木等の二代三代の後輩に至るまで日露日清の戰爭に付ては功勞がある、現に今日と雖も陸軍大臣岡などは長州人である。

　さう云ふ譯で詰り軍人なり若くは官吏を希望する奴が多くなつたから、これで實業界には餘り顔を出して居る奴はないが、併ながら朝鮮なり滿洲なり、若くは

布哇あたりへ行つて成功して居るのを見れば、是は必ず實業界に於て成功の出來る奴である、計數に明かで人間もずるい奴である、又薩摩人は殆ど巡査になられる者位まで悉く上京して政府に仕へた、これであるから一時薩摩に殘つて居た奴は身動きさへ出來ない者が殘つて居たことがある、これと同じやうな譯で長州では商人になる奴は他の方に向けられない奴ばかりである、これでもどうか斯うか成功して居る、藤田傳三郎と云ふ人は是は實に立派な人である、今の久原も立派なさうだが私は知らぬが人格に於て偉い者である、其他は長州の實業界に從事して居る奴は餘り人間がこそ過ぎてこせ〳〵して餘裕が少しもない、併ながらこすいから兎に角成功した、人の惡い方は擧けたくはないが、臺灣あたりで行つてやつて居る者もあるが、其人間も隨分こすい方である、なか〳〵こすくて長州の氣風を示して居ることは一見して分る、これが長防二州である。

それから廣島と云ふ所は、淺野の領内で、淺野が廣島から安藝備後の一部を持つて居つた四十二萬石の大名である、是が元和五年頃から此處へ來て殆ど二百何十年と云ふものを領して居つたのである、一體淺野家は豐臣取立の大名であるけれども、關ヶ原の戰爭以來頻りと家康方となつて、殊に三代長成は、德川家の娘を迎へて妻となしそれに娘が二人あつて越前宰相忠直、尾張大納言義直に嫁したから準德川家の一門になつた、そこで長州を抑へる總大將として置いてある、是が小さい所から大きくなつた縁であつて、長州は小さい武士が多くあつたのだが、之れに反して淺野の上田主水とか、淺野近江などは大祿を貰つて居る、所謂成金だから其一藩の氣風が從つて惰弱である、今の淺野長勳と云ふ人は華族の中では俊傑であるけれども、あれは大名に生れたものでないので。

であるから一體淺野家は惰弱であつて御維新時分にもあれだけの大藩で、船越親子、辻將曹の二人位のもので餘り偉い勤王家も出來ず、一般の氣風がだれて居る、それから安藝乞食と言つてどうも此人間は妙な人

種で他に奉公に出たり出稼する人種である、これだから御維新後に至つては他へ出て、布哇邊にも朝鮮あたりにも大分行つて居る、所謂昔からの移住的、移動的人種である、士族と云ふものは餘裕があつて幾分か惰弱な性質を有つて居る。

それから備後の福山と云ふのは阿部で十一萬石、是亦譜代大名である、譜代大名の特長として偉い人物は出ない、但し三備、所謂備前備中備後と云ふ所は交通の便が好し、從つて彼の近海を始終船で交通して商賣交易をして居る、其結果として交通の便なる國の者は必ず人間も氣が利いて居つて、從つて辯口が宜い、例へば備後に於ける井上角五郎はどうか、或は花井卓藏だとか、それは備後ばかりではない備前備中にも多いので、備中では犬養毅、守屋此助だとかあるが、然しながら一般此邊の奴は小才が利く、之を要するに交通の便が宜くて他郷の人と交はると云ふ結果が爲して居ると思ふ。

それから備前備中、備前の方は國主大名があつて備中の方には國主大名がない、備中は詰り備後を總大將にして備前に當らうと云ふ、所謂備前が萬一謀反でもしたならば防がうと云ふやうなことで置いたので幕府の譜代大名が多い、それから天領と云ふのが澤山あつた、それから旗本領があつた、そこで備前と云ふものは單純なる性格を備へて居るが、備中に至ると天領なり旗本領なり譜代大名に依て皆出來て居る、例へば天領の奴はなか〳〵云ふ事を肯かない、馬越恭平だとか犬養など、なか〳〵つむじ曲りが居る、又其僻遠の地になつて、所謂備中高梁と云ふ所になると交通に不便であり人間も純朴であつて小さな國でありながら柔順な人間である、質朴である、柔順でない人間でも、例へば櫻井熊太郎と云ふ如き誠に正直な卑劣でない人間が出て來る、一般に備中備後安藝と云ふ所は文學の發達した所で、御維新前には安藝には賴山陽あり備後には菅茶山あり、備中には山田方谷、御維新後には備中からは三島中洲、川田甕江、阪谷朗盧、がある。

それから備前と云ふ所は、三十一萬石の池田家の居

つた所で、是が不思議なもので、今の因幡伯耆と云ふ兩國をもつて居る池田家と、備前一ヶ國を持つて居る池田家と元とは兄弟で、さうして因幡伯耆と云ふものは三男の家であつて、備前は長男の家である、併ながら三男の家は徳川家から來られた娘さんの末子です、其三男の池田の方は祿も三十二萬石、備前の方は三十一萬石と云ふやうな譯で、さうして因州池田の方が準徳川家の一門とせられて葵の紋を付け、金紋挾箱の家であつて、備前とは幾らか格が良かつた、さうして家來も備前の方には幕府の政略上として祿の餘り高い役に立たない士族を向け、因州の方には祿の少ない氣の利いた者を澤山付けたと云ふ譯である、今から三百年前は同じ藩であつて同じ池田輝政の家臣であつた、二百五十年前に兄弟に分れた、さうして因州に移り一時は備前に移つた、どうも妙なもので、因州と備前では性質が違つて居る、之とは備前藩の人は祿も多く凡庸の奴が分れ、因州の方は氣の利いた若い奴が付いて行つた、丁度今の京都大學は若い學者が來て、東京の帝國大學に殘つて居る者は歳を取つた奴ばかりである、これだから東京の大學と京都の大學では現在に於ては遙かに差はあらうが、併ながら數年の後になれば京都は若いものであるから何時までも盛んで居るかと云ふとなか／＼さうは行かぬ、京都と云ふ土地が惰弱の氣を生じ已に京都大學も幾らか衰へたやうになつて來た、丁度備前と因州の池田と同じやうである、因州には若い奴が行つて備前の方は大きな家老などが殘つた、併ながら備前の方は氣候風土の關係、それから國が便利であつた結果として小才の利いた商人的のものが多く出來た、それから武士として立派な人間は因州の方から出て居る、因州の方からは豪い實業家と云ふものはないやうである、所が備前の方からはなか／＼出て居る又備前の岡山は中國筋になか／＼繁盛して居る、電車電氣種々の製造工場が盛んである、さうして國民全體が氣輕で誠に小才子であつて、さうして商賣人に最も向くから大阪邊あたりまで來て、所謂中流の會社だとか何とか云ふものを岡山人がやつて居る者が多い、又岡山

人だとて豪い者の出ないこともない、例へば坂本金彌はどつちかと言へば岡山縣の畸形兒である、岡山人は小才子で二三萬の金を拵へて能く活動する、王政維新時分に因州からは、河田佐久馬と云ふ豪傑が出て居る、備前からは二三の人は出て居るが唯一個の才子位に止まつて居つて豪い重味のある確乎りした男子はでない、今日と雖も若い者でも例へば奥田義人なんと云ふ男はどう見ても才子風ではない、兎に角東京市民から頼まれ頼んで漸く出て行くやうです、さう輕擧のことをせぬ、是が所謂因州人の特長である。

それから山陰の方で石見出雲、石見と出雲もすつかり違ふ、出雲は出雲族と云ふ人類が出來て居る、石見の方は矢張中國人種であり、言葉も中國の言葉を使つて居る、出雲に至ると云ふと言葉は「ヒト」と云ふことを「フト」と云ふ、若槻禮次郎なども濁音が多いやうである、彼れは雲州人の氣質を示して居る、雲州人には例の松江松平十八萬石の是が大きい大名です、後とは小大名ばかりである、それは社寺領だの何のと云つてお宮の領地がある位のことで雲州松平と云ふのは是は例の松平出羽守の家柄である、さうして松平家には有名なる大橋茂右衛門と云ふ講談で名高い家老が居つた此處は一體どう云ふものか知らぬが人間が才氣のある氣の利いた人間で出る、梅謙次郎とか、若槻君だとか、岸清一其他山口兄弟と云ふ様なか／＼氣の利いた人もある、唯此邊の奴は意地が惡い、是は人種から來て居るのだらうと思ふ、前に云ふた名士を掴えて人氣が惡いとは言はぬが、一體雲州人と云ふものは人氣の惡いものである、それから出雲の大社だとか北嶋とか云ふ社家の領内のものはどうも宜くない、それから石見の方は極く單純である。殊に此津和野などは亀井伯爵の領地であるが、是は幾分か長州に接近して居つた關係か知らぬが、小さな藩で四萬三千石の小大名であるけれども、併ながら早くから勤王家が出て居る、福羽子爵は此處から出て來たのである、石州濱田は是は徳川家の一門で、松平六萬石是が此處では比較的大きなものである、此處にも講談に名高い有名な松倉丹

後尾淵石見と云ふ元龜天正の頃の有名な御家來も御維新まではあつた、なか〳〵立派な家柄であるが、是は御維新時分などに最も迷惑を受けた、何故受けたかと云ふと德川家の水戸家から養子が來て居るので長州が天下の兵を受けたとき虐めてやらうと云ふので石州濱田は酷い目に逢つて燒討をされて殆ど潰れて仕舞つた、石州濱田から逃げて作州の久米南條郡に五日も六日も小供を負ひ老を扶け艱難辛苦を重ねて遁れて行つた、丁度今白耳義が獨逸に敗けて國は亡びてアルバート陛下は或一隅に逃れた、國民は英國に難を避けた、と同じて丁度日本の白耳義は石州濱田である。實に散散の目に逢つて漸く久米南條郡と云ふ所へ落付いた、斯う云ふ話がある、併ながら此處は人間は善いが前のやうなことで國が亡びたから石州は豪い人間が出ない。

これから作州と云ふ所は、是は矢張り備前と因州の間に介在して居つて矢張り德川家の一門を此處に置いたものである、津山松平十萬石の大名である、さうして其他小さな譜代大名が置いてある、不思議に此津山松平は學者を奬勵した所で非常に學者が多い、備中の方は漢學者で作州の方は文明の學者が多い、作州からはなか〳〵豪い者が出て居る、菊地大麓の一門、菊地の兄弟の箕作麟祥箕作元八などが出て居る、これから宇田川緒方など云ふ蘭學者も此處から出やしなかつたかと思ふ、それから今の檢事總長の平沼騏一郎なども此處から出て居る、之もどちかと云へば學者に近い人である、此山の中で和蘭の文學を輸入した所で、作州は邊鄙な所であるが歐羅巴の文明の學問が殘つて、是は基督教徒が壓迫を被つて逃げて來た奴が作州に入つて基督を維持して何か一種の神樣にして御維新まで居つたと云ふ所から、山の中で文明に遲れさうなものであるが、山の中から文明の學者が出ると云ふことは不思議な樣で不思議でない譯である、先頃死んだ鳩山和夫も勝山のものである。

それから其次は但馬丹後丹波、是は皆小大名の居つた所であるが、丹波は交通の不便の爲に豪い人物を出して居らぬ、但馬には北垣國道だとか、原六郎と云ふ

人が出た、學者では加藤弘之など云ふ獨逸學者が出て居る、是は仙石の家來であるが、妙に但馬のやうな所でも矢張り藩主が良ければ豪い人物が出る、天保年間に仙石騷動があつて祿も減らされたが、此間腹を切つて死んだ酒匂常明なども此藩である、さうして仙石左京と云ふ者が仙石家を取らうとした結果忠臣と奸徒の間に軋轢を起した結果が、妙なもので人才を養成して小さな所でも加藤弘之のやうな者が出て來た、これから北垣原などは此邊から出て野武士出身である、一體に人は正直である。

丹後からは神鞭知常、河瀨秀治、小室信夫と云ふ様な人が出た、是が丹後あたりの粋を現はして居る、一體人間が極く淡泊であつて正直である、丹後と云ふ所は大きな大名もない、一番大きいのが本莊七萬石である、本莊は八百屋から出て來たと云ふ所から大根を紋にして居る位であるから武張つたことは貴ばない。

それから丹波あたりも武張つた人が出ない、是は要するに譜代大名計りである、只僅かに笠山の青山が士を養成した結果多少人才を出して居るが孰れも穩かな人物計りだ。

自殺せる青年へ

長田幹彥

七月九日午後二時。私は丁度その頃奈良の春日の杜のなかにある帝室博物館の大廣間にゐた。

その前夜、鴨川の涼み床で所謂京都的な情趣のあるしかたで淺酌低唱をやつた揚句、それにも飽きて今度は妙に糜爛した鋭い刺激が欲しくて耐らなくなつたので、私は西陣の織場にゐるY君と茶屋の女將を誘つて

宮川町の廓へ流れ込み、到頭そこで徹宵なるがまゝの放恣な酒に浸つた。そして明け易い夏の曉が藤紫の薄明を鴨川の河原へほのめかす頃になると、亂醉したまゝ座敷のそこ此處へ獸のやうに轉び寢た妓達の寢姿が私には俄かに怖ろしいものになつて、蒼ざめた灰色に浮き上つてみえるその寢顏や、曲りくねつただらしのない四肢の姿などが寢そびれた私の神經に異常な肉感の歡びを與へると同時に、また寸刻の間もさうしたあくどい刺激のなかに浸つてはゐられないやうな激しい嫌惡の念を起こさせた。彼等の護謨のやうな柔軟な膚に觸れる指尖の快感は殘つてゐても、彼等の鼻腔や口中から發散する惡氣がいつかしら座敷中の空氣を毒々しく染めてゐるやうな氣ばかりして、私は漸次と明るんでゆく妓達の姿を眺めてゐるうちに不健康な輕い迷眩さへ覺えて來た。で、夜が明け離れるとすぐさま私は起き上つて、宿醉の殘つた苦しさを抑へながら匇惶とその娼家を飛び出してしまつた。

鴨川に沿うた朝明けの廓道を歩いてゆく時、私の胸中には極めて不愉快な夜來の印象と、喉もとを狹窄するやうな強迫觀念とが力なく働いてゐるばかりであつた。自分にはどうしてかう節制がないのであらう、と思ふと、盲目な力に引摺られて我れとわが心で限りなく呪つてゐる境地の方へひとたまりもなく陷ち込んでゆく自分の醜い顏がはつきりと心に映つて來るやうで、さうした夜の後には必ず起つて來る寂しい悔恨の念が無上に心を焦だゝせてきた。何かなしに人氣のない森林の底へでも入つて行つて、滾々と湧き溢れる珠玉のやうな清冽な泉の水を見つめたいやうな心持が頻りに込み上げてくる。泉の水、綠樹の影に染められたその水ほど淨らかなものがまたと此の世界にあらうか。銀の箭のやうになつて深い地底から絕え間もなく迸出してくる水勢を見つめてゐると、私はいつもいつも自分の胸が明鏡のごとくに洗はれてそこに美しい心の影が曇りもなく落ちてくるのを思はずにはゐられなかつた。

その時、ふと私の胸に映つたのは奈良の春日の杜で

あつた。その杜はさして深くはなくても、亦そこに流れる水は泉のごとくに澄んではゐなくても、私にはその杜が何とも知れず懐かしまれるのであつた。嫩草山の麓から裳裾をひいたやうに奈良市街の方へ流れ下つてゐるその森、巨大な大佛の殿堂や、燃えたつやうな春日神宮の丹塗の廻廊や、三月堂の古びた建物や、興福寺の高塔などをその懐にかき抱いてゐる杜の姿を思ひ出すと、私はもう矢も楯も耐らなくなつて、その儘眞直に四條の橋へ出てそこから電車で七條の停車場へ驅けつけた。そして折も折七時の列車がもうプラツトフオームへ横着けになつて乘客を待つてゐたので、私は切符を買ふのもそこそこにそれへ乘車した。

奈良へ着くと私は少しづゝ照りつけてくる日射しを避けながら春日の參詣道を眞直に、雪消澤のほとりから深い杉林のなかへ入つていつた。下草にはまだしつとりと露が置いてゐて、オゾンに似た綠葉の香が冷たく鼻を打つ。小枝から小枝へ張り渡した蜘蛛の巣には露の玉が鏽し銀のやうに煙つて、螟蟲がぶんぶん鳴きながら群れ飛んでゐる。そして今小舍から出て來たばかりらしい神鹿は一尺ほども延びた角をふりたてながら思ひがけない樹蔭から人の香を慕つてとことこと集まつてくる。私は杜へ入つた最初の瞬間から胸がすつとして、宿醉の胸苦しさが忽ちにして洗ひ去られたやうな氣がした。綠葉の吐息が新鮮な歡びをもつて人間の心身に迫る大きな力を私はしみじみと味はつた。

春日神社から手向山、三月堂の方まで歩きまわつて少しづゝ疲勞を覺えてくると私はその足で博物館へ入つた。そこはこの奈良中でも私の最も好む建物のひとつなのである。そこは總ての藝術の寶庫であつて、陳列棚に飾られたものはひとつとして藝術の眞、藝術の偉大なる權威を現はしてゐないものはない。燦爛たるものも、纎麗なるものも今は總て時の力に燻ぶされて、又と得難い冷厳な色に匂つてゐる。銅像も木像も乾漆像も一様な名工の信仰と技術との生ける死屍となつて今猶ほ絶大なる魅力をもつて我等の胸に迫つてくる。私は棚から棚へ讃嘆の眼を移しながら匂ひの高い古藝

術の香に醉はされてゐたが、一巡見終ると又もとの大廣間へ歸つて來て、そこに置き並べられたベンチの上へ疲れ果た體をぐつたりと投げかけた。そして天平時代の傑作たる文殊菩薩の尊像や、藥師佛の坐像の美しい彫線の流れをばうつとり瞻りながら時の過ぎてゆくのも忘れてゐた。

正面のアーチの陰から見ると、今春日の杜は烈日に照りつけられてぎらぎらと綠の焔を吐いてゐる。芝原には明るい陽炎が汗ばんだやうに燃えたつて、そこに寢そべる神鹿の姿もまるで死んだやう、そして何處からともなく館内へ吹き込んで來る風が、餘りに涼しいので、私は昨夜に變る藝術的な心持ちになりながら、いつまでもいつまでもさうやつて古藝術品のなかに埋まつてゐたいやうな氣になつてゐた。懷かしまれるといふよりも、寧ろ苦痛に似た觀念で私を威壓してくれる此等の藝術品が私の胸に何とも知れぬ緊張を與へてくれたのであつた。

そんな心持ちにも疲れて私はしばらくすると懷にあつた大阪朝日新聞を取出して、何氣なく拾ひ讀みしはじめた。京都の停車場で買つて、車中でひとわたり讀むには讀んだが、まだ讀み殘した面があるので、そのまゝ懷中へ押込んで置いたのである。九の面をもう一度讀返してゐると、その時ふとそこにある『學生の厭世自殺』といふ二號活字の大見出しが眼についた。しかもそのなかには私の名と、私の作品の題名とがありありと印刷されてゐる。吃驚して讀んでみると、それは私には思ひも懸けぬ悲壯な事實を報道した記事であつた。

その記事によるとそれから四日許り前の日、石黑博士の令息九六氏が厭世の結果御嶽山中で自盡したとある。然も石黑博士が同記者に物語られた言葉の中に、私が七月の太陽誌上で發表した「自殺者の手記」をば令息は自盡の最後の瞬間まで持つてゐたとしてある。僅か一段にも足らぬ記事ではあるし、殊に石黑氏は全然未知の人なので、その自盡の周圍に伏在した事情については殆んど想像を下す餘地がなかつたが、それで

も私には私の拙い作品がこの悲しむ可き事實の何等かの誘因をなしてゐることだけは直感された。私はそれと氣づいた瞬間、或深い深いショックに打たれて、呆然としてしまつた。

　私の胸中に先づ最初に浮んだのはその「自殺者の手記」を書いた折の心境であつた。私が京阪地方へやつて來てからその時までにもう三箇月の月日が經過してゐた。殆んどその日暮らしの勞働者にも等しい私は、その間の生活を維持するためには可成り多くの仕事をしなければならなかつた。その「自殺者の手記」も無論さうした動機で筆を執つたのであるが、しかし如何に拙劣な作品と雖も自己が藝術的な熱心を持つ以上は、全く責任のないものを書き得る道理がない。あの作品も大方の具眼者の眼から見たら恐らくは愚劣極まるものかも知れないが、私には決してあれの中に虚僞ばかりが書きつらねてあるとは思へない。少くとも自盡した石黒氏ぐらゐの年頃に於て私が經驗した或靈性の苦悶と、懷疑とを書き現はし得たと信ずる。

　それにつけても思ひ出すのは私の少年時代である。私がはじめて宇宙人生といふやうな問題に頭を突込んだのは十七歳のことであつた。その頃私の通つてゐた中學校にはI先生といふ極めて素朴な理化學の教師がゐた。高等師範の教生から教員に出身して間がなかつたので、實驗をみせることが極めて不得手で、いつもフラスコを壞はしたり、理化學器械に出るべき結果が出なかつたりして惡戯盛りの學生の哄笑を買つてゐた。その代りその先生は純理的な方面になると可成深い研究を重ねてゐたものとみえて、いろいろ新奇な不可思議を私達に說いて聞かせてくれた。

　或春の末のことであつた、學校の放課後校庭に咲いた一株の櫻がちらちら散落ちる下陰で、私はその頃親友のひとりであつたMと云ふ男と一緒にそのI先生をつかまへていろいろな雜談に耽つてゐた。その頃習つてゐた地文學からふと宇宙の廣大無邊といふやうなことが氣になり出してゐたので、私達は根堀り葉ほり種々雜多な疑問を提出した。I先生自身もそれに

興味を持つたかして、倦まず撓まず一々その疑問に答へてくれた。太陽系の生成と、死滅。星雲と星系との關係。それからまた地球上のすべてのエネルギイが同一のポテンシアルに平均してしまふ時、全くこの世界は死滅に歸してしまふといふやうなことまで私達の合點がいくやうに詳かに說明して吳れた。

初めてそんな宇宙の秘密を說かれた私達の心持ちはどんなであつたらう。何といふ理由もなく唯世界、人生の悠久といふぼんやりした少年時代の夢に安住してゐた私達は、その時世界にも人間にも限られた極限があるのをはつきり意識して、到底口では云ひ盡せぬ激しい恐怖に打たれた。

その夜から私は熱病にとりつかれたやうにその事ばかり考へはじめた。夜になると大空一面に輝く星の光が私に遠い世界のことを思はせ、一瞬一瞬死滅の方へ近づいてゆく不可抗力が私の嫩芽のやうな心を戰かせて死といふことのみが私の思考の對象となつた。國家も社會もその時にはまるで眼中になかつた。それのみかこれから漸次と進展してゆく自己すらも全く否定してゐた。そしてその頃藤村操の死とゝもに流行した樣々の宇宙に關する出版物などを亂讀しては益々沈鬱な心持ちになつてゆくと同時に、夜になると全く不眠の狀態に陷つて、老廢した太陽の周圍を死滅しつくした死のやうな地球がくるくると意味もなく旋轉してゆく光景などを夢みながら深夜恐怖の餘り聲を放つて號泣したりした。それでゐて私は短艇の選手になつてゐたほどの運動家で、學校の方もさして惡くない成績で通過してゐた所謂善良な學生の一人だつたのである。

さうした心理狀態は十九歲まで續いた。私はその間にも全くのところ幾度か自殺する人間の心を承認するやうな心持になつた。若しあの時、家庭に何か複雜な事情があるか、或は生活の困難に逢遇するか、或は又病苦にでも責め苛まれたとしたら、私はひとつとして石黑氏や「自殺者の手記」の主人公と同じやうに自殺してしまつてゐたかも知れない。

併しさうした心理狀態から私を救つてくれたものは

やがて全くそれとは別の方面に向つて開いて來た感覺の陶醉と惑溺とであつた。初めて美酒を口にし、色慾界に眼覺めて來た若い私の心は忽にしてまるで今迄とは違つた世界を私の眼前に見た。無限の宇宙や、無限の生命に對する思念は殆んどその惑溺の一點に凝つて峻はしい岩角のやうな人生の間に私は五彩陸離たる幻影の數々を見た。感覺の世界は外に向つて開かれた。私の眼をしばしの間閉ぢさせ、神經の尖端に觸れる極美な刺激が私を生かし、私を醉はせた。私はそれから今日まで限りない生活の變化を求めて、他人からは爪彈きされるやうな沒人道的な蕩兒となつて暮らして來た。凡そ感覺の惑溺を強ふるものに對しては如何なる困難をも顧みず打衝かつて行つた。私はそれよりほかに生きるべき道はないとさへ思つた。そしてその間に接觸した「世間」は私に自己との間に均衡を與へて、私の純なる心の周圍にはいつの間にか堅い核皮が出來て來た。いつの間にか私は自殺を企てるやうな單純な、そして純粹な心を失つてしまつてゐた。そして凡ての生活は漸次と惰性的になつて、丁度疲れ果てた評論家が概念のみによつて死せる空理を談ずると同じやうにいつもきまつた道程を往返するに過ぎなくなつた。

㊃ 私は今自分の心に殘つてゐる創痕をよく知つてゐる。その表面には痣のやうな痂皮が出來て、一見全癒した樣にはみえてゐながら、その一端の口を開いたところから見ると痂皮の底には既に爛壞した更らに深い炎症面が隱されてゐるのである。感覺の惑溺は今猶ほ盛んに微に入り細に入りその秘密の底まで突進してゆかねばならぬやうに心に喰ひ入つてはゐるが、併し私にはそろそろもうその底が見えて來たやうな氣がされる。と云つて私は今更老廢した太陽の周圍を死のやうに死滅した地球が回轉して歩くその恐怖に全心を委するほど單一な氣にはなれない。私は實を云へば又もう一度その時代の心に歸つて、すべてのものに戰き度い。即ち今迄の「知る」と云ふ窓を一旦閉ぢて、その「知つた」ものを統一し、自己化する前にもう一度燃えるやうな感激を得たいのである。緊張した生命をもつた感

激なしには、私の人格の統一は望まれないのである。つまり石黒氏の時代を第一期の「青年病」とすれば、私は第二期のそれに差しかゝつたと云ふべきである。

宇宙の萬象に少年時代に夢みてゐたやうな確固たる悠久性のない頼りなさ、實に人生は無限の機によつて絶えず織られる布のやうなものである。その經となり、緯となるべきものは何處から來て何處へ去るか分らぬ。私といふ個人は單にその一筋の織絲であつて、今織りめに現はれたかと思ふとすぐに又その絲は行衛も知らぬ暗黒の裡に葬られてしまうのである。さう云つた幼稚と云へば幼稚なセンチメンタリズムも私にはまだ殘つてゐる。そして今迄經來た生涯を思ふと、偉大なる人間の社會に確固不抜の大道も示されてあるやうな氣もするが併し、私にはそれは今に疑問なのである。熾烈なる生存慾と人生との不合理、又はその間に横たはる矛盾がどうしても私にあるがまゝ人生を承認させない。そして個人と云ふものを掘つてゆけばゆくほど私はその疑問を深めなければならないのである。

石黒氏が「兄弟の寢息を聞きつゝ」遺書を裁してゐた日には、私は比叡山の延暦寺にゐた。此頃では妙に佛敎の内觀的な思索に同情が向くので、私はたとへ形貌の上からでも寺院を眺めることを好む傾向を生じて來た。不斷の霧を吐く大森林の底にある根本中堂は私に何とも云へぬ印銘を與へた。傳敎大師以來一度も滅盡したことのないあの黄いろい三個の法燈、私は閑寂として人の氣勢さへない大本堂の暗闇にともるその冷嚴な火の色を凝視してゐるうちに、一千有年の間人間の迷妄を照らしてゐたその燈火の威力を感じて、佛徒以外の或深い深い眼合を得たやうな氣がした。私の人格を統一し、新らしい力を以つて私を支配してゆく思想の芽はさうした燈の暗示から成長してゆくのではないかとさへ思はれた。その暗示は決して現實の回避を說くものではない、更らに現實の核心に徹底してそこに靜かな自己の生活を築きあげる力を語つてゐるのである。

四明嶽の一角に佇立した時には私は最も醜い人間の

國を下瞰したやうな氣がした。美しい自然をば人間はさまざまの虚僞を以つて散々に破壞し、變形してゐる。都市は人間の生活の噴火口であるにしても、高きに登つてみるとそれはまるで地殼に生じた疥癬のごときものである。そのなかに生がある！　死があり、生産があり、消費があり、歡びがあり、悲しみがあるのかと思ふと、私は思はず單一の個人としての至上生活を叫ばずにはゐられなかつた。理想家、空想家と罵られても、私はもう一歩進んで一層美しい生活を自分の上に創造しなくてはならぬと思つた。

私は現在の國家社會に對して一個の人間として到底責任を持ち得ない。一個人の微力を以つては到底廣汎なる社會が脊負はせる重荷に耐へ得ないのを知ると同時に、私は自己といふもの丶價値をもよく知つてゐる。私はその點に於て益々利己主義に傾かうとしてゐるのである。自己を無にしての社會が何であらう。自己の死は私にとつて世界の死を意味するのである。私は唯だ自己を統一し、自己を出來るだけ美しく樂しく生きさせる道を捜したい。自分の生そのものが宇宙の無限の生命からみて最も藝術的であることをのみ欲するのである。

私は「所謂」青年病の初期に於て純なる思想に殉した石黒氏の死に對して至大の同情を捧げるに躊躇しない。自殺といふことがどれほど苦痛であるかを思ふにつけても、私はその潔よい斷念を讃嘆しずにはゐられない。その思想の悲壯さは到底死をもつて凡てを解決せんと欲する純なる人の心ならでは解し得ぬところである。その思想の價値、深淺に對しては恐らくは如何なる哲人と云へども確固たる斷案を下すことと至難の業であらう。

御嶽の參道には私も嘗つて行つたことがある。瀑布の傍から鐵鎖に縋つて登るやうな道がついてゐて、錢苔やら羊齒類やらが蝦蟇でも棲んでゐさうな陰濕な片陰をつくつてゐる。そのほとりに端坐して、甲斐境の連山に沈む夕陽を眺めながら自己の頸へ白刃を加へた石黒氏の心境はどんなであつたらう。私はそれを思ふ

と氏の死顔が髣髴として眼前に浮びあがつてくるやうな氣がしてならない。たとへ氏が一般社會からは精神生活の上の落伍者であると罵られても、常に自己を虚僞の庇間にのみ置いて安全に醉生夢死してゆく者に比べて、私は氏の心裡を壯としない譯にはいかないのである。丁度氏が斷末魔の苦惱に喘いでゐる時、はるかに京の鴨川のほとりの涼み床で舞妓や酒に不徹底な夢を托してゐた「自殺者の手記」の作者は將に慚死すべきものかも知れない。

　私はそんなことを老へてゐる間に何んだか自分の眼の前が暗くなつてゆくやうな氣がして來たのですぐさま博物館を出た。日の光は明るく照り輝いて、すべての物象は何等の矛盾も苦悶もなく、完全にその生を享樂してゐるやうに見える。宇宙の暗黒と不可解に對して太陽の光はありとあらゆる虚僞を敢てしてゐるのである。私はその外光の鋭さを見てゐるうちに云ひ知れぬ寂寥の感が胸底から滲み出してくるのを覺えた。

　西大寺から唐招提寺、藥師寺とあの荒廢した西京の村々を烈日の光に照りつけられながら歩いてゆく時、私の胸には人生の放浪兒としての頼りなさと悲哀とが一杯に充ち溢れてゐた。眼に映るすべてのものは藝術と宗教と文明との廢墟である。千年も二千年も前に過ぎ去つた人生は僅かに斷礎となつて移り變る時代の日日に照らされてゐる。キユビズムの畫家の描きさうな帝陵も、世界隨一と云はれる寶塔もすべて時空の綾に佇む幻夢のやうになつて私の眼には映つて來る。私は眞白に燃えた人氣のない村道を歩きながら眞實何とはなしに涙ぐまずにはゐられなかつた。その涙は私の悲哀のどん底から流れ出たものでなければならぬ。

　私は一日も早く京都を去つて、高野山のさる寺院へ登らうと思つてゐる。そこへしばらくの間引籠つて、靜かに思索に耽つてみたいと思つてゐる。生活の上に何等かの斷念なり、信仰なりが得られたとすれば私はそれで滿足しなければならぬ。そして生活の接觸面が廣くなればなるほど、私達は早く「知る」と云ふ窓を閉ぢることが出來るのである。それから先はもう全く自

己に頼るほかはない。上から壓迫して來る槌が大きければ大きい程、私の心は彈力に富んで來なければならぬ。不幸にしてその彈力が壓力と不均衡になつた場合には當然私の上には自己の破產が來るのである。

私はたつたひとりになると云ふ意味で高野へ登り、イズムならぬ人生の觀照をやつてみたくて耐らない。藝術家は哲學者とは自ら違つた道を步まねばならない。しかも凡人であると同時に非凡人であることが藝術家の天分であると云ふことを私はいつまでも確信してゐたいのである。（七月十八日京都樵街西村家にて）

凉舟

黒頭巾

其一

◉今朝、曉起、窓を開けば、庭前に並べたる大輪の朝顏の花、絢爛として、人目に映發す。此の刹那、朦朧たる曉睡の吾が眼、一時に覺め來る。海上、航行中、夜、濛氣拭ひ去ると共に、水平線上に、低く、明月を捧げ來るの思あり。

◉曉天の露氣に浮び出でたる朝顏花の凉味言可らず。此の間の興趣、陸上の一物も、以て、譬ふ可きもの無し。若し、花彩の尤も鮮明なる大輪の朝顏花を、淸淺なる急流の波上に浮び出でしめば、理想的の凉舟を象徵するに足るものならずんばあらず。

◉墨田川の「お白粉流し」「扇流し」は言ふに足らず。曲水の宴に、盃を浮ぶるも、俗趣を免れず。龍田川に紅葉の流るゝは美し。或は淸流に、蜒岸に沿へる紅蓼花の落ちて、紅を染めつゝ流れ行くも佳し。然れども此の二者も、水に浮べる朝顏花の、天地を淸凉化するに比す可くもあらず。

◉冥想すれば、水澄みて清淺、底は、苔つかざる小石を敷き詰めて、水は濺々として鳴つて流れ行く。一杯に晴れ渡りたる曙に、此の水の上に、大輪の朝顔花を浮べ、多きを要せず、僅に、二三點ばかり、寛やかに、漣波に搖られて浮び行くを見よ。

◉此の水は、小流なるも妨けず。廣ければ尤も可し。兩岸、濶くして、涼風の自在に吹き徹するを望む。朝顏花の流れ〳〵て、遠く、波間に白み行く頃、紅旭の光、微茫として、花の肩に上るらん。

◉人は、岸上に佇みて、恍惚として水上の朝顔花を眺め入る。眼前に、「波間の朝顔花」あり、吾が脊中は「涼風の嚢」を爲すべし。此の時、天地間の涼味、滿載して「波間の花」にあり。理想的の涼舟を象徵するものは、水上の朝顔花ならずんばあらず。

其二

◉昨日、吾輩、炎天に、郊外に往き、雜司ヶ谷に岡落葉を訪ぬ。趣味の話より趣味の實現に入る。シャツとヅボンに、絞りの手拭を被つて、來會の同人と共に、ラケットを揮つて、コートに馳驅す。

◉殘陽、斜に、雜司ヶ谷の雜木林を透して、ネットは漸く夕靄に沈み、ロッピングのボールばかり高く薄明の空に浮びて見ゆる頃、ラケットを收め、汗を風呂に流して歸る。シャツもズボンも汗滂沱として絞らば滴に滿つべし。則ち二者を風呂敷に包み、裸體に洋服を著けて、晩風を趁ふて行く。落葉送つて、目白停車場に來る。

◉田間の晩涼、吾が洋服の、ボタンの隙より、吹いて肌に入る。飄々たる斯身、風に御して行くに似たる哉。仰いで天を見れば、星月、森然、天は遠水の、星月を映ずるが如し。

◉吾等は、歩して、目白驛に出づ。電燈の光、參差として、天上の星、落ちて地上に在り。兒女、錯落、一齊に、空橋の欄干に憑つて、橋下の鐵道を、電車の往來するを眺めつゝあり。

◉空橋といふと雖、欄干に憑つて、俯瞰すれば、水を憶ふの情無くんばあらず。橋上、風は自由に透るとも、水無くんば「趣味の涼」足らず。

◉暖の趣味は、火よりも湯にあり。涼の趣味は、風よりも水に在り。趣味は、乾性よりも、濕性に存せずんばあらず。濕性の涼味を凝結せしむるものは、涼舟なり。

●此の日、弄鞠、テニスに依つて、炎熱を壓して、涼を招き、晩風に、素裸に涼を取り、空橋に、「畫趣の涼」を得たるの後、忽然として濕性の凉味に想到し、凉舟に憧憬するに至る。

其三

●凉舟と花壇とは、近代文明の趣向を象徴する「趣味の表現」たらずんばあらず。人間は、遠く、自然を驅逐しつゝあり、而して其の結果として、一面に、尤も近く、自然を人間自から身邊に結び付けんとしつゝあるものは、凉舟と花壇となり。

●月は草より出でゝ草に入れりし武藏野の昔には、人間は、趣味の凉舟を想像せざりき。此の時、涼は、人間の取るに任かせて、自由に、無盡藏なり。月は蓬々たる青草を照らして、青光を、人の身邊に投げ、蟲語の天樂は、水の如く、人の髮、人の足に澆ぐ。人、則ち凉味の畫趣を爲す。事實に於て、凉舟の必要は有らざりしなり。

●人間、到る處に花有りし時、人家に、花壇の必要は認められざりし。林を伐りて町を造り、花を鋤いて以て田を爲すの後、花木、遠く驅逐せられて山に在り。

●人間の文明、漸く進んで、「花咲きぬと使は來れり、馬に鞍おけ」といふの時、則ち、人家、漸く花壇の趣味を生ず。

●水に遠き者に盆池あり、山に遠き者に箱庭あり。煉瓦の大厦、石疊の町を爲す時、始めて屋上園藝あり。屋上園藝の文明は、人間をして、凉味を求めて、凉舟に憧憬し、戀著するに至らしめずんばあらず。

●草の一八は、茅屋の上に花咲けり、一八は、必ずしも未だ屋上園藝といふを得ず。然れども日本に於ては、一八は屋上園藝の先驅を爲す。古は、花、人の脚下に在り。今の文明に於ては、花、人の頭上に在り。

●墨田川の兩岸に、未だ人家無かりし頃、夏の月の夕、舟を中流に放つて、徐ろに流に隨つて下つて、海に至りし時、舟中の凉味果して如何ぞや。然れども此の頃、未だ凉舟の必要無く、趣味無く、凉舟の感興は未だ酣ならざりしなり。趣味の凉舟は文明の賜なるを知る可し。

其四

●短艇の凉舟と、和船の凉舟とは、均しく凉舟なりといふとも、趣味相同じからず。譬へば屋上花壇と、屋

根の一八草との相違あるが如くなり。

●波濤を壓して、遠洋を航するは西洋船に若かざるや勿論なり、趣味、詩情は則ち一葉の蓬窓に存せずんばあらず。西洋人ならしめば、蓬窓の裡に坐するに窮屈なるやも知れず。日本人には蓬窓を趣味ありとす。

●涼舟にも民族的趣味あり。茅屋と茶漬とが日本趣味あると同じく、涼舟には、和船を宜しとすべし。

●涼舟は、實用に非ずして趣味なり。實用は後天的にして、趣味は先天的なり。後天的は變化自由なれども、先天的には變化少し。實用のものは、時世に隨つて移る。趣味は往々にして、舊を傳へて變はらず、茅屋は、早晩、日本に全滅するに至るやも知れず。「趣味の茅屋」は、或は茶室となり、或は四阿屋となり、堂々たる洋風の苑圃の間に伍して、永遠に存すべし。

●吾輩は、和船の領域の、年々、減少しゆくを思ふ。墨田川の渡舟は、今、尚ほ其の二三を殘すも、其の廢止は、いづれも數年の中に在り。渡舟は全滅するも、涼舟は、ますく\榮え行くなるべし。

●日本の鷄も犬も、純日本種のものを見る事難し。草も花も、街樹も泰西の趣味、彷彿しつゝあり。ひとり涼舟は、純日本の趣味を、永遠に、傳ふるものなるやも知れず。

其五

●涼舟の興味は自由に、到處に逞しくすべし。航海して、月夜、舷頭に、髮を萬里の長風に梳づる時、其の船、則ち涼舟ならずんばあらず。

●夜の渡舟は感興限無し。悠々として、客を載せて、櫓聲緩やかに、烟管の烟草の火、微かに明滅す。滿舟渾べて、涼。渾べて詩ならざるは無し。

●夜の渡舟は、客の多きも可、少きも可なり。客を滿載すとも涼舟たるを失はず。寥々たる二三の客、期せずして、涼舟の雅會を催うすに似たるも亦た妙ならずとせんや。

●江流を上下するの舟、夜は、皆、涼舟ならざるはあらず。舟を以て家と爲す者は、妻兒團欒して、稚兒、波聲に慣れ、或は、雄鷄、雌鷄、閑に、月下に睡るあり。千金を散じ、家を擧げて、涼舟に、豪興を驅るの富人と雖も、這般の興趣を企望するを得可らず。

●日は、白帆のかげに烈日を遮り、夜は滿天の風露に、櫓聲の音律を樂むを得る。舟人は、自覺せずして、涼舟の興趣の中に生活する者ならずんばあらず。

●舟に比すれば、「筏」は、涼舟の最上乘ならずんばあらず。涼、水と共に足を浸し、人は、波上を歩しつゝあり。若し、涼夜に、筏に乘つて、大江を下らば、古の所謂、琴高仙人は羨むに足らざるなり。

●琴高仙人は、鯉背に御して波上を行く。大江の鯉といふ事、頗る畫趣あり。然れども鶴背が、飛行機に若かざると同じく、鯉背は「筏」に若かざるなり。

●如何に、大なる鯉背といふとも、安定の興味無し。筏は極めて安定にして、且つ、波勢に隨つて、悠揚として浮沈し、閑々然として膝を抱きて坐し、烟草を吹かしつゝ、天際に垂るゝ星光を眺め行く。

●「筏」は大江の流、漫々、汪々たるを、緩やかに下り行くは、大に可なり。急流を下るも極めて可なるべし。筏は波に隨つて、掀飜し、飄搖し、水沫飛んで肩を蹴ゆ。宛然、人は水中に在り。水中の仙なり。水沫に、悉く月あり、星あり。

其六

●夜釣の舟、自から絶好の涼舟たらずんばあらず。一竿、心無く、靜かに江海に釣つて、夜の更け行くを知らず。一釣竿の一線は、此の夜の畫趣を統一し、併せて涼味を統一しつゝあり。

●舟を放つて、網を投ずるも惡しからず。網を投ずる刹那の吾が腰は、體を構へ、槍を繰ん出す備あり。此の時、心、丹田に沈み、投網の三昧に入る。無限の涼味、天地に滿ち、斯身に滿つ。

●涼舟の興趣は、涼の三昧に入るに在り。涼三昧に入るを得るものは、悉く涼舟たるを失はず。涼三昧の妙境は、隨處に存せずんばあらず。

●達磨、葦葉に乘つて大海を渡るといふ。星月の涼夜、彼が涼三昧の樂如何。何事ぞ、古來、八百萬の禪僧、徒らに達磨を說きて、葦上葉の涼三昧に說き及ばず。

●明月の大海に、達磨、巨眼を開きて、涼三昧に入る時、海風、水沫を交へ、彼の袂、裾を吹きて、彼の衣は、飄搖として、波濤と共に靡く。此の時、舟中より遠く、達磨の渡海を望む者、達磨を見て、葦葉を見ず。故に、唯だ、驚歎して、達磨、歩して大海を渡るといふのみ。

●達磨といへども、歩して大海を渡る可らず。一葉の葦葉、彼をして涼三昧に入らしめたるのみ。葦葉の涼三昧は、野狐禪の知るところに非るなり。

其七

●青、深々たる大西瓜を清流に投ずれば、ボコン〱と浮いて流れ行くなるべし。此の時、西瓜自から凉舟を爲すものならずんばあらず。

●達磨は、僅かに一葉といふとも、猶ほ葦葉に乘ず。未だ身を以て凉舟を爲す能はず。劍を浮べて海を渡る者といへども、凉の劍禪に入るを得ず。其の身、未だ凉舟となる能はず。身を以て凉舟と爲すものは、清江の西瓜なり。

●浮いて流れ行く西瓜の上に、或は、蟷螂の留まりて在らんには、彼は、自ら計らずして、凉舟に乘るものにして、若し、極めて洒脱、自由の筆致を以て、これを畫かしめんには、まさに、一幅、凉舟の象徴畫を爲すべし。

●御伽噺の桃が谷川を流れ來れるは、夏ならば凉舟なるべし。桃の春なるが故に凉舟と爲すことを得ず。若し桃太郎をして、流れ來る西瓜の中より出でしめば、彼は、凉舟の中より生れ出でたるものならずんばあらず。

其八

●吾輩、凉舟を思ひ、凉舟を稿しつゝあり。此の頃、炎熱、近年未だ見ず。殆んど人をして亞熱帶に在るの思を爲さしむ。墨田川の凉舟、夜々、殷盛を極めつゝあるなるべし。

●試みに、吾が卓前に、薄紫色の玻璃盤を置き、其の中に、盛るに長方形の氷塊。一箇を以てせよ。氷塊は、次第〱に溶けゆきて、水、氷塊を浮べ、自から凉舟の象徴畫を爲さずんばあらざるべし。

●此の時、玻璃盤の光彩は、氷塊に映じ、氷塊を透射し、而して滿盤の光景、冷凉の氣分、燦然として煥發しつゝあり。

●凉舟の氣分は、即ち、玻璃盤の中の氷塊ならずんばあらず。凉舟あるが爲に、四圍を凉化し、四圍の凉は、凉舟を漂へ、一箇の凉界を出現せしむるに在り。

●南極、北極の海に漂へる氷塊は、凉、極まつて冷となる。既に、凉舟の域を去る。一箇の凉界、炎界に對映するもの無くんば凉舟といふ可らず。

●夜の凉舟は、晝の炎天に對映し、玻璃盤中の氷塊は、四圍の炎氣に對映す。凉といふは、畢竟、對映の氣分

のみ。

●吾が眼前の、氷塊、大なれば、其の中に、瀟洒たる花を點出するも不可ならず。但し、寧ろ無きを上乘とす。氷塊小なれば、其の上、其の中、他の一物を點加するを許さず。則ち涼舟は、極めて簡素、瀟洒たるを必要とするなり。

其九

●綠蔭の瀧壺に、淸水の泡立ちて、珠玉を濺らす邊に、足を苔石に踏み掛け、模型の帆船を浮べ、船中に、一の人形(にんぎやう)を乘せたらんには、涼舟の氣分を鑒賞するを得べし。

●涼天には涼舟を思はず、涼天には涼舟無し。炎天には涼舟を思ふ。畢竟、涼中に涼無く、涼は熱中に在り。涼舟といふは炎天の趣味ならずんばあらず。

●吾輩は、今、東京に在り。等しく東京といふといへども、炎涼、區々、其の處を異にすること、東京は自から一の小地球の觀を具す。

●製氷室の番人は、涼舟を思ふこと無かるべし。製氷會社の製氷室は、夏の東京に別國を爲す。彼等は、涼舟よりも、風の吹き通る高樓を夢想しつゝあるべし。

●樹蔭の地下室は、冷を求めず、光明を求む。餘りに光明なれば涼意無し。涼は日光よりも月光に在り。涼舟の涼味は、月明よりも、或は星明に在り。

●人間、到處に、涼界を求む可く、舟遊、到處に涼舟の趣味を得べし。然れども吾輩の、特に、涼舟といふは、即興的の涼舟をいふに非ず。特製の涼舟をいふ。

●兵士は、制服の胸を開いて、手に手拭を翻へして、扇(あふ)がば、其の手拭は、則ち當意の團扇といふを得べし。美人、媚態を帶びて、艶なる袂を翻へして、胸邊を搖曳せしめば、袂も亦た即妙の團扇たらずんばあらず。

其十

●涼舟といふは水上の舟をいふ。天上の舟をいふに非ず。今、單に、舟といふも、飛行船、飛行機、ともに天界の氣流に航するの舟なり。天上の舟の涼味は、涼意透徹、寧ろ寒冷を生ず。

●飛行船の全盛時代、出現せば、天上に、納涼の客、旁午するに至らずんばあらず。此の事、必ずしも空想に非ず。人間、文明の進步の急速なる、或は、其の日の來る、意外に近きやも知れず。

●吾輩、飄々として、天上に、涼舟を操つるの興味を

冥想せざる能はず。空明を擊ち流光に溯るの愉快、恐らくは地上に土著しつゝある、今の人の、夢想するを得ざるものあらん。

●去年、大正博に、不忍湖上の、ケーブルカーは、或は、天上、凉舟の趣味を暗示するに足らずとせず。星月の光、糸の如く、吾が身邊を包圍して、空明の堆積するは、髣髴として、澄水の深淵に臨むの思あり。

●吾輩を以て見れば、天上の凉舟、自から別種の興味を具するも、天上、遂に、水上に若かざるもの無くんばあらず。水上凉舟の興趣、奪ふ可らざるものは、櫓聲に在り。水聲に在り。水上、濕潤の空氣に在り。濕分を透して、濕ひ來れる星月の光に在り、空の色に在り。櫓の撥する水の音律に在り。

●吾輩は、水上の凉舟を以て、あらゆる舟の享有する凉味の妙境となす。故に、吾輩の所謂、凉舟は、水上の凉舟を指すものなり。

其十一

●今、吾輩、凉舟を思ひつゝある時、臨川、中秋、久松、臨淵諸人、來り、共に、品川海に浮んで、月明の舟游に数刻を楽まん事を勧む。臨川は、今夜、十三夜、

漁舟、まさに凉舟の興趣あるべきを力說す。

●吾輩は、明日、關西行の迫れるを以て品川の舟游を辭す。同人、或は言ふ、舟中、凉舟を草する、甚だ可ならずや。舟燈の下に、鉛筆を奔らすも、凉舟の快游たるを失はず。

●或はいふ、今夜の月、必ずしも舟燈を要せざるべし。直ちに月光に向つて筆を執る、語々、直ちに凉舟の文を爲すべし。

●吾輩いふ、古詩人、すべに、「月中著ㇾ句未ニ嘗書一」の句あり。月明、十分に明らかなるも、字を書するに便ならず。支那人の、大字を書する尙ほ然り、況んや吾輩の細字に於けるをや。蓋し、月光は感興なり、詩を生むべし。字を記するは勞作なり、月明は勞作の舞臺に非る也。

●今、此の一室、端無く、凉舟の興味、磅礴す。必ずしも品川海に行かざるも、品川海の趣味、或は、此の刹那に在り。

●吾黨の談緒ゝ飛んで電燈鉛筆に及び、或は、電燈萬年筆に至る。若し「發光筆」を發明するを得ば、一擧微明、星明に凉舟を操つるの時、直ちに筆を執つて、即興詩を記するを得べし。

●凉舟の感興を印象するは、發光筆に若く無し。然れども人間、未だ此筆あらず。品川は電氣學者なり。此の筆を發明するの天職、彼の身上に存せずんばあらず。

●若し携帶用の電池の、極めて趣味あるものを作り、電線を巧みに裝置して、筆端に發光せしむるを得ば、發光筆必ずしも難事に非ざるべし。然れども吾黨の夢想する發光筆は、電池を、筆の軸に收むるものならざる可らず。

●凉舟の趣味と發光筆の空想と、一坐を鼎沸せしむるの後、諸人、吾輩を留めて、杳然として品川海に向つて去る。今夜、月明、舟中、臨川は投網のかげに、發光筆に耽思するや、如何。

●中秋、長髮を風に靡かせつゝ、意氣殊に軒昂。一網、多獲を期し、深更、歸り來つて、吾輩に、潑溂たる巨鱗を贈つて、吾輩の書樓に、月明に、凉舟を語りつゝ、一杯を傾く可く、夜坐、以て待てといふ。

◉月明は、人をして悉く詩人たらしむ。凉舟は詩人、詩を練るの書齋なり。中秋の投網は、或は、銀鱗を獲ざるやも知れず。然れども、今夜、彼の報告には、必らず詩あらん。吾輩、まさに酒と魚とを備へて、彼の歸り來るを待つべし。

其十二

●凉舟は清素なるに若くは無し。然れども簡素ならんことを要す。化粧箱の如くなるを好まず、屋根なく、舟は扁平ならん事を欲す。

◉今、モーターボートの世となりつゝあり。此の舟、快速力を有し、足、健にして、波を劈き、舷頭の風甚だ凉し。然れども機響、喧囂、人の閑話と詩思とを攪亂す。譬へば飛行機上の人、共に語るを得ざるが如し。趣味の凉舟には非ず。

●趣味の凉舟は、人をして、閑ならしむるに在り。併せて靜ならしむるに在り。則ち和船の情味津々たる所以ならずんばあらず。

◉凉舟は、實益を主とせず、交通機關に非ず。故に機械力を發揮せん事を要せず。悠暢なる人力の作用に依り、凉舟をして、人間が自然を征服するの象徵たらしめんよりも、自然に調和し、契合するを求むる情緒たらん事を冀ふ。

◉這般の意義に於て、和船、屋根無く、扁平にして、櫓の潑する水音の音律的に、人の心耳を澄ましめて、星の語るを聞かしむるを得るの、理想的なるに若くも

のあらず。

其十三

●詩的の涼舟は、趣味の同人、舷に倚つて、出世間の話を爲すも樂事なり。詩を話し、詩を作り、默して烟草を吹かすも、興趣、雋永にして盡くるところを知らず。

●涼舟に乘るは、浴衣の翩々たるを可しとす。黑き衣は味少し。輕便、簡易、偏へに飄々として、風に御し、波に犯して、唯だ滿天の星を友とするの氣分あるべし。涼舟の、人生に値あるは、人間をして、自然に歸らしむるの興味に存せずんばあらず。

●涼舟の中、放談を妨げず。幽玄を説くも可なり。俗談を禁ずべし。然れども涼舟に、俗談を試むるは、初より未だ涼三昧に入るの望なき者なり。

●法器の語あり、涼器の語を爲すも不可とせず。涼三昧に入るは、涼器なり、涼三昧、刹那、多語無し。感興あり、詠嘆あり。思索あり。涼舟は、人をして神來に接せしむべし。

●涼舟に携ふ可きもの、烟草と酒とす。燈、唯だ一燈にして可なり酒、唯だ偶爾にして少しく飮むが爲め、烟草は冥想を涵養するが爲のみ。

●星斗闌干、舟を江海に放つて、三更、人、涼三昧に入るの時、時に隻手を垂れて、舷側の波に洗はん哉。徐かに、櫓聲、水聲を聞きつゝ、唯吾一人、舟中に仰臥して、快心の烟草を、緩るく吸ひつゝ、冥想に耽ければ、夜の更け行くを覺えず。

吾輩、先年、舟游を記す。舟游といふも涼舟なり。今年、炎熱甚だしくして、吾輩、未た涼舟に上らず。乃ち、涼舟の氣分を論じて、暫らく此の稿を擱筆す。明夜、西海に向つて去るの後、一たび快心の涼舟に上らん事を期す。（黑頭巾再記）

清涼飲料水の話

警視廳防疫官 國澤健雄

清涼飲用料と一口言うても、之を小別にすると凡そ三つに分類が出來る。其第一は炭酸を含有するとて

ろの飲料即ちレモナードで、例へばラムネ又はサイダーの如きもの、それから第二には、果實蜜飲料、是れは濃厚なレモナードのこと。第三には果實水、例へば蜜柑水、薄荷水などで、之は緣日などで盛んに賣つて居る。此三つの物を清涼飲料水といふ。此中果實水は別として、清涼飲料水と言へば、砂糖に酒石酸、若くは苦鹽酸、それに天然又は人工の香料を加へて、なほそれに炭酸を加へたもの、即ち香と甘味と酸味と炭酸を加へたものが清涼飲料水である。吾々がサイダーを飲んでも、多少の酸味もあり、又甘味もある。泡が出るのは、あれは炭酸の含まれて有る證據である。

扨是れは何うして拵へるかといふに、炭酸含有の物は、先づ炭酸瓦斯を作らなければならぬ。それには一種の器械を要する。即ち瓦斯發生機を要する。それは硫酸を重炭酸曹達若しくは石粉（大理石若くは石灰石の粉）若くは胡粉に加へるといふと、炭酸瓦斯を發生する。けれども、それは不純なる故、或裝置に依つて之を洗つて清潔にし、純粹にする爲めに、之を瓦斯タンクに入れる。是れは人工製造の方である。普通今日用ゐられて居る物の中には、此人工的のもの、外に液化炭酸といふものがある。即ち瓦斯の液化したものである。之は重に英國若くは獨逸から日本に輸入したものであるが、今日は戰爭の爲めに杜絕して居る。此液化炭酸を使つてもよいのである。そして其炭酸瓦斯を水と混和させなくてはならぬ。混合機の中に百磅乃至百二十磅位の高壓力を加へて、水と炭酸とを混ぜる。それで水と炭酸が攪拌して炭酸水が出來るのである。そして一方には、酸と砂糖と香料との濃液を作り、それを炭酸水の大部分に混和すると、炭酸含有のレモナードが出來る。

そこで、此清涼飲料水といふものは、殊に夏季人々が好んで飲むのであるから、若しもそれが飲料に不適當なことになつて居れば、非常な問題になる。そこで清涼飲料水に對して三十三年六月、内務省令を發布して之を取締ることになり、誰でも勝手に拵へる譯にはゆかなくなつてゐる。上長官に出願して認可を受けな

くてはならぬ。認可を受けるに就いては、工場、設備、用水等の檢査を受けるを要する。それから又いよ〳〵認可を受けて製造するやうになつても、時々技術員が現場に臨んで視察をする。

そこで先づ吾々の注意すべき事は、其原料である。炭酸でも、香料でも、砂糖でも、皆精製せられた純良な物でなくてはならぬ。然し其中でも最も重きを置くべきは水である。水といつても、水道ならば先づ其儘使つても差支へない。が、其上注意すれば之を消毒するに越したことは無い。現に或サイダーの如きは、日光の紫外線で消毒して居る。第二に注意すべきは製造の機械で、若し其機械に銅若くは鉛の如き物が出て居ると、銅なり鉛なりが出て來るから、さういふ部分には純粋の錫を以て鍍錫する。殊にパイプなどには鉛管を使ふことは絶對にいかぬ。金屬類、殊に銅鉛の出ることは大いに警戒しなければならぬ。此事も規則で取締つてある。それから其次には塵埃、蟲――或は蠅の脚だの翅だの、人の髪の毛、などが這入ること、それを注意しなくてはならぬ。これには瓶を十分に洗滌しなくてはならぬ。炭酸曹達の濃厚液で十分に洗滌すると、其等の不潔物が除却されるのみならず、同時に瓶の内部を殺菌消毒するの功がある。今一つは瓶の中に硝子の破片などが有ることがある。それは瓶にアワが出來て居る。それに壓力が加はる時に缺けて落ちるのである。さういふやうな諸種の不良の原因には十分注意しなくてはならぬ。又其使用を禁じてあるに拘らず、故意に防腐劑其外サッカリンなどを用ふるものも昔はよくあつたが、今日では最早あるまいと思ふ。

それから誰でも注意すべき事は、瓶の中に沈澱物が有るといふと、瓶を靜かに倒さにして、覗いて居ると塵埃が下に落ちる。それの澤山有るのが、其飲料物の不良な好い證據である。けれども幾分夾雜物は免れない。砂糖を溶かす時に多少の塵埃は普通有勝である。然し今日はどれもこれもみんな好く出來て居るから、昔のやうなわるい物は餘り無いやうだ。能くラムネには硫酸が這入つて居るとかいふが、それは誤解である。

炭酸瓦斯を作るに硫酸を使ふものだから、そんな事を言ふに過ぎぬ。要するに、新らしい物を飲むことにすればよい。

ラムネとかサイダーとかを貯へるには日に當てぬ事が一番肝要である。冷藏庫があれば、最も良いが、さもなくても冷たい處、例へば緣の下などに置くともちがよい。

只玆に餘程注意しなくてはならぬのは、緣日や、行商などに賣らるゝ色を附けた蜜柑水などである。此等は餘程危い。是れは蜜柑油、橙皮油に味を附け、砂糖と水を割つたものであるが、腐り易い物であるから、どうも危險だ。それに瓶の消毒も十分でなし、水も良くないのを、子供などがうつかり知らずに飲むが爲めによく腸加答兒などを起す。大人は兎に角、子供には飲ませぬやうに親たる者は十分注意をしなくてはならない。

尚最後にもう一つ言つておくべき事は、清涼飲料水の營業者は、拵へる場所、機械、容器を清潔にしなければならぬ事は勿論であるが、營業者の中傳染病に罹つて居る者、例へば結核、癩病、黴毒に罹つた者の如きは、之に從事せしめないやうにしなくてはならぬ。之を取締まるには、時々之を監視する必要が有ると思ふ。

それから清涼飲料水には色が着いて居る。多くはタール色素に人工色素を加へたもので、赤とか青とか黄とかいろ／＼の美しい色が附いて居るが、それは別に人體に害にはならぬ。

炭酸含有飲料水は一種の清涼劑で、飲んで氣持が好い。のみならず多少消化を助ける消化劑であるから、適當に使用すると害が無いのみならず、多少の益がある。殊にレモナード類は利尿の効があるから小便の通じのわるい人や、腎臟病などの人には可なりの効能がある。然し無暗に飲むと胃腸を害ふの虞があるから、飲み過ぎぬやうに、適度に純良な物を用ふるのが第一である。

安達謙藏氏　鈴置倉次郎氏　下岡忠治氏　鳥居諦次郎氏　濱口雄幸氏　大津淳一郎氏








桑田熊藏氏　大隈信常氏　町田忠治氏　坪井九八郎男　藤澤幾之輔氏　荒川五郎氏








人物評論（六十二）

正副參政官の人物

▽正副參政官

石川半山

正副參政官が冗官で有ると云ふ說は、民間に高いが、それが果して冗官で有るや否やは、此の任を受けた人々の働らきに依て決する事だ、若しも新任の人々が何等の働らきをもなし得ないならば、いよ〳〵冗官と云ふ非難が高くなるで有らう。

外務の安達君と鈴置君

新任の十八人の中には、我輩の知らない人が有るが、大體に於て其の適材を適所に置かれたとは思はれない樣だ、先づ外務の安達謙藏君にした所が、ドウも適任者とは思はれない、彼れを信任して居る人は、彼れの長所を認めて居るが一方には隨分反對の有る人だ、陰險狡猾なる人物とさへ言ふ者も有る、我輩は能く其の人物を知らないけれど、曾て朝

眞鍋斌男　三浦得一郎氏　早速整爾氏　田中善立氏　田川大吉郎氏　關和知氏



鮮王妃殺しの陰謀團の一人で有つた所を見れば、兎に角陰謀家には相違あるまい、加藤外相は秘密の保てる男が入用と云ふので、安達君を登用したさうだが、彼れは確かに秘密は保てる男に違ひない、それから根氣良く奔走をすると云ふことだ。同志會の諸領袖の間を奔走して、秘密の使命を達するに敏捷な男だと云ふことだ、先づソコが彼れの生命で有らふ、然かし政友會員等の言に依れば、世界の大勢などは到底分りもせず、又之を研究する素養もないと云ふ事だ、ソコで或る皮肉家は曰く、安達には外交の事は一切分るまい、既に何も知らなければ秘密を漏らす心配はない、然かし單に秘密の漏れないと云ふ條件のみが參政官に必要な事で有るなら、何も生きた人間に高い俸給を拂ふて、之を任命するよりも、張り子の人形を置いた方が、物識が無くて良いだらうと、全體外務省は閥の有る所で、閥外の者が飛び込んでも、なか／＼務めにくい所だ、稻垣滿次郎君が松隈内閣に拔擢されてから、隨分ヒドい目に逢ふた、其の西班牙に客死する迄、彼れが八方から虐待された慘狀は、我輩共友人の同情に堪えなかッた所だ、尾崎行雄君は松隈内閣の時に外務の勅參となり、志賀重昂君は憲政黨内閣の時に外務の勅參となッたが、兩君共に閥外の人だから、閥内の大小官吏から馬鹿にされて、隨分氣の毒な情態で有ッた、尾崎君はヌーとして意に介しない樣に見えたが、志賀君は大分不平を漏らして居た、尾崎君にしても志賀君にしても、世界の大勢の分かる人で、外交に付ては相當に意見も有る人だが、それでも閥外の人だから、アノ通りに馬鹿にされた、矧んや安達君の如く外交の知識に於て、閥内の人から馬鹿にされるべき人を參政官にしたのは、如何にも不適任では有るまいか、實は安達君の如きは大浦子の下に内務の參政官には適して居たかも知れないが、外務とは意外な場所で、本人も恐らくは得意では有るまい、實は外交の事などはドウでも良いので加藤男は政黨の事情に通じて居ないから同志會總理として彼れを其の秘書官長の格で選任したのかも知れない、副參政官の鈴置君は彼れが加藤男の出身地たる愛知縣の代議士たる外、我輩は彼れに付て何者をも知らないが、是れ亦素より閥内の人から尊敬を受けるほどの外交上の識見を有する人とは思はれない、要するに外務の正副參政官は適材を得たとは思はれず、世間でも餘り喝采して居らぬ樣だ。

内務の下岡君と鳥居君

内務の下岡忠治君は立派な人物だ、彼れは國務大臣の器で有る、近き將來に於て大臣として國務を其の双肩に荷ふべき人物だ、大隈首相が内相を兼任して居る間は、彼れが實力に於て内務大臣で有ッた、大浦子が轉任の後も彼れは事實に於て内務大臣の働らきをして居る人だ、此の人が參政官と云ふ閑職に轉じたのは、寧ろ國家の爲めに惜しむべしだが、然かし彼れは何處に居ても、内務省の中心は依然として彼れに在るに違ひない、彼れが參政官に任ぜられた爲めに、此の冗官の價値は騰貴したと云ふ位だ、鳥居君は我輩曾て一面の識もないが、何でも新潟縣の代議士で、坂口仁一郎君の推薦に係ると云ふことだ、坂口君は自分が獵官運動をしない代りに、其の代理を出した者と見える。

大藏の濱口君と大津君

濱口雄幸君も今の官吏社會に一頭地を拔いた人物で、下岡君と共に將來の大臣として囑望さるゝ人だ、彼れは人格、識見、技倆、共に立派な人物で有ると云ふ事だ、我輩は個人的には知らないが、彼れが參政官となッたことは、此の官の價値を高めたる事、下岡君と同樣で有ると考へる。

副參政官の大津淳一郎君は我輩も能く知て居る、古るい政黨員で其の經歷から言へば、濱口君などよりも遙かに先輩で有る、彼れが今日此の副參政官を受けた事は、實に氣の毒に感ぜられる、彼れが多年政治上に盡力した經歷から考ふる時は、尾崎、武富諸君に一歩を讓るべき所はない、彼れは明治二十三年國會開設の時の代議士で有ッた、彼れが議政壇上に於て改進黨の代議士として聲名を馳せて居た時、今の若槻藏相などは未だ大學に學生で有ッたのだ、此の人にして此の副參政官の任を受けると云ふは、眞に氣の毒に感ぜられる、彼れも若し國務大臣に任命されたなら、尾崎、武富、河野諸君と同じ樣に、多くの人から尊敬せられるべき働きをなしたかも知れぬが、副參政官では十分に働らく勇氣も出まいから、矢張り適任とは思はれない。

海軍の早速君と田中君

早速整爾君は參政官として用ひらるべき人物だ、彼れは人格も良し、識見も有り、辯舌も有り、將來國家の重任に膺るべき人材で有るが、唯海軍とは途方もない所へ割り當てられ者だ、農商務の參政官として彼れを採用したなら、何人も異議の無い所だが、海軍では折角の人材も專門の軍人に馬鹿にされる事は有るまいか、特に彼れは從來財政經濟上の見地から、多く軍備擴張に反對して來て居た者だから、第三十七議會に於て彼れの口から海軍擴張案を主張する事になッたら、誠に變な者で有らう、或は折角の人材に傷を附ける樣な事になりはしまいかと多年の友人たる我輩は恐れて居る、田中君も我輩は面識の有る人だが、同じく海軍では專門が違ふ樣だ、八代海相と同縣の緣故を有つて居るので、鈴置君の加藤外相に於けるが如く、大臣の蔭に居れば良い樣な者だが、海軍の軍人からは馬鹿にされるだらふと恐れる、既に軍人軍屬は政黨演說はならぬ

と云ふ條項を盾にして、早速、田中兩君の政談演説を禁止せんと意氣捲いて居る軍人が有ると云ふことだ、是れ全く軍人が彼等を愚弄し虐待せんとする徴候を示した者だ、頗る氣の毒に感ぜざるを得ない。

遞信の藤澤君と荒川君

藤澤君は辯護士だから、司法の參政官となッたら、遞信よりも良いかも知れぬ、或る人は田川君と藤澤君を入れ代へた方が良いと言ッたが、然かし大臣との關係を考へればソウもゆくまい、荒川君は「早速を正にして乃公を副とするとは怪しからぬ」と憤ッたさうだが、之れも一應は無理でない不平だ、同じく廣島縣選出代議士で年齡は荒川君の方が年長者だから、彼れとしては尤もなる不平で有らふ、然かし又早速君の方から言へば代議士になッたのは一二期早かッたと云ふ理屈も有るかも知れぬ。

司法の田川君と關君

田川君の司法參政官は相當だ、尾崎君が東京市長たる間其の助役として能く之を輔佐したる彼れが、今日に於て司法の參政官となッたことは先づ誰れが見ても順序上然るべき事で、敢て怪しむを要しない、彼れは實に悧巧な人だ、其の智略に於ては群を拔いて居る、尾崎君の帷幄の士として、彼れだけの人は外には見ない、先づ當代に於て智略の士としては何人にも一歩を讓るまいが、然かし彼れの平生から考へると、自分では他人から智略の士と評せられる事を好まないに違ひない、精進修養して徳行の士とならんことを務めて居る所を見れば、彼れは尙將來に於て發達すべき見込みの有る人材で有る、關君も新進の人材中、世の注意を惹ける一人で、今後ドノ位出世するか分らない、全體我輩は尾崎君の將來に望を囑して居る一人で、ドウ考へて見ても、彼れは將來一度は内閣首相の印綬を帶ぶ可き人物だ、田川君や關君が彼れの補佐官となッた事は彼等の將來の運命を開くに大關係の有る事で、單に此點から考へれば、誠に友人として之を祝せざるを得ないが、司法の參政官として適否如何と考へればそれは全く別問題だ、今の情態では司法は平沼鈴木の天下で、尾崎君と雖も何等の手を下すべき餘地はないのだ、田川君の智略と雖も、恐らくは牢乎たる彼の司法閥の荊棘を伐り開くことは困難で有らふと思ふ。

其他の各省

農商務の町田君も文部の桑田君も個人的には知らないが、評判を聞て知て居る所に依ると、共に立派な人物で、共に適任で有ると考へる、大隈信常君に至ては正參政官となッても良い人が、副で忍耐して居るのは寧ろ氣の毒だ、陸軍の眞鍋中將や三浦君は、全く知らないが、一説に陸軍では參政官を冗官と見て、其の冗官たることを證すべき人物を迎へたと云ふことだ、或はソウかも知れない、農商務の坪井君に至ては全く知らないから、何事をも語ることが出來ない。

▽新任參政官論

鐵拳禪

一

獵官運動と云ふことあり。與黨代議士の役人になりたしとて狂奔する自薦運動を指す。代議士は瘦せても枯れても帝國の選良なり、選擧民の利益の代表者なり。何故に左樣なるさもしき運動をなすやと云ふに、其處には種々の事情と、人情と、黨情との絡り居る事と思はざるを得ず。之が一切の情僞を知らんと欲せば、黨人心理學の特殊研究に待たざるべからざるも、深く研究せずとも唯觀察せしだけにて分ること二つあり。一は黨に衿るべく自身を光彩すべく役人になりたしと思ふこと、一は自個の抱負を實行すべく手腕を實際上に働かすべく其の地位を占めんと思ふこと、即ち是れなり。前者は徒らに官尊民卑の因襲に囚はれて役人を有難がり。錦衣を故郷に飾らんとするの虛榮心に外ならざるも、後者は何程か政治家の見地より責任の椅子を珍重し、權威を揮はんとするの自尊心に出づ。されば後者の何物かを把持する、前者の無抱負、無經綸、無自覺に勝ること萬々なるも、未だ他の推重を得ざるに、自ら正札を貼附し以て押賣せんとするは、斷じて自覺せる政治家の擧措に非ず。況んや自家の適不適を省みず、何れの官にても、唯役人たるを得ば光榮なりと云ふが如きに於てをや。吾人の獵官運動を渉間しと云ひさもしとて指斥するは、是れが爲めなり。

一體此の獵官運動は、役人たらんとするの運動なるが故に、なべての人が官途に就かんとする運動を指すべき筈なるも、辭義は兎もあれ近來は專ら黨人の役人たらんとする運動を指すなり。而して獵官運動の盛んに行はれたるは、明治三十一年の憲政黨內閣を嚆矢とし、次官、局長、官房長は勿論、府縣知事までも、黨人的色彩を以て塗抹するに至れり。暫く官僚政治の下に屈服したる黨人の、自由進步兩黨の握手によりて政黨政治の宿志を達せるが故に、競うて役人となり、官僚の勢力地盤を根柢より覆して、大に成す所あらんとせしなり。其の意氣組は頗る盛んなりしも、さて實際に處しては口ほどに手腕は働かず、加ふるに兩黨は渾然融和せずして、互に勢力の爭を是れ事としたれば、官僚の徒が毒を盛るまでもなく、忽ち寂滅の悲運に會せり。此の內閣は俗に隈板內閣と稱され、伯大隈を首相とし、伯板垣を內相としたるものにて、公伊藤が好意的、且試驗的に、政權を投げ與へたるなり。處が黨人輩の爲す所、官僚の横暴より以上に、無責任なりしを以て、信を朝廷に失せしのみならず國民をして失望の歎を禁ぜざらしめたり。是に於て官僚のおん大、公山縣等の忌む所となりて、文官任用の門は或制限の下に閉鎖され、黨人の進路を絕たれたり。其後、妥協內閣、情意投合內閣の成る每に、大臣及び秘書官は黨人より拔擢されたるも、次官以下は彼等をして一指を染めしめず。黨人と官僚とは、全く別天地に住むの觀ありしに憲政擁護運動以來、政界の空氣一種の變調を呈したれば、官々の鐵飾を以てする閥

級制度を幾分にても打破するの必要起り、山本内閣は遂に文官任用令を改正し、次官、警保局長、警視總監、法制局長官等を政務官と做し、更に勅任參事官を黨人より採用する事とせり。此の改正を動機として、次官中政友會に入黨する者續出し、官僚と黨人との接近する端緒を啓き、憲政逆轉内閣と稱されたるにも拘はらず、表面上何程か政黨内閣の觀を呈せり。政友會の黨人等が國民の與論を裏切り、閥族と提携せるの非は飽く迄も非とせざる能はざるも、門戸開放と國務接近とは、政界に何等かの意味を與へずとは云ふ可からず。然るに後の大隈内閣は、前の逆轉内閣以上の逆轉にして、少數黨を與黨とし、二三黨人の入閣を見たる外悉く官僚系を配置し、宛然官僚復活内閣の觀を呈せり。與黨綜合少數なりと雖も、同志會と中正會の二派あり。久方振に政權に有附きたる事とて、獵官運動盛んに起り、次官以下の椅子を分配するに非ずんば、容易に節度に服せざるの形勢あり。男加藤等の發案にて、英國の制度を模倣し、參政官てふ新官を設けて、黨費救濟策を講ずるの餘儀なきに至れり。政友會時代の改正は、再び其の範圍を縮少され、人數だけは十八名の正副參政官が新設され、香餌を投げて黨人等を垂涎せしめ、總選擧後の議會を經て、漸く之が實行を見たり。香餌ある所、競爭者のあるは謂ふ迄もなく、所謂獵官運動者は無數に集まる金魚の如く尾鰭を動して狂奔せるが、慾得づくの事とて、多數の落伍者、失望者を出せり。伯大隈の大風呂敷は何人をも包容するも、官制度の下にありては無制限に採用するを得ず。勢力爭ひの爲めに、嫉み合ひをなす者を生ずるに至れるこそ是非なけれ。憲政黨内閣の數月にして瓦解せしに懲し、現内閣も獵官不平者と、民黨の突擊、元老等の苦肉策によりて、寒さの來ると共に霜枯れの運に會ふべきを豫言するものあり。

二

現内閣瓦解を前提とする時は、新任參政官は實際手腕を揮ふの機に接せざるべきを以て、其の人物を論ずるの徒爾なるが如きも、先づ此頃の暑さをも厭はず大臣學の手習をなし、來らん議會に大臣候補試驗を受くるの格にて臨み、政府案の說明及び答辯の勞を取る者とし、批判のレンズの曇を拭ひて、其の目鼻立の人並なりや、或は人並以上なりやを檢せんかな。

政務官の新設は、各省事務上の必要より來れるに非ずして、黨人操縱の政略に迫られたるなり。各省の事務は次官の手にて處理するが故に、政務官は唯議會に於て舌を揮へば足る譯合なり。既に政務官は黨人操縱の呼吸より生れたるを以て、現内閣が其の人選に當りて、人物本位よりも政略本位となり、肘鐵を喫しつゝも屢上院の有力團體と交渉を試み、下院の與黨内派よりは頭數の按分率を以て採用するに至れり。苟も人物本位として、高材逸足を網羅するにあらば、眼中上院なく、與黨に對しても亦按分率を以てするの要なし。黨情の如何に拘らず、老朽を斥け、有爲の新人物を擧げ、以て大正政界の新機運に乘ぜざる可からず。然るに青年に向つて高遠の理想を力說して止まざる伯大隈は、子大浦及び男加

閥等に制肘されて左顧右眄し、不羈的人物を推薦せるは、遂に老人の中愚に選れるもの、遺憾禁ずる能はず。

然らば其の政略によりて人選され、按分率によりて任用されたる參政官の顔觸は如何。先づ上院よりは法博桑田熊藏(文部)、陸軍中將眞鍋斌(陸軍)の二名を選拔し、同志會よりは安達謙藏(外務)、藤澤幾之輔(遞信)、町田忠治(農商務)、濱口雄幸(大藏)の四名、中正會よりは早速整爾(海軍)、田川大吉郎(司法)の二名、無所屬より下岡忠治(內務)一名を算出せり。副參政官に至りては、更に黨情黨略に左右され、均衡、穴埋め等の用に供されたれば、人選愈々低下せり。殊に陸軍に中將眞鍋を据ゑ軍醫監の三浦得一郎を副たらしめたるが如き、如何に政略に囚はれ、軍閥の意を迎ふるに急なりしかを知るべきなり。

由來陸海軍は、軍閥の擁守する祕密の城廓にして、軍人軍屬以外の何人にも之を窺はしめず。議會に於ける答辯すら、機密を盾に取りて、徹底的說明を與へざるなり。故に此の祕密の城廓を窺知せんことは、世人の等しく望む所にして、又之を精査するに非ざれば、陸海軍の濫費、行政整理、部內の廓淸を叫ぶと雖も、隔靴搔痒の感を免れず。幸ひ今次參政官の新設され、此の祕密の城廓たる陸海軍にも政黨出身の代議士を入れ、何程か祕密の暗影を去り、機密も亦祕密位になるべく思はれしに、其の任命を見るに至りて、陸軍は依然として祕密の城廓を嚴守し、海軍のみは纔かに暗所を政界に向つて開放せり。然れども、陸海軍には特殊の刑法あり。其の條項に由る時は、正副參政官を軍屬と見做すに於ては、政見の發表も黨人的行動も共に採る能はず。若し採るに於ては、直ちに所刑されざる可からず。斯くては折角參政官を新設せるの趣旨を沒却すれば、陸海軍刑法を改正するか、或は當局者に於て特例となすかの意見を一定せざる可からず。陸軍の參政官は豫備にもせよ軍籍にあり。祕密を暴露するが如きこと非ざるべしと雖も、海軍のは黨人なり、祕密の城廓の門扉を徹するは勿論、政談政論を鬪はさざるを得ず。然るに此の條項に由りて脅迫さるれば、彼等は海軍の軍人軍屬と何等異なるなく、議會に於て祕密と機密との兩刀を使ひて、お座なりの答辯をなす器械に過ぎざるに至らん。如何に役人になりたければとて、斯かる束縛の下にありて器械化するは彼等の欲する所に非ざるべく、何とか之に超立するの工夫をなさざる可からず。

早速は早稻田の出、下院豫算通の目あり。然れども彼れの財政意見は未だ斷片的にして組織的のものに非ず。殊に海軍に對しては何等の組織的調査を遂げず、國防上に就ても亦卓說を聞かず、其の議會に於ける鬪士的元氣、理攻めの銳舌には、人並以上の優所あるも、海軍省參政官としては、多少粗鬆の嫌なからず、之が副たる田中善立の如きは、獵官し得て果して何を成さんと欲するや。年齒少壯なるを以て新人物とせば、彼れも亦一個政界の新人物に相違なきも、唯夫れ以上に新人物の要素を具備するや疑なき能はず。政友會脫會の當時、硬漢中の一人を以て目され相應に名を賣りたる男が、今日進んで伴食に滿足を求むるに至りては、掬に側むに堪へたり。中將眞鍋は曾て軍政に關係せる事あり。多少其の呼

級を併せざるに非ざるも、今や六十五の老齢、且豫備役の老朽なり、新進の大官軍務局長の徒と伍して、能く何事を成し得べき。唯此の地位を占めたるは、陸閥の出身にして、上院に一席を有するが故のみ。蓋し參政官の冗官たるを語るは、中將眞鍋に非ずんば、即ち之が副たる古物三浦ならずんば非ず。

三

參政官中、的大阪の耕地早稲田出身者は、早速の外、田川大吉郎、副の關和知あり。法博桑田も亦其の畑の者なるも、出身別を以てすれば、赤門系なり。同系の人物は、他に下岡、濱口、町田の三人あり。安達は私立中學、藤澤は明大系なるを以て、私學は都合四名、官學も矢張四名、不明一名なるも、官學の徒は多く、官界に棲息し、漸進的に陞進せるを以て年齢比較的少く、又事務に錬達せるものあり。私學の黨人は逆境を耕し來りたるを以て齢稍傾き加減にて、官界の事情に通せず、實務に迂なるを免れず。藤澤の如きは多年政界に浮沈し來り、漸く幹事長となり、總務となり、黨内の要樞に座するも、徵官すれば下岡、濱口の徒と同列、否少しく落ち加減の所にあり。安達も亦中央倶樂部を率ゐて一黨の領袖たりし事あり今日同志會の最高幹部たるも、役人となれば田川同格たるに過ぎず。夫れにても役人となりたる事の嬉しかりしと見えて、藤澤は任命發表當日の新紙を手にし、口も利けざるほど喜び居りしと聞けり。

彼れは一見凡倫の如きも、權略あり、却々に如才なき所あり。就任幾許ならざるに、羅と貫紫に扮裝ち(いでたち)、白飛白の單衣を纏ひて登廳し、官民多數の出迎を受けて滿悅至極の態體なり。翌日は早速諸官衙を巡り、「遞參在任中だけも何分宜しく」など空世辭を振蒔き、大持てに持てたりとの事なり。此の一事に徴するも、彼れの如才なく、衆愚を魅するの力あるを知るべきなり。此の平凡俗惡なる魅力は、即ち彼れの彼れたる所以にして、國民黨にあれば國民黨、同志會にあれば同志會を糾合し、地方黨人の結束を固うするを得るなり。總選擧前にも地方利益問題には可なり盡瘁したれば、今後と雖も如才なく行る事なるべく、夫れには最も適當の地位なるだけ、惡用の危惧を感ぜざるを得ず。演説は東北辯の重濁味あり、都人士の耳に欲せざるも、遮二無二切捲くる所、靈骨の頭々たるを見る。田舎中一頭地を拔けるは、此の靈骨と魅力と權略とを有すればなり。然れども、某紙の彼れを許して東北の西郷とせるは諛辭のみ。誰れが飴細工の大西郷を以て、實質の大西郷なりと稱するものあらんや。

法學桑田は、金持にして學者なり。餘り人と交際を食らず、引込思案の偏屈者なれば、役人風を吹かせずとも役人風を吹かすが如く見ゆるとと評合なり。素より頭腦の人にして手腕の人に非ざるも、教育調査會委員にもなり居る事なれば、文部省は先づ好個の据り場所と云はざるを得ず。安達の外務は不適任なるも、男加藤の頤使に甘んじ、敢て衝突を試みざるもの、幹部中此の人を措いて他に非ず。而も彼れは秘密を守ること嚴、口禍を買ふの失なきは、何程か現下の秘密外交と共鳴を感ずるに似たり。其の貧の清濁何れなるを知らずと雖も、身を淨うして乾兒を卑る

んとする、險辣の度こそ異なれ子大浦に界嫌す、下岡及び濱口は、次官より政務官に轉じたるもの、最も無難なり。下岡は人と爲り剛愎、手腕險辣にして、小大浦の稱あり。大浦も亦彼れに信頼すること厚く、總選擧の際の如き互に腹を合せて活動し、漸く政界の機微を解し來れり。今頃彼れの事務を離れて政務に參せる。議會の驅引、乃至黨人操縱の爲めなること想像に難からず。

下岡と同名にして、而も出色の稱あるは、町田農參なり。一は官界游泳の達人にして、一は財界に錬熟せる實務家なり。銀行業保險業の經驗あり。眼は三角ならずとも、算盤上に一隻眼を有する人物なれば、尋常黨人の疎放なる頭腦と自ら異なるものあり。利益あるべき保險會社長を辭して、役人となりたる程なれば、役人の有難きを感ずる以外、何等かの成竹あるに似たり。師走の日比谷座に於ける「參政官二人忠治」の新狂言は、政界の興味を唆りて、多少の見物を呼ばずんは非ず。田川の法參は、議會の答辯振を想察さるゝに拘らず、適任ならずとの評あり、彼れの此處に据れる、法相尾崎の東京市長時代に助役たるの關係あり、宗教上に就ても亦テオドラ夫人の指斥を受けざるにあり。然るに彼れと競爭者の地位に立ち、此の椅子を望めるもの、中熟合同の主唱者菊池武徳あり。憲政擁護運動以來尾崎と行動を共にし、二派合同をして今日の中正會を築き上げたる功勞者の一人なり。多辯饒舌、秘密を嚴守する人ならざれば、官僚派に忌まるゝも、參政官の不適任者に非ず。其の選に洩れたるは、稻門の勢力大にして、三田の氣焔甚だ揚らざるに困れり。森田小六郎も、亦曾て尾崎の下に市の飯を食ひたることあり。盛んに運動を試みたるも其の目的を達せず、空しく新進の徒の後塵を拜するに至れり按分率の不平、是に於てか起る。政府はよりて新たに參政官の一、政略の爲めに内輪喧嘩を招來せるは、何としても上々の略とは見るべからず寧ろ伯大隈の高遠の理想より、高材逸足を叩き出すの機會あるに有かず今次の參政官制の餘りに新奇に失したるのみならず、政府が按分率は因はれ、憲政黨内閣當時の如く比較的自由に黨人を採擢し、配置するを得ざるは、決して政黨政治の新氣運に副ふものとは思はれず。

▽參政官の噂

野村胡堂

▲内務の下岡忠治は 人物として非常に變つた型に屬す可き人だ、凡そ人間には、特長とか欠點とか、何かしら一ツは人並と違つた所を持つて居るものだが、下岡に限つては斷じてそんなものが無い、渾身悉く平板中庸に出來上つて居て、丁度上手な指物師の拵へた、眞四角な箱を見るやうな心持の人だ。

▲例へば氣は長い方ではないが、闊らかと云つて決して癇癪持ではない、寛大な人と云ふ事は出來ないが、冷酷と云ふ非難を受ける事は萬々あるまい、事務の才もあり、術策も野心も相當に心得て居るが、左りとて事

務家、策士、又は野心家と云ふ肌合の人でもない、可なり融通に利く方だが、まだ道樂をした話は聞いた事が無い、併し大抵の趣味は大摑み乍らも心得て居て、それに淫しないところが下岡流の特長だ、酒も一寸イケるが決して度を過すやうな事はない、物事に熱中する事は出來ないらしいが、何んな仕事をさしても冷淡なる惧は斷じてない、交際家と云ふ程ではないが、逢つて話して見ると、却々人を外さない呼吸も心得て居る。

▲數へ來ると悉く平凡だ、凡そ常識的と云つても、こんなに變化の乏しい人も一寸珍らしからうと思ふ、仕事をする段になれば、此調子で平押にジリ〳〵とやる、敵に廻しては恐ろしい人だが、味方にして置く分には、こんな調法な役者は、政治界にも一寸外には類があるまい、九人の參政官中第一の練た者て、從つて第一の適任者だ、常識肌も此位になると流石に強い。

▲大藏の濱口雄幸は、悉く之と反對で、飽までヌーボー式に構へて、漠々焉と要領を韜晦して居る、然も誰にも嫌はれずに、ハヽン〳〵ズウ〳〵で頭を撫げて行くところは全く一流の腹藝だ、輪廓の態大なことは、土佐人の特長其儘だが、土佐人の病所たる。策を好むの風や腰の弱い嫌も先づない、之も不思議な性格の一人だ。

▲濱口の貧乏と無慾は有名な話だが、未だに雜司ヶ谷の由來付の家に住つて、時々電車で大藏省へ出て來る、曾て後藤男が濱口のホープとした所に惚れ込んで、餌を食らして藩閥に引張りにかゝつたが、事實局に尻を据へて一寸でも動かないので、男一流の小細工をやつた揚句、ヒドく怒らして手を引いて仕舞つた事などもあつた、雜司ヶ谷のお宅へは、今でも時々變なお使ひ物も舞ひ込む相だが、濱口は遠慮氣もなく突返すので、御近所の人は其頑固なのに感いて居る、濁世の吏人に珍らしい硬骨漢だ。

▲輪廓の大きい人は、評價される時何うしても二三割方儲かるが、濱口になると、此ヌーボー式が骨にまで徹つて、掛値の仕やうも儲けやうもない程知れ渡つて居る、居常別に勉強する風もないが、本職には非常に熱心で、頭腦の良いことも評判だ、辯舌は例の堂々たる土佐音で可成聞かせる、若槻に代つて總相候補者に立てられる時期の來るのは、何人も疑はない所だらう、下岡と共に大隈内閣の有する双絶だ。

▲政黨出の凄いのでは、外務の安達謙藏がある、何う云ふものか安達は世間から無暗に騒がれて居るが、之には大分誤解もあるやうだ、比較的金には綺麗だし、性格も健實一點張て、世間で考へた程悪辣な人間ではないやうにも思へる、恐らく安達には、些の稚氣も衒氣もない爲に、人に對して親みの感じを與へない嫌があるのではあるまいか、無邪魁偉の風丰て、無口な上に眼ばかり光る、何うも人に快感を與へる顏ではない。

▲安達の頭腦と云ふものは、恐らく氷よりも冷靜だらうと思ふ『常に利害を思ひ將來を慮る』と自分でも云ふ、悲觀とか樂觀と云ふ事は、安達の辭書には無い言葉だ、如何なる失敗も、成功も甘て安達の顏の筋肉を、一本も動かす事が出來なかつた、此點に於ては全く恐ろしい種類の人間だ、從つて其やり口に感服をする事はあるが、何んなに努力しても、安

達其人に親しみを持つ事は出來ない。

▲佐々克堂の國權黨を承けて以來今日まで、一歩一歩叩き上げた忍耐と『押し』とは、羇々者流の到底眞似も出來ない藝當だ、地味に、根强くジリ〱と押して行く人間は、何時でも、如何なる場所に處しても恐ろしいものだ、安達が嫌はれ者で通り乍らも、今日の地位を贏ち得たのは、一に此特長あるが爲だと云つて宜い、

▲穢多村扱ひをされ乍ら、帝國黨から中央倶樂部まで持ち堪へた手腕は、流石に安達なればこそだ、同志會が始めて組織された頃は、一時國民黨系の領袖に蹴落された形はあつたが、總選擧となると、忽ち其眞技倆を發揮して、到頭金の采配を預つて號令し、總選擧に於ける功績の大半を、安達一人が浚つて行つた形になつた、郷里熊本の選擧で、形勢非なりと見るや、前日電達して、自分の投票を全部投げ出し、切り取り勝手と云ふ離れ業をして、最後の勝利を占めて仕舞つた、之は、何人も知つて居る消息だ。

▲外務省の參政官としては何んなものであらう、朝鮮支那の事情には通じて居る筈だが、其他の技倆は全々未知數だ、注文の六つかしかる可き加藤外相が、頭を縱に動かした以上は、別に信ずる所があるのであらうか、尤も口の堅い事にかけては、黨人でも珍品とされて居る、外務省には持つて來いだ。

▲農商務の町田忠治は、人も知る通り日本銀行の落武者で、同志會切つての財政通だ、演說はズウ〱で、極めて光彩に乏しい方だが、頭の確かな事にかけては、武富遞相、片岡直温と好箇の對照と云はれて居る、併し以前は長い事新聞や雜誌に關係した事もあるので、滿更算盤の化物見たいな吏人氣質ではあるまいと思ふ。

▲山口銀行の關係で、大阪の財界には相當に勢力を持つて居るが、何う云ふものか仲間内の評判がよくないやうだ、それも極めて馬鹿氣た批評で、理屈ポイとか旋毛を曲げるとか、何うせ人格を危うくする程の問題ではないが、將來のある可き人間としては、こんな事で何とか云はれるだけ、小しくヘマだ。

▲それは人間が正直過る所爲もあらう、公平がつて見たい癖のある所爲もあらう、正直過るのは至極結構だが、公平がる癖などは有難いものぢやない、見た所忠朴敦厚、串談一ツ云へないやうな風だが、あれで酒も相當にイケて、興に乘ずれば隨分小唄位はやる相だ。

▲司法の田川大吉郎は、基督敎の說敎で鍛へた演說、下ッ腹を抱へて俯向加減に『故に』とアクセントの强い聲を出す、海軍の早速整爾は、義太夫で練つた辯舌、トン〱と疊んで行つて、錆のある凄壯な聲を一段張り上げる、兩者共壇上の雄者、彌次られてヘコ垂れるやうな事は萬々ない。

▲田川も大分世間から誤られて居る方だ、冷酷とか偏窶とか云ふ人もあるが、親炙した人の話では、決して其んな風はなく、寧ろ情誼に篤いよく物の解つた男だと云ふ事だ、頭の冷靜な人にあり勝の癖で、兎角人と親み難いのと、何となく氣取つた風のあるが缺點だ、そんな事でツイ何

とか批難されるのであらう、モウ一つ、規帳面過るのと俐巧がる癖のあるのも疵だ。

▲二十八議會の頃であつたと思ふ、最終日の議場で、七八十もある請願を、慣例通り一括して鬼に仕やうとすると、止せば宜いものを田川君『それは不謹愼だ』と文句を云ふ、議院法を楯を取られては如何とも仕方が無い、紛々たる不平を抱き乍らも、少しは自棄氣味で、一々委員長の報告を濟して、それを又規則通り採決する、到頭三時間餘り、此馬鹿氣た手續を繰り返すの破目になつて仕舞つた、然るに當の田川君は、サッサと切り上げて仕拂つて、議席に影も形もない、辛棒役を承つた諸君、怒るまい事か『田川の僞善者』と云ふ聲が、期せずして諸方に起る騷ぎだ、

▲一體田川には、こうしたイヤな癖がある本人は惡氣もないだらうが、結果から云ふと非常に相手に惡感を與へることになるのだ、僞善者とか冷酷とか云はれるのは、恐らくこんな黨を誤解されるのではあるまいか、頭も良し、文章も演説も立派、參政官には持つて來いだが、それにしても司法省とは少し氣障だ。

▲早速は田川畑の人間だが、田川より野趣を帶びて居る丈けに、從つて批難は少い方だ、議會でも年々器量を上げて、今では將來のある一人と云つても、差支はない額になつた、之も海軍はチト變だが、外務や陸海軍は、黨人と沒交渉のやうに思ふのが、反つて舊思想かも知れない。

▲遞信の藤澤幾之輔はコロボックル式の野人だが、ドン底に恐ろしく俐巧な所がある、之を一言にして盡せば、如才のない豪傑で、見てくれいよりは危な氣の無い男だ、あの茫漠たる[illegible]乎で、案外用意周到に切り廻したら、議會の答辯なども、田川や早速より反つて見事かも知れない、勿論遞信省關係の事務には全然素人だらうが、そんな事を云つて居た日には、何日まで經つても、官僚の跋扈を默認しなければなるまい。

▲文部の桑田熊藏は、一木文相を稍や少さくしたやうな心持の人だ、參政官としても至極立派だらう、陸軍の眞鍋斌は、例の馬蹄銀さへ付き纏はなければ、申分なしだ、今日まで無事で通れば、山本權兵衞伯位の格にはなつて居る筈だ、出直して後進の岡陸相の下に、今更參政官では氣の毒だが、返り新參の潑溂たる元氣を買つてやる位の雅量は、敵味方共あつてよからうと思ふ。

▽參政官論

菊池武徳

今回の參政官の個人々々に就いて批評をせよといふことは困る。參政官落選候補の一人として世間からいろ〳〵取沙汰をされてゐる今日、私の口から妄評を敢てするととなれば、『何れも立派な方々である』とでも言つて退けるより外はない。然しながら參政官論といふことになれば、それは自ら問題が別である。

私は思ふに、今度の參政官を設置するに當つて政府はどんな役目を彼

等にさせようとしたのか。近頃加藤男が金澤に行くのに鈴木安達の兩君をも連れて行つて居るやうであり、旅行規則などをも新たに制定したところから觀れば、此方面にも參政官を使ふつもりであるやうにも見えるが、最初は單に議會に於ける説明應答のみを以て其職を定めたやうに見受けられる。議會に於ける説明應答は次官局長の力を藉らねばならぬところであつて、素より初めの内は不馴れであらうが、それとても自然に馴れて來れば上手にもなるから、それはよいとして、參政官の最も大切な役目は院の内外、政府と國民、政府と政黨各派との間に立つて英米で謂ふフキツプの役目をするといふことであることを閑却してはならない。今までのやうなビユーロクラチツクな時代ならば兎も角、今日のやうなデモクラチツクな傾向の時代になつて來ては政府と國民との意志の疏通を圖るといふ事が肝要であつて、それには官僚の畠に養はれたる官吏の如き者の能くするところではない。必ず民間の事情に精通した所謂有志家の如き者の力を藉らなければならぬのである。本當から言へば、參政官は此必要に迫られて新設せられたものでなければならない。然るに今日新任されたところの參政官の顏振れを見れば、このフキツプの役目をする資格を有つて居る者は一人として見當らない。今日の同志會内に於ては此任に當る者は初めから尠いのであるが、我黨から出た田川君にして、早速君にしろ、演説は上手であるが、其演説も地方を遊説して地方の有志家を説付けるといふ段になれば二人とも適任者といふことは出來ない。又同君等にてもそれを以て職としてゐる人達ではない。同志會の藤澤、安達兩君に至つては決して其任ではないと思ふ。藤澤君はまだいくらか有志家肌の人ではあり、同黨の舊い功勞者であるが、黨外に於て、即政友會は勿論、國民黨又は中正會に何等の勢力をも有しない人である。安達君に至つては、時に峻辣な手腕を揮つて仕事をすることはあつても、黨外は素より黨内の人望から言つて決して其任ではない。かうして觀て來ると、今日參政官中殆ど其人を得ないと謂はなければならぬ。若し參政官といふものが、單に議會の答辯應答を以て職とするといふならばそれでもよい。然しながら今言つたやうに院の内外に在つてフイツプの役目をするものとしたらば、其役目は今日官僚的色彩の濃かな現閣と、一般國民との間を融和せしむる最も重大なものである。然るに其參政官を物色するに多くは官僚的色彩の者か、然らざるも官吏となつて得意になつてゐるやうな人のみを擧げて、それで參政官新設の意義があり、其職を全うすることが出來るか。私は何の爲めに、こんな煩瑣な役目を設けたか、政府の意あるところを解するに困しむものである。

▽新參政官月旦

笑　生

一、大體に就て

▲樗蔭詞兄、頃日來相州の海に趣き居り、御書面を拜見したるは廿日の

夜に候ひし故、本稿はホンの感じたる儘を申述ぶるに過ぎず、先づ井戸端會議の種類として御覽下されたく候。

▲見渡したる所、實は井戸端會議の問題位に過ぎざる顏觸れには無之や、大臣の卵だの、大臣の候補者だのと煽てる者もあるやうなれど、其の二三者を除き、彼等を將來の大臣なりとすれば、聊か情けなき感は之れあらざるか。

▲稱藤詞兄、藩閥は情實のために人才登用の道を塞げりとは、政黨者流よりして常に聞く所に候、併しながら、今度の參政官任命ほどの情實が、曾つて藩閥の間に行はれたりや。世には是れ設立匆々の事なれば恕すべし、唯だ斯の如くにして段々と政黨員を養成するを可とすと論ずる呑氣者あり、心得違ひも亦た極まれり。

▲國家を以て政黨者流のため事務を練習する草紙となさんは、餘りに高價の道樂にはあらぬか。日本が政黨政治の練習を爲しつゝある間に、列國は其の實力を蓄ふべく驀進しつゝあるなり。殊に建國以來の大難關に立てる時に於て、政黨政治の練習とは、餘りに呑氣過ぐるにあらずや。

▲頃日武富遞相に對して、參政官の冗官にあらざるなきかを質したるに、遞相は『衆議院議員は、出鱈目の質問を爲すものにて、役人とは心理狀態を異にするが故に、彼等の心理狀態を了解して答辯するにあらざれば、徒らに押問答に時間を費して、議事の進行を妨ぐるのみなり、參政官の設置の如き、此の點に於て最も功あり』と申されたり。

▲如何さま一理なきにあらず、併しながら斯の如き議員と斯の如き官吏とを有する國家は禍なるかな。議員は出鱈目の質問や揚足取りを以て能事とし、政府は同じく議員を政府委員とし、答辯異同の辯を以て一時を胡麻化し去れば足れりとす。上下交々相欺いて國終に危しとでも申すべきか。

▲大隈内閣が參政官を設けたるは、實は山本内閣が改正したる官制を舊に復するが爲にてありしなるべし。實に山本内閣の官制改正は山縣派に於て大反對ありたること御承知の通りの次第なれば、大隈伯は其の意を迎ふるために之れを復舊せんと思へど、唯だの復舊にては餘りに露骨なるが上に黨人の反對もあることゝて、別に參政官と云ふ伴食次官を設け、世間態を繕ふと同時に黨人の獵官慾を滿さしめんとしたること、見透きたる策に候。

▲政務と事務とを區別すると申せども、政務とは抑も何ぞや、事務とは如何、英國などにも斯の如き區別を云々する者は之れなし、英國にては一を國會の次官、一を永久の次官と申すこと御承知の通りなるが、英國にては下院には下院議員でなければ入ること能はず、上院には上院議員でなければ入ること能はざる慣例となり居るが故に、上院に席を有する大臣は止むを得ず下院に席を有する國會の次官を置かざれば答辯も主張も出來ぬわけに候事言ふまでもなし。

二、安達と藤澤

▲安達は明治三十五年の總選擧に初めて衆議院に現はれ、藤澤は廿五年

に一度衆議院議員となり、其後中絶して三十一年から引續き今日まで當選し來りたる者に候、されば衆議院議員としては、藤澤の方がズツトと先輩に候。

▲安達は熊本國權黨の壯士として、佐々友房の乾兒たり、衆議院議員となりては、同じく佐々の殼に帝國黨の一人に加はり候。當時の帝國黨員は總て十七人にて、其の前年まで熊本選出議院の同黨にある者七人、政友會にある者一人なりしを、三十五年の總選擧に於て五人に減じ、政友會の方に三人を割取せられたる次第にて、彼れが政友會に對する怨みも隨分古きものに候。

▲藤澤は年僅かに廿一にして代言人となり、明治十六年には河野廣中の福島事件の代言を爲して官憲を痛罵したる結果、官吏侮辱罪に問はれて代言人が禁錮に處せられる奇觀を演じ、之れが爲めに却つて虚名を賣りて家業が繁昌したる由。

▲明治廿五年、有名の干渉選擧の際は賢こくも無所屬を標榜して當選したり。斯の如き際には無所屬議員の增加するものにて、當時は彌生倶樂部（自由黨）九十五人、議員集會所（改進黨）三十七人中央交渉部（政府黨）九十五人、獨立倶樂部三十一人に對し、無所屬は四十二人の優勢を保ちたり。

▲大手ながら右の黨派別を今日に比すれば頗る面白く候。彌生倶樂部は政友會に比すべく、議員集會所は國民黨に比すべく、中央交渉部は同志會に比すべく、獨立倶樂部は中正會に比すべく、無所屬は今の無所屬團に比すべきか。

▲當時（第三議會）選擧干渉上奏案にて獨立倶樂部は反對したるが、之れが爲めに内部に紛擾起り、無所屬も亦反對したるも遂には四分五裂となり、中央交渉は殆んど全滅の姿となりて、第四議會に於ては彌生倶樂部（九十一人）議員集會所（四十一人）議員倶樂部（六十人）東洋自由黨（四人）中央交渉部（十一人）同盟倶樂部（二十人）芝倶樂部（十八人）有樂組（十人）實業團體（七人）井上（角五郎）組（五人）紀州組（五人）無所屬（二十人）と云ふ十二團體の分立と相成、藤澤は神鞭知常、安部井磐根等の下に有樂組の一人となれり。今の政府與黨亦た此の轍を踏むことなきか。

▲三十一年には進步黨の候補者として當選し、同志會の成るや大石氏に從ひて之れに趣き、後藤男の盛んなる頃は、頗る男に接近したるが如き有様なりしが、今は一心專心加藤男に忠勤を勵みつゝあり。

▲容貌愚なるが如く、態度朴訥なるが如く、黨内にての德望家なれども郷里にては村松龜一郎の人望に及ばざること遠く、一部の人々よりは喰はせ者とも評せらる。併しながら兎も角遞信省參政官としては申分なき人物なるべきか。

▲中央交渉部は西郷從道、品川彌二郎が國民協會を組織するに及び分裂して大半之れに趣き、議院内に於ては議員倶樂部と稱し（第四議會の時所屬議員六十八人を有せしが、第六議會より議院内に於ても國民協會と稱するに至り、所屬議院は二十六人に減せり。國民協會なるものは元來

干渉に依りて製造したる議員多數なければ、斯く減少するは自然の數のみ。

▲而して品川逝き西郷亦た表面の關係を斷つに及んで帝國黨と改稱したるは實に三十二年七月第十四議會前の事にて、所屬議員は二十人なり、安達謙藏が議會に出たる頃は更に減じて十七人なりき。而して佐々友房死するに及んで更に更に凋落し、第一次西園寺内閣の組織せらるゝと殆んど同時に、帝國黨は解散して甲辰俱樂部、無所屬議員の一部等と合し、以て大同俱樂部を組織したり、是れ桂公の後援に依るものなれども、桂公は深く隱れて大浦子をして操縱の任に當らしめたり。

▲此の時安達は大同俱樂部内に於ける　帝國黨一派を代表して勢力を示し、次第に大浦子の信用を得て、桂直參の臼井哲夫と共に俱樂部の首領たる實權を收めたり。

▲佐々友房は熱心なる帝國主義者にして、内政に於ては政府を援助して以て帝國を外に發展せしめんと試みたるが、安達に至りては帝國主義に對する充分の了解なく、唯だ官僚政治家の走狗となりて滿足する底の人物に過ぎず、熊本國權黨は實に佐々の死と共に精神的に亡びたりと云ふも可なるべく候。

▲併しながら、官僚政治家の走狗としては、安達の手腕は佐々の比にあらず、彼れはブルドックの如く一度噛み付くや、肉を食ひ取らずんば離さずと云ふ人物にて、常に陰險辛辣の策を藏し居り、實に官歷なき大浦と申すべし。

▲彼れが容貌を見よ、口は唇薄くして上方に灣曲し、眼は凹くして三角に、鼻尖り頰落ち、頸直立して色青白く、悉く是れ陰險、狡猾、智惠、敏捷神經質等の象徵ならざるはなし。藤澤は唇厚く、眼は細長く、鼻は團子で頰豊かに、顏圓く色黑し。兩人の差は實に其の容貌の如くに候。

▲小生一日安達に會し、問ふに政界の前途を以てしたるに、彼は事もなげに笑ひて、政治は勢なり豫測し難しと言ひ、更に二大政黨論如何と質せしに、願くば我が黨唯だ一黨とならんことを望むと放言せり。彼れは政治を以て政權爭奪の戰爭なりと思惟し居るものゝ如く、從つて勝ちさへすれば可いと云ふのが其の理想なるらし。

▲先年大同俱樂部に紛擾起り、一壯士の某俱樂部員を毆打したる事あり、元と是れ内輪喧嘩に過ぎざるを以て、傍人之れを調停し、毆打したるステッキは折られて床下に投げ込まれ居たるに、安達は之れを聞きて自ら蜘蛛の巣だらけになりて床下に入り、其のステッキを取り來りて證據品とし、直ちに告訴に及びたり。彼れが性格は此の一事を以て知るべきのみ。

▲彼れが外務省參政官就任に對する世評を聞けば、或は外交の智識なしと云ひ、或は外國語を知らずと云ひて、其の不適任なるを嗤ふものあれども、小生は比較的適任と考へ候。彼れは辭令にこそ嫺はざれ、智嚢は加藤外相以上なるべきやも知れず。殊に彼れが如き專制政治の思想を有する者が内務省にでも行きたらんには、如何なる亂暴を働くやも計り難し、國權黨の出身にもあれば、先づ外務省に置くを以て國民の疑懼を少くする所以なり。

三、濱口と下岡

▲兩人共に明治三年の生れにて、明治廿八年の帝大出身なり。同年卒業の政治科に小野塚喜平次、小島滋太郎、濱口雄幸、下岡忠治の順にて、神山閏治、勝田主計、菅原通敬等も其の内に含まれ、法律科には清野長太郎、河村金五郎、田所美治、上山滿之進、久保田政周等ありき。

▲下岡は大浦農相の時代に秋田縣知事より農務局長に擢でられ、累進して農商務次官、樞密院書記官長等に任じ、濱口は最初より大藏省に入りて專賣局長、遞信次官等に進みたる人。

▲兩人共純粹の官僚出身なるが、下岡は深く長閥に取入りて其の覺へ甚だめでたく、濱口は寧ろ官僚の桁脱れにて、藩閥に特別の縁故もなく、折あらば土佐の先輩に倣ひて政黨界に飛び出さんとの野心を有し居たり。

▲然れば濱口の同志會に入り或は代議士となり或は年來の志望を達したるものなるに反し、下岡は種々の情誼に依りて、止むを得ず代議士となりたるもの寧ろ其の素志に反したりと云ふべし。所謂下岡は官僚主義の人たり。

▲濱口は容貌も人格も藤澤に似たり、下岡は顔の輪廓こそ安達と相違あれ、其の無骨なる、其の青白き、其の鼻、其の顔の作りなど甚た相近く、人格は學問を有する安達と評すれば之れを盡す。

▲濱口は輪廓茫漠として内に熱火あり、下岡は輪廓明瞭にして内に冷氷あり。濱口は德の人にして下岡は才の人なり。藤澤と安達との比は即ち濱口と下岡との比ならずんばあらず。

▲大浦の處世術は實に巧妙なるものにて、御用商人等が相手の嗜好に應じて、或は金、或は女、或は骨董にて之れに取り入る代りに、彼れは相手の信用したる人物を用ゐるなり。一木喜德郎に對して慇懃を極むる如き、山形の歡心を得んが爲めにして、下岡を用ゐるも亦た其の類と外ならず。

▲濱口は既に黨人としての試驗に及第せり、下岡は今試驗にかゝりつゝある所なるが、果して及第し得るや否や、否な彼が黨人となり代議士となりたるは、素より其の志にあらざりしを以て、强ひて及第せんとも欲せざるべく、軈がて大隈内閣倒れて、政權に遠ざかる時に至らば、別に活路を求めんとすべきや必せり。

▲藤澤と安達と、濱口と下岡と、夫れ〳〵全然正反對の思想感情を有す。藤澤と濱口とは政黨主義者にして、安達と下岡とは非政黨主義者なり。安達の如き身は政黨に籍くと雖も、其の思想は專政主義武斷主義に屬し、唯だ政權爭奪の爲めに政黨を利用せんとするものゝみ。

▲さるにても、此等反對の諸人が一黨に席を列ね、一政府に椅子を分つが如き、犬猿猫鼠の行列を見るの感はこれなきや。

四、町田と早速

▲兩人共財政通と自稱する天狗なり。議會に於て早速が我れは頗なる氣障な財政演説を聞くこと久しきものなるが、每年每年同じやうな事の繰

り返されては、聽く者の耳にタコが出來て、近年は傾聽する者も少なくなれり。

▲養父が高利貸にて大吝嗇なるため、早速は代議士とまでなりても小使錢にすら不自由なりとの說あれども、兎も角嚴父に、財產があればこそ廣島の商業會議所會頭たること既に久しく、鳥なき里の蝙蝠然と威張らるゝ次第なり。併し中央政界に出ては、御承知の如き地位にて、此の人が一節官の參政官などになるべしとは夢にも思はざりしが、小數黨分立の餘德は端なくも此の人に酬ゐて、エライ光榮に俗したるものなり。其れも大藏省とか農商務省とか申せば、先づ我慢が出來ると云ふものながら、海軍省とは實に驚きたり。又た彼れだけ財政を以て自任したる人が、海軍省に行けと言はれて、直ちに之れを御受けに及ぶ如きは、小生早速君の名譽の爲めに之れを惜しみ候。

▲出來廣島は官尊民卑の風盛にして、大隈內閣成立の際花井君が法制局長官たるべしと傳へらるゝや、選擧區民は花井君の爲めに非常なる名譽となし、中には上京して就任を勸告したる者もありし由。早速の今度の任官の如き大なる賞贊を以て迎へらるべく、次回の選擧には縣下の投票を一人で取つて了ふ騷ぎなるべし。早速が海軍でも宜しいとて敢て承諾したるは、選擧民に對する義理立てにもや、斯く解すれば是非もなき事なり。

▲町田の農商務參政官は申分なし。彼れは初め大學豫備門に學びたるも中途退學し後ち犬養氏の援助に依りて大學選科を卒業したり。實に犬養氏の門下生と申せば彼れこそ眞の門下生にして、青地、前川などよりも、ズット密接の關係を有す。

▲大隈伯に紹介し、報知新聞に入れたるも亦犬養氏の周旋なりき、彼れが報知新聞を罷めて一時生活の資に窮するや、岩崎より一萬圓を出資せしめて、特に彼れに仕事を授くべく東洋經濟雜誌を發行して其の編輯に任ぜしめ、次第に岩崎に紹介して日本銀行に入らしめ、遂に山口銀行頭取となるまで、一に犬養氏の援助にあらざるはなし。

▲今では四五十萬圓の財產も有すべく、今こそ犬養の舊恩に酬ゆべき時なるに、端なくも政治上の意見を異にして、大石氏等と共に同志會に走りたるは、公人の行爲としては寔に是非なし、彼れを忘恩呼はりするは少々酷に失すべきか。

▲東北訛りこそあれ、辯力も可なりにて、頭腦は有繁に犬養氏に見込まれたる丈あり、理路井然として片岡直溫よりは却つて判つて居るかに見ゆる場台もあり、早速よりは一枚上のやうなり、

▲早速の街氣町田の現金、共に人に惡感を與ふるも、要するに兩人ながら人格は普通にて、是れと云ふ大欠點無く、先づ現代にては申分なき紳士と申すべし。

五、桑田と田川

▲桑田は博士大學講師なり、田川は早稻田專門學校出身にして、曾て耶蘇の說教師たりし事あり、一寸似通つた點もあれど、桑田は德と學とに

於て田川に優り、田川は才と事務とに於て桑田を凌ぐ幾何なるを知らず。

▲桑田は多額納税者議員にして、而かも社會政策、勞働問題に就て熱心なる研究主張者なり。然れとも未だ小作人を如何に優遇したるかを聞かず、米價調節、蠶絲業救濟に就ては、之れを實行すべく大に運動する所ありたり。大地主にして製糸家たる彼れとしては然らざるを得ざりしなるべし。

▲田川は曾て説教師たり、今も熱心なる信者なれど、世人動もすれば彼れを喰はせ者と評す。然れども小生の視る所を申せば、口に正義人道を唱ふるだけでも當世には尊ぶべし、公々然と不義無道を唱へて得たりと爲す者多き世間なるにあらずや。

▲彼れは改進黨當時より尾崎氏に親みしが、先年其の主宰する都新聞にて東京市長候補者の投票を募り、尾崎氏は大多數を得て、間もなく眞物の市長に任ぜられ、彼れは一躍水道部長の要職に就きたり。

▲郷里長崎縣にて選擧を爭ふこと再度にして辛やく當選したるが、其の選擧費は如何にして調達せられたるかなど申すものあれど、是れ彼れが耶蘇信者を標榜するが故に世間の評判になるものにて、當世を見渡すに其の金が假令節を賣りたるものなるにせよ毫も怪しむに足らず、小生は彼れと桑田の人格は之れを信じて疑はざるものに候。

▲殊に田川の事務の才に至りては、快刀亂麻を斷つの趣ありて、行く所として可ならざるなく、文才辯力亦た甚だ侮る名からず、更に圓熟し來らば將來有爲の政治家たるべし。唯だ一種の耶蘇坊主的臭味の拔けざるを惜しむべしとなす。

▲樗蔭詞兄、締切り切迫の際にて、取り急ぎたるまゝ、惜世の惡文にて恐縮に候。副參政官は今少し生長したる後ならでは、今の處海のものとも河のものとも判からぬ次第にて、批評すべき點も見當らず候。匆々

▽參政官諸先生

早川鐵冶

抑々參政官とは何か。尸位素餐である。大隈が内閣を組織するといつても斯ういふ餘計なものを拵へる。曩きにも參與官といふのを設けたが是れも尸位素餐であつた。何れも此れも政治家の演説遣ひみたやうな奴ばかりだ。今度の參政官でも、中立と稱する官僚の下岡、同志會の官僚濱口は是れまで行政事務を遣つて居つた人で、相當に仕事もしてゐるから、參政官としても又立派な意見も有つて居るだらうと思はれる。大藏にしても内務にしても今度の參政官は新參事官と同級同窓で遠慮がいらぬからよいやうなものだが、これが他人なら大臣といふ主人と參政官といふ主人と、所謂二君に事へる譯で下の者は非常に遣りにくい。殊に濱口とか下岡といふやうな事務上の次官を遣つた者が上に立つてゐては實際の事務次官は嘸辛いことだらう。が赤の他人が一所になつて仕事をするのは尚辛い。どつちにしたつて餘計なものだ。それでも下岡とか濱口とか

はまだよいので、其他の參政官先生と來たら何の取柄があるか。月給を貰はふといふことと、お茶を汲んで出す給仕の仕事が一つ殖へることぐらゐより外に何にもないぢやないか。何にもならぬばかりぢやない、有害無益だ。歐洲の事情を知らぬ安達に、外務の仕事が出來るか。小栗の番頭さんに外務の事務が執れるか。素養も何もない壯士上りが、一躍して外交の事務が執れるものではないぢやないか。鈴木とか伊集院とか、石井とかいふ連中はまだしも學問が出來るし、二十何年來といふもの仕事を遣つて來てるから、安達などがそれと太刀打出來るものではない。

陸軍省では必要のないのを、制度の上から強いて、豫備の中將や、醫者を連れて來て置いたやうだが、この豫備の參政官先生、都々逸や端歌の作り粹を遣つて得意になつて御座る。そんな事で仕事が出來ると思ふか、そんなことだから岡などのやうな後輩の下に從いて、いつまでもうちく\してゐなければならないのだ。醫者などが役に立つて堪るものか、

海軍省の早速君、是れは特に國民一般と共に我輩は偏に同君の實行的手腕に俟たんと欲するところが多いのである。君は演說は實に巧いものだ。其巧妙なる辯舌を以て君は平素常に租稅を輕減し、國民の負擔を輕からしめんことを力說せられたものだ。ところが今度もどうせ海軍充實などと言つて、國民の膏を搾る奴が提出されるに違ひないが、君の大々的手腕に俟つのは實に此時なのだ。どうか君の持論に依つて此海軍の要求を喰ひ止めて貰ひ度い。我輩は今から樂しみに待つてゐる。それはよいとして、田中善立といふのは、あれは何だ。談議坊主ぢやないか。談議坊主に日本の財政が解つて堪るものか。

◎次に司法か、我輩は司法省を今のやうな制度で置く必要がないといふ意見を持つてゐる。今迄は法律制定といふ役目を有つて居つたが、法制局がある以上、官吏の移動以外に何の仕事をもしてゐないぢやないか。そんなものを置いておく必要が何處にあるか。其無用な司法省に無能な尾崎を置いて仕事が出來ると思うてゐるか。尾崎が司法大臣になるには、我輩なども大隈のところへ泣き付いて犬馬の勞をも取て遣つたものだ。それが僅か高等官五等かそこらの田舍の檢事を東京に轉任させて呉れと言つて賴んでも、それさへ出來ないぢやないか。力がないといふのか、腕が無いといふのか、但しは外の參事官などに氣兼して出來ないのか、いづれにしてもそれくらゐの事さへ出來ないやうな無能な者が仕事の出來る筈が無いぢやないか。其下へ田川、關和知の兩君が控えさせ給ふことになれば、司法省もお目出度いことだ。ボンヤリ机を並べて手持無沙汰でゐなければなるまい。每日く\遊んでゐるといふことは脇目から見れば結構なことのやうだが、月給を貰つて每日何の仕事もせずに、遊んでゐるといふのも嘸かし辛いことだらうとお察し申上げる次第だ。お三人とも揃ひも揃つた演說家だから、演說の使ひ別は巧いものだらうが、あれて所嫌はず行政演說でもされようものなら、司法省の奴等は畢丸が上つたり下さつたりすることだらう。

文部の桑田君は社會問題に精通せられる。寧ろ農商務省に置いたら實見の有る人だらうと思ふが、文部ではどうだか。今日のやうに敎育調査

會などと言つて、文部以外に文部を置いてゐては仕事は出來ない。

農商務の町田君は學校を中途で出てから、新聞記者となつたり、銀行家となつたりして相當の見識は備へて居られる。

行政上の手腕も有して居られる。保險會社や銀行や工業會社にも居たから、意見もあらう。が、意見は有つても、あんなおとなしい人では實際の仕事は出來ない。それに大臣の河野に至つては矢張り野に置け蓮華草で、臺閣に列する人ではない。然るに其身を圖らずして入閣したのは君の爲めに歎息せざるを得ない。苟も天下の志士が伴食大臣として終るのは天下の爲め惜しむべきことだ。それを助けて參政官の役をするのは君の爲めに果してどうかと思ふ。

遞信の藤澤にしろ、荒川五郎にしろ、多少の教育はあるから、文部省ならよからうと思ふ。藤澤君は昔からは、野黨の人で田舍代言人をやつてゐたから、田舍代言人的の法律は知つてゐる。誰にでもお上手な、愛相のよい人で、それだけ平和の時には事務官あたりから此上もなく歡ばれるだらう。

然しながら、要するに參政官諸先生も少しは自己の政治家たる地位を考へるがよい。僅か五千三千の金で、三十八九年の大學出の小僧ッ子と机を並べて喜んでゐるやうな事で何になるか。此調子では今に教育も何も無い三多摩の壯士から大臣が出るやうになるだらう。そんな人間が上に立つて、今日多少學問をした、高等文官の試験にも通つて來た若い者の上に立つて指圖をせねばならぬといふのは立憲政體の弊ではないか。



評論

意識の說

中澤臨川

一

人間の意識又は精神は一つの限定された容器ではないのである。我等の性格を何處々々までも個一的、絶對的に見る見方は、近代歐州に於ける科學文明の餘燼である。

初め彼の邦の心理學者は反射作用を以て一切の心理顯象を說明しようと試みた。即ち人間の意識は五官を通じての外界からの刺戟をその儘受け入れて、自働的に働く一種の機構に過ぎないものとして研究された。その說が哲學化されては、物心平行論となつて現はれたのである。最近に到り心理學は漸くかやうな機械的解釋から脫することを得て、我等の意識の自由、偶然性（コンティンゼンス）、自發性（スポンタナイチイ）を容認するやうになつた。

かやうな自發性は、人間ばかりでなく、あらゆる生物の特徵であつて、その發達の成行を理智的に豫知することは能きないが（それが偶然性の偶然性たる所以である）要するにこの性質はそれ〴〵各個に特殊で、且つ個性の保存の方へ向ふといふことだけは確かである。さればあらゆる生物は自己の個性の所有者で、その個性の力に依て有機的に統一せられてゐる。で、高等の生物になればなるほど其個性はより顯著になり、且つ統一力を强固にすればかりか、人間に到つてはそれが傑れた意識的の境地で發達したのである。

個性の特殊性、統一性は正に有機體の存在の第一義である。然し、それを餘りに重く考へる結果、是等の

性質を絶對と看做すことはどうであらうか。個性を除りに裁然と切り離して不變的にまた限定的に取扱ふことはどうであらうか。殊にこの思想は意識的な人間に當て箝められる場合最も危險ではあるまいか。

　何よりも我等の經驗が之に裏切りする。人間は久しき以前から、我等の日常を支配してゐる普通意識の周圍にまたは奥に、茫漠として不可思議な作用をなす或は精神素の存在することを不確實ながらに認めて來た。我等の夢の中に於ける不思議な事實、一類の病人の經驗する非尋常な精神狀態、或る人々の宗敎的經驗、藝術家のインスピレイション、さては、戀友愛などに伴つて起る熱情――などの中には、確かに普通意識を以て測度することの能きない精神作用の存するといふことは、何人も否むことの能きない事實である。然し、廣き意識或は「我」に關する我等の知識が科學の領域に入つて組織的に研究されるやうになつたのは、一八八六年にマイアース博士が『潛在意識』(Subliminal)の說を樹てから後のことである。彼の說に依れば、我等の精神內容は我等の日常行動を支配してゐるところの顯著なそして一定の形を成した普通意識または一次意識に限られてゐない。我等には『より廣い意識、より深い能力があるが、地上の生活に關する限り、その大部分は潛在力として睡つてゐる』のであると。で、例へば、太陽の光線が紫から赤までの七色のほかに、我等の眼に見えない幾多の光線を含んでゐるやうに、或は大洋の表面に現はれた孤島がその底では無限の隱れた島と通じてゐるやうに、我等の普通意識を取圍んで此の潛在我が擴がつてゐるものと見るのである。

　マイアースの潛在意識の說は、その後いろ／＼の方面から集められた實驗の結果から、今日では殆んど動かすことの能きない定說となつた(殊に我等はこの點に關し Society for Psychical Research の功を多しとせざるを得ない)。要するに、我等の顯はれた個性を絶對と見て、それから精神を一つの限定された容器のやうに考へるのは固陋な思想である。我等の普通意識は我等の全我のほんの一部分に過ぎない。それは我等の一

次的個性が廣い意識の一部を自分自身の周圍に凝固させ分離させたもので、そのほかにこの中心核を圍んで廣い暈縁を成す潜在我の世界がある。で、この暈縁は圓波の如く次第に擴ろがり、而して次第に稀薄になる流動體から成るものとも見られよう。

かやうな潜在我は、我等が日常の行爲と習慣とに囚はれてゐる間は殆んど眠つてゐるかにみえる。然かし事實この「我」は眠つてゐるのではなくて、ベルグソンの詞を借りて言へば『ちやうど或る壓力を保つ汽罐の中の蒸氣のやうな』活動の姿を呈してゐるのである。唯だ我等が强てそれと一次我との間の戸を閉ぢてゐる爲めに、潜在我は外へ現はれてその働きをなすことが能きない。然し、我等が一たん功利に無關心になりえた場合、我等の第二次以上の意識は、マイアースの所謂 "Subliminal uprush" を爲して、或る驚くべき力を現はすのである。

二

で、潜在意識とは、取も直さず、我等の普通意識の戸の外にある一切の思想、感情、意志などの廣い其地を總括したものである。然らば我等の全體としての意識は、なぜ潜在我と普通我とに別れたのかといふに、凡そ我等の地上生活に於ては、肉體に對する功利的關心が先に立つ。我等の知覺も感情も思想も、すべてが生活の奴隷として實用を目安に動いてゐる。で、我等の意識の表面はその爲め物質化し、凝固し、一種の自働機關としてのみ動作する樣になり了せたのである。之が普通意識の成因である。されば普通意識は一種の惰性、型、成心に依て物を視、感じ、または考へる。それは人爲我の障壁を造つて區別し、分析し、そして敵視する「それにも拘らず、我等の眞我は決して死んだのでもなく、眠つてあるのでもなく、たゞ意識の上げ蓋の下に隱れてゐるのである。で、かやうな潜在意識が、忘我の瞬間に人爲我の隙を狙つて外へ現はれる場合、どういふ働きをするかといふに、その第一の特徴は、我等の五官や普通意識の能くすることのできない關係に於て他の物、他の人格、又は或る高い力と交通

するといふことである。して、その交通は普通意識が功利の成心を置いて凡てを區別的にまた敵恃的に視るとは事違ひ、之は至つて自然的にそして親和的、同感的に對者の中心に身を置き、それと一體となつてその生命を身讀しようとする志向がある。之は唯だ機械的に事物を種別したり、冷かに證明したりする經驗界でなくて、文字通りに眞に「經驗」する世界、全人格を以て試み、感じ、生きる世界、獨逸語の erleben する世界である。我等は良心の苦みや、藝術の喜びや、至純な戀愛や友情やに於て屢ばかやうな經驗を積まなんだか。そして我等はまたかやうな經驗に於て、一つの香も唯の香でなく、一つの色も唯の色でなく、一つの音も唯の音でなく、その色、その香、その音に全自我の滲透をみ、同時に凡ての差別は消え、詞は少しも用をなさない世界のあることを覺えなんだか。

殊にかような顯象は、我等の宗教的經驗及び藝術的經驗に於て最も能く窺ふことが能きる。前者と潜在意識との關係は、ウイリアム・ジエームスの『宗教的經驗のさま〴〵』の中に詳しく引證して說かれてゐる。例へば、悟道または轉機（コンバーション）の如き事實と雖も、我等が潜在意識の存在を信ずる限りは、決して不可思議の出來事ではない。我等の凝結した普通我の周圍に廣い世界を形造つてゐる潜在我は一種活潑な流動體で、それが一たん自我の囚はれから放たれるや否や、飛動律（カイチナツ、セオリイ）に從ふ氣體の如く、いかなる間隙にも侵入し、いかなる他の氣體とも自由に混和する性質を有してゐる。で、物的我を超越したところの斯樣に自由な、公開的な、そしてホスピタルな經驗界では、何人の意識も自由に出入し、親和し、そして一體となることが能きる。それのみならず、我等は其處で、我等自らの「我」よりも優越した或る力、聖意識、即ち神とも相逢ふのである。猶ほ宗教的經驗及病理的經驗に於て能く見る個性の交換または崩散（ディスインテグレーション）といふ如き事實も同樣に說明することが能きないであらうか。我等は普通我の周圍を取卷いてゐる潜我的に或る理由から常規以上の壓力が起つて、前者の壁を破壞し、その形を變へさせるといふこ

とを想像能きないであらうか。前に言つたとほり、人間の表面個性を形の定まつた一の容器と考へ、またその特殊性、統一性を何處々々までも絶對と見做すことの能きない理由はこゝにある。

藝術的經驗も亦宗教的經驗と殆んど同じやうに解釋することが能きる。ベルグソンの巧妙な比喩を借りて言へば斯うである。我等と自然との間には黑い幕（普通我）が下されてゐる。若しこの幕が全く切り落されるか、透明になつたとすれば、その時我等は有の儘の純潔な姿で凡らゆる事物を、その形をも色をも、人間の心靈の微妙な變化をも感得することが能きる。然しかゝるは人間に望んで到底不可能の事である。この世には藝術家に造られた天才でも、この幕を上げまたは之を透視しうるは僅かにその一端に過ぎない。一の方面ではこの力を有する人でも、他の方面では無能である。で、その特殊の方面といふのがちやうど我等の一々官能に準據してゐるので、我等は各官能に該當した諸藝術を有つのである。例へば物の形と色とに鋭感な天才がありとすると、彼はその優れた視官の德に依り一切の囚はれを脱して、形の爲めに形を、色の爲めに色を視る。彼はその形と色とを透して事物の内生命に達することが能きる。彼は彫刻家または畫家である。同樣に耳の天才は音樂家となり、人間本然の情緒を色讀しうる者は詩人となり劇作家となるといふのである。

要するに、感應的、親和的に他の生命と交通するといふことが潛在我の第一特徴である。次にその交通の方法に於ても、潛在我は普通我と異なつた所がある。即ち後者よりも廣い機能を有してゐる。我等が普通に他物と交渉するには五官の媒介に依り、是非とも是等の關門を經なければならないのであるが、潛在意識は普通五官を通して外界と接觸するばかりでなく、別に他の感覺をも有してゐる。例へば、我等の諸機關、殊に内臟の奥に座を占めてゐる内在觸覺の如きがそれで、それが夢の中でいろ〳〵の病氣を豫示することは隱れもない事實である。

その外に潜在意識は「眼が無くして見る」術をも心得てゐるが、最も驚くべきその能力は、廣き意味での透感(telepathy)と豫知(Precognition)とである。透感とは處を距てゝの精神感應で、例へば英國と墺太利とに離れて居る二人の間に意志の交換を行ふやうなのを言ひ、豫知とは時を距てゝの精神感應で、未來の出來事を豫斷するのを言ふのである。要するに、我等の潜在我は、普通我以上の感覺を有するばかりでなく時には感覺の力を借らず時と處とを超越して他物と感應する能力のあるといふのが、第二の特徴である。

第一の特徴は内容の上から言つたもので哲學的思索に屬し、第二の特徴は方法の上から見たもので科學的實驗に基いてゐる。

三

次に認識機能としての潜在意識の働きを研べてみよう。

先づ第一に我等は意識の第一歩としての知覺から檢察せねばならぬ。我等の知覺は外界と雖も接近してゐる故に功利的因習の直接に生れる處である。我等は時間、空間等のいろ／＼の範疇を造つて、是等の型に嵌めて外界の事物を取入れようとする。かやうな點から言へば、カントが『純粹理性の批判』の中で經驗的知識を論じてゐるところは正しいのである。然し、さうした作用が我等の知覺の全部であると看る考へはどうであらうか。いかにも普通意識の所屬としての知覺の働きはそれに違ひないが、我等の知覺の極く僅かな部分でもが、時間空間の型に囚はれずに、本然自然の儘で潜在意識の一隅に殘つてゐるといふことがあり得ないであらうか。我等の心理學者はちやうどそれと想像されるやうな微弱な知覺の不斷に存在してゐることを實驗的に證明してゐる。そしてそれは我等の注意が實世間的の行爲に攪亂されてゐる間は何の作用をも現はさないが、我等の眼が專念に向けられた場合には、驚くべく正確な働きを示すことがあるといふ。ベルグソンは、記憶の混らない純粹知覺を以て「物それ自ら」の生の儘の印象であるといふ説を持してゐるらしい(之

に關する彼の說明は甚だ簡單で正確の要領を得ないのであるが)。兎に角かやうな潛在知覺とも名くべき機能の研究は、今後實驗心理學の發達と之に伴ふ適當の判斷とを待つて決せらるべきものであらう。ベルグソンも最近に次のやうな意味の事を言つてゐる。曰く、精神の鄕に於て定形意識の周圍に漠然たる暈緣をなしてゐる無功利の意識の存在するとを許すならば、同樣に我等の行爲の功利の爲めに一定の形に堀られた感官知覺を圍んで漠然たる無功利の知覺の存在することを想像するのは、些しも不思議ではない。是等の研究は正に靈心々理學(プシキカル・レサーチ)の領域に屬すべき事柄であると。

さて知覺の境から一步を踏み込むと、我等は普通我と潛在我とから成る意識の本境を發見する。普通我は前に述べた通り、意識の一部が功利の爲めに凝結したもので、其處は自働律(オートマチズム)の行はれる世界である。即ち機極的或は物的因果律がこの鄕を支配してゐるのも一つ言ひ換ゆれば、カントの所謂純粹理性の住む世界が此處である。即ち認識機能としての普通意識の要素は理智であつて、凡ての科學はそこから生れる。然し、理智は旣定の範疇を置いて、それを通(とほ)してのみ物をみる故に、その認識は人爲的であり且つ部分的である。即ち普通意識の齎す知識を以てしては形而上學(純粹哲學)は成立しないのである。

今一つ注意すべきことは普通意識の世界が靜的で且つ等質的であるといふことである。それは物質世界にかたどつた性質である。で、そこでは數學が萬能に行はれ、その特有の知識即ち科學は普遍性である。なぜならこの世界には眞の個性はないからである。しかもこの普遍性は範疇(即ち心の因習)の有する普遍性で、人爲的の或る消極的の普遍性であるのだ。

潛在意識の境に入ると大に趣を異にしてゐる。そこは異質性(ヘトロゼナイティ)の世界であるが、之を統一する生的志向があつて、且つ眞の個性が活躍してゐる。で、此世界では最早我等を囚へる何等の人爲的範疇もない。我等の認識經驗は自由で、根本的で、且つ「全的」である。前にも述べたとほり、この經驗界では我等の意識は感應

的にまたは親和的に物と交渉するので、かやうな性質が認識作用として現はれるとき、我等は之に『直觀』(ベルグソンの用語)とか『內省』(ジエームスの用語)とか名けてゐる。

ベルグソンは此の世界を持續即ち純粹變化の世界であるとし、この持續の本態を經驗するのが即ち直觀の作用であるといふやうに看做してゐる。彼にとつては理智は功利主義の產物で、獨り普通意識の中に於てのみ行はれて、潜在意識は直觀の獨壇場であるとせられてゐる。從て彼の哲學では、理智は極く卑淺な位置を占めてゐる。

潜在意識の認識機能としての直觀を偏に持續即ち生命の顯象のみを取扱ふ力であるとする斯樣な見方は正しいであらうか。抑もまた此の宇宙には持續し進化するほかの實在はないのであらうか。之は實に難かしい問題である。

先づ私はこれが解釋を與へる前提として、潜在意識が驚くべき理智的能力を有してゐるといふことから說き始めよう。英國の精神學會が報告した研究の中に、之を證明するいろ〳〵の實例がある。サッホォルド博士は十歲の時、其積が三十六桁になる乘法を一分間で暗算しえたといふ。また某る六歲の小兒はその父に伴はれて散步しながら、自分の生れた時の時間と現在の時間とを聞いて、直ちに自分の年齡を秒數で算へた。それが正確に合つてゐたばかりでなく、是等の年月の間に挾まれた二つの閏年までちやんと加算してあつたといふことである。で、かやうな『潜在意識の突發』は多く幼年時だけに起る顯象で、當人にも全く無意識の出來事であるのだ。之を以て見ても、潜在意識が何れだけ巧妙な理智作用をなすかといふことが分かる。それのみならず、昔からの偉大の科學的發見は殆んど凡てが直觀に依らないものはない。佛蘭西の有名な數學者のポアンカレイは、自分の經驗から立證してから言つてゐる。『凡て是等の事實から、無意識我即ち潜在意識が數學上の發見に於て最も重要な部分を働いてゐることが分る』と。

してみると、ベルグソンのやうに一切の理智作用を普通意識の領域へ追ひやつて了つて、直觀はたゞ生的變化を色讀する機能であると斷定する考へは間違つてはゐまいか。我等は寧ろかう考へる方が至當ではあるまいか、即ち我等の潜在意識の有する直觀能力には持續即ち動的異質性の世界を認める力と、靜的同質性の世界を認める理智とが相並んで存在すると。で、かやうに定義された直觀はベルグソンのそれよりも廣義のものである。

次に潜在意識の理智作用と普通意識のそれとはどんなかの相違があるかといふ問題が起つてくる。前者が後者よりも驚くべき早さと巧妙さを以て行はれることは前掲の諸例が示す通りである。

猶ほそればかりでない。今理智が專ら對照とする空間に就て見るに、普通知覺や普通意識の取扱ふそれは立體的で、即ち三「デイメンション」の世界であるが我等は直觀により高い「デイメンション」の空間を經驗することが能きるのである。最近の數學はユークリッドの定理の行はれない世界を心に描きながら、我等の普通意識が絶對と信じてゐる空間とは或る程度まで違ふ他のいろ／＼の空間の可能を闡明することは依て常識の僻見を破つた。剰さへ、リーマン其他の人が發見した超空間の幾何學は、知覺的にもかやうな世界の存在することを證明したのである。

之を要するに、潜在意識の理智作用は普通意識のそれよりもずつと自由で且つ廣いといふことが信ぜられる。後者がユークリッド的に拘束された理智であるならば、前者はより高い世界まで氣儘に放なたれた理智にある。換言すれば、カントが純粹理性として取扱つた理智や、ベルグソンの定義してゐるやうな此理智以外に、我等の意識の奥にはもつと廣い、自然な、驚くべき先驗的能力があるのである。尤もベルグソンも此の點には氣附いてゐたものと見えて、或る處でかう言つてゐる。「同じ理智主義にも二種類ある。その一は眞正の理智主義で、そが觀念を生きるもの、他の一は似而非理智主義で、碁石のやうに弄ぶためにそが流動觀念

を固定概念に不動化するものである」と。

潜在我の認識能力としての直觀をかやうに廣く見るときは、我等の形而上學（潜在意識の科學）は、生命の持續世界を對照とする進化哲學以外に、更に本在(ビーイン)又は本質(エツセンス)の永劫世界を對照とする眞の意味の先驗哲學をも許容せなければならない。ラッセル等の新理智哲學の起つたのは、かやうな點から見て理由のあることである。

猶ほ私は題を改めて私一家の哲學觀を述べ、多少とも從來及び現在の自分の主張に客觀的の肉を被はせた上で、今迄諸方面からうけてゐる私自身に對するいろ〱の批難にも答へ、他人の説をも批評して見たいと思つてゐる。で、この無味乾燥な一篇はほんの序論に過ぎない。

新刊批評と紹介

△想痕　　三宅雪嶺著　至誠堂發行

一代の先覺者、當代言論の雄、三宅雪嶺博士の論斷は其所關常に社會一世を指導せずんば息まず。此書は「日本人」及「日本及日本人」に登載せられたる博士の各方面に亘れる論文を蒐錄したる千四百頁の巍然たる大册。機に觸れ、時の當つて金玉の聲を發せしもの、又以て永く後世に傳ふべしとなす。（定價金三圓八十錢）

△縮刷何處へ行く　　杉本雲舟譯　三陽堂發行

靈肉の問題を取扱ひたる有名なるシエンキユヰツチの作「クオヴアヂス」の飜譯は其當時大に世の耳目を聳たしめたるもの、本書は其縮刷也（定價金壹圓拾錢）

△趣味と常識現代婦人寶典　　小林良一著　大日本雄辯會發行

凡そ婦人として心得べき殆ど總ての常識的知識を網羅したる九百五十四頁の大册にして、蓋し夫れ現代婦人の座右に一本を備へなば、女として又主婦としての所要を蓋し其趣味を發達せしめ得べし。（定價金參圓）

△日本農政史　　矢野友一著　丸山舍書籍部發行

本書は著者が農政の沿革を一般社會の發達と結付けて研究したる農政發達史である。王朝より江戸時代に至る迄の、所謂農國としての日本の發達は洵に能く究め盡されたりといふべし。（定價金二圓五十錢）

△世界教育史

大日本文明協會譯
文明書院發賣

本書はコロンビア大學のポール・モンロー博士の"A Brief Course in the History of Education,"を譯したるものにして、原書は從來の教育史書中最も卓越せるものとして定評あるものなれば、教育に志有る者にとりて必讀の要あるべし。(定價金壹圓九十錢)

△蒙古語研究

橋瑞超著
大阪寶文館發行

著者は親しく蒙古に遊んで其地を探險したる人、今や東蒙の地新たに我權力範圍に歸したる今日、蒙古語を修得せんとする者は此書に依るを便とすべし。行文簡明にして、序調體を得たり。(定價並製壹圓三十錢、上製壹圓五十錢)

△テムペスト

坪内逍遙譯
早稻田大學出版部發行

テムペストの譯成り、上梓せらる。今更めて贅するの要なし。文壇の寶物として何人も其座右に一本を缺くべからず。(定價金壹圓三十五錢)

△實際新聞學

小野瀨不二人譯
植竹書院發行

本書は米國ウヰスコンシン大學ドレヤー氏の新聞學に關する著書を譯して骨子となし、日本現在の新聞編輯並に經營の關係を説き、事例をも併せて其新聞全體の知識を與へんとしたるもの也。(定價金壹圓三十錢　特價金壹圓拾錢)

△ローマ字國字論

田丸卓郎著
日本のろーま字社

國字を如何にすべきかは我國教育界の今後の大問題である。時勢の要求は漸次漢字の廢止を必要とするであらうが、此大改革に對しては無論一部の大反對もあるであらう。眞面目に講究すべき大問題として此書の如きは最も價値がある。(定價金六十五錢)

△政黨と首領

無名氏著
實業之日本社發行

無名氏とは知る人ぞ知る、天下の名士、操觚界の雄、其言、其筆以て天下の誇とすべく、本書政黨並に其首領を論して、剔抉餘すところなし。(定價金六拾五錢)

△禪林奇行

菅原洞禪著
丙午出版社發行

禪道修道の扶けとなり、人生大悟の境に至らんとする者の手引ともならんが爲めに、著者が實地見聞並びに古聖先哲の奇行逸事百三十有篇を載せたり。(定價金壹圓)

△野人の聲

鵜崎鷺城著
興成館發行

人物を評するは易く、評して正鵠を得るは難し、そは評する者已に人なる以上亦已む得ざるべきか。此書の如き亦其撼無しとせず。而て之を野人の聲として聞く時、そこに比較的眞率なる而も痛烈なる筆致の能く其面目を穿てるあるを見る。(定價金壹圓)

△喜劇 親友

池田大伍著
近藤書店發行

佛老作家に負ふ翻案也といふと雖も其人物の性向、事件の發展等極めてなだらかにして殆ど創作と異らず。特に我現代と交渉する處密接にして、上場脚本としては最も恰適のもの也と信ず。(定價金七拾錢)

△暗室の王

[illegible]部寧治譯
新潮社發行

タゴール思想の具體化されたる戯曲「暗室の王」と其最近の作「郵便局」とを飜譯したるもの。此等は嘗てカルタッタに於て上演、喝采を博せる物也。(定價金六拾錢)

△鳥の目だま

鷲城學人著
興成館發行

鳥瞰的世界觀といふ意味也。鳥ならば鷲の目だま也。鋭くて陰險也。說まれたが最後、攫まれて苛まる。其筆鋒の犀利鋭亦天下の珍とすべし。(定價金九拾錢)

△教育講座近代文藝之背景

內ケ崎作三郎著
日本學術普及會發行

教育講座は普通教育に從事する人の參考書たり。此書近代文藝、近代思想の因つて來る所を知らしめん爲め其歐洲文明史的背景を詳說せり。好參考書たるを失はず。(定價金七拾錢)

△性慾心理及道德

澤田順次郎
青柳有美 共著
藤田文林堂發行

性慾の問題は一種の神秘であつて、古來未だ闡明し盡したる者がない。そこに研究の必要もあり、興味もあり、好奇心もある譯だが、其好奇心に附込んで挑發的な言辭を弄するならばそこに危險のあるのは勿論である。然し此書は見たところ少くとも科學的に取扱つてるらしく思はれる。(定價金壹圓六拾錢)

△破木杓

大內青巒著
至誠堂發行

修養訓、處世訓也、人生修道の要諦を通俗に說いて左右に使せるもの也。(定價金壹圓二十錢)

△人生雜感

新渡戶稻造著
警醒社發行

本書は普連土教會に於て、著者が其時々の宗教的雜感を極めて通俗的に講話したのを今回蒐めたものである。(定價金八拾錢)

△自叙傳

森田草平著
日月社發行

自叙傳の藝術的價値は已に定價あり。本書は其縮刷也。四六版三百四十五頁。(定價金九拾錢)

△現代の思想家

小松武治著
警醒社發行

現代の思想家中、メチニコフ、オストワルト、メエテルリンク、ショウ、オイケン、ベルグソンの六人を選んで「縱に傳記を語り、橫に思想を傳へ」んとしたるもの也。(定價七拾錢)

△盲目の川

長與善郎著
洛陽堂發行

此小說は『著者の「自分」といふ者に反映した事實を現在の自分として忠實に自由に描いたつもり』であるそうな。記者は未だ精讀の機會を得ないから、批評はいづれも後にして單に紹介に止めておく。(定價金壹圓三十錢)

△即位禮大嘗祭大典講話

關根正直著
寶文館發行

踐祚の大禮に關して其沿革由來御儀式等、苟も今回今上陛下の御登極に當つて萬民の心得べき知識は總て之を本書に收めたり。(定價金壹圓二十錢)

△天臺道士著作集　　猪狩又藏著　博文館發行

天台士杉浦重剛氏の還暦祝として其著作を輯めたるものを本書となす。氏は篤學重厚の人、所謂時流の書にあらず、而も尚一世を指導するものあるべし。(定價金壹圓六拾錢)

△不老不死　　青柳有美著　實業之世界社發行

從來の學者の研究に、有美式の哲學を加美して比較的科學的に、人間の最大要求たる不老不死の方法を研究せるもの。奇拔なれども根據なき妄說にはあらず。(定價金壹圓)

△信教の自由と學問の獨立　　姉崎正治 鈴木宗忠 共譯　大同館發行

本書は伊太利の前總理大臣、羅馬大學國法學の教授ルッアッチ氏の原著を飜譯したるものにして、國法上の問題を中心として宗教と教育との分離に關する宗教政策の研究也。(定價金壹圓二十錢)

△婦人の典型　　林靜太譯　警醒社發行

本書は男子の事業を助成せしめたる幾多婦人の事蹟を敍述したるコークラン女史の著を譯したるものにして、アウガスチンの母以下拾數名に就き誌すに女子が深き同情の筆を以てし、錯雜せる現代婦人生活をして意義あらしめんとせるもの也。(定價金壹圓)

△秘密の暴露　　孤松軒主人譯　南北社發行

原著者M某は國際的密偵として、ビスマルクに重用せられたる也といふ油斷のならぬ外交上の關係を忌憚なく暴露したるもので、歐洲政局の裏面史とも見るべきもの也。(定價金八拾錢)

△行人行歌　　若山牧水著　植竹書院發行

本書は明治四十年より大正三年迄の著者の作三千首の中より抄出したものを收めたる也と。(定價金六拾錢)

△樂しい人生　　前田慧雲著　至誠堂發行

「人生の樂は眞正の信仰修養より得來る自然の結果也」といふ著者の考から、宗教の眞味を談じ、詩文の風雅を說き、時に時習の弊を慨したのを收めて一册とした。之が本書である。(定價金壹圓二十錢)

△搦手から　　長谷川如是閑著　至誠堂發行

著者平常の目的の的めに一種の手段として小說體を以てした快書である。時に人の意表に出づるの警句ありて、快書たるを失はじ。(定價金壹圓二十錢)

△店頭禪　　高島米峰著　日月社發行

題して店頭禪といふ。禪の眞味は或は其邊にありて存するやも知れず。收むるところ悟れるものあり、尙未だ悟らざるものもあれど、皆とりどりに著者の面目を發揮して面白し。(定價金八十錢)

△大英遊記、半球周記　　杉村楚人冠著　至誠堂發行

其當時世の喝采を博せし楚人冠氏の大英遊記と半球周記とを縮刷合本とした手頃の袖珍である。(定價金壹圓三十錢)

△南國へ（定價五拾錢）　アイヒエンドルフ作　木村恒譯　文藝社發行

△ファウスト（定價參拾錢）　ゲーテ作　森田草平編　日月社發行

△評譯新文範（定價四拾五錢）　前田晁著　島村書房發行

△最新結婚學（定價五拾錢）　青柳有美著　實業之世界社發行

△科學的吃音矯正法（定價五拾錢）　松澤忠太著　樂石社發行

△聾　男（定價四拾五錢）　福田參琅著　良明堂發行

△努力のあしあと（定價五拾錢）　江部鴨村著　榮鳳閣發行

△眼の衛生（定價六拾五錢）　井上溫著　東亞堂發行

△新文章入門最新描寫法講話（上定價參拾錢）　本間久雄著　新潮社發行

△詩集浮　影（定價參拾五錢）　竹友藻風著　山中岩松堂發行

△立志小說父の遺訓（定價壹圓貳拾錢）　堀內新泉著　文正堂發行

△支那革命迷宮記（定價八拾錢）　德變女史著　日東堂發行

△薔薇叢書青い鳥（定價五拾錢）　メエテルリンク作　若月紫蘭譯　植竹書店發行

△觀自在術（定價壹圓二拾錢）　木村駒子著　育成會發行

△薔薇叢書ウヰルヘルム・テル（定價五拾錢）　シルレル作　船木枳之助譯　植竹書店發行

△現代評論選集阿部次郎論集（定價參拾五錢）　新潮社發行

△新潮文庫強き戀（定價貳拾五錢）　ゴーリキイ作　生田春月譯　新潮社發行

△新潮文庫ユウディット（定價貳拾五錢）　ヘッベル作　中島清譯　新潮社發行

△林間歌集（定價四拾五錢）　依田秋圃著　阿山知影會發行

△祖先教科書（非賣品）　長澤林太郎著　祖先教本部發行

△縮刷傑作文庫運命（定價四拾五錢）　國木田獨歩作　新潮社發行

△胃腸の衛生（定價九拾錢）　野田太市作　實業之日本社發行

△小町と業平（定價貳拾錢）　田中百山著　若林書店發行

△日曜講話（定價參拾錢）　奥村多喜衛著　警醒社發行

△増補處世講話（定價九拾錢）　加藤咄堂著　東亞堂發行

△藝人名簿（定價六拾錢）　文藝協會發行

△社交秘機舌三寸の活殺（定價五拾錢）　横濱蘇堂著　東亞堂發行

△現代文藝叢書第四十五編師匠の娘（定價貳拾五錢）　長田幹彦著　春陽堂發行

△時事叢書第三十九編戰の哲人ニイチエ（定價貳拾錢）　稻毛詛風著　富山房發行

△時事叢書第二十三編民族競爭（定價貳拾錢）　大類伸著　富山房發行

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

第一高等學校教授
東洋大學講師　三並良先生譯

オイケン氏　人生の意義と價値

■忽三版■

▲菊版最上製美本全壹册　正價金壹圓五拾錢　郵稅金拾貳錢▲

新人曰く……オイケンの數ある著書中、本書は通して讀み易き者の一である。容積は餘り大きくないがオイケン哲學の精髓とも謂ふべきものが此中にあるのである。本書は大體に於て前篇と後編とに分たれ、前編に於ては宗教的生活系及び内在的理想主義の生活系の如き舊き人生觀を始めとして、自然主義の生活系、主智主義の生活系、社會主義の生活系、個人主義の生活系等の新しき人生觀に至るまで實に鋭利なる批評眼を以て觀察し評價し、此等の人生觀の總て不完全にして到底吾人を滿足せしむるものにあらざるを闡明し、更らに進んで後編に於て新しき人生觀の建設を試む。即ちオイケンは宇宙の實在にして而かも獨立自在なる精神生命の上に彼れの人生觀の土臺を見出したのである。吾人の生活は此上に建設せられてこそ眞に巖の上に建てられたる城たるを得るのである。外部の動搖は如何に劇しく、世界は今日の如く如何に騷亂を極むるとも、決して顚覆せざる確乎不動のものとなることが出來るのである。吾人は唯此宇宙の内的生命を我有と爲して始めて人生の安定とその偉大とを確めることが出來る。又たそこに人生の意義と價値とが存するのである。夫れゆゑ本書は世界の大亂の眞中に於て殊に吾人が熟讀玩味すべき價値があるのである。吾人は確かに得る所のものが多いのである。吾人はかういふ意味に於て特に本書を讀書界に推薦すると共に、又大なる努力を以て此飜譯を完全せられたる三並氏に對して其勞を謝せざるを得ない。譯文もこれ迄のに比して非常に平易であつて一般の讀者にも決して解し難くはないやうに思はれる。

東京市神田區表神保町七　■大同館發行■　振替貯金口座東京八貳七番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

八月號

早稻田文學

思索生活に入るまで……長谷川天溪

ドストエフスキイの生活……吉田絃二郎

新劇の實價……桝本清

ロマンローラン論……エレンケイ

第四の壁……島村民藏

神秘と幻影……グリアンス

此の次の夏には（小說）……小川未明

顏（小說）……柳澤健

風（小說）……增田あつを

ある夜（小說）……三ヶ島葭

最近思潮

（外國の部）

- 英吉利教育家の戰爭對國民教育觀
- 塹壕の新聞
- 戰後に於けるロシア語の勢力
- イサドラダンカンの藝術
- アメリカに於ける希臘古典劇の復活
- 神秘家の眼に映じたる歐洲戰爭
- 英米出版界消息

（日本の部）

- 文學者の現代觀
- 學制改革
- 外國語の問題
- 大學の連絡
- 最近新劇團一瞥
- 七月の評論壇

無代進呈 分類圖書總目錄

好評ある圖書約五千種を選び半歲餘を費して編纂せるもの讀書家諸君が圖書選擇の際座右に缺くべからざる燈明臺なり。往復葉書又は郵料二錢封入申込あれ。

（中付の二の二）

定價二十五錢 郵稅一錢五厘

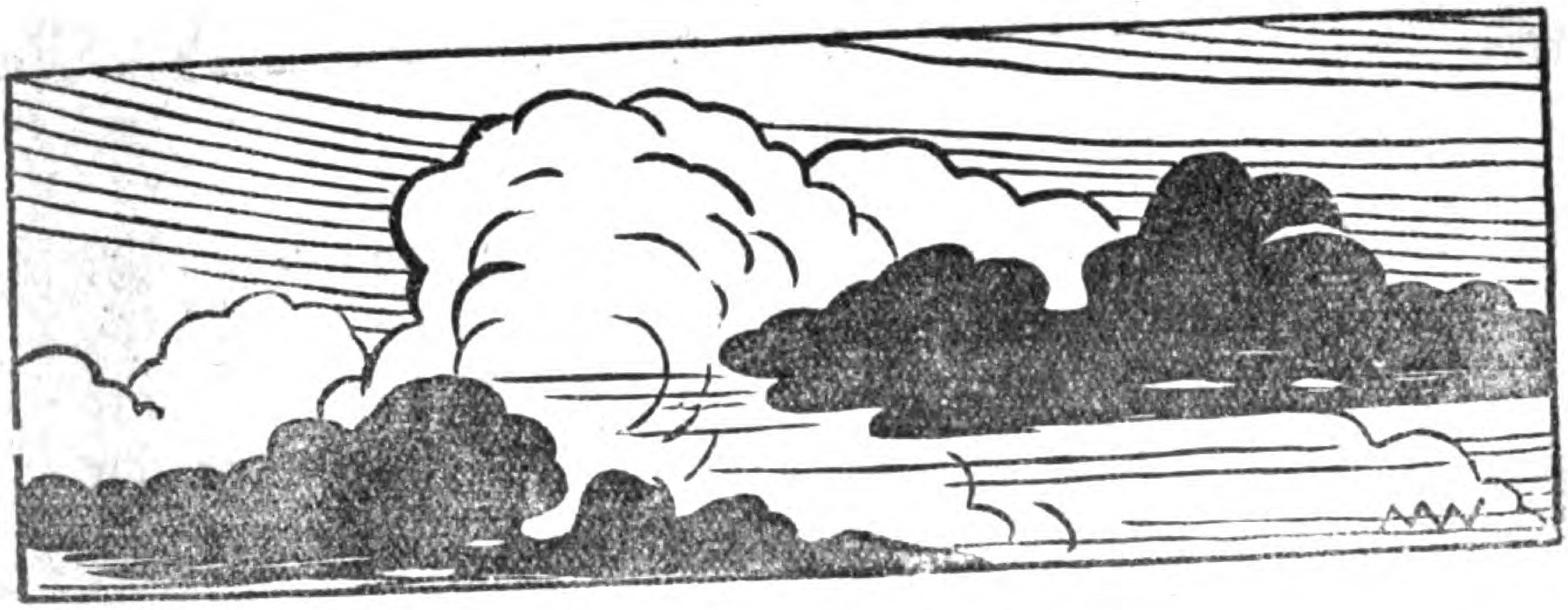
半ヶ年分倍號共一圓九十六錢

一ヶ年分倍號共三圓七十六錢

神田表神保町 振替二七〇番

合資會社 東京堂

信用ある店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



町裏の生活

小川未明

一

柳の影が風に動いて、人通りの多い路傍に僅かばかり哀れな趣きを添へてゐた。終日街を歩き疲れた貞吉は、其の木の下に來て休んだ。彼はしばらく其處に茫然として佇みながら、自分に關係なしに動いてゐる自然を眺めた。車を引いて行く者があつた。自動車に乘つて過ぐる者があつた。程隔つた彼處には電車が往來してゐて、其の黄色な車體が見えたり、隱れたりしてゐた。

晩方の濕つぽい風は濠の水の上を渡つて來た。また公園の鬱蒼とした樹木の間を渡つて來た。而して、今眼の前を歩いてゐる女の着物の裾を吹き捲つてゐる。女學生の短かい紫色の袴は押へ付けられるやうに風を切つて、人混りの中を縫つて行つた。遠くの煙突の煙は掻き亂されるやうに空に消えてゐた。

「すべてかうして動いてゐる人々には、其れ〳〵目的があるのだらう。けれど己一人は何の目的もなくかうして立つてゐる」と貞吉は思つた。

彼の眼には、今日驅け廻つた幾軒かの雜誌社の編輯室の有様などが浮んで見えた。小刀と錐の跡と、古痕の澤山付いた机や、青い色の布の破れた腰掛や、色の白い口髭を短く刈つた編輯者の姿などが、一種の暗雲の中に現はれて、今日ばかりでない永遠に忘れ難い印象の如く考へられた。けれど彼はこの後も長く、原稿生活をつゞけてゐる間は屈辱に堪へなければならなかつた。

「この作は、少し子供には向きませんからね、この次に面白い材料があつたら、頂きます」とある少年雜誌の編輯者は言つて斷つた。

「ぢや、二三日中に別のを書いて持て來ます」と彼は言つて其處を出た。

彼はこの廣い都會に住む一人の無名の作家に過ぎなかつた。彼には妻もあれば小供もある。其等の生活を支へて行かなければならぬのである。彼は其の雜誌社を出て、賑かな人の通る路の上を歩いた時に、心では少しも其の編輯者を怨まなかつた。却つて、自分を怨む心が起つた。

「さうだらう。己の書くものに子供の心を樂しませるやうな、愛もなければ、純なところが無くなつたのは自分でもさう思つてゐる。己にはもうお伽噺と云ふものが書けないのだ。誰を怨んで見やうがない、生活が皆んなかうしてしまつた。子供に讀ませるには、己の書くものはあまりに神經質過ぎるだらう」と彼は頭を傾げながら思つた。

其れから、二軒ばかり、他の社に廻つて見たが、小說としては、あまり幼稚だと言ふので取らなかつ

た。また御伽噺としては、あまり難かし過ぎると言つて取らなかつた。彼は二三十枚の原稿を懐に入れて、街から街を歩いて來た。

誰も彼の立つてゐる姿に注意するものがなかつた。たま〳〵ちらと顔を此方に向けても氣に留めずに去つてしまつた。貞吉は此處では誰に憚る心配もなく懐に入つこゐる原稿を取り出して、大分手垢と汗に汚れた紙の上に眼を晒らしたのである。而して其れを寸々に引き裂いて、丸めて人の踏まないやうな處へと思つて、傍の柵の中に投げ込んだ。

其の原稿には、彼が小供の時分の回想が描く書いてあつた。彼は原稿を引き裂いて捨ててしまつても、其等の回想は決して彼の腦裡から減じてしまふものでなかつた。しかも、この何となく物淋しい、頼りない夕暮方にこの回想は一層鮮かに、物なつかしくも彼の腦裡に浮んで來たのであつた。

貞吉は夕風になびく柳の木の下に立つて、既に灯の點つた街頭の慌しい光景を眺めながら其の昔の日のことを思つた。忽然として彼の眼には、この都會が消滅してしまつて、たゞ人家を離れた田舍道の上に、毛色の眞黑な年老つた犬が眤と立止つて、頸を傾げて自分の顔を見上げてゐる有様が浮んで見えた。「黑や、歸りにもこの道を通つて行くのだぞ、決して彼方の道を歩いて行くな、彼方の道を通つて行くと殺されるぞ」と貞吉は、犬の頭を撫でながら言つた。彼はまだ八つか九つの少年であつた。父はある山の工事場に監督となつて行つてゐた。其れで彼はたび〳〵其の父をたづねて行つた。彼の一家が住んでゐる小さな町から、其の工事場までは二里近くあつた。初めのうちは父に連れられたり、人に連れられて行つたり、歸つたりしてゐたが、いつしか道を覺えてしまふと彼は獨りで日曜日などには父をたづ

ねて行つて、獨りで歸つて來た。山の麓に一軒の茶屋があつた。其の茶屋へは彼が行つたり、歸つたりするたびに寄つたのである。其の家に年老つた黑犬がゐて、いつしか彼に馴れてしまつた。この黑犬は、彼と共に山へ行けば、また歸る時には町までいつしよに從いて來た。而して夜になると犬は獨りで我が家の方へ歸つて行つた。

この二里の間にはいろ〳〵の部落があつた。ある鬱然とした森蔭には昔から穢多の部落もあつた。其處には、常に生々しい血の付いた獸皮を日に晒らしてゐるのを見た。また鐵道線路の通つてゐる傍には踏切小舍があつた。歸るには其の小舍の前も過ぎなければならなかつた。其他鍛冶屋もあれば、水車小舍もあつた。

夜中に家の中に入れて置いた犬が頻りに啼くので、祖母が表戸を開けて外に出してやると犬は一目散に驅け出して行つた。其の後を見送つて、

「あゝ、家の方へ歸つて行つた」と祖母が獨り言のやうに呟いたのを貞吉は床の中で聞いてゐて、默つて、床の中で眼を開けて、靜かに其の二里の道筋を思ひ出して、誰にも苛められずに無事に淋しい路を歸つて行くやうにと祈つたことがある。

「黑や、今夜は私の家に泊つてゐれ、もう直に雨が降つて來るから」と言つて、貞吉は犬の頭を撫てゐた。見渡す限り低く雨雲が走つてゐた。其の下には固つて生いた木立や、草の繁つた平野や、水の枯れかゝつた流れが默つて眠つてゐるのであつた。其の細い道は百姓より他に通る者がなかつた。道の兩方には草が延びて足許を塞いでゐた。彼方の森のある處に人家があつた。而して其處には人の通る本統の

路があつた。この時二たび、

「黒や、歸る時には人に苛められないやうに、彼方の道を行かずに、この道を歩いて行けよ」と貞吉は犬の口許に顔を寄せて、涙ぐんで言つた。すると、年老つた犬の茶色の眼は悲しげに此方を見詰て、人間の情を解するやうに思はれた。

二

街頭の灯は夕靄の裡に悲しく染んで見えた。貞吉には、昔通つた故郷の野原の細道が無限に走つてゐる如く幻に映つた。而して、ある日のことこの黒犬が何人かに殺された時の悲しみが、新しく記憶の底に蘇生(よみがへ)つた。其の犬のことをいつまでも忘れられない。彼が書いたお伽噺は、其の時殺されて死んだ彼の犬と同じやうな毛色から、眼付まで似てゐる犬を幾年かの後、ある秋の暮方、都會の人通りの繁き巷で拾つたといふことを空想に描いて作つたものであつた。

彼は重苦しい氣分のする我が家の方へ歸ることを厭はしく感じた。柳の木の下を出て、路の上に眼を落しながら五六歩來ると、いつしか夕日の餘炎は沙の上に消えて、空には蒸し熱い水蒸氣が厚く鎖してゐた。額際からも襟許からも汗が流れて、彼は帽子を脫いでハンケチで拭いた。而して何心なく前方を見ると杖を握つて考へ顏をしながら歩いて來る詩人Kの姿を見た。貞吉は直に彼の傍に寄つて聲をかけた。

「しばらく顔を見せないぢやないか」と貞吉は懐しげにKの痩せた神經質らしい顏を見上げた。

Kは話する間も絶えず輝く眼を四邊に配つて落付いてゐる樣子がなかつた。貞吉は友の日夜焦々としてゐる心持に少なからず同情する心が起つた。

「この頃、詩は作れるか、體の方はいゝのかね」と彼の返事も待たずに重ねて問ひかけた。

何か言はうとする前にKの頰の筋肉は輕い痙攣を傳へたのである。

「僕は何處へも出ないのです、もうこの一年間ばかりといふものは誰の處へも行きません、だん〳〵顏を知つた人に遇うのが苦痛になります。一種の恐怖ですね、其れは誰も何の原因もなしに迫害したり、脅迫を加ふるものでないとは知つてゐます。しかし顏と顏を合はした時分に互ひの胸の裡に抱く感情や、思想が怖しい。人間は常に愛か、憎み以外に感じてゐないものです。僕には、よく相手の胸を過ぎる刻々の感情を鮮かに讀み取ることが出來ます。其れが僕には怖しい。其のことを考ふるのが苦痛です。私を知らぬ人々は、私に對して何等愛憎の感じを抱く理由がない。僕は病的な程、神經質です。此頃は、たゞ何となく知つた人に遇うのが怖しい。かうして君に遇つて話をすれば、君に對して、たゞ懷しいと思ふより他に何をも思はない。獨り君をさう思ふばかりでなく、この人生を懷しいと思ひます。けれど、今日まで進んで、其れに觸れようとはしない。僕は每日、晩方になると成たけ知つた人の通らないやうな路を歩いて瞑想に耽ります」と聲を顫はしてKが言つた。其の澄んだ聲には、何處か銀線のやうに鋭い切な調子があつた。貞吉はKと話してゐる間に、彼が僕と言つたり、私と言つたりする、其のたびに微細な彼の神經が反省したり、刺戟されたりして動搖しつゝあるのを感じた。

此時、Kは茫然として、車や、人の往來してゐる街頭に眼を反らしてゐたが、忽然として獨り自分に

向つて問ふ如く叫んだ。
「何が怖しいんだ！」とKはかう言つて、反省するところある如く淋しく微笑んだ。貞吉はこの言葉が身に染みて悲しく感ぜられた。
「さうだとも、お互にこの生を樂しむ權利があるんだよ、人間は平等の權利を有つてゐる自分の歩いて行く路を誰も妨げてはならない譯だ。さうだとも、何も怖しい者はないんだよ」と貞吉は友の心を勵まして言つた。
「私もさう思つてゐます、しかし人間が怖しいんでない、人間の行爲を支配する運命が怖しいんです」とKは聞き取れぬ程の小さな聲で答へた。濠を隔てて、彼方の土手の上を汽車が走つて行く、その轟きが夕暮方の灰色の空氣を震動して聞えた。
「僕も家へ歸るのが厭なのだ。直ぐ近所に氣狂ひが出て、毎夜、暴れるので、氣にかゝつて困るのだ」と貞吉は言つた。
「氣狂？　其れは堪りませんね、貴方も氣が狂ひさうになりませう。早くお越しになつたらいゝでせう」とKはしけ〴〵と貞吉の顏を見たのである。
「僕もさう思つて、今日、原稿を賣りに行つて、其金で何處かへ越さうと思つたんだが、少し小供に不向きなので、書き換へなければならんのさ。そんなことで、まだ二三日は移ることが出來ないのさ」と貞吉は言つた。自動車が西洋人の夫婦を乘せて傍を走つて行つた。青い揮發油の煙が、しばらく鼠色を帶びた夕暮方の空氣の中に漂つてゐた。

「何にしても、早くお移りなさいまし」と言つて、Kは別れ際に、名殘惜しさうに貞吉の顏を眺めた。而して、二人は反對の方面に歩いて行つた。しばらくしてから貞吉は、路の上に立止つて、彼方の人影の間に小さくなつて行く瘦せた青年詩人の姿を見送つて、あんなに人を懷しがりながら、厭人家（ミスアンソロピスト）であることを不思議に思つた。

彼の眼には、彼の町の裏手になつた崖の下に軒を並べて建つた、一圍の生活を瞭々と眼に描いたのである。自分の住んでゐる家は其の角になつてゐた。其の隣りには土木請負業者が住んでゐて、肥つた五十餘りの女房が終日大きな聲で、下女を叱つてゐる。其の隣りは何うして生活してゐるんだか知らない。二階に白粉を塗つた若い女がゐる。其の家へはよく角帽を被つた學生が出入りするのと見る。ちやうど其の家の裏手に低い陰氣な家がある、氣狂ひは其の家から出た。なんでも其の家の主人で四十三四の男だといふことだ。是等の家がせゝこましい處に固つて建つてゐた。其の横手には草の生へた可なり廣い空地があつた。

社會のどよめきは、常に波のやうに押し寄せて來て崖の處に打衝つた。是等の自然的な、不自然的な人間の生活が、この崖の處でさも社會から虐げられたやうに、いぢけて、小さくなつて、脅かされ勝ちに其の日、其の日營まれつゝあるのであつた。

貞吉は、其等の人々の生活のうちに、自分等の生活も算へて、常にこの崖の下の一圍の生活を日陰者の生活の如く考へてゐた。彼は既に明るく四邊を彩つた、街の灯の中を歩いて我が家の方へと歸つて行つた。而して、いつも通る高架鐵道の下を通つたのである。街の炎は星影の見えない曇つた空に映つて

赤く濁してゐた。

三

貞吉は茫然として窓際に來て外を眺めてゐた。四角く闇を抉り拔いたやうに窓框の外には重苦しい夜の空が垂れ下つてゐた。瞳を凝して上を仰いでも一つの星の光りも見えなかつた。彼方の街の脚光に空の一端が赤褐色に彩られてゐる。而して、時々吐息するやうに生温い風が顏の上を過ぐる他、何の物音も聞えて來なかつた。黑い屋根は屋根に重なり合つてゐた。夜は次第に更けつゝあつた。

彼は窓から顏を出して、氣狂の出た家の方を熱心に見守つてゐた。氣狂は何うしてゐるだらう。自分が氣狂ひになつたら、やはりあの男のやうに暴れるだらうか。而して自分が何をなしつゝあるかといふことについて、少しの反省もなければ、また記憶もないのであらうか。彼は先刻Kが「君も氣が狂ひさうでせう」と言つたのを思ひ出した。毎夜、きまつて彼の不自然な、氣味の惡い叫びを聞くたびに、自分の神經も其れと共鳴して、今にも自分が狂ふのでないかといふやうな一種空怖しいやうな氣持がするのだ。彼はかう思ふと全く自分で制し切れない自分の精神といふものを怖しく感じた。

どうか今夜は、あの不自然な氣味の惡い叫びを聞きたくないものだ。而して、ぐつすりと熟睡して、明朝は早く起きて、書きかけてゐる原稿の先きを書きたいものだと思つた。彼はあまり四邊が靜かなので、何かして其の裡から何の音か聞き取らなければ、不安なやうな氣持がした。この地上に喰付いたやうに低い黑い家が頭を並べてゐる。而して其の隱れた内部には悲慘なこと、愉快なこと、各々性質を異

にした生活が營まれてゐる。然るにすべてが闇に包まれて、寂寞が更に其れを掩ふてゐる。一見すれば、何事も起らない平和な天地の如く見える。これはたゞ人間の眼に見えないからのことだ。たゞ氣付かないからのことだ。もしあらゆる人間の營んでゐる生活を透視することが出來たなら、其の多くがいかに苦しんでゐるかに魂消るだらう。滿足を感じてゐる者がどれだけあつて、貧困と不足に苦しんでゐる者がどれだけあるかが分るだらう。而して其の結果、社會は虛僞なり、この人生は悲慘なりと叫んで、正直の者は大抵氣が狂つてしまふだらう。

　貞吉は窓の緣に乘つて、半身體を闇の中に乘り出して、頭を伸して氣狂の出た家の方に全身の神經を注いでゐた。

「何、なさつてゐなさるのです」と急に、室に入つて來た彼の妻は後方から其の樣子の異つたのを見て驚いて聞いた。

「今夜は、大變、靜かだな、氣狂ひは何うしたらう」と貞吉は振向いて妻に聞いた。

「今日は音がしませんでしたよ、病院へ入れたんでせう」と彼女は圓らな眼を見張つて、闇の裡に黑く見える陰氣な低い家を見詰めた。

「さうか知らん、さうするといゝんだよ。己も每夜、襲はれるやうな氣持がして、氣が狂ひさうに思ふのだ」と言つて、貞吉は窓から降りて疊の上に坐つた。やがて妻は其の室から出て行つた。獨り貞吉はいつまでも其處に坐つて、氣狂ひよりも、氣が狂はずに孜々として働いてゐる人間がより哀れだといふやうなことゝ考へてゐた。

「己は氣が狂つたつて、亂暴はしまい。誰をも怨んでゐないから、寧ろ自分の生といふものと呪つてゐる。生れて來なかつた方がよかつたと思つてゐるから、きつと人目を盜んで自殺をするだらう」といやうなことをも空想したのであつた。

彼はやがて床に入つた。赤く心の燃えた電燈を見詰て、死のやうな靜寂に耳を澄ましてゐるうちに、重苦しい魔睡藥の効能にかゝるやうに體は晝間の疲れを覺えて眠つてしまつた。

不自然な、氣味の惡い叫びが不意に眼を醒ました。つゞいて硝子や、陶器類が板戸に投げ付けられて、碎ける音が闇を裂いて聞えた。貞吉の心藏は鼓動を高めたのである。彼は總身に冷氣を覺えた、床の中から體を起しかけて、尚ほ外の樣子を聞き取らうとした。

「氣が狂ふといふことは怖しいもんだ。どうして氣が狂ふのだらうか。自身には其れが分らないのだらうか」と口のうちで獨言をした。

「南無妙法蓮華經、々々々々々々、馬鹿野郎――おたまの阿魔――其處退け――」と凄い。氣味惡い聲で叫ぶと、つゞいて二たび物の碎かれる音が聞えた。なんでもその中では女が外へ暴れ出やうとする男を出すまいと懸命に抵抗してゐるらしく感ぜられた。つゞいて氣狂ひは、雨戸を足で蹴外したらしいやうな物騷しい音が聞えると。

「あれ――　誰か來て頂戴！」と女の張り詰めた、今にでも泣き出しさうな叫びがしたのである。

「何、どいつでも來て見やがれ、殺してやるから――」と暴れ狂ふ男は叫んだ。而して、彼等二人はしばらく闇の裡で、彼の空地の邊で爭つてゐたが、遂に女の力が盡きたらしく氣狂ひは前の往來を何やら

叫びながら、街の方へと驅けて行つた。其の後を女が追つて援けを叫びながら行くのであつた。

其の聲は遠くまで聞えた。貞吉は、この刹那の女の心持を想像して、氣の狂つてしまつた者より、この方により多くの同情を寄せた。しかし全く夜中で、誰も通つてゐる者がなかつたけれど、街に出れば、程隔つた處に交番があるから、多分其處で氣狂ひは取り押へられるだらうと思つてゐた。

「あ、厭だ。厭だ。早く此處を越えなければならん。誰にも氣狂ひになる素質はあるのだ。殊に己などは、いつ感染して發狂しないとも限らないから」と彼は獨語して、自分の體に宿る不可解の靈魂を眞に怖しく感じた。

「あ、怖しい！　神樣どうぞ、私を氣狂ひにせぬやうにして下さい。もしさうならなければならぬ運命なら、寧ろこの命を奪つて下さい」と彼は心から、一身に附き纒ふ不可抗の力を怖れて神に口のうちで祈つて、二たび枕に頭を付けた。けれど、遂に夜の明けるまで眠ることが出來なかつた。

夜明け方に人々の聲がして、氣狂ひが家に送り込まれて來た樣子であつた。後で聞くと警官が連れて來たことが分つた。

毎夜、睡眠不足と不安と恐怖のために、貞吉は頭が痛んで、意識が弱つて、神經衰弱が一層甚くなつたのである。彼は、空しく、窻から屋根の上に漂つてゐる白い雲を眺めて、原稿を書きつゞける氣力もなかつた。

氣力の乏しい瞳には、軌道を步む太陽の光りも倦んでゐるやうに、黃色く映つた。彼はたゞ終日何か知らぬ暗い手で頭を押へ付けられてゐるやうな氣持がした。

妻は垣根の外で、誰かと立話をしてゐたが、やがて家に入つて來て、其處に姿を見せた。

「オイ、まだ氣狂ひがゐるぢやないか。昨夜も眠むれなかつたので、頭がづきづきする。何故、癲狂病院へ入れないのだらうな」と貞吉は彼女に向つて、訴へる處がないものゝやうに顏を顰めて言つた。

「やはり其の家の人になつて見れば、かうしてゐるうちに落付くだらうと思つてゐなさるのでせう」と言つて、彼女は病院へ入れないのも無理がないと言はぬばかりの返事をした。この返答は却つて貞吉の心を激さしめた。

「だつて他人が迷惑するぢやないか。お前のやうな無神經な者ばかりならいゝが、己などは其れがために精神が興奮して氣が狂ひさうだ」と聲を荒げて言つた。

「精神病院へ行くと癒るものでも、却つて惡くなるといふぢやありませんか。そんなことも氣にかゝるでせう」と妻が言つた。

貞吉は、曾て某精神病院に於ける內部の無道德的な樣子を聞いたことがあつたのを思ひ出した。而して、妻の言には答へないで、しばらく其の當時聞いた話しなどを思ひ浮べたのである。このことを彼に對つて物語つたのは、其の病院に僅かばかりの間看護人となつてゐて、其時は既に其處を出た、まだ年若い男であつた。

「其れはお話になりませんよ、何にしろ祕密の別世界ですからね、相手は野獸にも劣る聞き分けのない狂人のことです。普通の者は看護などに務まりません。この世の中には、さう多く博愛のために、若しくは人道のために身を犧牲にする者はありません。名目は何うにでも付きます。畢竟自分が食ふために

仕方なしに入つてゐる者ばかりです。いはゞ食ふに困つて人間が行く處です。中には惡い者もゐる。而して給金と來ては全く煙草を買ふにも足らないのです。自然彼等は狂人の食物は盗むし、差入物は横取りするといふやうな有樣です。殊に見脱しにならないのは、全快した患者でも、金になる見込みのある者はまだ充分に癒らないから出すことは出來ないと言ふことです。この場合、いかに患者が自分はもはや氣が狂つてゐないと辯明してゐ、一旦氣が狂つた者だから第三者から見れば、やはり醫者や、看護人の言ふことを眞實として信じます。氣狂ひでない者を檻禁するといふ悲慘なことがありませうか。而してこの場合、其れを救ふ道がないといふことも、これ程もどかしいことがありませうか。世間はまだこの都會の片隅みにあるこの別天地に冷靜な觀察を向けないでゐます。しかし何時の世になつても、またいかなる場處に於ても正義の眼を晦ますことが出來ない」と其の靑年は叫んだ。貞吉は、其時、彼に向つて、

「何故、君はこの都下の最も信用すべき新聞社に走つて行つて、其の慘狀を哀れな人間のために訴へないのだ」と言つた。

「駄目です、而して、私には其れが出來ない」と言つて、靑年は眼を相手の顏から外らした。其の靑年は、今はある會社に務めてゐる。貞吉は其のことを思ひ出すと、彼女の云つたことにも、成程、理があるらしく思はれた。

「それにをかしいんですよ。あの白粉を塗つた女の處へよく角帽を被つた男が來るぢやありませんか。夜も遲く來ることがあるさうです。この頃は毎晩のやうに來て、二階で女といちやついてゐる、其の聲

は貞吉の顏を見て笑ひながら言つた。

四

「男女の關係などゝいふものゝ空想に描く時は、至上な幸福のやうにも思はれるし、また絶大な快樂なやうにも考へられる。けれど事實にそんなに美しいものでもなければ、また反對にそんなに醜いものでもない。すべて人間がこの世界に於て經驗することには限りがある。本能はもつと其の上を望むけれど、神經や、肉體は疲れ易く、而して、心は醒め易い。思つたことも、實際に觸れて見ると、眞に百分の一すら滿足に値しない。けれど人間は、尙ほこの現實に對して未練がましく、無窮を追はうとしてゐる。而して死を怖れてゐる。しかも彼等は、他人が快樂を經驗する時、幸福である時、これを嫉み、これを憎むのである。なんとこの人生といふものは醜いものでないか？　氣狂までが露骨に其の野性を出してゐる。獨りこの氣狂が醜く見えるばかりでない。同時に煩惱に身を焦して、羞恥を感じない彼等男女が醜いのである。いつまで其の快樂がつゞくものか」と貞吉は思つた。

「今もちよつと病家の女を見ましたが、顏色が靑く、窶れて、髮も壞れて、病人のやうなんですよ。氣狂は自分では分らんのだから仕方がありませんが、看護してゐる人の身になつたら、どんなに辛いでせう。每晚、眠ることは出來ませんし、晝間は晝間で眼が放されんのですから、かうなると氣狂の方は何も分らんのですから樂ですね」と彼女が言つた。

「さうとも、氣狂に同情する必要はないさ、あゝなつたら死んでくれた方がいゝんだね」

「だつて、家の人にしたら、人情ですもの、さうは思ひませんよ」

「己は氣が狂つたら、きつと自殺をすると思ふよ」

「何故、そんなことが分りますの」

「少し自意識の強いものは、最後まで自分を處置することを忘れないものだよ。己は他人に迷惑をかけたくないと日頃から思つてゐる。それに、死んでもいゝから馬鹿にされたくないと思つてゐるから、きつと自殺するよ」

「そんなことになつては大變ですわ」と彼女は眞に怖れる如く溜息を洩した。

「何、己なんかは氣も狂はなければ、また自殺も出來る人間でないんだよ」と貞吉は冷笑つて、自分を意氣地ない男の如く感じた。

彼は氣狂よりも、其の人を看護してゐる女の身に同情した。彼はまだ其の女の姿を見たのではないけれど、妻の言葉で、疲れ切つてゐる姿を想像することが出來た。彼は夜半の同じ時刻に前の家の二階では男女が快樂に耽つて、聲を出していちや付いてゐる。後の家では氣狂が血走つた眼で、齒を喰ひしばつて雨戶を蹴破つて出やうとしてゐる。しかも其れが同じ時刻の出來事である。しかし何等其處に不思議があるのでない。人生の異つた姿が偶然的に、また必然的に其處に並んで現はれたゞけである。たゞ獨り苦痛を感ずる者は第三者であつた。意識と自覺と反省のある第三者であつた。常に人生のことがさうであつた。敢て肯定の出來る者、敢て否定の出來る者、共に幸福の人々と言ふことが出來る。けれど何

れにも行くことの出來ない、しかも反省の强い人間は不幸である。

「紅茶でも入れませうか」と言つて、妻は室から出て行つた。

貞吉は獨り考へつゞけた。氣狂が暴れ出すのは、あの白粉を塗つた女と角帽を被つて來る學生が遠慮なしにふざける爲であると聞くと。而して男女は其のことを悟りながら、尙ほ毎夜の如く醜行をつゞけてゐると知ると、貞吉は人道のために默つてゐることが出來なくなつた。狂人のために、それよりは狂人を看護する狂人の女房のために、寧ろ毎夜、狂人が暴れて眠ることが出來なかつた自分のために、何となく默つてゐることが出來なかつた。

彼は斯く偶然な話を聞いて、一時神經が興奮したが、其の狀態は長くつゞいてゐなかつた。其後には反動として、一種疲れたやうな物憂い心の平靜と頭の空虛を感じた。

「さうだお伽噺でも書かうか知らん」と獨言をして、彼は机に向つた。けれど直に飽が出て肝要の想像力が根絶してゐるやうに、幻想が浮んで來なかつた。

「腦が疲れてゐる、考へるのは無益だ」と言つて、彼は二三行書きかけた原稿紙を引裂いて、紅茶の香を慕つて室から出て行つた。

不順の氣候は、梅雨が逆戻して來たやうに、空が曇つて、濕氣を含んだ生温い風が木の葉を搖つた。彼は頭の重苦しさを感じながら、其の日の午後、机の前に來て坐つて、氣狂いことを考へてゐるうちに、氣狂と其者を看護し、ゐる女のために先刻と同じやうなことを思つた。而して、不潔な快樂に耽つて、氣狂の心を焦立せる男女を心から憎く思つた。彼は社會がこれを取締るのを正當のことゝ考へた。けれ

ど路の左側を歩かなければならぬ規則はあつても、こんなことを取締る規則はない。彼は腹立しまぎれに、はがきを箱の中から取出して、其れにペンで、

「お前方は裏の家の病人を哀れと思はないか。何處か他へ行つて、本能の滿足を遂げたらい丶、またお前方の上に危險が迫りつ丶あることに氣付かないか。氣狂はきつとお前方を殺すだらう」と書いて、これを近所に住む一人よりとして、本名を署せずに表書を認めた。

彼は途中で、其のはがきをポストの中に投げやうと思つて、懷の中に入れて散歩に出かけた。しかし一歩、我が家から離れると彼の考へが變つてしまつた。頭の上を絕へず押へ付けてゐたやうな重苦しい目に見えない掌は取れて輕々しくなつた。

空は曇つてながらに、何處か雲の色に濃淡があつて、而して切れ目から覗く青い色には悠久を思はせるものがあつた。

『なんで己はくよ／＼してゐるのだ。この地上に住む人間はすべてが逝く運命を負つてゐる。樂しむ者も、悲しむ者も、狂ふ者も、すべて須臾の間に過ぎない。己は彼の男や女に對して彼等の快樂を減殺する權利を有してゐない。またとやかう云ふ地位にゐる者でもない。若し煩はしくて、心の平和を害する者があつたなら、早く今住んでゐる處を去つてしまへばい丶のだ。考へれば、皆な短かい生涯の裡に出來るだけの滿足を得やうとして、慌しい生活を送つてゐるのだ。誰も始から周圍を考へて生活する者はなからう』と貞吉は考へた。彼は瞬間でも、彼等の生活に干涉しやうと思つた、幼稚の心を恥かしく感じ、懷からはがきを取出すと寸裂して、路の上に捨ててしまつた。

路傍に立つてゐる木立の青葉の上を風が渡つた。街に出ると人が歩いてゐた。彼は裏通りを歩いて、貧しさうな生活を送つてゐる人々の顏を見て、其處にもさう多く幸福を感じてゐる者が少ないと思つて、僅かに自分を慰めることは出來たが、また何れも險しさうな警戒深い、疑ひ深い眼付きをしてゐるのを見て、彼はつく／＼孤獨を感じて、この人生は冷酷な、無慈悲なものであるとも思つたのであつた。

彼は散歩して、外から内に歸ると、二たび目に見えない重苦しい掌が頭上を押へ付けるやうな不快な、不安な氣持になつた。彼は例の四角く壁を切り拔いた窓の際に來て坐つて外を眺めた。

黑い着物を被た、脊の低い男が草の生へた空地をうろついてゐるのを見た。其の男は手に何か持てゐた。貞吉はしばらく其男を見てゐたが、男が此方を向いて顏が見えると直にこのあたりの借家を持てゐる家主であることを知つた。彼は家主が何をするのだらうと思つた。其の男は無口で、强情で、何處の家主にも共通な金を持てゐる癖に分らずやの吝嗇家であつた。しかし氣狂ひが出たからといつて、さう直にはあの家を追ひ立てることも出來ないので、さぞ心のうちで困つてゐるだらうと貞吉は思ひながら、默つて見て居た。それには皮肉を感ずるやうな話があつた。最初、氣狂の入つてゐる家の修繕が出來上る頃に、貞吉が移りたいと言つたのを家主は子供のある人には借せないと言つて斷つた。大抵このやうな分らずやのことを言ふのは貪慾な家主に限つてゐる。彼等守錢奴等は家庭に子供が付きものであるといふことを自然と思はないばかりでなく、彼等も曾て子供の時分があつたものを、それすら忘れて、さながら子供を目して人間の仲間に入れて考へてゐないことだ、貞吉は、今氣狂ひが毎日のやうに障子を蹴壞したり、窓の硝子を叩き破つたりしてゐる音を聞くたびに一種の痛快を感じた。同時に自然の皮肉

な懲罰をばをかしく思つた。

脊の低い、むく犬のやうな樣子付きをした家主は眼をぎよろ〳〵と四邊に配つてゐたが、やがて遲々たる歩き付きで空井戸の處に寄つて、其の傍に何處からか持て來た大きな厚みのある板で蓋にしやうと動きはぢめた。

「氣狂ひのためにするのでない、あの井戸で人が死んだとなつたら誰も借り手がないから、損得を思つてするのだ」と貞吉は思つて見てゐた。

憂鬱な空は低く垂れて、凸凹に重なり合つてゐる屋根の上を壓へ付けてゐるやうに見えた。暗い風が、地面の草の葉々動かしてゐる。脊の低い、黑い着物を被た男は鐵槌で錆釘を井戸蓋に叩き込んで桁に打ち付けて、空井戸の口を塞いでゐた。其の鈍い、重苦しい響きがづき〳〵と頭の神經を刻むやうに應へた。やがて男は其れを終へてしまふと、尙ほしばらく其處に立つて、何やら口のうちで呟いてゐたが、何時の間にか、何處にか去つてしまつたと見えて其の姿が消えてしまつた。

貞吉は彼の男の去つた時、足音を聞かなかつたので、まだ其の邊にうろついてゐるのでないかといふやうな疑ひが起つて、窓框の上に乘つて、頭を低い垣の上に突き出して、男の姿を探したけれど全く見えなかつた。而して思ひがけなく、色の乾いた白い井戸蓋を見た。今迄、其處にあつたけれど釣瓶が落ちてゐて、誰も使はなかつた四角な井戸を蓋は隙間もなく堅く塞いでゐた。此時、ポツラ〳〵と細かな雨が灰色の空から降ちて來て、顏の上に當つた。

其れでも、日の暮れる頃までは、雨は降るといふ程降らなかつた。かういふ風に曇つた日はいつもよ

り早く暮れるやうな氣持がした。

「ちよつとご覽なさい。あの家では神縄を廻して、戸口の處に線香を立てました。きつと氣狂が暴れて外に出ない呪ひなんですよ」と妻が貞吉のゐる處に來て言つた。貞吉は机に向つて、其時、外國のお伽噺を讀んでゐたのであつた。

——其のお伽噺には、見なれない子供が來年の睡蓮の花が咲く時分に、お前を迎ひに來やうと神經質な子供に向つて言つてゐる——其處まで讀んでゐた。彼は妻に話しかけられて、幻想を忽ち他の方に移さなければならなかつた。靑い表紙の書物を机の上に置いて、妻の顔を見た。

「また氣狂ひのことか」と彼は心の中で思ひながら。

「どれ」と言つて、殆んど宿命的に、しなければならぬやうに彼は窓框の上に乘つて、半身を外に伸出して、彼方の家を見ると、既に地上に濃かに這ひつゝあつた鼠色の夜の底から、赤い線香の火が二つ三つ針で穿たれた孔のやうに見えた。而して、軒下には、白い神縄から吊下つた紙がひら〳〵と忙しさうに、濕つぽい風に吹かれて動いて、白い蝶の飛ぶやうに見えたのである。

「厭だな、今夜も、また眠れないのでないか知らん」と言つて、彼は忌々しさうに、其の家の方を呪んだ。

先刻、彼等氣狂夫婦のために、男女の二人を憎んだ貞吉は、また周圍の人の心をも顧みず、迷惑も思はず、氣狂ひを其の儘にして置く氣狂の家をも憎まずにはゐられなかつた。彼等には親類がないのか。兄弟、姉妹がないのか、尙ほこの儘にして幾日も經つたなら、他の人は知らず、己は何うするだらう。

いよく己は取り上げても、取り上げなくても警察へ訴へて出なければならないと思つた。

其のうちに黒い闇はすべて地上のものを包んで隱した。而して夜が更ると隣りの肥つた女房が下女を叱る聲も止んでしまつて、四邊が死んだやうに寂然としてしまつた。此時、耳を傾けると、しとくと雨の降る音がしたのであつた。

貞吉はふと夜中に眼を醒ました。時計を見ると二時であつた。彼は毎夜眼の醒めるのが癖になつたのであつた。やはり戸外には雨の降つてゐる氣はひがした。しかし氣狂ひの暴れてゐる樣子もなく、天地は靜かに眠靜まり返つてゐた。貞吉は暮方見て、まだ眼に殘つてゐるあの呪ひが効いたのかと思つた。其れとも、今夜はあの女の處へ、角帽を被つた男が來なかつたので、其れで氣狂の神經を高ぶらせるものがなくておとなしかつたのだらうかとも思つた。

夜が明けても、まだ雨は降つてゐた。朝飯を食べてしまつた時分、急に戸外が騷がしかつたので椽側に出て垣根越しに通りを覗いて見ると氣狂ひが車の上に縛られて、人が從いて何處かへ送られるところであつた。貞吉は直にいよく病院へ行くのだなと思つた。而して、病人の彼方に行つてから、行末のことなどを空想に耽つたのであつた。

「いよく病院へ行くんですね、可哀さうですね」と傍に來て立つた妻も、眼を外の方に向けながら言つた。

「自分の體を何う取扱はれるといふことも分らないのだからな」と貞吉は、自覺ない、また意識ない人の身の上を憐んだ。

『どんな氣持でゐるんでせう』と彼女は考へても病人の心理に考へ至らぬ如く、不思議に感じて言つた。
『ほんの聞き分けのない子供に返るんだね、善とか、惡とかいふことは全く分らなくなつてしまふんだ。また他から馬鹿にされやうが、苛められやうが、其れをさうとも感じないで、全く意識がなくなつてしまふんだね。考へて見れば可哀さうぢやないか。だから氣狂が、たとへどんなことをしても其の行爲を憎むことが出來ない。誰でも、子供や、死んだ人の體を粗末に取り扱つてはならないと思ふのは、其等の何の抵抗力も、また意識もないからのことだ。どんなに利巧な者でも、ふと氣が狂つてしまへば、みんな以前の經驗を忘れてしまふのだ』と言つて、貞吉は眞に狂人に對して同情する心が起つた。けれど、もし其れが子供であつたなら、前の家で男女が淫らな眞似をしてゐるのを見ても何とも感じないであらう。獨り子供には天眞の純潔がある。けれど年老つた氣狂にあつては、腦が破壞しても體に宿つてゐる怖しい盲目の本能がある刺戟によつて眼醒めることを思ふと、却つて悲慘を感ずると共に、人間の醜さを思はずにはゐられなかつた。貞吉は子供を憐む、また死者を哀れむ、また、狂人を哀れまなければならぬと思つた。けれど狂人に對しては、同じ憐憫の情に驅られながら、一種暗い不快の混ずるのを感じたのであつた。

やがて氣狂を乘せた車は、他の二臺の車と共に垣根の外を過ぎて、去つてしまつた。此時、彼は二たび同じ人が此の崖の下の長屋に戻つて來ることであらうかと思つた。すべての事が人間の抵抗することの出來ないまた目に見えない運命の力によつて左右せられて行くのである。彼はこのことを思ひ、このことを悲しく考へた。

五

雨が晴れると、今迄長い間空に蟠つてゐた鬱陶しい、重苦しい雲が去つて、日の光りが强烈に草の葉の上や、靑桐の葉の上を射した。其の光りは銀のやうに白く輝いて、眩しく眼に染みた。獨り雨に洗はれて鮮かに見えるのは葉の上ばかりではなかつた。斯のやうな輝きは限りもなき空氣の裡に織込まれてゐた。

貞吉は旺盛な夏の特色がいよ〳〵現はれて來たことを感じた。一夜の熟睡と憂鬱な天候が晴れた後の心地は彼の氣力を全く快復して、想像の力を活々たらしめた。彼は机に向つて書きかけの原稿の後をつゞけたのである。

午後、彼は紅茶を飮んだ後で、眩しい光線の海を前に望んで、太陽の熱を冒しながら散歩に出かけた。白い雲は地平線の彼方に飛んでゐる。何の木を見ても自然の限りなき恩澤に浴してゐぬはなかつた。獨り木や、草や、雲ばかりでない、すべて生きてゐるものは、この自然の無窮の恩澤に浴してゐる者だと思つた。さう思ふと、この自然の恩澤に浴しないものがあらうかと考へられた。既に死んだ者は、其の恩澤に浴しないばかりでなく、吾等と幸福を共にしない者であると考へた。彼はいつしか、去年の春に死んだ子供のことを思ひ出した。其の子供は、もはや永久にこの自然の恩澤に浴しないばかりか、自分等と幸福を共にしない者である。然らば、死んだ者は何うなるのだらう？　彼は暗然として路の上に立止つて深く思はざるを得なかつた。冷かな悲しみと、何うしても思ひ切れない其の面影が心の上を襲つ

て來て、彼はたゞこの不可思議な生の意識に戰いて、終には誰に縋る術もなく泣きたくなつた。

「あゝ、いつまでもこの自然の恩澤に浴する者は幸福だ、しかしやがて此の地上にも秋が來り、また冬がやつて來る。同じやうに人間がさうだ。目に見えない手に引摺られて、暗い太陽の光りの射さない世界へ連れて行かれる者が、一日、一日に幾人あるか分らない。しかも、其の怖しい運命の手が何時誰の頭の上に下つて來るか分らない」と貞吉は思つた。

彼は散歩から歸ると、女のゐる二階に例の角帽を被つて遊びに來る男と、白粉を塗つた女とが欄干の處に並んで凭りかゝつて、笑ひながら話をしてゐるのが見えた。其の刹那、貞吉は氣狂は何うしたらうといふやうな考へが浮んだが、畢竟、他人の運命を何と思つても仕方がないと考へ直した。遠く見ると、青い、青い空が街の上に垂れかゝつてゐる。

貞吉は、數日の後にお伽噺と前から書きかけてゐた單篇小說とを脫稿した。お伽噺はやはり一度書いた黑犬のことを、もつとすなほに分り易く書き直したので、當時あまり見受けない昔風の行き方であるが、犬が物を言ふやうなところをも設けた。而して其れが自分で不自然であると思はれないまでに書けてゐた。小說は、やはり主人公を自分にして、北國の赤い夏の夕暮方、海岸で、住所不明の行路病死者を見た時の記憶を印象風に書いたものであつた。

彼はこの二篇を懷に入れて、ある日のこと電車に乘つて、それ〴〵志す處の雜誌社に持て行つたが、其れは二つながら滯りなく通つて、直に幾何の金に原稿を引換へることが出來た。彼は其の歸りに久しぶりで街の酒場に來て、色硝子のはまつた窓際のテーブルの前に腰を下して、舌に燒き付くやうなウヰ

スキイに唇を觸れたのであつた。歸りに銀座で、子供の土産にするつもりで、露西亞の玩具を二つ買つた、一つは雪の中を狼が歩いてゐるのであつた。

西の町は赤く燒けてゐるやうに、夕陽に彩られてゐた。坂になつてゐる路の上に繪を見るやうな人影が動いてゐた。貞吉は始めて彼等と幸福を共にしたやうな心持がして、其の群集の一人となつて浮き〳〵とした氣持で我家の方へと歸つて來た。

其の後、二三日は彼は茫然として日を送つた、自分にも閑散である如く、この社會もまた閑散であるやうな氣持がして、疊の上に横になつて、遠く何處からともなく響いて來る巷の鳴音に耳を傾けたのである。

「あなた、お移りなさるなら、あまり熱くならないうちに家をお探しになりませんか」と妻が言つた。

眼を反けると銀のやうな日光が、窓の外に降つてゐた。彼は其の光を見て、默つて考へてゐた。

「移つた先きがいゝければいゝが、また隣で蓄音機を鳴らしたり、琵琶歌をうなつたり、墮落書生でも下宿して來て、バイオリンでもやられた日には却つて困るからな」と貞吉はこの儘、此家にゐやうか知らんといふやうな考へにもなつた。

「お移りなさらんのですか」と彼女は、意外だと思はぬばかりに聞いた。

「氣狂ひがゐなくなつたから、まあそんなに急がなくてもいゝよ」と貞吉は體を轉して彼方向きになつた。

「こゝの家は熱うて座いますよ。何にしろ崖の下になつてゝ、石垣に日が照り返しますから」と彼女は

これから可なり長い、熱い間を考へてゐるらしい樣子であつた。

貞吉も去年ゐた狹苦しい家で、暑氣に當られて卒倒した時のことを思ひ出して、この家も其れと同じ程に熱かつたら、もつと其れ以上に熱かつたら何うしやうといふやうなことなどを考へたのであつた。

彼は直には彼女の言葉に答へることが出來なかつた。

果して日に、日に熱さが加はつて行くばかりであつた。木の葉には光が閃いて、風が其の上を流れた。すると遠くで鳴いてゐる蟬の聲が亂れるのであつた。彼はこの去年に變らぬ自然に對して、ふと死んだ子供のことなどを思ひ出した。一方の窓に迫つてゐる崖の石垣は、常に日に照り付けられて、色が白く乾いて、其處から熱風を煽つて來た。

『あの女は越したやうですよ。いつ越たのですか二階の戶が閉つてゐますよ』と妻が白粉の女がゐなくなつたことを貞吉に知らした。彼はそんな女のことは、とつくに忘れたやうに、其の女のゐるとゐないについて何の感想も起らなかつた。數日の後、隣の請負師の家で、また何處へか越して行くやうな氣はひがして、其日は朝のうちから車が來たり、人が出たり入つたりして、肥つた女房の甬高な聲が聞えたが、やがて車も行つてしまつた後になつてから、男が來て、取次に出た貞吉の妻に、

『本所の方へ越して參りますから』と言つてゐる聲が聞えた。此方に耳を傾けてゐた貞吉は、何となく集散、離合定めもなく、其れが普通であるやうな都會の生活を考へて、いつ二たび彼等を見ることがあらうと淡い哀しみの湧くのを覺えた。

『あなたはお越しにならんのですか』と妻は、日々に石垣が燒けて、熱氣が家に籠るので、また、此頃

は何もせんで茫然としてゐる貞吉に向つて言つた。
「近所では、皆な越したぢやありませんか」と彼女は貞吉が默つてゐるので言つた。貞吉は最も先に越す筈であつた自分等が越さず、また彼處では氣狂ひを出しながら其の家の者が越さず、却つて長くゐさうに思はれた家が越したのを何といふこともなしにをかしく感じた。
「まあ熱いの位は我慢するんだね、隣りで蓄音機を鳴らしたり、琵琶歌などうなられるよりは増だからな、却つて隣りに人がゐなくなつて靜かでいゝぢやないか」と貞吉は笑つて言つた。
窓から外を覗くと赤銅色の雲が市街の上を見下しながら、遲々として動いてゐた。其の下に街があつて、屋根から少し高く伸びた煙突の先きが黒く見えて、其れから黒い煙や、白い煙を上げてゐた。
かうして、日が空しく經つた。
ある日の暮方、西日が室の中に射し込んで机の上に置いてある赤いインキ罎の中が燙え立つやうな時分に、貞吉の處へ、詩人Kの親友Hが訪ねて來た。
「どうだひどい熱さでないか。何處かへこの夏は行くかね」と室に入つて來ると汗を拭きながら、Hは茫然としてゐる貞吉に言つた。
「さあ何ともきめてゐないが、多分何處へも行かんだらうよ」と貞吉はつまらなさうな顔付きで、稍々色づいた夕暮の空を見て答へた。
「Kが君に遇つたつていふぢやないか。どんな話をしたんだい」とHは貞吉の顔を見て仔細ありげに聞いた。

貞吉は頭を傾けて考へたが、別に後まで心に殘るやうな大した問題もなかつたやうだ。

「別にどんな話もしなかつたよ。たゞKが誰でも怖しいと言ふから、何が怖しいものか、同じ權利を平等に自然から得つゝある人間等でないかと言つたゞけだよ。Kはこの頃、極端の厭人主義者になつたもんだね」と貞吉は答へて、友が何う言ふだらうかと心で待つた。

「あゝそんなことか。僕もさうだらうと思つたんだ。しかしKに遇つた時、君に對つて秘密を口に出してしまつて、君が何う思つてゐるだらうと言つて心配してゐたから、それで君に聞いて見たのだ」とHは言つた。彼は貞吉の顏を見ながら、つゞけて話した。

「全くKは精神病者になつたらしい。此頃は、僕に遇ふのさへ怖しがつてゐるやうだ。いつであつたかKの下宿へ訪ねて行つたら留守といふのだ。其時はほんたうに留守だと思つた。けれど其れから幾度となく行つても留守だと言ふのだ。僕は不思議に思つた。平常家にばかりゐるKがどうしてこんなに留守にするのだらうと思つて、其れとなく下女に聞いて見ると、此頃は誰にも遇はずに、獨りで室の裡に閉ぢ籠つてゐるといふから、僕は案内も乞はずに、ずんずんと彼の室に入つて行つた。するとKはさも懷しさうに僕を迎へた。僕は此時不思議に思つた。益々Kの心理が分らなくなつた。

「Kが其時言ふんだよ。今は君とかうして親密に交際してゐるけれど、いついかなる感情が衝突で敵にならぬとも限らない。さう思ふと怖しい。いつそ路上の人となつて、愛されもせぬかはりに憎まれもしないやうにしたいと言つた。其の時、僕は既にKが過度の脅迫觀念に襲はれてゐると思つた。

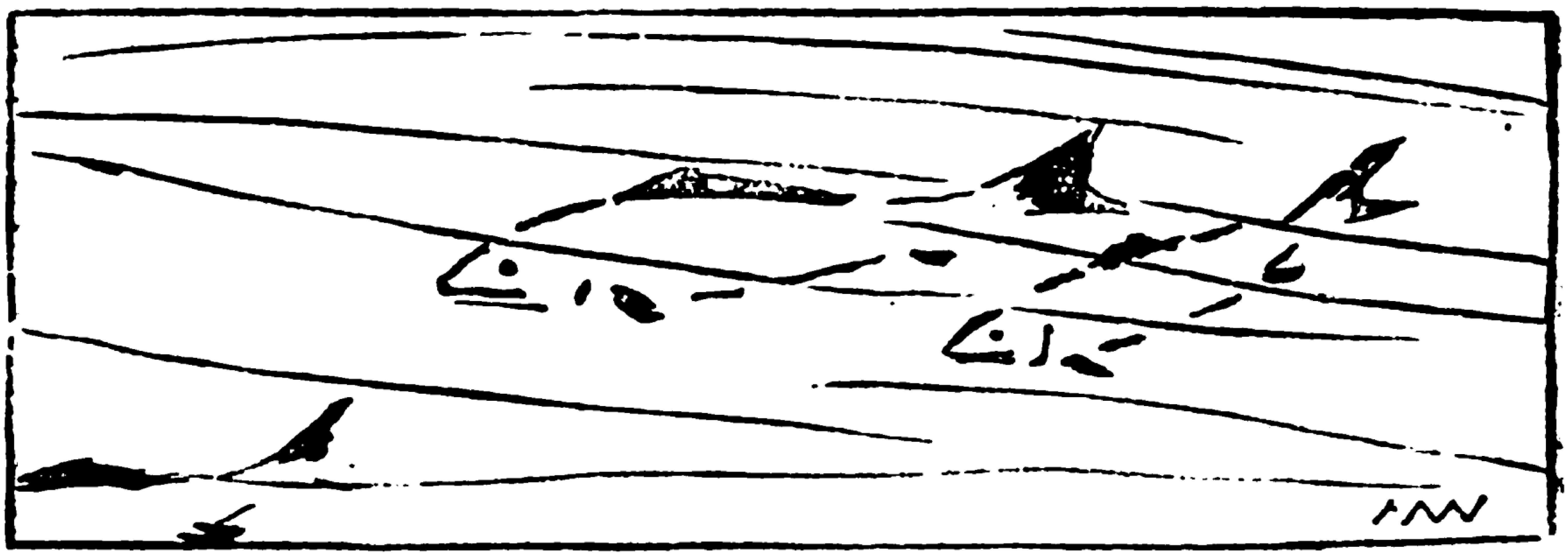
「つい四五日前だよ、Kが突然僕を訪ねて來た。ちやうど空は曇つて、鈍色に暮れかゝつてゐたよ、其

時は殊にいつものKとは様子が異つてゐると思つた。平常なら、他人の顔を見ると直に笑つて、あの調子の鋭い聲で自分から物を言ふのだが、彼は默つて、顔が何時になく陰氣に見えた。僕は變だと思つたよ。おい何うしたんだ、元氣がないぢやないかと言ふと、體が惡いから、是れから國へ歸るつもりだ。共れで暇乞に來たと言つた。僕も何んだか悲しくなつた。其日に限つて、Kは他のことは言はずに歸つて行つた。僕が停車場まで送つて行かうと言つたら、彼は手を振つて、顔を顰めた。其の様子が何となく迷惑さうだつたから、つい行かずにしまつた」とHが語つた。貞吉はHの話によつて、Kが既にこの都會にゐないことを始めて知つた。

日は全く西に沈んだ。八時頃Hは歸つて行つた。其後で貞吉は窓から、紺碧の夜の空を望みながら、言ふにいはれぬ人生の悲哀と苦痛を覺えたのである。

「己は、これで餘程のんきだから氣が狂はぬのだらう」と彼は冷笑ふ如く、獨語した。

――一九一五、七、作――



再婚

近松秋江

故醫學士吉川俊次郎氏の未亡人美津子は、昨夜から泊り込んでゐた築地の待合から田の玄關まで女將や女中に送られて、門の奥深く敷かれた花崗石の露地の中に先刻から待つてゐた奇麗な俥に肉付豐かな體を載せると、

「左樣なら！　御機嫌よう!!」

と、口々に言葉をかけられながら威勢よく表の通りへと俥を急がせた。

彼女は、車夫が手捷くかける黒布の幌にすつかり人目を包まれてしまふと、やつと我れにかへつたやうになつて、睡眠不足の體を車に凭せながらほつとした。昨日念の上にも念を入れて結つた島田の鬢がうるさく、蒼白く血色の褪めた兩頰に這ひかゝるのを掻きあげるのも怠儀さうに幌の中で獨り思ひ耽つた。

昨夜は早く話をつけて歸つて來るつもりであつたのを、意地わるく、男の嫉妬のために引留められて徹宵虐められたのである。

男は、自分が棄てゝ行かれる怨恨のありたけを並べたてゝ、容易に執拗な手を緩めてくれなかつた。

「お前は虚榮心に騙られてゐるんだ。都築は文學博士で俺は法學士だ。都築は大學の教授だが俺はまだ無名の辯護士に過ぎない。お前は文學博士大學教授の夫人といはれたさに俺を棄てるんだらう。都築が何だ。俺だつて今に法學博士になつて見せる。」

「さういふわけぢやないんですよ。」

と、いつて、いろ／＼に辯解したが、男の心は遂にとけなかつた。

心の解けないのにも無理はない。美津子自身に自分の心の底を探つて見ても、男のいふ通り無名の學士の妻君になるよりも大學教授文學博士の令夫人といはれたいのである。

五年前に四十二で咽喉病のために亡くなつた先の夫が學士であつたから、此度再婚すれば必ず博士か、さもなければそれ以上の地位か名譽か財產のある人物と結婚をしたかつた。

此度いよ／＼都築文學博士に再婚の縁談が纏まるまでには、いろんな處と縁談があつたけれど、他から縁談を持込んで來るやうな口はいづれも香ばしくなかつた。

一度結婚したことのある者は男女に限らず初の夫や妻によつて得た幸福と同樣の幸福を得るのみならず、それ以上に尙ほ異つた多量の幸福を得んことを思ふであらう。

美津子と吉川醫學士との仲ほど餘處目にも羨ましいくらゐな睦まじい仲はなかつた。双方の家格や地位からいつたら、あまり權衡つた縁でもなかつたが、學士の縹緻望みから、懇望されて、さる官省に勤めてゐる老朽の下級官吏の娘は一躍して、まだその頃は學士といふものゝ價値の極めて高かつた時分に、

彼女は二十の歳に吉川醫學士の令夫人になつたのである。戀女房に對する學士の愛は蜜よりも甘かつた。

吉川醫學士はその專門とする眼科の醫師としてよりも學士が唯一の道樂である演藝鑑賞家として夙に世間にその名を知られてゐた。學士の演藝を好むのは、好むといふよりも寧ろ觀劇に淫するといつても可いくらゐであつた。十を以つて數ふる大小の劇場は變り目ごとに缺かさず看るばかりではない、學士は一つ芝居を三度も四度も看にゆくことさへ稀しくなかつた。

學士は、さういふ時によく愛妻を伴ふて觀劇に出掛けるのが常であつた。性來から華美好きで陽氣な美津子にはさういふ華やかな盛り場に出入して愉快な日を消すことが無上の幸福であつた。

學士自身に世俗にいふ兒種といふものがなかつた所爲か、それとも結婚後三月も經たぬ内に美津子が劇烈な子宮内膜炎を患つた結果か、睦まじい夫婦が同棲十年の間遂に子供といふものが出來なかつた。

幾年經つても子供が出來なかつたその代りに互に慕れ合つた夫婦の仲は子供に對する親の愛情のために夫に對しまた妻に對する愛情を妨げられる憂ひがなかつた。吉川醫學士の方でこそ美津子の美貌を見染めて貰ひ受けた戀女房であつたが、美津子の方からいへば結婚して後に慕れた夫であつた。

美津子の目には、世間並からいつても夫は好い男ではなかつた。早くから額際の薄い、反齒の顔は、まだ未婚女の美津子の胸にも最初の見合からいよ／＼結婚の晩になつてからも美しい男子を欲する不滿足より生ずる堪え難い失望を感じてゐたのであつたが、世間普通の處女にあるとほりに始めて男性の强い愛情の手によつて抱擁せられることを知つた彼女には單純な容貌の不滿足などは夫に對する愛情に少しも邪魔にならなくなつたばかりではない、そのあまりに美しからぬ夫の容貌は、むしろ世間に稀れな

くらゐ好人物な夫の性質を歴々と不斷に微笑を湛えた表に現はしてゐるかのやうにさへ思ひ做された。吉川醫學士が好人物で賢良であるといふのは妻たる美津子が惚れた慾目にさう映るのではない、彼を知る者はいづれもさう認めてゐたのである。

子供を持たぬ夫は、愛妻に對する愛情の上に尚ほ愛子に對する愛情をも加へて、美津子を單に妻であるといふ外にさながら愛孃の如くに愛撫してゐた。

吉川は何よりも好む道樂なる觀劇に淫することゝ妻君美津子を愛撫することゝによつて始めて生き効も感ずれば、また現世を樂しいものと思つてゐたのであつた。否、吉川醫學士には嘗て、人生は悲しいものだとか、現世は痛いものだとかいふやうな思想は萌しそめもしないばかりに、さういふ忌はしい心持ちの頭を擡げる餘地のないまでに彼等夫妻の生活は幸福で樂しいものであつたのである。

併しながら無常の風はさういふ幸福な夫婦の上をも襲ふた。演藝鑑賞家として令名ある吉川俊次郎氏が死亡したといふ報知が、ある朝黑枠に入れられて、新聞記事の中に發見せられた時、かねて歌舞伎座や市村座で吉川氏夫妻の睦まじさうに觀劇してゐる有樣を餘處目に見てゐた、ある夫婦者の夫は、その突然の兇報を認めて吃驚した聲を出し、

「おい〳〵、大變だ〳〵。吉川俊次郎さんが死んだ。吉川俊次郎さんが死んだ。こんなに死ぬるほど惡かつたのかなあ。先達つて何處かで吉川俊次郎が病氣で入院してゐるといふことを聞いてゐたやうに思ふが、そんなに惡いとは知らなかつた。……あんな美しい妻君を殘して死ぬるとは。死ぬるときにどんな氣がしたらう。さぞ死にたくなかつたらうなあ。あの人達がさも仲好さゝうに芝居を看てゐる處を見

ると、あの廣い歌舞伎座に來てゐる多勢の觀客の中に、あの夫婦くらゐ睦まじい幸福な人はなかつたがなあ。」

さういつて、その夫は吉川俊次郎の突然の死去について暫時無量の感慨に耽つてゐた。

すると、夫の吃驚したやうな言葉を何事が起つたかと思つて聞いてゐたその妻は、先づ

「へえ。」

と、いつたきり、後無言のまゝ、これも感慨に沈んで、夫の言辭を聞いてゐたが、その終るのを待つて、

「あの人達、あんまり幸福過ぎたんだ。あんまり不足がなさすぎるとそんなことがある。」

自分達の境涯について少しも幸福を感じてゐないその妻は、さもしい考からさも〳〵小氣味がいゝといひたげの口調でいつた。

まつたく吉川俊次郎夫婦が歌舞伎座にいつて、いつも平土間の四つめか五つめの桝に入つて冬ならば火鉢で炬燵をして、二人で笑ひ興じながら舞臺や見物席を觀廻はしてゐる狀態は溫厚篤實の稱ある吉川學士に似げもないと、傍の者の目にあまるほどであつた。

そのころ丁ど妻君ざかりの美津子が濃い頭髪を上品な丸髷に結つて、澁い藍微塵などの着物に黑縮緬の羽織を拔き衣紋に被つた、意氣でありながら何處か高等なつくりで急ぎ足に幕間に花道を歩く姿などはそこらに來てゐる藝者までが振顧つて眷るくらゐであつた。それが何よりも彼女の虛榮心を滿足せしめた。

ついぞこれまで身に不孝といふ暗い蔭の翳したことのない美津子はかねて昵懇な病院の院長から最後の運命を告げられた時に彼女は始めてわが身の前後を省みて、死の床に横はりつゝ可愛い、可愛い妻を殘して死んでゆく夫の手に縋りついて泣けども、泣けども盡きぬ悲歎の涙にかき暮れたのである。

幸福であつた學士自身も、わが生涯が四十を漸く出たばかりて終るものとは、かけても想ひ及ばなかつた。けれども、素人とちがひ自分の生命はとても助からぬものと早く覺悟を定めると、美津子を傍に呼んで遺言をした。

彼女は幌の中で、今別れて來た三輪のこと、今日の午後に迫つてゐる都築との結婚のことなどを千々に思ひ惱むにつけてもやりぱり忘られぬは始めて男といふものを知つた先夫のことであつた。

一方ならぬ親孝行で、そして兄思ひであつた先の夫が最期の際に病室の外に一旦自分を遠ざけておいて阿母さんや兄さんだけに何事か話をした、その後で自分一人を傍に近寄せて見る影もなく病み衰へた力の無い手に靜と美津子の手を握りしめながら

「……お前も知つてゐるとほり、貯金が一萬圓あまりある。それに種々な物を金に積つたら、三千や四千になる。保險も二千あるし、巧くやつてさへゆけばお前一人が一生遊んで食ふに不足はない。まだ三十にもならぬ上に子供もないお前に一生獨身で徹せといふのは無理だが、今阿母さんにも兄さんにもよく賴んでおいたから、私の物は皆お前の物だ。みんなお前にやるから、私のことを忘れなかつたら、兄さんや姉さん達を信賴にしてどうぞもう何處へも嫁いてくれるな……」

刺すやうに苦しい咽喉の痛みを堪えて途切れ〳〵にいひながら凋びた顏を昂奮さして、濁つた二つの

眼からハラ〳〵と冷い頰に涙を流したそのとき。

美津子は耐りかねて、わあつと聲を上げて泣き入りながら、洪水の如く湧き出る涙を黒縮緬の羽織の片袖におさへつゝ、右の手で夫の細つた手を固く握り締めて、

「御安心なさい、わたし、もう一生何處にも嫁きはしませんから……」

涙をすゝりながら、漸う〳〵それだけいつた。

さういつた美津子の心には少しも嘘はなかつた。どうかなるものならば自分も一緒に死にたいくらゐに思ひつめて悲み歎いた。そして亡夫の遺言を堅く守つて自分はどんなことがあつても一生再縁すまいと決心した。

けれども豫期してゐたことは後日になつて全く相違して來た。亡き後の葬送萬端も一とまづ形づいて遺産の始末に引きつゞいて、美津子の今後の身をどう所置するかといふ問題になつたとき、吉川家で最も權威のある發言權を持つてゐる母堂の意見と、その母堂に對して孝順といふ令聞ある法學博士で貴族院議員の長兄さんの意見とは一致した。

二人の意見では假令俊次郎氏の遺言であるにしてもやつと三十になるかならぬの、しかもまだその女盛りの標緻といひ、水々した肉體といひ、とても道心堅固な未亡人で生先きまだ永い生涯が立て徹せるものではないといふのである。

或程今後倘ほ幸福なる生涯の永かるべき四十二や三で夭逝した俊次郎の心を思へば、母堂にしてもまた令兄にしても死んだものが可哀さうである。いな、死んだものは唯一と筋に冥土の道を先へ〳〵ゆく

ばかりであるが、なまなか後に殘つた自分達の心で俊次郎が何處までも可哀さうである。それゆゑ成るべくならば俊次郎の遺言通りに美津子をば昔の武士の妻にもあるやうな貞操なる未亡人として寂しいが清い後半世を送らしめたい。

けれどもそれが理想のとほりゆけばよいが、世間によくある例のとほり若も飛んだ間違ひのあつた時には却つて俊次郎の位牌を辱かしむるものである。

母堂と令兄とはそれを氣使つた。それで亡き人の遺言には背くが美津子に勸めて俊次郎の弟の參治と嫁合はしめやうとした。さうすれば美津子はいつまでも吉川家の者で少なからぬ遺產もそのまゝこれまでのとほり依然美津子と吉川家との共有になるのである。

けれども美津子は、義弟の參治と結婚することを拒んだ。彼女は何となく參治を好まなかつた。それは義弟として決して參治を好まぬわけではないが、今更亡夫の弟と夫婦の緣を結ぶことを忌んだのである。そして母堂と令兄とに對して何處までも亡夫の遺言を楯にして終生獨身で立てとほすことを主張した。兩方で頑として主張を屆げなかつた結果遂に美津子は吉川家と絕緣せねばならぬ破滅に陷つた。そして亡夫が死の床に横りながら、美津子の手を握つて遺言した遺產は遂に美津子に讓られずして、財產の殆ど全部は令兄が保監するといふ名義の下に吉川家に收めてしまひ、彼女は僅に亡夫の保險料三千圓と少許の家財諸道具に衣類を全部與へられたばかりであつた。

美津子は今思ひ出してもその時の果敢なさ遣る瀨なさに新しい淚が逆り上げて來るのである。

亡夫とゝもに十年餘の永い間、幸福の住家として住み馴れた家をいよ〳〵引拂つて、赤阪は氷川の奥

の自分の實家に歸つてゆくその日であつた。亡き夫の丹精した庭樹や盆栽はお前にくれてやるから持つてゆけとお母さんの言葉であつた。自分はこんなに裸體にして突き放されるやうな思ひをしてゐながら何もそんな物まで持つて行きたくはないと思ひながら、移轉の人夫が

「奥樣これをどういたしませう。」

と、いつて片端から運んでいつた鉢ものを並べてあつた跡や植木を堀り返したあとの庭が見る影もなく荒れてゐるのを、氣のぬけたやうな心地になつて緣側に立つて痛しさうに眺めてゐると、鹿此木さんが遲くなつて、引越の手傳に來てくれた。それにいくらか氣を取直されて

「まあ見て下さい、私のものといつたらもうあの庭樹とこの手洗鉢とがあるきりです。私何もこんなものまでは欲かありません。」

さういつて、そこにあつた酌でその手洗鉢を自暴に叩きつけた。……その時のこと。

たつた三千圓ばかりの金では、吉川俊次郎の未亡人として今までのとほりに、耻かしい目も見ず、世間體を張つてゆくことは覺束ない。彼女は決して好んで亡夫の遺言に背くのではないが、亡夫の遺言が吉川家の母堂と令兄とによつて實行せられなかつた、止むを得ざる結果として亡夫の名を辱かしめない程度の何か然るべき方法で今後の身を立てやうと決心したのであつた。

丁どその頃劇壇に新氣運が動いて來て到る處に新らしい女優を養成する學校や團體などが出來かけてゐた時分であつたので美津子は自分の後半世を女優になつて徹さうかとも思つた。女優ならば信用ある團體に身を寄せて一心に藝術を研いて天晴女優と稱えられるやうになれば地下に在る亡夫の靈をも慰む

るに足る。幸ひ自分にはその道に入るに一通りの素養もあるし、容貌や體格からいつても今新出來の何處の女優に比べても少しも損色はない。さういふ考から彼女は何かの好い機會があつたら女優として華々しく名乘りをあげて出るつもりで新に踊とピヤノの稽古を始めたのであつた。

さうしながら時節の來るのを待つてゐたけれども、珍しいもの好きの世間が、段々女優といふものに飽いて來るとゝもに、彼等の技藝や將來の俳優としての價値の底が知れて來るにつれて、一時は吾れも〳〵と思ひ立つてゐた相應に地位のある婦人達も、來歷の分らぬいかゞはしい女づれの俳優と一つに見られるのを恐れてさういふ希望を思ひ止るやうになつた。

美津子もまたその一人であつた。彼女はそれならばと思ひ立つてゐた女優が香ばしくないことゝなつたので、また自分の前途について思案を仕直さねばならなくなつた。

「それともいつそ再婚をしやうか。」

と、いふ考は亡夫の弟と結婚するか、遺產をどうするかといふやうな話があつた時分から夙に美津子の胸の底に萌してゐたのであつた。

彼女は決して吉川の死を悲まぬのではなかつたが、しかしながら十年同棲した夫を亡つた堪えがたい哀愁の半面にはまだ吉川に嫁かぬ以前の未婚女の時分のやうな氣樂な、前途のある、何かまだ〳〵好い幸福が自分を待つてゐてくれるやうな浮ついた心持ちが密んでゐた。

彼女は、吉川の死を悲んでゐる間に既に、吉川の他の男を持たうと思へば持つことの出來る身體になつた自由と幸福とを感じてゐた。

「此度はどんな男を持たう」

といふ考がいろ〳〵な空想や希望になつて美津子の胸の底を往來した。

まだ獨身になつた當座は母堂や令兄の自分を遇する處置について不平から、反抗的に『ぢや、再婚したつて申譯は立つ。』と是認してゐても、未だ亡夫に對して濟まぬといふ考がまだ先きに立つてまさか再婚を斷行しやうといふ氣にはならなかつた。けれども何時までも獨身でゐることは彼女の身體が許さなかつた。

母堂や令兄の方でも自分達のいふことに不服とあれば、不服でも構まぬから、さうして何時までも獨身でゐてくれては、萬一の間違ひがあつた際にかへつて俊次郎に對して自分達がついてゐて申譯がない、どうぞ然るべき良縁を求めて早く再婚してくれるやうにとの意見である。

美津子は赤坂の實家にゐて兩親と同居してゐるものゝまだ籍は吉川家に置いてあるので、可然良縁さへあれば、吉川家の娘分として嫁かすといふ何處までも行きとゞいた處置をとつてゐるのである。

その頃美津子には、何處よりも自分から望んでもらつて欲しい處があつた。それは文學藝術といふほどでなくつても多少さういふ方面にも趣味のあるさる金持の實業家で、近頃、美人の評判高かつた愛妻を亡ふて後妻を探してゐることが世間に知られてゐた。美津子は、どうかして其處へ嫁ぎたいと思つた。そこならば普通の開業醫にすぎない吉川の妻でゐるよりも遙に彼女の虚榮心を滿足さすることが出來る。吉川に死なれた不幸を却つて數倍の幸福にして自分の運を取戻すことが出來る。

さういふ希望から、彼女は内々人橋かけて遠まわしに縁談を持込んで見たが、それは先で望まなかつ

た。

さうしてゐる間に段々歳は取る。美津子も氣が氣でないので、はては方々の結婚媒介處にまで緣談を依賴した。三輪と今のやうな關係になつたのはそれからであつた。最初は媒介處の周旋で寫眞の交換をして、それから見合ひをしたのがもとで、二人で勝手に密會をするやうになつて、正式の夫婦でなく情婦情夫の關係で二人の仲は一年あまり繼續して來てゐるのである。

美津子は三輪とそんな關係でゐながら、彼と正式に結婚をする氣にはなれなかつた。それは昨夕も三輪から厭味をいはれたやうに、これまで三輪とは逢ひつゞけてゐながら、公然とこの男を夫として結婚するにはどうしても自分の虛榮心が滿足しなかつた。今まで十歲の餘も違つた夫を持つてゐて、自分より年下の男を見ると可愛らしいには可愛らしいが、何だか賴りがなかつた。さうかといつて美津子は決して三輪を嫌つてゐるのぢやない。先の夫にくらべて遙に好い男で、色艷のいゝ、肉の緊つた體はどうしても思ひ切れない。

美津子は幌の中で三輪の容貌風姿を凝と思ひ起して放縱に懷しんでゐた。その可愛い口髯、微笑を湛えたぱつちりとした目元が昨夕かぎり思ふやうに見ることが出來ないのだと思ふと、一層未練が募つた。

『さうぢやありません、あなたを棄てるんぢやありませんと、いつたつて、俺といふものがあるのに都築と結婚をするのは棄てるんぢやないか。』

男は眞氣になつて詰つた。

『棄てるんぢやないわよ。棄てやしませんよ。だけど都築は吉川の令兄さんが表面仲に立つて結婚さす

ことにしてくれたのですから、私の方では厭といふことが出來ないんですもの。」
『だつてお前は弟との結婚を拒絶したといふぢやないか。そんなことはお前の意思でどうでもなることだ。』
『意思でどうでもなることだつて、先に弟のことがあるから、此度は謝斷の仕樣がないんですもの、兎に角私都築へ嫁きます。さうさして下さい、その代りあなたとこれ限りに致しませんから。』
男の方でも、自分を棄てゝおいて都築に嫁くのには耐え難い嫉妬を感じたが、嫁いてからも尙ほ自分との關係は絕たないといふ女の堅い約束を信じて、漸く曉方になつて、淫りがましく疲勞した二人は暫く昏睡することが出來た。
美津子は外の世界から深く被ひ隱されて幌の中でそんな種々な思ひ出に耽つてゐた。
彼女は自分は何故今日都築に嫁してゆくのであらうかといふことを考へて見た。夫に持つ男としては都築は文學博士で大學敎授といふ名をこそ聞いてをれ、これまで殆ど一面識もない男である。今次の緣談の初つたのは吉川の母堂や令兄の方で美津子をあのまゝにして置くのは、どうも危險であるといふので美津子の友達に然るべき良緣を周旋するやうに賴んだのであつた。
するとその友達の中に丁ど都築を知つてゐる者があつて、これならばどうであらうといつて仲に立つと、緣談は意外に早く纏つた。
都築が歐洲の留學から歸りたての若手の大學敎授として一部の人々の間に信望を博してゐた時最初に結婚したのはある豫備の陸軍中將の子爵の令孃であつた。

都築の專攻は社會學であつた。その思想の傾向は頭の新しい仲間には餘り歡迎せられなかつたが、その方に歡迎せられぬだけ漢學臭味を帶びた一種の頑固な癖のある主張は古い思想の老人の間に悅ばれてゐた。不斷孟子を愛讀してゐるといふ噂のある子爵の娘をもらつたのも或はさういふことが老子爵の意に投じたのかも知れぬ。

妻にもらつたとはいひながら、養子に行つたも同じことで廣大な子爵家の邸內に和洋折衷の住宅を新築して新夫婦はそこに住んでゐた。けれども男と女と三人の子供が出來たにもかゝはらず、夫婦の仲が睦じくなかつた。儒敎の思想で固め上げた家庭にそんなことのあるのを世間では不思議にも思ひ、また皮肉にも觀てゐた。到頭子まである仲が離緣になつた。

他家の帳中の秘事は、容易に他人の忖度を容さないけれども離婚の原因について大學敎授文學博士たる都築の性行やその生理上の點にまで立入つて極めて皮肉な噂をするものさへあつた。そして此度美津子と三人めの結婚をするのである。

美津子を都築に紹介して見合ひをさせた美津子の友達仲間では彼女に三輪といふ情夫があることを知つてゐたが、都築には勿論吉川家に對しても彼女の友達はそのことを秘してゐた。

大分緣談が進んで來た時に友達の下田と小川とは美津子に向つて

「吉川さん、あなた都築さんに眞個にお嫁きになる氣がおありになるなら、三輪さんと奇麗に切れてからになさい。さうしないと私達が吉川さんや都築さんに對して濟みませんから。」

かういつて忠告した。

「えゝ、それは御心配ありません。三輪とは奇麗に切れてしまひますから。」

美津子はさういつて決心を語つた。

表面媒介者に立つた吉川の令兄は都築に對つて

「……さういふことは斷じてありません。私が保證します。」

と言明した。

美津子は友達を欺り、都築を欺り、吉川家の母堂や令兄を欺り、そして自分をも欺つたのである。自分とて都築に嫁くには必ず三輪と切れねばならぬことは知つてゐた。けれども最切さういふ機會から關係した三輪といふものゝあるのに更に都築に嫁するには、假ひ嫁しても尙ほこれまでの通りの關係を繼續するといふ一時の辯解を以つてせねば男の心を宥めることが出來なかつた。

彼女はさういふ、言はゞ不貞の心を抱いて今日都築の處へ嫁かねばならぬのである。けれども彼女自身はそれについてさまで罪惡を感じてはゐなかつた。彼女がまだ吉川の妻であつた時分には吉川の妻であることに幸福を感じてゐた。吉川以外の男を思ふ心は起らなかつた。一度び吉川に死なれてから彼女の心は荒廢して來た。女が獨身でゐて男を持つことに心に何等の譴責を感じなかつた。また以前から關係してゐる男と關係を繼續しながら更に他の男に嫁することについても彼女はさまで良心の苦痛を感じなかつた。夫に死別れてから後二三年の間の自由な獨身生活が彼女の婦人として謹むべき貞操を頽廢してしまつたのである。

美津子が俥の上でいろんなことに思ひ沈んてゐる間に俥は幾度か曲折して驅けた。彼女はセルロイド張りの小さい窓から覗いて外を眺めた。其處はもう葵橋の少し先きを福吉町の方に折れやうとする處であつた。彼女は幌の内から車夫に聲をかけてその近くにゐる友達の小川雪子の家まで寄り道をした。そして街路に面した雪子の家の窓の下に俥を呼び留めて。

「小川さん、小川さん。」

と、二度ばかし呼んだ。

すると高い櫺子窓を明けて小川は色の白い顏を覗けながら

「吉川さん？　まあ今時分何處へ？」

「えゝ、……ちよつと。」

「まあお上んなさいな。」

美津子が何だか話したいことがありさうにしてゐるので小川はさういつて勸めた。

「さう、ぢや私一寸お邪魔してゆきますわ。」

美津子はさういつて築地から乘つて來た俥に祝儀をくれて歸しておいて小川の入口の方に廻つた。

美津子は玄關に入つて來て、出迎へた小川の顏を見上げながら、三十を過ぎた女にしては厭味なほど愛嬌のある顏ににつと微笑を湛えながら

「小川さん、今日はあなたに聞いていたゞきたいことがあるのよ。」

といひつゝ小川の書齋に導かれていつた。

そして小川が自分の机の前に座りながら、呆れたやうな眼をして自分の様子をじろ〳〵見てゐるのに氣が着くと美津子は

『まあ、私こんななりをして。』

と、いつて始めて自分のしどけない様子に氣がついたやうに島田の鬢に手をやつて、ほつれ毛を撫であげた。

『あなた今日御婚禮でせう。』

『えゝ、さうなのよ。それで昨夕から例の待合へいつてゐて、今やつと其處から歸るところなよ。』

例のといへば小川も三輪といふことは直ぐわかるので

『へえ。』と呆れたやうな聲を出してまた暫らく對手の顔を見守りながら

『それでどうなすつたの。三輪さんと話が奇麗につきまして？』

『私そのつもりで昨夕逢つたのよ。處がどうしても三輪が承知しないの。それはいろんなことをいつて私を責めるの。その爲め今朝まで寢やしませんの。どうしても三輪が寢かさないんですもの。私散々怨みをいはれた。二人で牛乳を一升と生卵を三十も飲んでとう〳〵夜明しよ。』

美津子はさういつて蒼ざめた顳顬のところを指尖で抑さへてゐた。

小川は微笑しながら

『まあ、あなたの閑氣なのにも呆れるわねえ。私達は別に表面に立つて媒介するわけぢやないけど、それぢやあなた都築さんにも濟まないけれど、吉川さんや吉川さんのお母さんに濟まないわ。吉川さんの

方では何方もあなたにそんなことがあらうとは思つてゐらつしやらないんですから、尙ほのこと濟みませんわ。三輪さんと切れておしまひなさいな。」

さういつて美津子にすゝめた。

「えゝ、私もどうかさうしたいと思つて昨夕逢つたんですけれど、どうしても切れてやらうといはないんで、私眞個に困つてしまつた。」

「ほゝゝ、それは元々あなたがお惡いんですもの。好い人には逢ひたいし、さうかといつて地位や名譽のある人とは結婚したいし、さう兩方好い都合にはゆきやしない。……でも私、あなたに同情しますよ。吉川さんのやうに亡くなつておしまひなすつた方はそれはそれでまた諦めがつくでせうけれど、一旦關係した男と奇麗に切れてしまふといふことはそれは六ケしいものですよ。吉川さんのやうに亡くなつた方だつて、あなたも二三年は獨身でゐらしつたくらゐですもの。」

雪子はさういつて美津子に忠告するやうな同情するやうなことをいひながら、そゞろに自分の身の過ぎ去つたことを思ひ起してゐた。

雪子が向島の先の方の田舍で小學校の教師をしてゐる時分慶應義塾に居つたことのある新聞記者のやうな男と夫婦のやうな同棲生活をしてゐて四五年苦まされた結果その男と奇麗に關係を絶つてしまふには別になつてからも二三年かゝつた。

男は半歳も顏を見せないでゐて、またひよつこり隱れるやうにしてゐる雪子の處を嗅ぎ出して、さも自分の家にでも戾つて來たやうな調子で入つて來ることがあつた。その度に雪子は小學校でもらふ俸給か

の給料の中からつましく殘してゐる小使を取つてゆかれた。

「私も先の夫のことを思ふとぞつとするやうな氣がしますわ。ほんとに男を持つのも餘程考へものよ。」

雪子はつゞけてさういつた。彼女は美津子より二つ歳下の三十一になるまで、その男との交通がぴたりと止んでから四五年獨身で通しながら母親と妹と弟とを養つてゐるのである。小學校に勤めてゐる頃から小說などが好きで、何かしらそんなものを書いて、その時分賣れッ兒の小說家に見てもらつて賣れ口を求めてゐる間にそれでも婦人向きの雜誌や畫報のやうなものに買つてもらつて中には相應に小說としての價値を認められるやうなものもあつた。女一人でそれまでにやつて來るには並大抵の苦勞ではなかつた。口うるさく世間の噂では彼女の今まで通つて來た徑路に隨分暗い蔭がさしてゐるやうにいふものがあつた。それがどうかして雪子の耳に入ることがあつた。雪子はその度に一葉女史が吉原でおでん屋をしてゐたとか、たれかの妾になつてゐたとか傳へられてゐる噂を想ひ浮べたり、女一人で立てとほして行かうとするものゝ道に橫つてゐるいろ〳〵な苦衷や誘惑を思つてわれ一人机に凭つて悔し淚に袖を濡すことさへあつた。

「あなたなんかあんまり氣樂過ぎるのよ。」

雪子は美津子に向つてさういつた。

「まあ小川さん止して頂戴よ。私が氣樂だなんて。」

「でもあなたは氣樂よ。今までの境遇が私達と違つて氣樂なばかりぢやない。一體あなたの性格がお氣樂ですよ。」

「さうでせうか私。私自分ぢや私くらゐ不幸な者は眞個に少いと自分ぢや思つてゐるのに。」

「そりや不幸といへば不幸ともいはれるでせう。お子さんもなければ、中年で吉川さんに亡くなられたのですから。だけど吉川さんの時分あなたくらゐ幸福な方はなかつたでせうよ。そして今のやうにおなんなすつたからつて立派な御縁で地位や名譽のある方の夫人とおいはれなさるんぢやありませんか。そんな、あなた私達の到底望めないやうな良縁ですもの、いけませんよ三輪さんと奇麗に切れてしまつて、それから都築さんと御結婚なさいよ。」

「えゝ、さうします。」

美津子は口の先きでさういつたが、三輪に切れてしまはねばならぬほど都築のことを思つてゐなかつた。

「だけど小川さんあなたにもお骨を折つていたゞいてこんなことを申しては濟まないけれど、都築の處へ嫁くのは私本當に氣がすゝまないのよ。それは文學博士で大學教授といへば立派なやうだけれど何だか書いてゐるものなんか讀んで見ても私達には何の事かちつとも解りやしない。隨分野暮で頑固に出來てゐるらしいのねえ。」

「ほゝゝ、あなた今更そんなことを仰つたつて仕方なくつてよ。あなたがあすこならば嫁ぐと決心なすつたんですもの。」

雪子は美津子の良心の緩んだやうな姿態を眺めながらいつた。

「私、もうこれからは、一生とても今までのやうに自由に芝居なんかへ行かれやしないわ。そしてやが

て大學の方が休暇になるから都築の田舍へ行くんですつて。私のやうな東京に育つたものがとても草深い越後へなんか夏二た月も行つてゐられないわ。此度はもうたゞ吉川の家の方に對して嫁きますのよ。」

美津子は此度は獨語のやうにいつて、三輪と逢ひながら、東京で獨身で氣樂にしてゐる方がいくら好いか知れないと思つてゐた。けれどもそれには先の吉川の妻であつた時のやうな不自由のない生活をやる資力がなかつた。

閑氣さうな彼女はやゝ暫時考へ沈んでゐたが、

「でも最早歸つて支度しませう。」

と、ほつれた島田の髮を搔き上げながら起ち上つた。（をはり）

デヰスン嬢の死

小山内　薫

もう倫敦の逗留にも飽き飽きして來ました。全體こんなに長くゐる筈はなかつたのですが、見たいものや聞きたいものが、それからそれと出來て來るのでつひ〳〵こんなに長くなつて了つたのです。おそくも五月の末には立つ筈だつたのを、又二週間ばかり延ばす事にしたのも、詩人イエエツとグレゴリイ夫人に率ゐられた愛蘭國民劇協會が、思ひがけなくスロオン、スクエイのコオト、シアタアへやつて來たからです。この劇團はつひこなひだまで亞米利加へ行つてゐたので、今年——一九一三年——はとても見られまいと思つて、實はもう諦めてゐたのです。

この劇團は或一つのプログラムを、月曜火曜水曜の三晩と、これに水曜のマチネエを加へて、都合四回やると、木曜の晩から又プログラムを新しくして、金曜土曜と、これに土曜のマチネエを加へて、都合又四回同じものをやるといふ風にしてゐますから、私は一週間に二度しかコオトへは行かないわけなので

（もう私はこちらへ來た初めのやうに、同じ芝居を二度三度と見る根氣がなくなつてゐます）、その間のつなぎをどうかしてぼんやりせずに過ごさなければならない事になりました。私はこの短い旅行を、一日でも無意味に暮らすのが、惜しくて惜しくて堪らないのです。

併し、倫敦には一向刺戟的な事がありません。誠に住み心地のよい、人氣の穩かな所ですが、私達青年の心を興奮させたり感激させたりするやうな事は一向ないのです。

總てが眠つてゐます。總てが死んでゐます。私のさういふのは、ひとり藝術界の事ばかりではありません。政治でもさうです、社會的の事業でもさうです、毎日輸入新聞で見る市井の出來事でもさうです。

さういふ中で、たつと一つ活氣のあるのは、御存じの Suffragette です――男子と同じ參政權を得ようとする婦人達の運動です。この運動の趣意は誰が見ても立派なもので、政府もいつかはこの婦人達の言ふ通りにするには極まつてゐるのですが――もう時間の問題だけになつてゐるのですが――サラフジエツトの連中は、それを便々と待つてはゐられないと言ふのです。もう呉れなくても好い、貰はなくても好い。自分達が持つべき正當な權利なのだから、自分達の「力」で取つて見せると言ふのです。これが所謂 Militant Suffragette といふ奴で、隨分亂暴をして歩きます。こなひだも私の友人の研究に通つてゐる K-ew Garden といふ有名な植物園へ行つて見ますと、そこにあつた Pavilion なども、サフラジエツトに燒かれて了つたのださうで、茶亭はやむを得ずテント張りで營業をしてゐました。總硝子の溫室なども いつ何時やられるか分からないので、みんな冷や冷やしてゐるのだといふ事です。つひ先達もロイアル、アカデミイの展覽會へ火をつけて、あすこの繪をみんな燒いて了はうと企てたサフラジエツトがありま

す。議會の傍聽席へはいり込んで、爆烈彈を首相にぶつけ損なつたのがあります。こんな風ですから、近郊にある離宮なども、この頃は唯庭を見せる位なもので、寶物の置いてある奥殿などへは一切人を入れない事にしてゐます。さういふ亂暴をするサフラジエットは、無論直ぐ捕まへられて、牢屋へ入れられます。ところが、これが又 Hunger Strike といふ事をやつて、一切獄中で食事をしません。さうかと言つて、ほし殺してはならないから、獄丁が無理に食事をさせようとする、所謂 Forcible Feeding でこれが又サフラジエットの怒りを招くといふわけです。バアナアド・シヨオなども、これは牢屋へ入れるといふ上に、無理に食事をさせるといふ二重の刑罰を與へるものだと言つて、サフラジエットの憤慨に味方をしてゐます。

かう言つて來ると、サフラジエットの連中は無暗と恐ろしい、鬼のやうな女の集まりのやうに見えますが、事實は決してさうではありません。日本の所謂「新らしい女」などより——かう言つては日本の進んだ婦人諸君に禮を失するかも知れませんが——ずつと愛嬌もあれば、色氣もある、優美な婦人達の集合なのです。第一、倫敦のサフラジエットには大分女優がはいつてゐます。今はもう舞台を引いてゐますが、有名なエレン・テリイ、その妹のマリオン・テリイ、ゴオヅン・クレエグの妹エヂス・クレエグなどは勿論「ピイタア・パン」で有名なポオリン・チエエス、つひこなひだまで、ここで引退興行をやつてゐたフオオブス、ロバトスンの妻君のガアトルウド・エリネット、まだその外にも澤山ありますが、かういつた美しい人達が、仲間になつてゐると聞いただけでも、既にもう荒ら〱しい野蠻な感じなどはしないではありませんか。

愛嬌と言へば、いつぞやもこの連中が隊を組んで、大通りの商店のショオ、ヰンドオの硝子をハンマアで毀して歩いた事があるさうですが、その時なども、成るべくふだん女の客をお得意にしてゐる——即ち婦人に對してあんまり苦情の言へない——化粧品屋や帽子屋のを毀れをして歩いたといふから面白いぢやありませんか。ところが、化粧品屋や帽子屋の方でも、又それを知つてゐて、破壞を未然に防ぐ爲に、抜け目なくサフラジエットの機關新聞といふ機關新聞に大きな廣告を奮發して、精々歡心を得るやうに努めてゐるのだといふから、更に面白いぢやありませんか。

ハイド、パアクの諸所で毎日曜催される、この連中の車上演說も、一度聞きに行つて見ましたが、中々愛嬌があつて面白いものでした。私の見た車の上には、思ひの外年をとつた婦人だの、思ひの外年の若い婦人だのが、三四人乘つてゐました。そしてこの三四人が代る〲立つて演說をするのです。丁度私の行つた時は、まだ年の若い利口さうな目をした身なりの小ざつぱりとした、可なりな美人が立つてやつてゐました。論旨は大抵機關新聞に毎週繰り返される社說と大して違ひはありませんでしたが、その懸命さは可なりに私を動かしました。然るに演說車を取り卷いてゐる男達は、いづれも職人か商店のクラアクといつた無智な連中で、日曜日の慰み半分に聞いてゐるのだから堪りません。頓狂な聲でノオを叫んだり、無暗と長く手を叩いたり、隊を組んではやり歌を唄つたりして、演說の邪魔をするのです。併し女辯士は少しも怒つたやうな色を見せないで、笑ひながら、その人達に、"You, musical gentlemen!"などと呼びかけるのです。聽衆の男の中には、時々だみ聲をあげて隨分な愚問を發する手合がありますが美しい、サラフジストはどんな愚問をも決して侮蔑しないで、一々親切に解決するのです。私はこの

態度を實に快く感じました。

かういふわけですから、私も私の友人のT君も、サフラジストが大の贔負で、土曜日の午後にはきつとチャアリンダ、クロスへ出かけて行つて、この運動の週刊機關新聞を、成るべく若い婦人の手から買ふのを常としてゐます。

併し、私達がこの運動の彌次馬たる事は、決してハイド、パアクの職人達と選ばないのです——私達がこの國の政治運動に直接の利害關係を持つてゐない事は、明らかな事なのですから——ただ私達の彌次は彼等の彌次に比して、ずつとおとなしくもあれば溫かであるだけが違つてゐるのです。併し、彌次はやつぱり彌次です。傍觀者はやつぱり傍觀者です。私達は芝居か踊でも見物してるやうな氣で、サフラジエットの運動を見物してるのです。

ところが、つひこの頃、傍觀者が傍觀者でゐられなくなるやうな、恐ろしい事件が起りました……

ダアビイ競馬と言へば、世界でも有名な競馬ですから、名前は既に聞いてお出でせう。毎年五月の末か六月の初めの火曜日から金曜日にかけて、ここから十六哩程離れたエプソムといふ田舍で、夏期の大競馬が催されますが、その內水曜日のダアビイ、デエは、中でも大事な日なので、倫敦中の人氣は悉くこれに集注されると言つても好い位です。職人などには一年中の貯蓄を携へて行つて、幾枚かの馬劵に運命の限りを托して了ふのがあります。貴族や富豪でも、巨萬の財を一度の賭に失ひ悉して、自殺をするものさへ間々あるといふ事です。勿論、世界の各地から旅客が集まつて參ります。巴里からは特別

列車が仕立てられます。ステエション前のホテルなどは、さういふ客でどれもこれも滿員といふ繁昌です。

今年は其ダアビイ、デエが丁度六月の四日に當りました。私は丁度身體の明いてる日だつたので、例のつなぎに、ふとエプソムへ行つて見る氣になりました。それからT君を誘ひますと、T君も永年倫敦にゐるが、まだ一度も行つて見た事がないからといふので、汽車の案內旁一緒に行つて呉れる事になりました。

一體私は自分ではやりませんが、人の賭事を見てゐるのは大好きで、日本でも「馬券時代」にはよく目黑や川崎へ見物に出かけたものです。三分か五分の間の運命で、何百圓何千圓といふ金を、一度に儲けたり損をしたりして、誠に得意の絶頂へ登つたり俄に失意のどん底へ落ちたりする人の顏を見るのが、何とも言はれず愉快なのです——太古からの人間の本性が、一糸をも留めずひん剝かれて、まつ裸に暴露されて了ふのを、一種殘酷な「共鳴」を感じながら見るのが、何とも言はれず愉快なのです……

ダアビイ、デエの當日は、空の高く晴れた、埃の立つ日でした。エプソムのステエションから競馬場へ行き着くまでの光景は、嘗て私が目黑や川崎で見た光景と少しも違ひがありませんでした。大勢の男や女が村の道を一ぱいにして、頭から埃を浴びながら、みんな同じ方向に押し寄せて行くのです。人々の眼はみんな或期待に血走つて、額には欲望の汗が汚なくにじみ出てゐます。その人込みの中を、金持の自働車や貴族の馬車が横切つたり驅け拔けたりして行くのです。併し、馬車に乘つて行く連中の目つきも、田舍道をボク／＼歩いて行く連中の目つきも、目つきに變りはないのです。——私達もそのボク

〳〵連中に交つて、砂ほこりを浴びながら歩いたものです。

やがて競馬場へ着くと、もう何千といふ人が集まつてゐます。私達は成るべく入場料の安い所へはいらうとしましたが、時間が少し遲れた爲に、もう何處も滿員ではいれません——散々あつちへ行つたりこつちへ行つたりした揚句、とう〳〵思ひ切つて、Grand Stand へはいる事にしました。グランド、スタンドの入場料は一人前一磅で、日本なら馬劵が二枚買へる値段でしたが、ここならまだ明いた席もあるといふ事ですし。國王陛下の玉座で見られるといふのが有難いので、とう〳〵奮發して、ここへはいる事にしたのです。

併し、はいつて見るとやつぱりここも一杯で、到底棧敷の椅子に腰をかけて、ゆつくりと見物する事などは出來ないのです。唯棧敷の下の芝生が、外の等級の席よりは稍透いてゐるので、立つてなら見られるといふだけの事でした。尤も椅子に座れたとしても、とても座る勇氣はなかつたらうと思ひます。何しろここは最上級の客ばかりが集まる場所なのですから、男も女も流行と粹の限りを盡した服裝をしてゐるのです。男は大抵色變りのモオニングにシルクハットで、肩には双眼鏡の黑い皮の紐をかけ、薄手な皮の手袋をはめた手には銀金具のついた細い眞直なステッキを突いてゐます。靴は大抵黑のエナメルで、ズボンの下には薄色の短い隱し脚絆をしてゐます。さういふ中に、モオニングに山高帽で手袋なしといふ倫敦では餘り見られない田舍めいた風俗で立ち交るといふ事は、如何に厚顏な私達でも少しは氣が引けるのでした。

併し、私達の芝生は競馬を見る場所としては、確に第一の場所でした。決勝點は直ぐ目の前にありま

す。出馬の掲示板もまともに見られます。小高い岡の上なので目黒の三倍もあらうといふ廣い競馬場も、殆ど隅から隅まで洩れなく見渡す事が出來るのです。

日本ではコオスの中の圓内へは係りの者しか入れませんが、ここではそこが一番安い場所になつてゐるらしいので、勞働者らしい服装をした連中が何千人となくその中に集まつてゐて、遠くから見ると、まるで蟻かなんぞのやうに眞黒になつて蠢めいてゐるのです。その中には小屋がけの飲食店や、急拵への運動機械など出張つてゐて、群集の中で子供がブランコをしてゐる光景などが、遠くから小さく見えるのです。

やがて競馬が始まりました。馬券は日本のやうに Office ばかりで賣るのではないので、政府の許可を得た中賣りが大抵二人宛組んで、私達のゐる芝生のそこここで、歩きながら馬券を賣つてゐるのです。一人が大聲で出馬の名を呼んでゐます。一人は客から金を受け取ると、直ぐそれを上着の横の衣兜へ突つ込んで、馬券を渡しながら、大きな帳簿へ鉛筆で何か一寸記します。それだけの事でよく間違ひが起らないものだと思ひますが、これで決して間違ひが起らないといふ所に歴史的な英吉利一流の公徳の誇りがあるのです——見てゐると、小さな札を出して馬券を買ふ人はありません。大抵は五磅ノオト（五十圓札）を幾枚か重ねて、大丈夫だといふ馬を買ふのです。勿論、中には大穴を豫期する人もあるにはあるやうですが、まあ九分が九分、勝目疑ひなしといふ馬に出來るだけ多くの金をかけるといふ風に見えました。

私は勿論そんな事をするだけの金を持つてゐませんでしたし、自分でやつて見る興味もありませんで

したから、唯番組と首つ引きで競馬の勝負ばかりを見てゐました——一勝負濟む毎に五磅ノオトの大きな束が、あつちへ行つたりこつちへ來たりしました。仲買りも客も、まるで唯の紙のやうに貴重な紙幣を引つ摑んで、これをやつたり取つたりするのです——私は人間の慾の頂上が、却つて貴重なものを粗末にする光景を目のあたりに見ました。紙幣も金貨もここでは何の權威がないのです。唯あるものは人間の慾です、人間の賭博的本能です……

何回目かの競馬でした。これには國王の持馬が出るといふので、それが大した人氣でした。人々は國王の持馬がどれもこれも、弱くていつも負けてばかりゐるのを知つてゐながら、主權者への諂ひにやつぱりその馬を買ふのです——この時出たのは Anmer といふ馬でした。

「キングの馬には時々女騎手が乘るよ。」

私はT君のから言ふのに興味を持つて、番組と騎手の服の色とを見比べましたが、生憎その時王の馬に乘つて出たのは男の騎手でした。

王の馬は初めの内は可なり勢よく走りましたが直ぐと勞れて來て、いつの間にか目に立つやうな位置にゐなくなりました。

眞黑になつて走る馬の群が丁度私の立つてる芝生から左の方に見える Tattenham Corner にかかつた時でした。馬の一つが躓いて倒れたかと思ふと、騎手が眞つ倒に地面の上へ落ちました。コオスの内からも外からも、埒を潜りぬけて大勢の人が飛び出して來ました。馬の姿も騎手の姿も、忽ち眞黑な群集

に圍まれて見えなくなつて了ひました。やがて Ambulance がレエス、コオスへ引き出されました。
「騎手が落ちたんだ。」
「死んだかしら。」
「死にはせぬが、頭をぶつて氣を失つた。」
こんな會話が忽ち私の周圍に起りました。私は嘗て松戸で見た悲慘な騎手の落馬や、目黒で見た殘酷な負傷者の銃殺だのを思ひ出して、妙な氣持になつてゐますと、又こんな會話が耳へはいつて來ました――
「馬がひとりで蹟いたんぢやない。サフラジストが埒の中から飛び出して來て、馬の手綱に飛びついたんだ。」
「王の馬に飛びついたんだ。」
「王の馬をねらつて飛びついたのか。」
「さうだ。そしてそのサフラジストはどうしたのだ。」
「無論死んだらう。」
「どうしてそんな馬鹿な事をしたんだらう。」
「王の注意を引く爲だ。」
私は場所が離れてゐたので、はつきりとそは見ませんでしたが、兎に角この恐ろしい事件の前に偶然立つてゐたのは事實でした。
或人はサフラジストの勇敢を賞しました。或人はサフラジストの狂的行爲を嘲けりました。併し、私

はどつちの氣持にもなれませんでした。私は唯今まで彌次でゐたのが、急に彌次でゐては濟まないやうな氣がして來ました……

私は舞臺の上で氣を失つて、倒れる俳優を見た時のやうな氣持がして、甚だしく「遊び」の氣分をそがれました……私は歸りしぶるT君を促がして、あとの勝負は見ずに競馬場の外へ飛び出して了ひました。

その晩、私は倫敦の或寄席で、早くもその日のその出來事を活動寫眞で目のあたり見ました。寫眞はタッテンナム、コォナアに据ゑつけてあつた器械が、偶然とつたものだといふ事でした――多くの馬が非常な勢で走つて來ました。突然埒の中から白いものが飛び出して來て、いきなり馬の一つにからみつくと、馬は直ぐ倒れました。多くの群集が崩れを打つて出て來ると、忽ちレエス、コオスを眞黑にして了ひました……

その日の夕刊。明くる日の朝刊。私は新聞といふ新聞を買ひ集めて、事件の眞相を究めようとしました。

馬はその時一時間四十哩といふ早さで走つてゐたのでした。王の馬は少し遲れて、稍外輪を走つてゐたのです。前からその覺悟で來てゐたらしいサフラジストのデキスン孃は、王の馬にきつと目を注ぎながら、埒を潜つてコオスへ飛び出すといきなり身を躍らせてその手綱を掴まうとしました。併し、それは無駄でした。馬は婦人を蹴倒すと、自分もバランスを失つて倒れました。騎手も片足を鐙に引つかけ

た儘落ちました。馬は怒つて、倒れた儘尙したたかに婦人を蹴りました。これは實に一瞬間の出來事でした。やがて馬は立ち上がりましたが、婦人と騎手は地面の上に倒れた儘になつてゐました。二人はアムピユランスに載せられて、直ぐとエプソム病院へ送られたのです。

一說に依ると、デキスン嬢が倒れると同時に、サフラジエットの旗が埒の中で揚がつたといふ事です――これで見ると總ての事が豫め準備されてゐたやうにも見えます。

事件の起つた場所の直ぐ前に、愛蘭の若い劇作者セント、ジョン・アアキンが立つてゐたさうです。かれは或新聞の主筆にその光景を書いて送つて、「この出來事はひどく群集を悲しませた。」と言つたさうです。ハイド、パアクの彌次馬も、この悲壯な事件を目の前に見ては、膽を冷やしたに違ひありません。

併し、デキスン嬢はなぜこんな事をしたのでせう。その理由は簡單にして明白です――

「數週間前に、議會の開院式へ臨まうとする國王を道に要して、五人の婦人が直訴を企てた。その結果として、かれらは獄に投ぜられた。

「六月四日の水曜日に、一婦人がその計畫を再びした。かの女は實に直訴を遂げたのである。併し、かの女はそれが爲に貴重な生命その者を犧牲にした。

「世界最大の競馬に於いて、一婦人が如何にして國王の馬を留めたか、如何にして致命の傷を得たかといふ物語は、文明世界のあらゆる隅々まで到達した。

「一千九百十三年のダアビイ、デエが記憶せらるる限りは、愈やし難い悲痛を以て、この英雄的行爲が聯想されるであらう。

「エミリイ・ヰルヂング・デヰスンは、二十世紀にも理想の爲には喜んで生命を擲つ人間のある事を證據立てた。」

サフラジエットの或機關新聞には、こんな事が書いてありました。デヰスン孃は多くの婦人の命を救ふ爲に、一人の婦人の命を馬に踏み殺させたのです。デヰスン孃は自分達の主義の偉大な事を社會公衆に知らせる爲に、自分の命を掲示板にしたのです……

デヰスン孃は婦人參政運動の爲に、これまでにもう八回程牢屋へはいつてゐます。第一回に捕まつたのが千九百九年の三月三十日で。議會妨害の爲に一ケ月の禁錮。第二回が同じ年の七月三十日で、ライムハウスの議事妨害の爲に二ケ月の禁錮。第三回が同じ年の九月四日で、マンチエスタアのホワイト、シチイで石を投つた爲に二ケ月。第四回が同じ年の十月二十日で、ラドクリツフで石を投つた爲に一ケ月。第五回が千九百十年の十一月十九日で、下院の窓を毀した爲に一ケ月。第六回が千九百十一年の十二月十四日で、エストミンスタア市の郵便箱に火をつけた爲に一週間。第七回が千九百十二年の一月十日で、ホロエエの郵便箱に又火をつけた爲に六ケ月。第八回が同じ年の十一月三十日で。ロイド・ジヨオジと間違へて、或浸禮教會の牧師をアバアゲン停車場で襲擊した爲に十日間。その外にも一度有名なパンカアスト夫人と一緒に、やはり議事妨害で捕縛された事があります。

併し、デヰスン孃はいつでも例のハンガア、ストライクをやつて、大抵は五日か、六日早い時は二日半位で牢屋を出て了つてゐます。中でも有名なのは、マンチエスタアのストレンジエエ監獄でそいつをやつた時で、孃は二つの板張りの寢臺を戸口の所へ立てかけて、靴だの腰掛だのブラシだのを楔にして

その上にぢつと座つてゐたといふ事です。獄丁はどうしても戸を明ける事が出來ないので、窓を毀してそこから、ホオスを嬢に向けましたが、それでも嬢は寢臺にかじり着いてゐて離れなかつたといふ事です。かうして、嬢は直放免されたのです――かういふと、デキスン嬢はひどく剛健な體格でも持つてる人のやうに見えますが、寫眞を見ると如何にも優形な品の好い婦人です。嬢はオックスフォオドの出身で倫敦大學の名譽學士まで持つてゐるのです……………

國王の馬に頭を蹴られたデキスン嬢は、氣を失つた儘エプソム病院へ擔ぎ込まれました。王室外科醫學校の副校長マンセル・ムウラン氏は總ての爲事を放擲して、嬢の生命を取りとめようと、三日の間努力の限りを盡しました。金曜日に行はれた手術は、可なりな効果を齎らしましたが、その後二日生きてゐたといふだけで、嬢は終に意識を回復せずに、日曜の午後に死んで了ひました。

女王陛下からは幾度となく慰問の使がエプソム病院へ來たといふ事です……………

デキスン嬢の葬式は六月の十四日に行はれる事になりました――私はそれを見る爲に又出發を延ばしました。

當日、私は又T君を誘つて、ハイドパアクの近所まで出かけました。大層な人出で、何處へ立つても中々よくは見られさうもなかつたのを、騎馬巡査が「道順變更」を告げて通つたので、大分人が薄くなつたところへ、やつぱり葬列は豫定通りの道をとつて來たので、幸にも私達は一番前で見物する事が出來ま

した——巡査達はその筋の達しで、群集を散らす爲に、わざと嘘をついて歩いたのです。一時半か二時頃には來る筈の葬列が、三時頃になつて漸く來ました——保釋中のパンカアスト夫人が帷をおろした馬車の中に隱れて、デキスン孃の棺を送らうとしたのが、刑事の知る所となつて差し留められたりなどしたので、豫定の出棺が一時間も遲れたのです。

葬列は幾組かに分かれて來ました。一番初めには、十字架の後に坊さん達がついて來ました。その後から三列に並んだ娘達が、みんな白い着物を着て、一人一人月桂冠を手にして來ました。その次ぎに紫の旗が來ました——「戰へ、神は勝利を與へむ」と英語で書いてあります。それから又白い着物を着た娘達が十二列になつて、みんな月桂冠を手にして來ました。

その次に樂隊が來ると、續いて倫敦の會員がみんな黑い服を着て、一人一人紫のあやめを手にして來ました。

それから又樂隊が來ると、續いてみんな紫の着物を着た倫敦の會員が、一人一人牡丹を手にして來ました。

又樂隊が來ると、續いて白い着物ばかり着た倫敦の會員が、マドンナ百合を一人一人手に持つて來ました。

又樂隊が來ると、今度は「思想は出でぬ、その力はもはや眠る事能はず。勝利、勝利」と英語で書いた旗が來るのです。その旗の下に立つて來るのが所謂ハンガア、ストライカアで、いづれも痩せた、顏色の惡い婦人達ばかりです。月桂冠をのせた馬車に、續いて牧師や坊さん達が來ると、友の爲におのれの

命を捨つるより大なる愛はなし」と書いた旗が來て、その次にデキスン孃の箇人的な友人が續いて來ました。

その次ぎがデキスン孃の黑い天鵞絨で蓋はれた棺で、棺の後には親類がついて來ました。續いて“Dulce et decorum est patria mori” と書いた旗が來て、その次に又ハンガア、ストライカアがやつて來ました。それから又月桂冠をのせたる車が來て、續いて「命を失ふ者は命を得む」と書いた旗がやつて來ました。それに續いて女醫や女學士が學校の制服でやつて來ました。

又樂隊。白い着物を着て、マドンナ百合を携へた地方會員。又樂隊。紫の着物を着て、牡丹を持つた地方會員。又樂隊。黑い着物を着て、紫のあやめを手にした地方會員。又樂隊。花を持つた諸種の團體。それから又樂體で、あとは一般公衆といふ順序でした。

葬列はピカグリイからシヤフツベリイ、アエニウを通つて、キングスクロスのステエションからデキスン孃の故郷へ送られるのです……

私はこの美しい葬式を見て、愈々サフラジエットが好きになりました——私はもう。彌次でなく詩人ロオレンス・ハウスマンのやうに、心身になつてこの運動が助けたくなりました……

中央公論

秋期大附錄號

九月一日發行の本號には公論說苑等に第一流大家の雄篇を滿載する外附錄として

上州屋騷動（小說）……谷崎潤一郎
柘榴の花（小說）……正宗白鳥
料理人（脚本）……坪内士行
題未定（小說）……森鷗外
ある力（脚本）……武者小路實篤
守護神（小說）……上司小劍
夜のおそれ（小說）……德田秋聲

の創作七篇を揭載すべし。一般に賑はしきを例とする新秋文壇に在つても恐らくは本誌の光彩と權威と獨り斬然として他を壓倒するものあらん。

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂
仝　神田區裏神保町　上田屋
仝　京橋區尾張町　東海堂
仝　京橋區元數寄屋町　北隆館
仝　京橋區西紺屋町　良明堂
仝　日本橋區本石町　至誠堂
大阪市北區梅田町　盛文館
仝　東區京町堀　太華堂
仝　北區東梅田町　宮內立誠堂
仝　東區瓦町　東枝支店
京都市七條停車場前　三共社
仝　藤村梅松堂

◯定價　金貳拾五錢郵税金貳錢（海外郵税拾貳錢
但支那を除く）

國別／册數	內國	外國
六册	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二册	金參圓	金四圓貳拾錢
	以上郵税共	

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御註文の方は內國は金四圓二拾五錢外國は金五圓九拾五錢の割となる

送金注意

一誌代郵税は一切前金とす、金切の場合は發送を止むべし
一郵便爲替にて御送金の場合は指定を本鄕區西片町十番地中央公論社とし拂渡局を東片町局と指定あれば途中盗取さるゝ虞なし
一振替貯金　口座は東京三十四番なり
一郵券代用　必ず一割增の事
一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
一金一圓迄　金六錢（集金委託料
一金五圓迄　金七錢（及送達料共）
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正四年七月廿九日印刷納本
大正四年八月一日發行　（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木酉三

發行所　東京市本鄕區駒込西片町十番地
中央公論社
電話 小下谷九一九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場



○サナトーゲンは腦の過勞・神經の消耗に因する衰弱諸症に對し靈妙なる効驗を有す、

神經系統の疲勞及衰弱は神經營養物質の過度なる消耗に原因す、サナトーゲンは迅速に神經營養物質を補給するの外食慾を興進し、血液及體量を增加し、全身の活氣を振起するものにして悲哀憂鬱の念を一變して健康と幸福とを得せしむる靈妙なる効驗を有す。

サナトーゲンは現代に於ける最も進歩せる滋養强壯劑なり、その醫學上の價値は既に久しき以前に確定せるところにして今日神經病專門家にてこれを賞用せざるなく、世界到る處文明の都鄙を通じ販賣せられざるなく、而して第十七回萬國醫學會に於て數百種の滋養劑中獨りナサトーゲンのみ最高賞を授けられたる等一に其の効力の非凡卓越せるを確證するものなり。

身體及精神の過勞に依り神經衰弱に陷りたる人は速かにサナトーゲンを服用せよサナトーゲンは新神經新體力を構成し生活の快樂を恢復すべし、腦力を以て活動する人、腦を過激に消費せる人はサナトーゲンの持續服用に依り容易に活動能率を增進し得べし、結核、貧血又は重病により身體の衰弱せる人は數週間の規則的服用により營養を進め、驚くべき體量を增加し得べし、その服用後齎すところの眞實錯誤なき効驗こそサナトーゲンが今日世界に其名を知られたる所以なれ。

詳細說明書進呈

價格　大瓶參圓二十五錢　小瓶壹圓八十五錢

日本代理店
神戶市海岸通英三番
タムソン商會

到る處藥店にて販賣せり

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.